

指宿駅西部土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 Vol.2

# 橋牟礼川遺跡 (VI区・VII区)



平成30年3月

鹿児島県指宿市教育委員会



SB4 出土遺物



## 序 文

大正5（1916）年に発見された橋牟礼川遺跡は、平成28（2016）年に発見から100年を迎えました。その発見には、指宿出身で旧制志布志中学校で学んだ西牟田盛健氏が大きな役割を果たしました。遺跡の発見後、瀬之口傳九郎、山崎五十鈴、喜田貞吉、濱田耕作、長谷部言人、鳥居龍藏など当時の日本の考古学、人類学をリードしていた学者たちによって調査が行われてきました。その調査の中でも、京都帝國大学の濱田耕作による発掘調査において、縄文土器と弥生土器に時期差を見出したのは、日本考古学史に残る重大な成果として知られています。そして、大正13年に「国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡」として国指定史跡に指定されました。

昭和50年代に入ると、指宿駅西部土地区画整理事業の計画が立ち上がり、国指定史跡の隣接地に幹線道路が敷かれることとなりました。そこで、事業に伴う発掘調査を実施したところ、874年3月25日の開闢岳噴火で埋没した平安時代の倒壊建物跡や畠跡が検出され、さらに下層からは古墳時代の大規模な集落跡がみつかりました。これらの発掘調査成果から、国指定史跡の追加指定が決定し、隣接する形で指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれが平成8年4月に開館しました。開館から現在まで、指宿市内の発掘調査成果や文化財情報を広く市民の方々へ公開・活用しているところです。

本報告書は昭和61年から62年に実施された発掘調査の成果を再構成し、報告書にまとめたものです。本成果が、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の更なる理解につながり、指宿市の文化財が市民の方々に保護・活用されることを祈念いたします。

平成30年3月

指宿市教育委員会

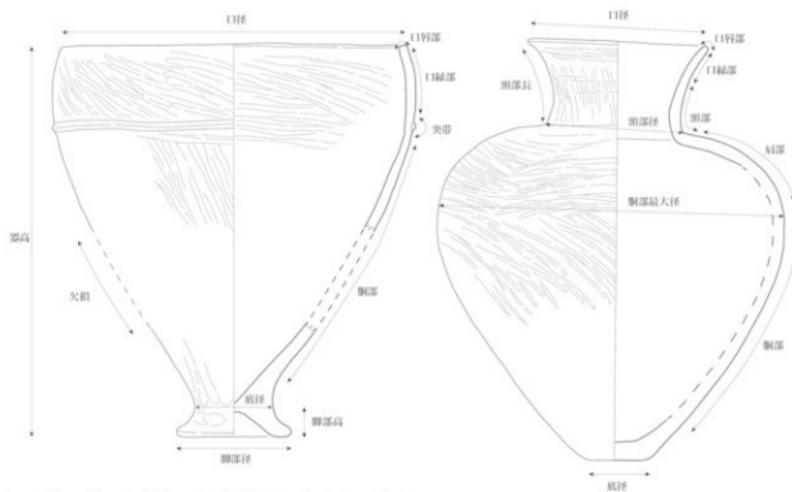
教育長 西森 廣幸

## 例　　言

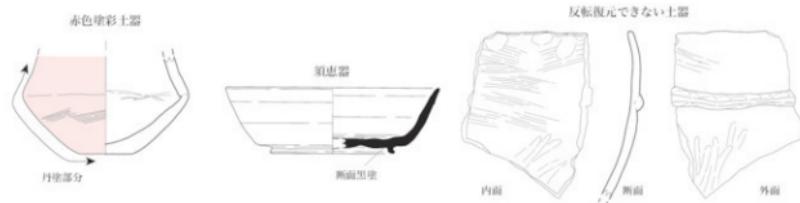
1. 本書は鹿児島県指宿市十二町に所在する橋牟礼川遺跡の発掘調査報告書である。起因事業は指宿駅西部土地区画整理事業である。
2. 発掘調査はVII区を昭和61年7月10日から昭和62年3月20日まで、VI区を昭和62年6月1日から昭和63年1月30日まで実施した。
3. 発掘調査は指宿市教育委員会と鹿児島県教育委員会文化財課で実施した。
4. 報告書作成主体は指宿市教育委員会で、報告書作成は松崎大嗣が担当した。
5. 本書の編集、図面整理、遺物実測は松崎大嗣、中摩浩太郎、鎌田洋昭、西牟田瑛子が行い、遺物実測の一部を九州文化財研究所へ委託した。遺物写真撮影は株式会社渕上印刷に委託し、巻頭写真の集合写真は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得た。
6. VII区出土遺物図・遺構図・層位断面図については、調査時に作成されたトレース図を再トレス・再構成したものである。
7. 出土動物骨については西中川駿氏(鹿児島大学名誉教授)、松元光春氏(鹿児島大学共同獣医学部)に玉稿を賜った。出土鉄器については大西智和氏(鹿児島国際大学国際文化学部)に所見をいただきた。記して厚く御礼申し上げます。
8. 報告書作成に要した経費のうち、50%は国、3.3%は県からの補助を得た。
9. 本報告書におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
10. 出土遺物については観察表を作成した。寸法の表記のなかで復元によるサイズは()を付けた。
11. 遺構は遺構の略号を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記する。  
SB(住居), SK(土坑)
12. 層・遺物の色調は『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
13. 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。
14. 発掘調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれで保管し、活用する。橋牟礼川遺跡の遺物注記の略号は「HS」である。

## 凡例

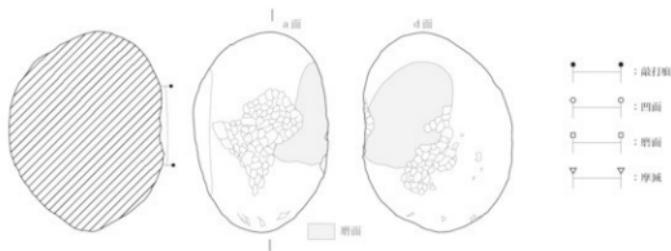
1. 本書で用いる土器の部位名称は以下のとおりである。



2. 本書で用いる土器の表現は以下のとおりである。



### 3. 本書で用いる石器の表現は以下のとおりである。



# 目 次

第1章 発掘調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の組織	4
第3節 整理・報告書作成の組織	4
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 基本層序	6
第3章 VI区の調査成果	
第1節 調査の概要	12
第2節 第10層出土遺物	12
第3節 古墳時代の遺構と遺物	13
第4節 古代の遺構と遺物	126
第4章 VII区の調査成果	
第1節 調査の概要	148
第2節 遺構	148
第3節 繩文時代の遺物	152
第4節 弥生時代の遺物	161
第5節 古墳時代の遺物	162
第5章 分析	
橋牟礼川遺跡出土の動物骨	174
松元 光春・西中川 駿	
第6章 総括	
第1節 墓穴住居の新旧関係	177
第2節 墓穴住居についての考察	177
第3節 第6層中出土遺物からみたVI区の評価	179
第4節 SB7の評価	180
第5節 出土石器について	182

## 挿 図 目 次

第 1 図	橋牟礼川遺跡の調査範囲	3	第 39 図	SB6 平面図・断面図	49
第 2 図	指宿市の位置	5	第 40 図	SB6 遺物出土状況	50
第 3 図	指宿市の火山地形	6	第 41 図	SB6 床面直上遺物出土状況	51
第 4 図	指宿市南東部の遺跡	7	第 42 図	SB6 出土遺物 1	52
第 5 図	橋牟礼川遺跡の範囲と周辺遺跡	9	第 43 図	SB6 出土遺物 2	53
第 6 図	橋牟礼川遺跡の基本層序	10	第 44 図	SB6 出土遺物 3	54
第 7 図	調査区配置図	12	第 45 図	SB6 出土遺物 4	55
第 8 図	VII区東壁土層断面図	13	第 46 図	SB7 平面図・断面図	57
第 9 図	VII区西壁土層断面図	14	第 47 図	SB7 遺物出土状況	58
第 10 図	VII区北壁土層断面図 1・2	15	第 48 図	SB7 完掘平面図・断面図	59
第 11 図	VII区北壁土層断面図 3・4	16	第 49 図	SB7 出土遺物 1	60
第 12 図	VII区南壁土層断面図 1・2	17	第 50 図	SB7 出土遺物 2	61
第 13 図	VII区南壁土層断面図 3・4	18	第 51 図	SB7 出土遺物 3	62
第 14 図	第 10 層出土遺物	19	第 52 図	SB9 檢出面遺物出土状況	63
第 15 図	VII区遺構配置図	21	第 53 図	SB9 檢出面出土遺物	63
第 16 図	SB3 平面図・断面図	22	第 54 図	SB9 平面図・断面図	64
第 17 図	SB3 出土遺物	23	第 55 図	SB9 出土遺物	65
第 18 図	SB4 平面図・断面図	25	第 56 図	SB10 平面図・断面図	66
第 19 図	SB4 遺物出土状況 1	26	第 57 図	SB10 出土遺物	67
第 20 図	SB4 遺物出土状況 2	27	第 58 図	SB11・12・13 平面図・断面図	68
第 21 図	SB4 出土遺物 1	28	第 59 図	SB12 出土遺物	69
第 22 図	SB4 出土遺物 2	29	第 60 図	SB13 出土遺物 1	70
第 23 図	SB4 出土遺物 3	30	第 61 図	SB13 出土遺物 2	71
第 24 図	SB4 出土遺物 4	31	第 62 図	SB14・15・16・18 平面図	72
第 25 図	SB4 出土遺物 5	32	第 63 図	SB14 出土遺物	73
第 26 図	SB4 出土遺物 6	34	第 64 図	SB17 平面図・断面図	74
第 27 図	SB4 出土遺物 7	35	第 65 図	SB17 出土遺物	75
第 28 図	SB4 出土遺物 8	36	第 66 図	SB18 出土遺物	76
第 29 図	SB4 出土遺物 9	37	第 67 図	SB19・20・21・22・23 平面図	77
第 30 図	SB4 出土遺物 10	38	第 68 図	SB21 出土遺物	78
第 31 図	SB4 出土遺物 11	39	第 69 図	SB22 出土遺物	79
第 32 図	SB4 出土遺物 12	40	第 70 図	SB24・25・26 平面図・断面図	80
第 33 図	SB4 出土遺物 13	41	第 71 図	SB25 出土遺物	81
第 34 図	SB5 平面図・断面図	44	第 72 図	SB27・28・29 平面図	82
第 35 図	SB5 遺物出土状況	45	第 73 図	SB27・28・29 遺物出土状況	83
第 36 図	SB5 出土遺物 1	46	第 74 図	SB27 出土遺物	84
第 37 図	SB5 出土遺物 2	47	第 75 図	SB28 出土遺物	85
第 38 図	SB5 出土遺物 3	48	第 76 図	SB29 出土遺物 1	88

## 挿 図 目 次

第 77 図 SB29 出土遺物 2	89	第 115 図 第 6 層出土遺物 2	136
第 78 図 SB30 平面図・断面図	90	第 116 図 第 6 層出土遺物 3	137
第 79 図 SB30 出土遺物	91	第 117 図 VII区の位置	148
第 80 図 溝状遺構 1 平面図	93	第 118 図 VII区西壁土層断面図・平面図 1	149
第 81 図 溝状遺構 1 出土遺物	94	第 119 図 VII区西壁土層断面図・平面図 2	150
第 82 図 溝状遺構 2 平面図・断面図	95	第 120 図 VII区西壁土層断面図・平面図 3	151
第 83 図 第 9 層出土遺物 1	97	第 121 図 溝 1 出土遺物	152
第 84 図 第 9 層出土遺物 2	98	第 122 図 縄文時代出土遺物	153
第 85 図 第 9 層出土遺物 3	99	第 123 図 弥生時代出土遺物	154
第 86 図 第 9 层出土遺物 4	100	第 124 図 古墳時代出土遺物 1	155
第 87 図 第 9 层出土遺物 5	101	第 125 図 古墳時代出土遺物 2	156
第 88 図 第 9 层出土遺物 6	102	第 126 図 古墳時代出土遺物 3	157
第 89 図 第 9 层出土遺物 7	103	第 127 図 古墳時代出土遺物 4	158
第 90 図 第 9 层出土遺物 8	104	第 128 図 古墳時代出土遺物 5	159
第 91 図 第 9 层出土遺物 9	107	第 129 図 古墳時代出土遺物 6	160
第 92 図 第 9 层出土遺物 10	108	第 130 図 古墳時代出土遺物 7	161
第 93 図 第 9 层出土遺物 11	109	第 131 図 古墳時代出土遺物 8	164
第 94 図 第 9 层出土遺物 12	110	第 132 図 古墳時代出土遺物 9	165
第 95 図 第 9 层出土遺物 13	111	第 133 図 古墳時代出土遺物 10	166
第 96 図 第 9 层出土遺物 14	115	第 134 図 古墳時代出土遺物 11	167
第 97 図 第 9 层出土遺物 15	116	第 135 図 古墳時代出土遺物 12	168
第 98 図 第 9 层出土遺物 16	117	第 136 図 VII区 874 年面検出遺構および 周辺調査区	169
第 99 図 第 9 层出土遺物 17	118		
第 100 図 第 9 层出土遺物 18	119		
第 101 図 第 9 层出土遺物 19	120		
第 102 図 第 9 层出土遺物 20	121		
第 103 図 第 9 层出土遺物 21	122		
第 104 図 第 8 层出土遺物	123		
第 105 図 古代遺構配置図	127		
第 106 図 SB1 平面図・断面図	128		
第 107 図 SB1 完掘平面図	129		
第 108 図 SB1 出土遺物	129		
第 109 図 SB2 平面図	130		
第 110 図 SB8 平面図・柱穴断面図	131		
第 111 図 SB8 出土遺物	132		
第 112 図 第 6 層上面出土遺構・遺物分布状況	133		
第 113 図 Pit1 出土遺物	134		
第 114 図 第 6 层出土遺物 1	135		

## 図 版 目 次

図版 1-1	VII区遠景	184	図版 11-2	VII区南から	194
図版 1-2	VII区竪穴住居群	184	図版 12-1	溝2	195
図版 1-3	VII区南壁	184	図版 12-2	溝1	195
図版 1-4	VII区調査風景	184	図版 13-1	第10層出土遺物	195
図版 2-1	SB3 遺物出土状況	185	図版 13-2	SB3 出土遺物1	196
図版 2-2	SB3 遺物出土状況	185	図版 13-3	SB3 出土遺物2	196
図版 2-3	SB3 西側遺物出土状況	185	図版 13-4	SB4 出土遺物1	196
図版 2-4	SB3 西側遺物出土状況	185	図版 13-5	SB4 出土遺物2	196
図版 2-5	SB4 出土イノシシ骨	185	図版 13-6	SB4 出土遺物3	196
図版 3-1	SB4 遺物出土状況（東から）	186	図版 13-7	SB4 出土遺物4	196
図版 3-2	SB4 遺物出土状況（西から）	186	図版 13-7	SB4 出土遺物5	196
図版 4-1	SB4 大型壺出土状況	187	図版 14-1	SB4 出土遺物6	197
図版 4-2	SB4 床層	187	図版 14-2	SB4 出土遺物7	197
図版 4-3	SB4 遺物出土状況	187	図版 14-3	SB4 出土遺物8	197
図版 4-4	SB4 遺物出土状況	187	図版 14-4	SB4 出土遺物9	197
図版 4-5	SB4 完掘	187	図版 14-5	SB4 出土遺物10	197
図版 5-1	SB5 遺物出土状況	188	図版 15-1	SB4 出土遺物11	198
図版 5-2	SB5 遺物出土状況	188	図版 15-2	SB4 出土遺物12	198
図版 6-1	SB5 完掘	189	図版 16-1	SB4 出土遺物13	199
図版 6-2	SB6 遺物出土状況	189	図版 16-2	SB4 出土遺物14	199
図版 7-1	SB6 遺物出土状況	190	図版 16-3	SB4 出土遺物15	199
図版 7-2	SB7 遺物出土状況	190	図版 16-4	SB4 出土遺物16	199
図版 7-3	SB7 遺物出土状況	190	図版 16-5	SB4 出土遺物17	199
図版 7-4	SB7 土器埋設炉検出	190	図版 17-1	SB5 出土遺物1	200
図版 7-5	SB7 土器埋設炉 <sup>3</sup>	190	図版 17-2	SB5 出土遺物2	200
図版 8-1	SB7	191	図版 17-3	SB6 出土遺物1	200
図版 8-2	SB7 完掘	191	図版 17-4	SB6 出土遺物2	200
図版 8-3	SB7 埋設土器撤去後	191	図版 17-5	SB6 出土遺物3	200
図版 8-4	SB10 断面	191	図版 18-1	SB7 出土遺物1	201
図版 8-5	SB13 検出面	191	図版 18-2	SB7 出土遺物2	201
図版 9-1	SB13 遺物出土状況	192	図版 19-1	SB7 出土遺物3	202
図版 9-2	SB13 完掘	192	図版 19-2	SB7 出土遺物4	202
図版 9-3	SB14 遺物出土状況	192	図版 20-1	SB7 出土遺物5	203
図版 9-4	SB15・16 検出面	192	図版 20-2	SB9・10・12・13 出土遺物	203
図版 9-5	SB14・15・16 完掘	192	図版 20-3	SB13 出土遺物	203
図版 10-1	SB17 遺物出土状況	193	図版 20-4	SB13・14・18・21・22 出土遺物	203
図版 10-2	SB18 検出面	193	図版 20-5	SB25 出土遺物	203
図版 11-1	VII区西から	194	図版 21-1	SB17 出土遺物	204

## 図 版 目 次

図版 21-2	SB27・29・30 出土遺物	204
図版 21-3	SB27 出土遺物	204
図版 21-4	SB30 出土遺物	204
図版 21-5	SB29 出土遺物	204
図版 22-1	住居跡出土石器 1	205
図版 22-2	住居跡出土石器 2	205
図版 23-1	第 9 層出土遺物 1	206
図版 23-2	第 9 層出土遺物 2	206
図版 24-1	第 9 層出土遺物 3	207
図版 24-2	第 9 層出土遺物 4	207
図版 25-1	第 9 層出土遺物 5	208
図版 25-2	第 9 層出土遺物 6	208
図版 26-1	第 9 層出土遺物 7	209
図版 26-2	第 9 層出土遺物 8	209
図版 26-3	第 9 層出土遺物 9	209
図版 26-4	第 9 層出土遺物 10	209
図版 26-5	第 9 層出土遺物 11	209
図版 27-1	第 9 層出土遺物 12	210
図版 27-2	第 9 層出土遺物 13	210
図版 28-1	第 9 層出土遺物 14	211
図版 28-2	第 9 層出土遺物 15	211
図版 28-3	第 9 層出土遺物 16	211
図版 28-4	第 9 層出土遺物 17	211
図版 28-5	第 9 層出土遺物 18	211
図版 29-1	第 9 層出土遺物 19	212
図版 29-2	第 9 層出土遺物 20	212
図版 30-1	第 8 層出土遺物 1	213
図版 30-2	第 8 層出土遺物 2	213
図版 30-3	Pit1・第 6 層出土遺物 1	213
図版 30-4	第 6 層出土遺物 2	213
図版 30-5	第 6 層出土遺物 3	213
図版 31-1	第 6 層出土遺物 4	214
図版 31-2	第 6 層出土遺物 5	214
図版 31-3	第 6 層出土遺物 6	214
図版 31-4	第 6 層出土遺物 7	214
図版 31-5	第 6 層出土遺物 8	214
図版 32-1	VII区出土遺物 1	215
図版 32-2	VII区出土遺物 2	215
図版 32-3	VII区出土遺物 3	215
図版 32-4	VII区出土遺物 4	215
図版 33-1	VII区出土遺物 5	216
図版 33-2	VII区出土遺物 6	216
図版 33-3	VII区出土遺物 7	216

# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

橋牟礼川遺跡は、大正7・8年に京都帝國大学の濱田耕作、長谷部言人らによる発掘調査がおこなわれ、縄文土器が弥生土器よりも古い時代のものであることが国内で初めて層位学的に実証された遺跡として知られる。大正13年には、国市指定史跡に指定され、昭和53年には、史跡保存のための2.36haの公有地化が完了した。

その後、国指定史跡に隣接する北西側の土地からJR指宿駅付近に至る範囲まで土地区画整理事業がおこなわれることとなった。この事業に伴い、昭和61年から平成3年度まで、深さ1.5m以上の掘削を伴う道路部分と下水道が敷設される部分において発掘調査がおこなわれることとなつた。

橋牟礼川遺跡の調査履歴は第1表から第2表のとおりである。本報告書に掲載する橋牟礼川遺

第1表 橋牟礼川遺跡調査履歴 1

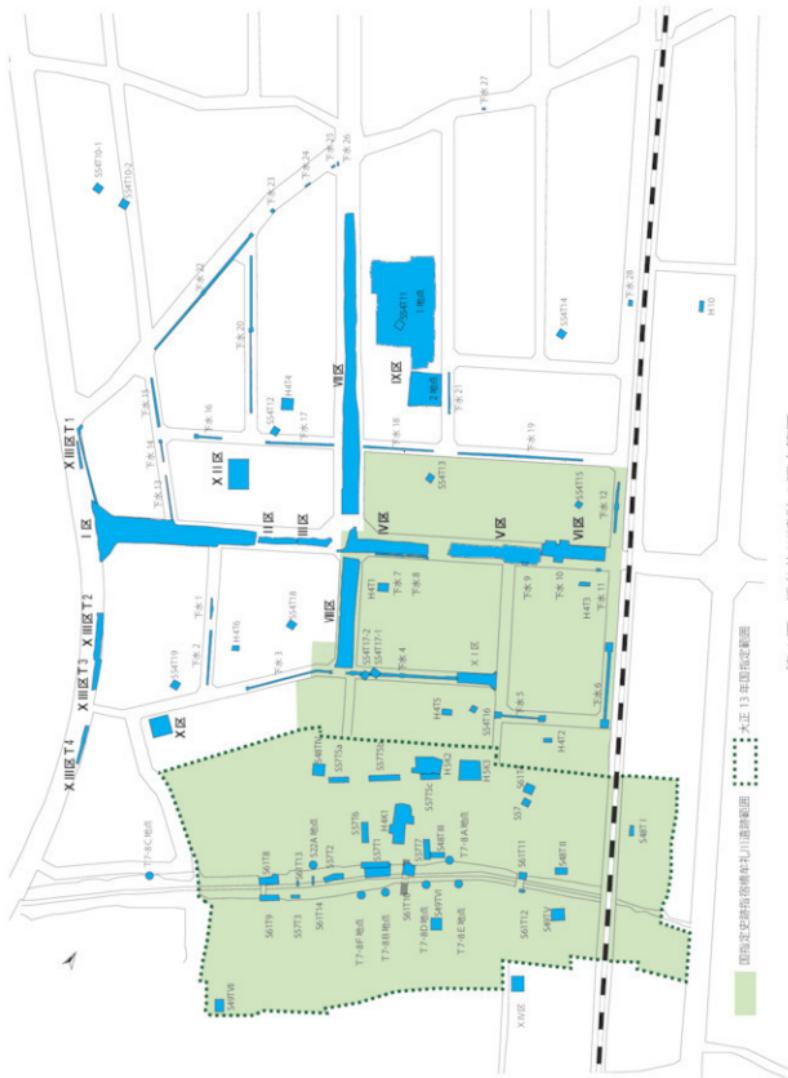
西暦	和暦	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	調査区
1917年	大正6年		山崎五十鈴	吉田貞吉の依頼で、縄文土器と弥生土器が出土する地点を確認。	
1918年	大正7年 1月		京都帝國大学	京都帝國大学による学術調査が行われ、縄文土器が弥生土器よりも古い時代のものであることが日本で初めて実証された。	
1919年	大正8年 4月		京都帝國大学	京都帝國大学による学術調査によって、「日本のポンペイ或いはサントリ」と報告され、日本で最も早く火山災害遺跡であることが認識された。	T7・8A~F
1926年	大正15年		史跡名勝天然記念物調査委員(山崎五十鈴)	濱田の調査を要約	
1930年	昭和5年	昭和5年3月13日	鳥居龍藏	京都帝國大学調査地点の周辺で調査。弥生土器や石器が出土し、その東100mの地点で新たな貝塚を発見した。	
1948年	昭和22年	昭和23年2月	鹿児島県	鹿児島県立公園候補地学術調査が行われ、縄文土器、弥生土器の包含層に加え、古墳時代の貝塚が発見される。	
1974年	昭和48年	昭和49年2月25日～3月11日	指宿市教育委員会	史跡指定規制変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、平安時代の土塙墓から幼児骨など5体が発見される。	S48I～IV
1975年	昭和49年	昭和50年2月3日～2月18日	指宿市教育委員会	史跡指定規制変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代に至る各時代の文化層、火山灰層が確認される。また、縄文～弥生期の堅穴住居跡、古墳時代の土器集中廃棄所などが発見される。	S49V～Ⅲ
1979年	昭和54年	昭和54年10月22日～12月11日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う確認調査が行われ、遺跡の広がりが10ha以上に及ぶことが確認される。	S54T1～T18
1983年	昭和57年	昭和58年2月21日～3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の堅穴住居や貝塚が発見される。	S57T1～T7
1986年	昭和61年	昭和61年5月6日～6月30日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の堅穴住居跡や土器調、鐵冶に伴う遺物が出土する。また、平安時 S61T8～T10代の鐵器、須恵器、土器等などが出土する。	S61T8～T10
1986年	昭和61年	昭和61年7月10日～昭和62年3月20日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞觀16年（西暦874年）の開闢放噴火に伴う土石流で埋め尽くされた旧河川が発見。Ⅷ区される。	
1987年	昭和62年	昭和61年6月1日～平成1年1月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、国指定史跡内で発見されている古墳時代の堅穴住居跡と同時期の住居跡が確認され。VII区。	
1988年	昭和63年	昭和63年7月4日～平成1年1月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞觀16年（西暦874年）の開闢放噴火で埋没した建物跡が発見される。また、古墳時代の子持玉が出土する。	
1988年	昭和63年	昭和63年4月25日～5月20日	指宿市教育委員会	温泉源移転に伴う確認調査が行われ、古墳時代の集落の広がりが確認される。	X区

第2表 橋牟礼川遺跡調査履歴

西暦	和暦	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	調査区
1989年	昭和63年	平成1年1月8日～1月28日	指宿市教育委員会	個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、貞觀16年（西暦874年）の開闢痕火で倒壊・埋没した建物跡の一部が発見される。	XIV区
1989年	平成1年	平成1年4月20日～6月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業による温泉源移転に伴う確認調査が行われ、貞觀16年（西暦874年）の開闢痕火で埋没した樹木痕が発見される。	X区
1989年	平成1年	平成1年4月20日～平成2年3月29日	指宿市教育委員会	都市計画事業による発掘調査が行われ、貞觀16年（西暦874年）の開闢痕火で土石流跡を確認。日本三代実録の「河水砂・Ⅱ区・Ⅲ区和」を実証する。	
1989年	平成1年	平成1年10月5日～12月10日	指宿市教育委員会	都市計画事業による個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、平安時代の品跡、建物跡、古墳時代の堅穴住居跡などが発見される。	XII区
1990年	平成2年～3年	平成2年5月1日～平成3年7月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業による発掘調査が行われ、古墳時代の集落跡、土器集中廃棄所、道路、平安時代の品跡、建物跡などが発見される。	I区
1990年	平成2年～3年	平成2年7月4日～平成3年9月17日	指宿市教育委員会	下水道事業に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の集落、平安時代の品跡が広範囲にあることが確認される。	下水I～28
1991年	平成3年	平成3年6月7日～11月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞觀16年（西暦874年）の開闢痕火で埋没した品跡に隣接して、高床倉庫跡、道・Ⅷ区跡、欄柵跡などの遺構が発見されている。	
1991年	平成3年	平成3年9月27日～11月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業による発掘調査が行われ、古墳時代の堅穴住居跡、馬骨が発見される。	XIII区
1992年	平成4年	平成4年5月20日～3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の品跡、道路等が発見される。	IX区
1992年	平成4年	平成4年8月17日～平成5年1月26日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の品跡、古墳時代の土器集中廃棄所等が発見される。	H4T1～T5
1992年	平成4年	平成4年10月21日～平成5年3月20日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が実施され、平安時代の堅穴住居跡等が発見される。	HAKI
1992年	平成4年	平成4年7月1日～平成5年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、旧河川の統引きと平安時代の品跡が発見される。	IX区
1993年	平成5年	平成5年4月1日～平成6年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、平安時代の品跡、古墳時代の馬鹿足工具痕跡、弥生時代の土器集中廃棄所等が発見される。	
1993年	平成5年	平成6年10月1日～平成7年3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が行われ、平安時代の堅穴住居跡2基が発見される。	H5K2・K3
1994年	平成5年	平成6年1月17日～平成7年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査（片野田地点）によって、中世の品跡、平安時代の道路等が発見される。	H5
1994年	平成6年	平成6年4月11日～5月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、縄文時代後期の柱穴群が確認される。	IX区
1994年	平成6年	平成6年7月15日～平成7年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査（片野田地点）によって、中世～近世の墓、古墳時代の柱穴が確認される。	H6
1995年	平成7年	平成6年7月17日～平成8年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査（向古地地点）によって、弥生時代終末～古墳時代の祭祀遺構が発見される。	H7
1996年	平成8年	平成6年11月18日～平成9年3月31日	指宿市教育委員会	指導挖掘工事に伴い発掘調査が行われ、古墳時代の遺構・遺物が発見される。	
1996年	平成8年	平成8年12月1日～平成9年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、貞觀16年（西暦874年）の開闢痕火で埋没した樹木痕が確認される。	H8
1997年	平成9年	平成9年7月1日～平成10年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査（南丹波地点）によって、古墳時代の柱穴が確認される。	H9
1998年	平成10年	平成10年7月1日～平成11年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の品跡、古墳時代の柱穴が確認される。	H10
1999年	平成11年	平成11年7月26日～平成12年3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の品跡、道路が確認される。	H11

跡における発掘調査の内容及び検出した遺構遺物等に関しては、第1図に示した調査区名を用いた。なお、本報告書で便宜上用いた調査区名については、下記のように付している。

・ I 区～X III 区：昭和 54 年度～平成 6 年度の指宿駅西部土地区画整理事業（以下「都市計



第1図 橋牟礼川遺跡の調査範囲

画事業」及び博物館建設に伴う調査

- ・下水1～下水28：平成2年度から平成3年度の下水道敷設に伴う発掘調査
- ・年度+トレンチ番号：大正年間以降に橋牟礼川遺跡及び隣接遺跡での確認調査及び緊急調査（T：大正，S：昭和，H：平成を示す）

## 第2節 発掘調査の組織（昭和61年度・62年度）

調査主体者	指宿市教育委員会	教 育 長	安 田 新 駒
調査責任者		社会教育課長	北 方 耕 蔵
調査事務担当者		社会教育係長	堀 口 健一郎
		派遣指導主事	田 中 和 成
		主 事	尾 辻 隆
		主 事 補	肥 後 俊 明
		主 事	板 松 エイ子
調査担当者	指宿市教育委員会	文化財専門員	桑 烟 光 博
	鹿児島県教育庁文化財課	主 査	中 村 耕 治

なお、調査企画において、県教育長文化財課長・桑原一廣、同課長補佐・川畠栄三、同主任幹・中村文夫、同主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長・立園多賀生、同文化財研究員兼指定文化財係長・吉元正幸の各氏の他、同企画助成係の指導・助言を得た。また、発掘調査・遺物については、鹿児島県考古学会長・河口貞徳氏の指導を受けた。なお、調査期間中に鹿児島大学教授・上村俊雄氏、同助手・本田道輝氏、同埋蔵文化財調査室の松永幸男氏、獣骨については鹿児島大学農学部教授・西中川駿氏、地層については玉龍高校教諭・成尾英仁氏の指導、助言を受けた。※所属は当時。

## 第3節 整理・報告書作成の組織（平成28年度・29年度）

作 成 主 体	指宿市教育委員会	教 育 長	西 森 廣 幸
作 成 責 任 者	指宿市教育委員会	教 育 部 長	長 山 君 代
作成担当組織員	指宿市教育委員会	社会教育課長	中 摩 浩 太 郎
		文化担当主幹	鎌 田 洋 昭
		管理係主幹兼係長	迫 田 優 子
		管理担当主幹	湯 口 亮 一
		社会教育係主幹兼係長	鶴 崎 一 郎
		文化係主幹兼係長	上 蘭 浩 司
		文化係主事	廣 田 さおり
		文化係技師	西牟田 瑛 子
		文化係技師	松 崎 大 嗣
整 理 作 業 員	清 秀子, 竹下 珠代, 鎌田 真由美, 境 由希		

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

指宿市は、薩摩半島の南端に位置し、地形的には、山地、台地、平野、湖沼と大きく4つに分類できる。これらの地形は、約10万5千年前から約11万年前に噴火した阿多火山の噴火活動に伴う阿多カルデラ内にほぼ取まる。約5万3千年前には、池田湖の東側に位置する清見岳が大きな噴火を繰り返した。約2万8千年前から約3万年前には、始良カルデラの噴出物である戸戸火砕流が現在の台地部に厚く堆積した。

指宿市開聞地区から南洋を臨むと、硫黄島・竹島を目視することができる。この二つの島は約7,300年前に噴火した鬼界カルデラの北縁であり、指宿市から約50kmの距離に位置する。鬼界カルデラから噴出した「幸屋火砕流」は、指宿市新西方の幸屋で発見したことからこの名がついている（宇井 1967）。

その後、新期指宿火山群（池田火山）が活発な火山活動を始めた。中でも、約5,700年前の池田火山の活動により、九州最大のカルデラ湖である池田湖が形成された。その噴出物は、指宿市全域の直接的な地形形成の要因となっている。池田火山が噴火した直後に松ヶ窪、池底、鰐池、成川、山川湾が連続して噴火し、「爆裂火口」と呼ばれる一直線上に並ぶ火口を形成した。

さらに、池田火山の南西に位置するトコロニーデ型の開聞岳は、約4,700年前から約3,700年前に活動を開始した。開聞岳噴出物のうち、旧指宿市域では主に4回分の開聞岳噴火火山灰層を確認することができる。有史時代の噴火についてはいくつかの資料に記録されており、西暦874年（以下「874年」と表記）と885年の噴火とそれに伴う災害の状況等が『日本三代実録』に記録されている。特に、874年の開聞岳噴火に伴う固結火山灰層は広く市域を覆っている。

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は、指宿市街地に所在し、指宿市街地に並行し南北に走る山塊の山裾から海岸へ傾斜する海拔7m～20m程度の緩やかな火山性扇状地上に位置する。

扇状地上には、山裾を水源とする複数の河川が海岸に向かい東流するが、いずれも大地を深く削り、深さ数m～10数mに達するV字状の谷を形成している。大正13年に国史跡に指定された



第2図 指宿市の位置



第3図 指宿市の火山地形

範囲の中央にも、上記のようにして形成された橋牟礼川が流れるが、V字状谷の側面には遺物包含層が露出しており、古墳時代の成川式土器や弥生土器、まれに縄文土器が表採される。

〈文献〉

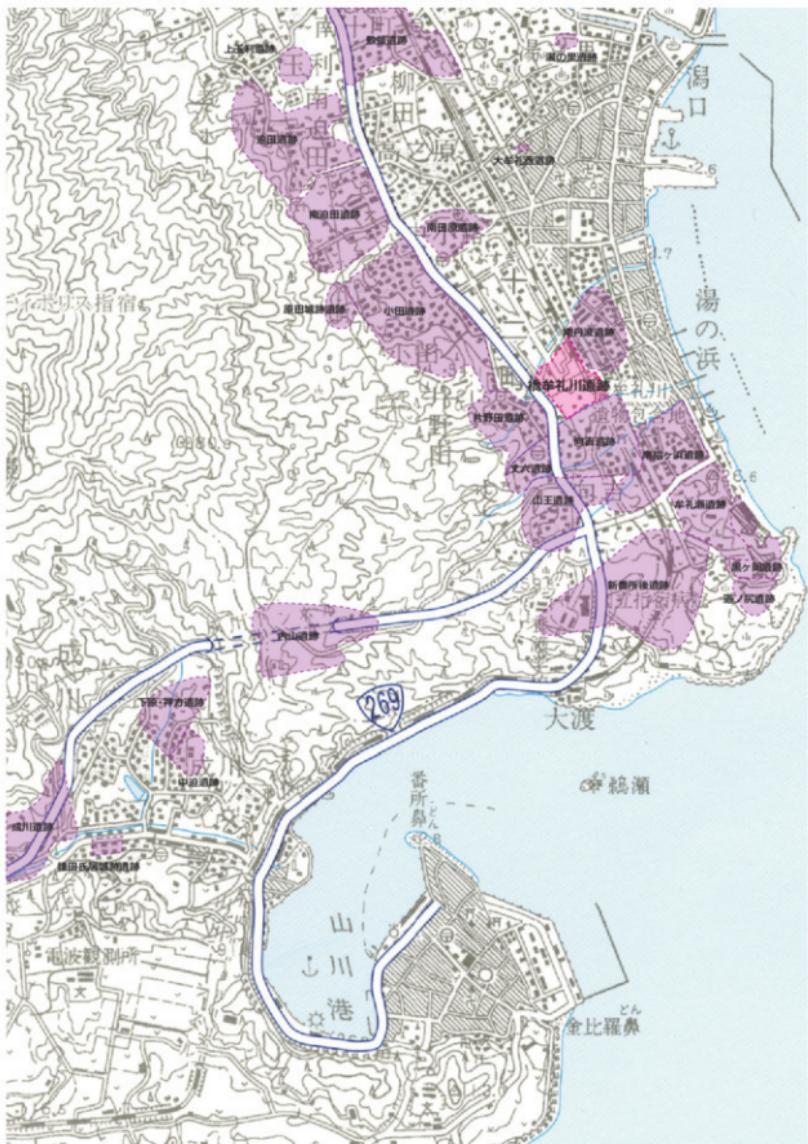
宇井忠英 1967 「鹿児島県指宿地方の地質」『地質学雑誌』73巻10号 477~490頁

## 第2節 基本層序

橋牟礼川遺跡の地層は、基本的に池田カルデラ噴出物と開聞岳噴出物とそれらに挟まれる扇状地堆積物から形成される。ここでは、1991年に確認された橋牟礼川遺跡の標準層位をもとに述べる。

### 第1層 黒褐色土層（表土）

耕作土。都市計画事業によってシラスや砂利、礫層がある場合がある。また土地利用の履歴により第1層の厚さや性状に差異が認められる。重機による掘削痕跡が下層に及ぶ場合がある。



第4図 指宿市南東部の遺跡

第2層 暗灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

第3層 黒灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

第4層 黒色土層

中世（鎌倉～室町時代）の遺物包含層である。黒ボクのような腐食土が発達している。厚さは20cm～50cmと厚く、宋代の青磁・白磁や糸切り底の土師器が出土する。内黒土師器も出土していることから、上限は平安時代後期まで遡る可能性がある。紫コラ（貞觀16年、仁和元年の開聞岳噴出物）の堆積後の生活が再開される時期を考える上で重要な層である。

第5層a 紫灰色火山灰層（紫コラ）

平安時代に堆積した開聞岳噴出物層である。平安時代の旧地表面を覆う火山灰層の上位に存在することから、下位の火山灰層を貞觀16年に、上位の第5a層を仁和元年の開聞岳噴出物に対比させる説もあるが、近年の地質学的調査の成果から、下位と上位の噴出物は一連の火山活動に伴うものであるとする考えがある。

第5層b 紫灰色火山灰層二次堆積物

次に説明する紫灰色火山灰堆積物 第5層c（874年開聞岳噴出物）の二次堆積層で、水流作用で形成された層と考えられ、砂が多く混在し、クロスラミナが発達する。

第5層c 紫灰色火山灰層（紫コラ）

紫灰色火山灰層（紫コラ）。874年の開聞岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて強く固結し、フォール・ユニットが認められる。第5層cの最下部には、2cm以下の礫が2～5cmの厚さで堆積するが、これは貞觀16年の火山活動に伴う最初の降下物とみられる。第5層cの厚さは、約30～80cmであり、場所によっては一時堆積物を侵蝕して、クロスラミナを形成する堆積層が観察されることがある。

第6層 暗オリーブ褐色土層

奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は874年開聞岳噴出物層に直接被覆され、旧地表面の地形をそのままに留めている。第6層は標準層位では、a, b, cの3分層が可能である。a層は腐食が進行しており、特に畠跡周辺では黒色が強くなる。b層はオリーブ褐色を呈するが、河川跡付近では砂層となる場合がある。c層は7層青コラの二次堆積層である。

第7層 青灰色固結火山灰層（青コラ）

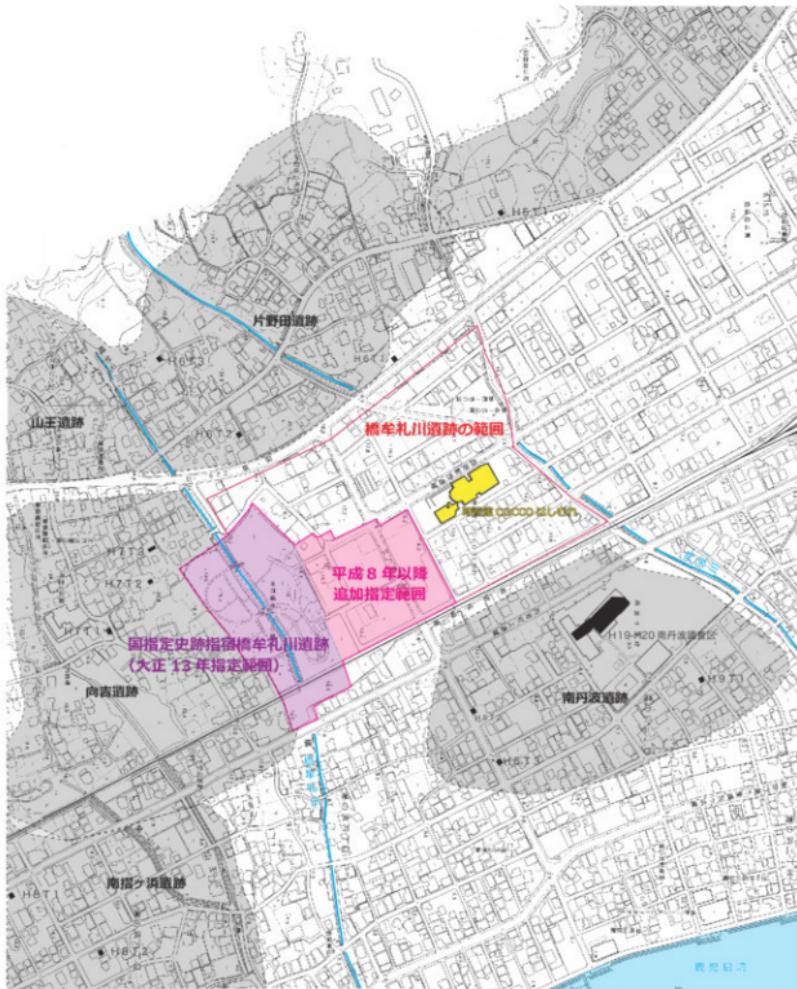
7世紀後半に比定される開聞岳噴出物層（下山1992）で、下部には火山活動の初期に降下したと考えられるスコリアが2～5cm程度堆積する。さらに、暗橙色土層を5～10cm程度挟み、1～2cm程度のスコリア堆積が部分的に見られる場合があることから、火山活動の小休止期があったと考えられている。

第8層 橙色土層

古墳時代に相当する扇状地堆積物層であり、5～30cmほど堆積する。層中には、スコリアのブロック（開聞岳の7世紀第4四半期の噴出物堆積層と休止期を挟んで下位に存在する初期の噴出物）や、砂層、池田湖起源の噴出物のブロック、池田湖降下軽石等を含む。古墳時代時などのローリングを受けたものが検出される。

第9層 暗褐色土層

古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田カルデラ降下軽石を若干含む。やや粘質であり、厚さ



第5図 橋牟礼川遺跡の範囲と周辺遺跡

は50cm～1m程度である。第9層中から造構が掘りこまれた場合は土色などからの判別が困難であり、下位層の第10層に達している場合は、第10層上面で検出できる。第9層の形成は、出土須恵器から5世紀から6世紀代の集落形成による地層の搅乱と、複数回にわたる河川の氾濫などによる堆積などの要因が複合しているとみなされる。

第10層 赤橙褐色粘質土層

弥生時代中期～後期の遺物包含層で、いわゆる山ノ口式土器などが出土する。基本的には扇状地堆積層で、池田湖降下火山灰のブロックを含む。第10層の中位から砂層ブロックが検出されることがある。第9層から掘り込まれた遺構は、通常、第10層に到達するため、第9層中に混在する弥生土器は第10層に包含されていたものがあると考えられる。

#### 第11層 暗紫色火山灰層（暗紫コラ）

弥生時代（山ノ口式土器段階）に降下した開聞岳噴出物堆積層である。強く固結せず、ブロック状に堆積していることが多い。層厚は0～5cm程度である。山ノ口遺跡、成川遺跡など、この火山灰が山ノ口式土器を被覆していた事例がある。

#### 第12層 明褐色土層

弥生時代前～中期にかけての遺物包含層で、第13層と色調は類似するが、粘性が強く粘度は小さい。

#### 第13層 暗褐色小石混シルト質土層

主に、刻目突帯文土器を包含する層で、小石が混じる。

#### 第14層 赤褐色小石混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含む。黒川式土器が主体となる。

#### 第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含むが、縄文時代後期の遺物が出土することがある。

#### 第16層 黒褐色橙色バミス混シルト質土層

主に、縄文時代後・晩期の遺物を含む。縄文時代後期の上加世田式土器、市来式土器などが確認

	第1層 表土（現代耕作土）
	第2層 暗灰色土層
	第3層 黒灰色土層
	第4層 黒色土層
	第5層a 紫灰色火山灰層（紫コラ）
	第5層b 紫灰色火山灰層二次堆積物
	第5層c 紫灰色火山灰層（紫コラ）
	第6層 暗オリーブ褐色土層
	第7層 青灰色固結火山灰層（青コラ）
	第8層 橙色土層
	第9層 暗褐色土層
	第10層 赤褐色粘質土層
	第11層 暗紫色火山灰層（暗紫コラ）
	第12層 明褐色土層
	第13層 暗褐色小石混シルト質土層
	第14層 赤褐色小石混シルト質土層
	第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層
	第16層 黑褐色橙色バミス混シルト質土層
	第17層 暗青灰色火山灰層（黄コラ）
	第18層 灰褐色砂質土層
	第19層 池田湖火山灰層

第6図 橋牟礼川遺跡の基本層序

されている。第14層から第16層までは、場所により欠落する場合があるが、第16層はコンスタントに確認することができる。

#### 第17層 暗青灰色火山灰層（黄コラ）

縄文時代後期の開聞岳噴出物で、上半は黄色細粒火山灰、下半は黒灰色スコリア及び粗粒火山灰の二層から構成される。ブロック状に残存し当時低い部分には10～15cm程度の層厚を確認することができる。成川遺跡などでは、「指宿式土器」を被覆していた事例がある。

#### 第18層 灰褐色砂質土層

縄文時代後期遺物包含層で「指宿式土器」を主に包含するが、同層より「阿高式土器」が出土している。下部は、池田湖降下軽石を含む砂層に変化し、池田湖火山灰層の二次的な堆積層となる。

#### 第19層 池田湖火山灰層

灰色～黄灰色を呈する層で、約5700年前の池田カルデラ形成期の火山活動に伴い堆積したものである。軽石を多く含み、軽石には角閃石が多く含まれる。同層が、この地域の地形基盤を成すものと考えられ、発掘調査では、現在のところ同層を除去した事例はない。指宿市北部の横瀬遺跡では2m以上の層厚を呈する。橋牟礼川遺跡付近では、池田火碎流堆積物は30m以上に達すると考えられている。

#### 〈文献〉

下山寛 1992 「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第8号 65～79

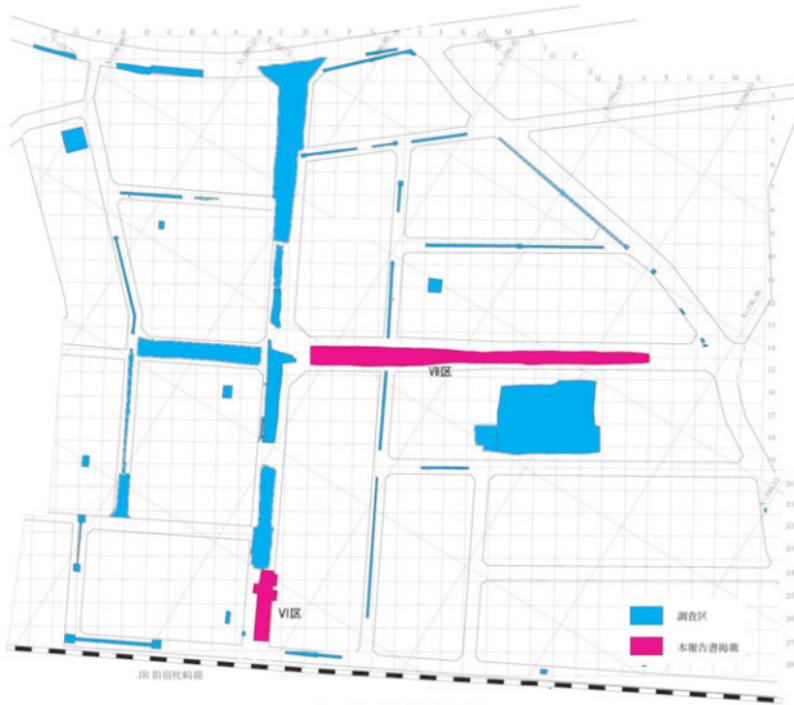
第3章 VI区の調査成果

## 第1節 調査の概要

VI区の調査は昭和62年6月1日から平成元年1月30日まで実施された。調査区は、指宿駅西部土地区画整備事業に伴い設置が計画された都市計画道路のうち、国道226号線から海に向けて東西方向に新設される幹線道路予定地の最も東側に、JR指宿枕崎線に面して設けられた(第7図)。

## 第2節 第10層出土遺物(第14図)

第10層は弥生時代中期～後期の遺物包含層で、いわゆる山ノ口式土器などが出土する。基本的には扇状地堆積層で、池田湖降下火山灰のブロックを含む。第10層の中位から砂層ブロックが検出されることがある。第9層から掘り込まれた遺構は、通常、第10層に到達するため、第9層中



### 第7図 調査区配置図

に混在する弥生土器は第10層に包含されていたものがあると考えられる。

#### 〈第10層出土遺物〉

1は中溝式の壺である。口径は復元で30.0cmを測る。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、口唇部はコの字に仕上げられる。頸部には外面に突出する貼り付け突帯がめぐり、細かい刻み目が施される。外面はナデ調整、内面はナデ調整、指頭圧痕がみられる。

2は壺の口縁部で、くの字に強く屈曲する。口唇部は断面M字状。調整は内外面とも細かいミガキ調整がみられる。

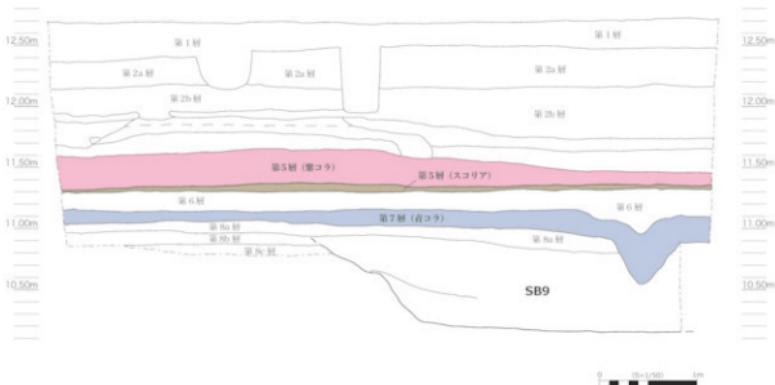
3は壺の脚部である。脚部径7.0cm、脚部高1.3cm、底径6.0cmを測る。脚部形態は、ハの字に開く形態を呈し、胴下部にかけて大きく開く。内底面の器厚は0.5cmと薄い。外面はナデ調整、内面は工具ナデ調整がみられる。脚接合部から胴下部にかけてススが付着し、内面にはコゲがみられる。

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

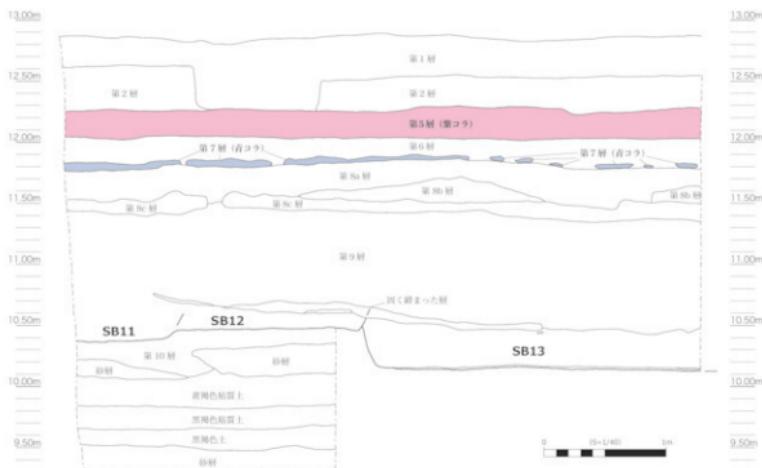
#### (1) 遺構

VII区においては、古墳時代に帰属するとみられる堅穴住居等の遺構が検出された。主体となるのは、第8層・第9層中から掘削された堅穴住居等の遺構群である。これらの中には、7世紀後半に位置づけられる第7層青コラ火山灰が降下する時点で埋没過程にあるものが複数含まれていた。加えて、出土遺物が少量であるとともに、弥生土器が主となる堅穴住居もある。検出時の層位が十分に確認できない状況であるが、これらの住居遺構は、切り合い関係では第9層下位から掘削された堅穴住居によって切られている状況であるが、帰属時期の確定が困難であり、本節で記載した。

なおSB7、SB31は第7層青コラ火山灰上位の第6層から掘削された堅穴建物であり、古代に帰



第8図 VII区東壁土層断面図



第9図 VI区西壁土層断面図

属する遺構であるが、本節で記載している。

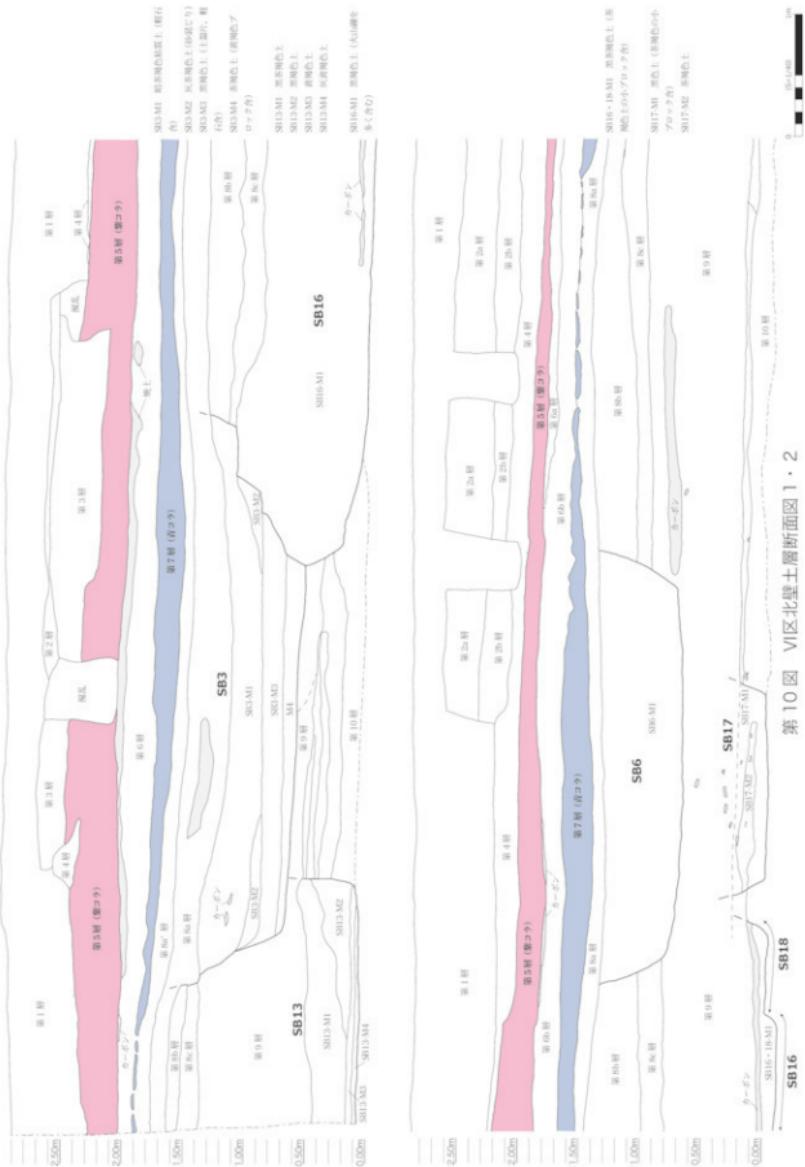
古墳時代に帰属する遺構の構成は、堅穴住居跡とみられる遺構 26 基（SB と表記、うち SB9 と SB28 の 2 基は疑問）、溝状遺構 2 基、土坑 1 基、土坑状遺構 1 基である。

本稿の記載は、昭和62年度において作成された遺構平面図や層位断面図等の現場で作成された図面を基に行った。したがって、遺構の帰属層位や新旧関係等に関しては図面をもとに再構成したものである。

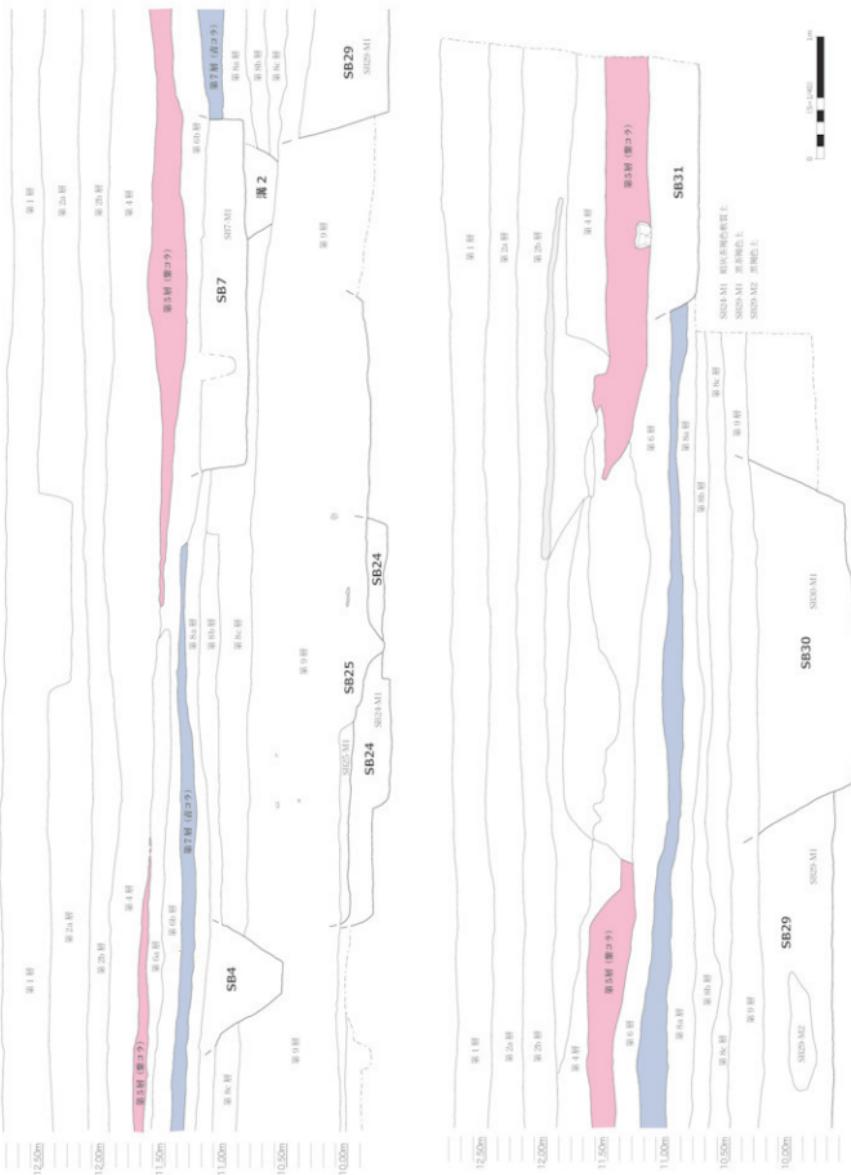
### 【SB3】(第 16, 17 図 図版 2-1 ≈ 2-4)

SB3は、主軸を北西—南東にとり、方形プランを呈する。全体の半分以上の検出であるが、検出された竪穴の一辺は3.5mを測る。検出面からの竪穴の深さは約53cmを測る。第7層青コラ火山灰層の下面がわずかに竪穴中央に向かって窪んでおり、竪穴埋没途中で青コラ火山灰が降下したものと考えられる。

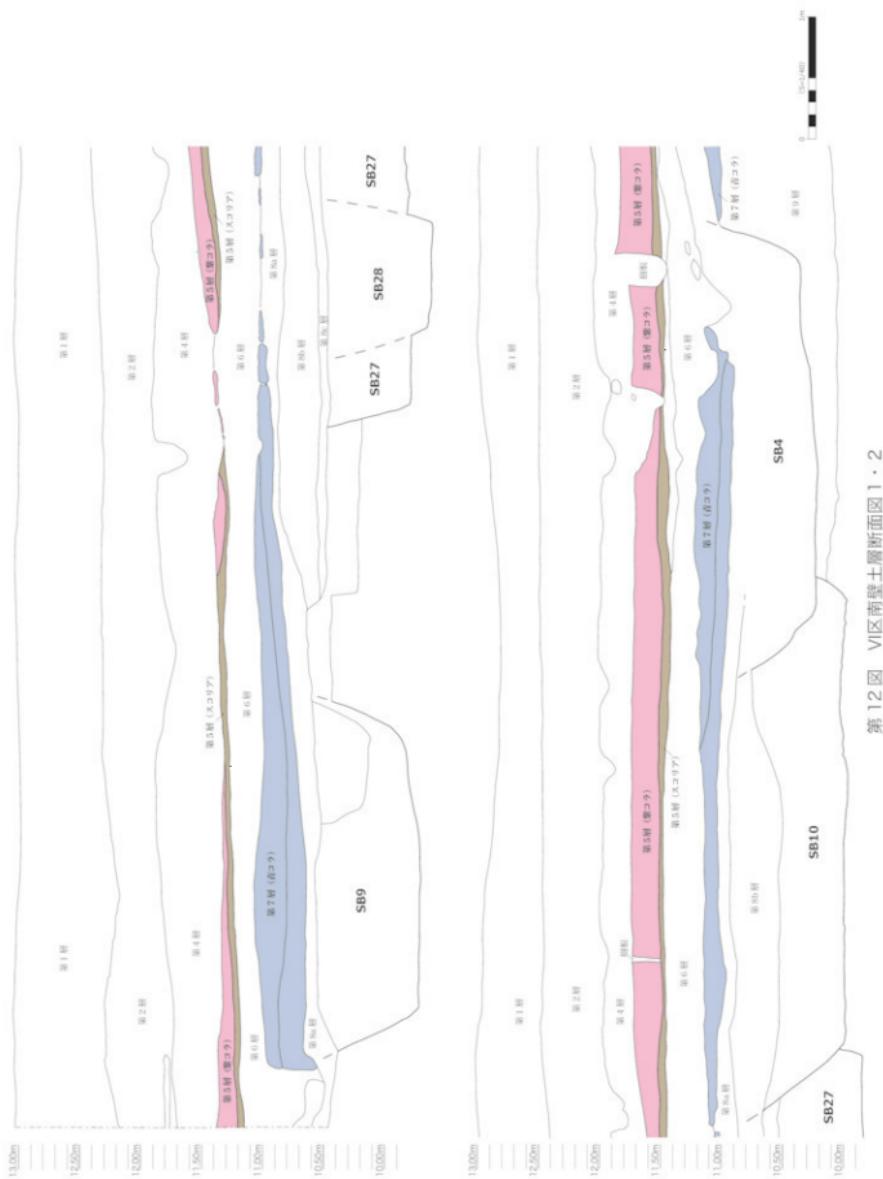
付帯遺構として、ピット5基、床面中央部分に設けられた土坑1基、竪穴コーナー下端部に溝状の土坑1基が検出された。ピットは便宜上3aから3eとした。ピット3aは長軸20cm、短軸18cmの略円形であり、深さ36cmある。ピット3bは直径12cmの略円形で、深さ21cmである。ピット3cは直径16cmの略円形であり、深さ23cmである。ピット3dは直径18cm、短軸16cmの楕円形であり、深さ27cmである。ピット3eは長軸16cm、短軸14cmの楕円形であり、深さ22cmである。床面全体が検出されていないため柱配置については不明な点が多い。検出されたピットはいずれも直径20cm程度と小型であること、土坑の東西では、西側に4基、東側に1基と、偏りがみられることから、どのピットが柱穴となるか不明である。ただ、片野田遺跡で主

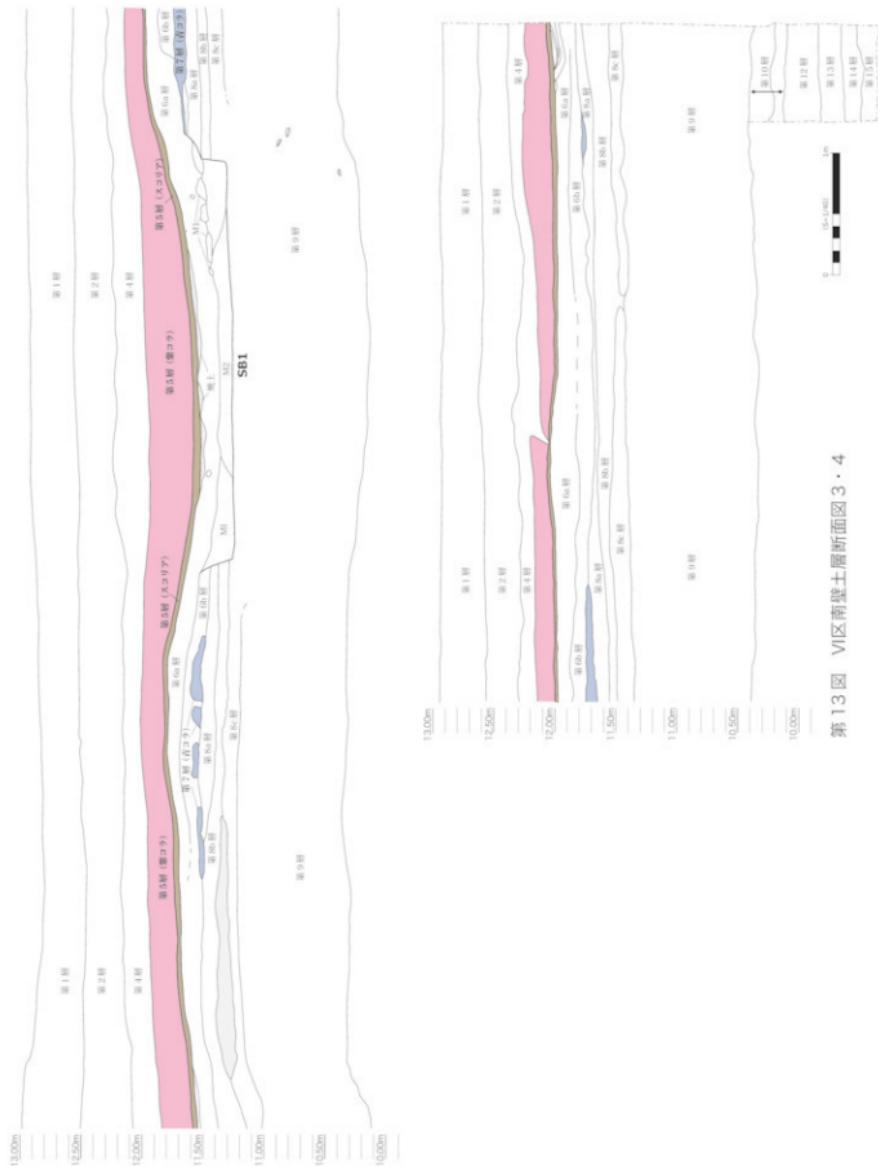


第10図 VI区北壁土層断面図 1・2



第11図 VI区北壁土層断面図 3・4





第13図 VII区南壁土層断面図 3・4

柱穴を設げず、床面に柱受けと考えられる凹みを設けた事例があることから、土坑の東側の床面で検出された直径20cmの凹みが柱受けである可能性もある。この場合は、凹みとピットaは対をなすと考えられる。さらに、凹みとピットaを中心軸と仮定すると、ピットd・eに対応する2柱穴が調査区外にあった可能性も考えられるかもしれない。

床面中央の土坑は長軸88cm、短軸70cmの不整梢円形であり、深さ12cmの断面逆台形を呈する。床面にはカーボン集中箇所が検出され、土坑はこれに隣接して確認された。竪穴コーナー下端の溝状土坑は、竪穴コーナーに沿っており、長さ1.4m程度を測る。幅30cm～46cm、深さ12cm程度である。

#### 〈SB3 出土遺物〉

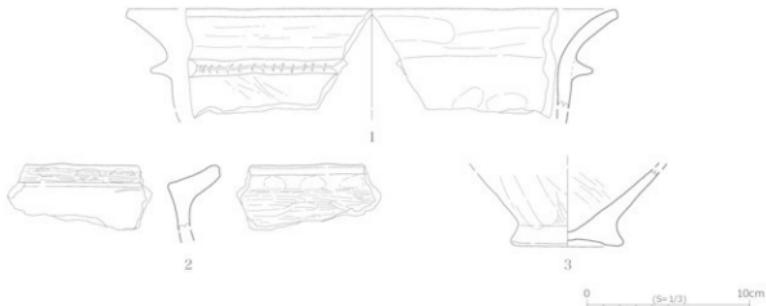
出土遺物総点数は828点である。

4は壺の口縁部から胴部である。口径30.5cmを測る。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部はゆるやかな丸みを持つ。一条の貼付け突帯がめぐり、刻目が施される。この刻目の原体は指頭で、刻みの間隔は広い。突帯が貼り付けられた部分の器壁はやや薄い。内外面ともミガキ調整が施される。そのうち外面は、突帯より上部は横方向のミガキ調整、突帯下部はタテ方向のミガキ調整である。内面はタテ方向のミガキ調整で仕上げられる。外面にはススの付着が見られる。

5は壺の脚部である。脚部径9.7cm、脚部高5.0cm、底径5.7cmを測る。脚部は直線的に開く形態で、脚内面形状はドーム状を呈する。脚端部は丸みをおびる。外面はナデ調整、内面は工具ナデである。

6は壺の脚部である。脚部径は復元径10.0cmである。脚部の内面形状はドーム状で脚端部はコの字である。内外面ともナデ調整で、脚端部には指頭圧痕がみられる。

7は二重口縁壺の口縁部～頸部である。口径は復元径16.2cmを測る。頸部からゆるやかに外反する形態である。口縁屈曲部は外面に強い稜を持ち、内面の屈曲はゆるやかである。口縁端部は丸くおさめられる。内面は剥落しているため調整不明だが、外面は頸部から屈曲部にかけてタテ方向のナデがほどこされる。やや白っぽい色調を呈し、軟質である。



第14図 第10層出土遺物

8, 9は壺底部である。8は底径が復元径9.0cmを測る。底部は平底だが、座りは悪い。底部から胴下部にかけての立ち上がりは、一度直線的に立ち上がり、ゆるやかに内湾しながら広がる。立ち上がり部分には連続的な指頭圧痕がみられる。外面はナデ調整で仕上げられるが、内面は剥落しており調整不明である。

9は底径が復元径6.3cmを測る。外底面の中央がくぼんでおり、底端部は丸みをおびる。立ち上がりは、直線的に開く形態で、内外面ともナデ調整で仕上げる。内面にはスリップ状の付着物がみられ、土器製作時に内面に塗布されたものと考えられる。

10はミニチュア土器である。わずかに脚部を持つことから、雖もしくは鉢をモデルとしたものと考えられる。脚部径2.2cm、脚部高0.8cm、底径2.6cmである。脚部は指頭圧痕が明瞭に残る。内外面とも粗いナデ調整である。

11から14は高杯の脚部である。11は脚接合部分である。脚接合部の径は復元径で3.6cmを測る。脚部と杯部の接合は粘土円錐塊を充填する方法で接合している。外面には赤色顔料が塗布される。

12は、直線的な高杯の筒部で、脚端部に向かって強く屈曲する。筒部径は復元径5.0cm、屈曲部径は復元径5.4cmを測る。脚部と杯部の接合は粘土円錐塊を充填する方法で接合される。円錐塊は内面で押しつぶされている。脚部外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。

13はくびれを有する高杯筒部である。脚部と杯部の接合は粘土円錐塊を充填する方法で接合している。外面はミガキ調整、内面は工具ナデで仕上げられる。外面全体的に黒斑がみられる。

14はドーム状に膨らむ脚部である。筒部との接合部で欠損している。脚部径は復元径で15.1cmを測る。脚部はやや踏ん張る形で丸みをもなながら開き、脚端部は断面コの字である。外面はナデ調整、外面は工具ナデ調整がみられる。

#### 【SB4】(第18~33図、図版2-5~4-5)

SB4は、主軸を東西にとり、長軸6.7m、短軸6.3mの方形プランを呈する。検出面からの竪穴深さは約51cmを測る。第7層青コラ火山灰層下面は竪穴中央部に向って窪んでおり、竪穴埋没途中の窪地の段階で、青コラ火山灰が降下したものとみられる。

竪穴は二段掘りであり、中段に造り出された平坦面は幅20cm~30cm程度であり、これがほぼ一周造り出されている。ただ、南面の一部でこの平坦面がなく、一段掘りとなる。一段掘りの部分では、竪穴下端の床面に溝状の落ち込みが設けられている。

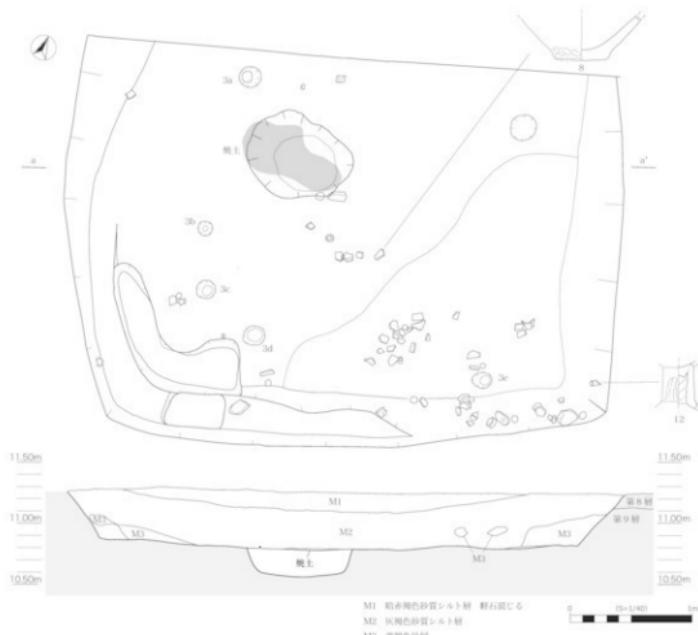
付帯遺構として、床面にピット9基、カーボンが広がる範囲1基、東面の竪穴下端に接する土坑と南面の竪穴下端に接する土坑の2基が検出された。ピットは便宜上4aから4iとした。ピット4aは長軸19cm、短軸18cmの円形であり、深さ63cmある。ピット4bは直径20cmの略円形で、深さ21cmである。ピット4cは直径22cm、短軸の略円形であり、深さ40cmである。ピット4dは直径20cmの略円形である。ピット4eは長軸44cm、短軸42cmの略円形であり、深さ19cmの二段掘りである。底部中央に長軸、短軸、深さ4cmの円形ピットを設ける。ピット4fは直径22cmの略円形で、深さ29cmである。ピット4gは直径22cm、深さ41cmの略円形である。ピット4hとピット4iは南面土坑内に隣接して設けられている。ピット4hは長軸14cm、短軸13cm、深さ12cmである。ピット4iは長軸16cm、短軸14cm、深さ52cmである。

カーボンが広がる範囲は床面中央で検出された。長軸82cm、短軸70cmである。

南面の一段掘り部分の竪穴下端で検出された溝状の遺構は、長さ2.6m、最大幅68cm、最小幅



第15図 VI区遺構配置図



第16図 SB3平面図・断面図

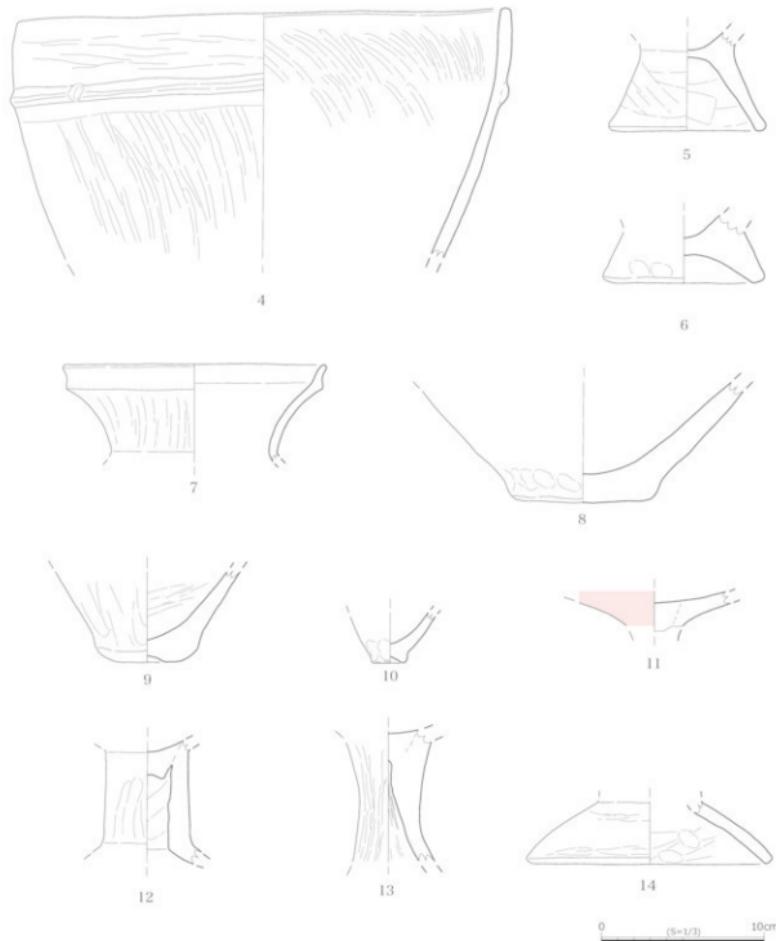
が26cm、深さ4cm～13cmとなる。底面はほぼ平坦である。平面形状は凹凸を成しており、土坑3基の切り合いにもみえる。東面の竪穴下端の土坑は、長軸1.3m、短軸0.6m、深さ9cm程度で長楕円形を呈する。ピット4eと切り合う。

#### 〈SB4出土遺物〉

出土遺物総点数は4,895点である。

15から42は甕である。15は脇部から口縁部にかけてバケツ状に大きく開く形態を呈し、口唇部は上方に面をもつ。口径が復元径26.6cm、器部高が20.5cm、底径が4.9cmを測る。口縁下部には断面台形状の突帯が貼り付けられる。突帯が接合する部分は接合せず、突帯接合部分を正面にした場合、左側が上方へのびる形態である。脚部は直線的に開く形で、脚部内面はドーム状である。外面はミガキ調整で、突帯より上方が横方向のミガキ調整、脇部から脚部が縦方向のミガキ調整である。突帯より上方のミガキについては突帯部分を切る形でミガキがみられるため、突帯貼付け後の調整であったと判断できる。内面は摩滅しているため判然としないが、工具ナデによる調整である。

16は内湾する口縁部をもつ甕である。脇部欠損している。口径が復元径21.4cm、器高24.1cm、最大径は突帯上部にあり、復元径22.2cm、底径は4.8cm、脚部径7.0cm、脚部高2.0cm



第17図 SB3出土遺物

である。口唇部は少し丸みをおびる。脚部はハの字に開き、接地する部分に平坦面をもつ。内外面ともミガキ調整が主体で、突帯より上部が斜め方向のミガキ調整、同部が縦方向、内面は横方向のミガキである。胴下部から脚部にかけてはナデ、指頭圧痕がみられる。

17は口縁部が内湾する甕で、口唇部はコの字である。口径が復元径で30.8cm、最大径は突帯上部にあり、復元径で32.2cmを測る。口縁部は指頭圧痕によって歪んでいる。突帯は断面台形を呈する。内外面ともミガキ調整が主体で、突帯より上部は横方向の粗いミガキ調整、胴部は斜め方

向のミガキ調整。内面は横方向のミガキ調整で、ミガキの単位が外面よりもやや細い。

18は口縁部が内湾する形態の甕で、口唇部はコの字である。口径35.7cm、最大径は突帯部分で38.0cmを測る。口縁部は歪みがみられ、口唇部はコの字に仕上げられる。口縁部には一条の絡繩突帯が貼り付けられるが、接合しない。この突帯は、不接合部分を正面にした場合、左側が上方へのびる形態で、端部には明瞭な指頭圧痕がみられる。器面調整は内外面ともミガキ調整である。外面は突帯の上部、下部が横方向のミガキ調整、胴部が縱方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整である。外面にはススの付着がみられる。

19は口縁部がバケツ形に広がる甕である。口径は復元径で31.6cmを測る。口縁部は先細る形で口唇部は丸く收められる。突帯は断面三角形を呈し、貼付け後はヨコナデで仕上げられる。器面調整は主にミガキ調整である。外面は突帯上部が横方向のミガキ、胴部は縱方向のミガキ、内面は横方向のミガキ調整で胴下部は横方向のナデ調整がみられる。外面はススの付着がみられる。

20は胴部から口縁部まで直線的にのびる形態の甕である。口唇部はやや丸みをおびる。口径は24.1cmを測る。口縁部下には断面三角形の突帯が貼り付けられる。外面の器面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴部は工具ナデである。内面は口縁部周辺がナデ調整、胴下部はミガキ調整である。外面には帶状のススが付着する。

21は口縁部が内湾する甕である。口唇部はコの字状で、やや歪む。口径は復元径で26.2cmを測る。口縁部下には一条の絡繩突帯が貼り付けられ、貼り付け時の成形によって、突帯貼り付け部の器面は歪む。器面調整はミガキ調整で、外面は突帯上部が横方向のミガキ、胴部が縱方向のミガキ、内面は横方向のミガキのち、斜め方向のミガキである。外面にはススの付着がみられる。

22は口縁部が内湾する甕である。口唇部は丸みをおびる。口径は復元径で27.0cm、最大径は口縁部下にあり、復元径で27.6cmを測る。口縁部下には一条の絡繩突帯がめぐり、歪みが大きい。器面調整は外面はナデ調整、内面は斜め方向のミガキ調整である。外面にはススが付着する。

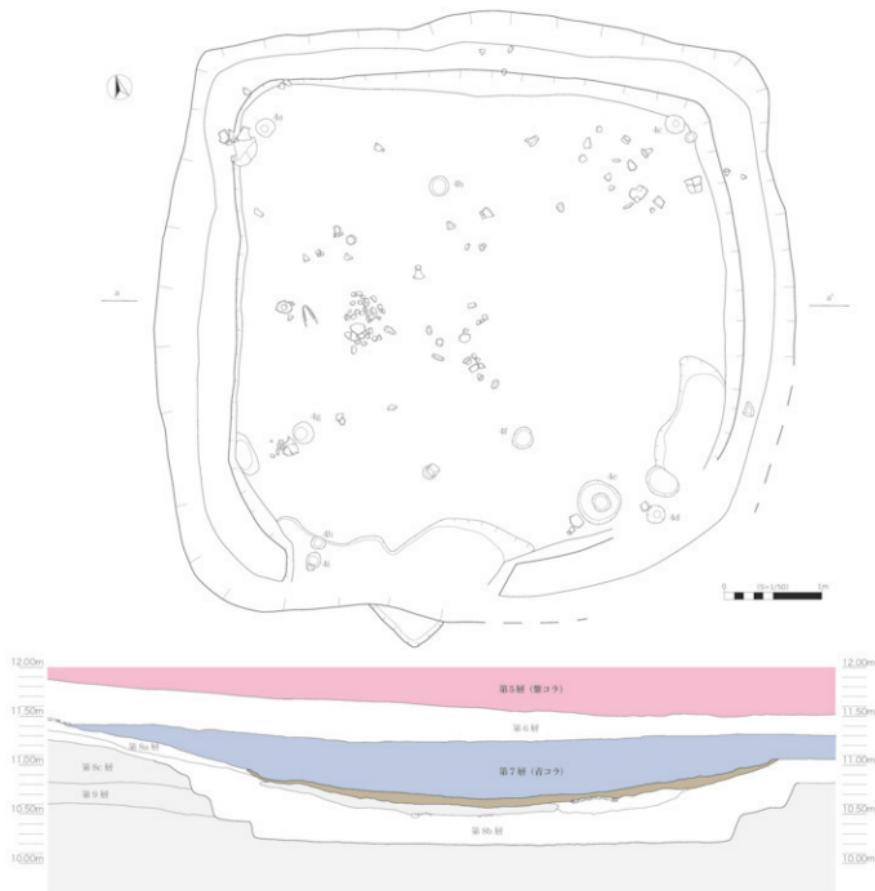
23は胴部から口縁部にかけて直線的に開く形態の甕である。口唇部は丸く、口縁部周辺は指抑えによる成形で歪んでいる。口径は復元径29cmを測る。口縁部下には一条の断面台形の突帯が貼り付けられる。外面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴部が縱方向のミガキ調整である。内面はナデ調整である。外面にはススが付着する。

24は口縁部が直線的に開く形態の甕で、口唇部は丸い。口径は復元径で25.0cmを測る。口縁部には一条の断面台形突帯が貼り付けられる。器面調整は外面が斜め方向のミガキ調整、内面はナデ調整である。

25は口縁部が内湾する甕である。口縁部はやや肥厚し、口唇部は丸くおさめる。口径は復元径25.9cmを測る。口縁部下には一条の断面台形突帯が施され、歪みが大きい。外面は突帯上部が横方向のミガキ調整、突帯下部が縱方向のミガキ調整である。内面は、外面より幅の広い単位の横方向のミガキ調整がみられる。外面にはススの付着がみられる。

26は口縁部が内湾する甕で、口唇部。口径は復元径30.2cmを測る。口縁部下には一条の突帯が貼り付けられるが、突出は少ない。外面は斜め方向のミガキ調整で、突帯貼付け後の調整のため、突帯にもミガキ調整がみられる。内面は横方向のミガキ調整である。外面にはススの付着がみられる。

27は口縁部が内湾する甕で、口唇部は上方に面をもつ。口縁部下には一条の絡繩突帯が貼り付けられ、口縁部はやや肥厚する。器面調整は突帯上部で横方向のミガキ調整、胴部は縱方向のミガキ調整で、内面は工具ナデが施される。



第18図 SB4 平面図・断面図

28は口縁部が内湾する甕で、口唇部は丸い。外面には一条の断面台形突帯が貼り付けられるが、接合しない。不接合部分を正面にすると、左側の突帯が口唇部までのび、突帯貼付け後はヨコナデで仕上げられる。外面調整は突帶上部が横方向のミガキ調整、胴部が斜め方向のミガキ調整である。内面は斜め方向のミガキ調整である。

29は、甕の脚部から胴下部で、脚部径が復元径 8.1cm、底部径 6.1cm、脚部高 2.5cm を測る。脚部はハの字に開き、脚部内上部は平坦である。外面は、脚接合部から上部にかけて工具ナデ、脚



第19図 SB4 遺物出土状況1

部は指頭圧痕が残る。内面は主にナデ調整である。

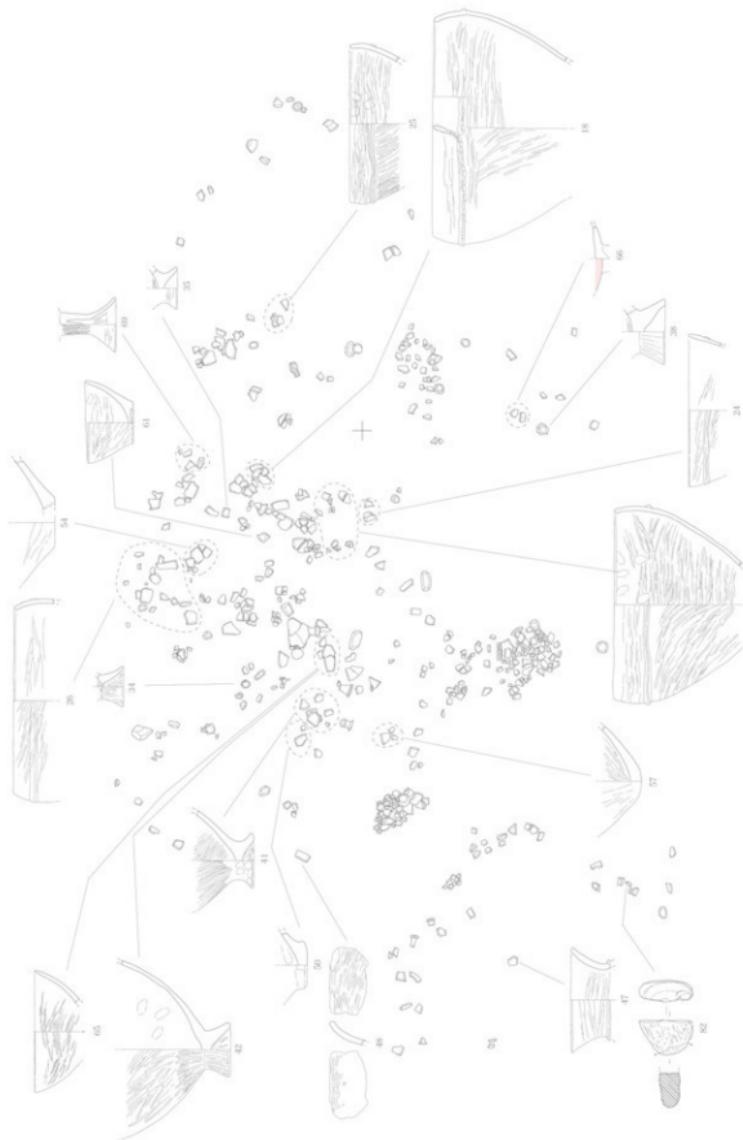
30 は甕の脚部から胴下部である。脚部径は復元径 10.9cm, 底径 6.1cm を測る。脚部は直線的に開き、脚端部は丸い。脚天井部は丸みをおびるドーム形を呈する。脚接合部は縦方向の工具ナデ、脚部は横方向のミガキ、内面は工具ナデで仕上げられる。

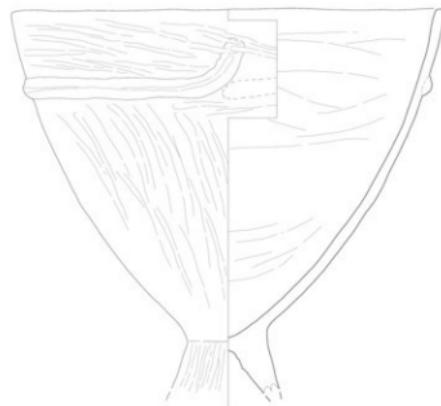
31は壺の脚部である。脚部径は8.5cm、底径5.5cm、脚部高3.8cmを測る。脚部は直線的に開き、脚端部は丸みをおびる。脚天井部は平坦面をもつ。脚部の調整は工具ナデである。

32は麁の脚部である。脚部径6.8cm、底径4.7cm、脚部高2.5cmを測る。脚部はハの字に開く。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。

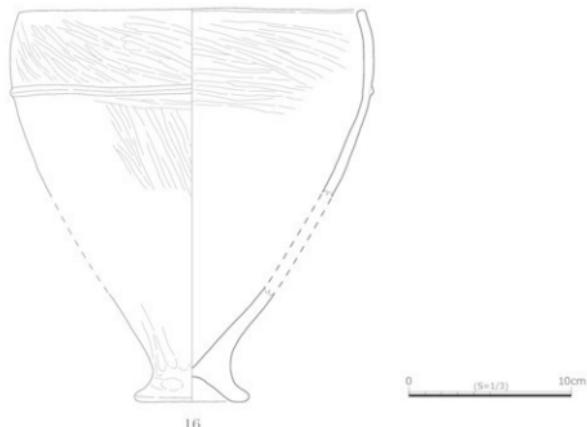
0  
10  
(10×10m)

第20図 SB4遺物出土状況2





15



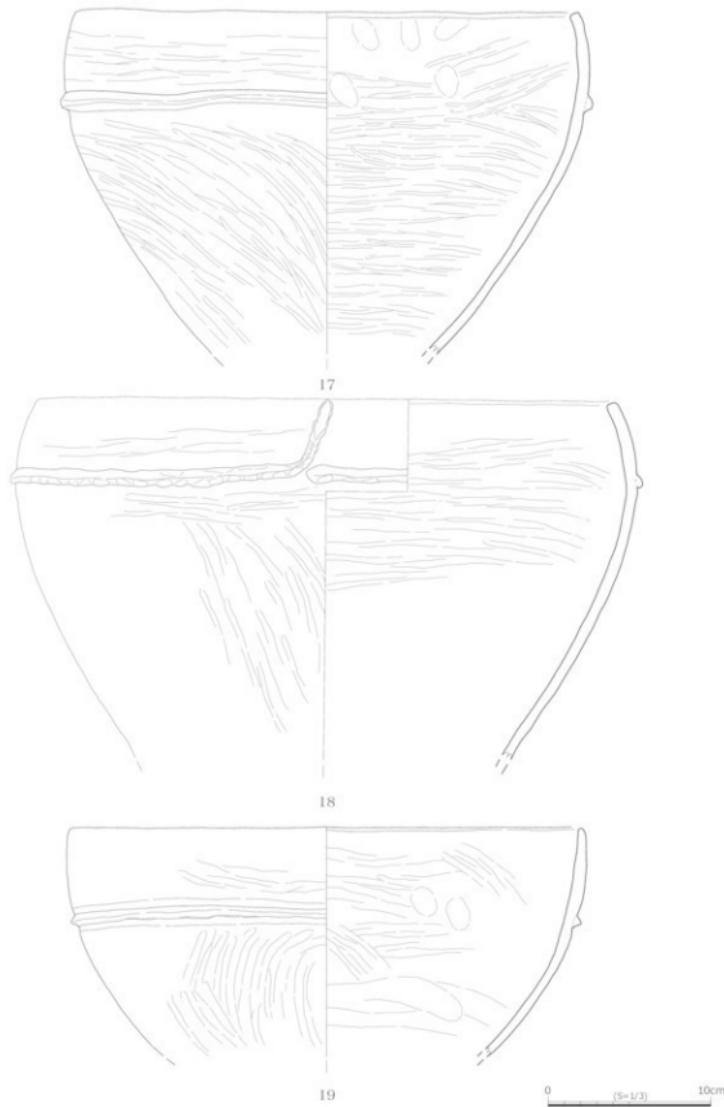
16

第21図 SB4 出土遺物 1

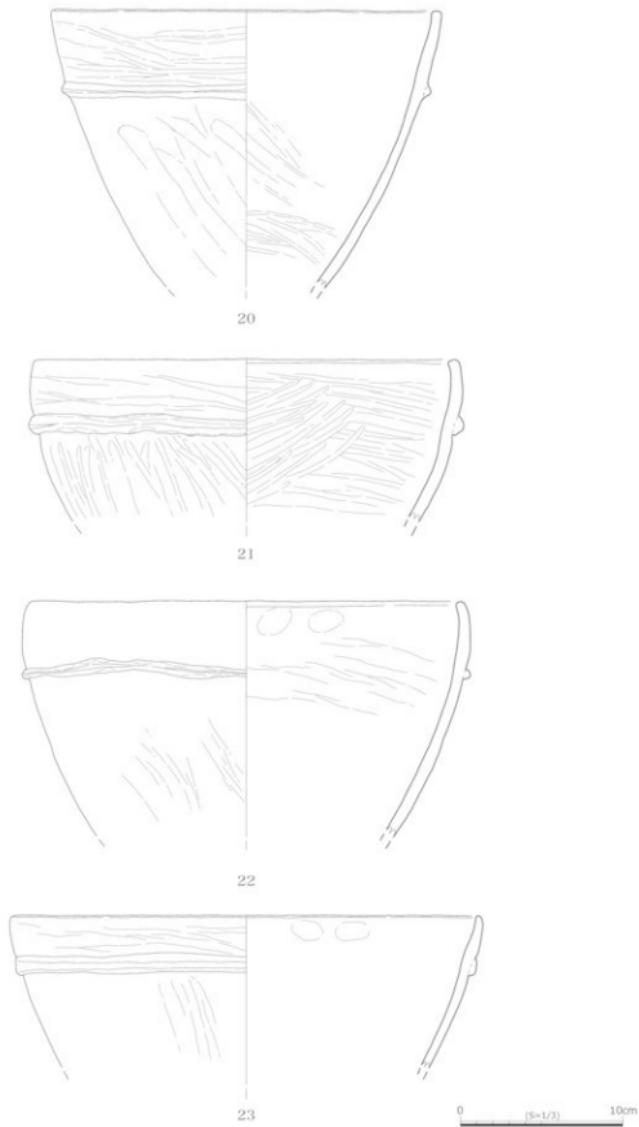
33は甕の脚部と胴下部である。脚部径6.9cm, 底径6.1cm, 脚部高1.3cmを測る。脚部はやや低く、踏ん張る形を呈する。外面は胴下部ミガキ調整、脚部は指頭圧痕が残り、内底面はミガキ調整である。

34は甕の脚部である。脚部径6.3cm, 底径4.0cm, 脚部高3.6cmを測る。脚部はハの字に開き、脚端部は丸い。内外面ともミガキ調整である。外面にはススが付着する。

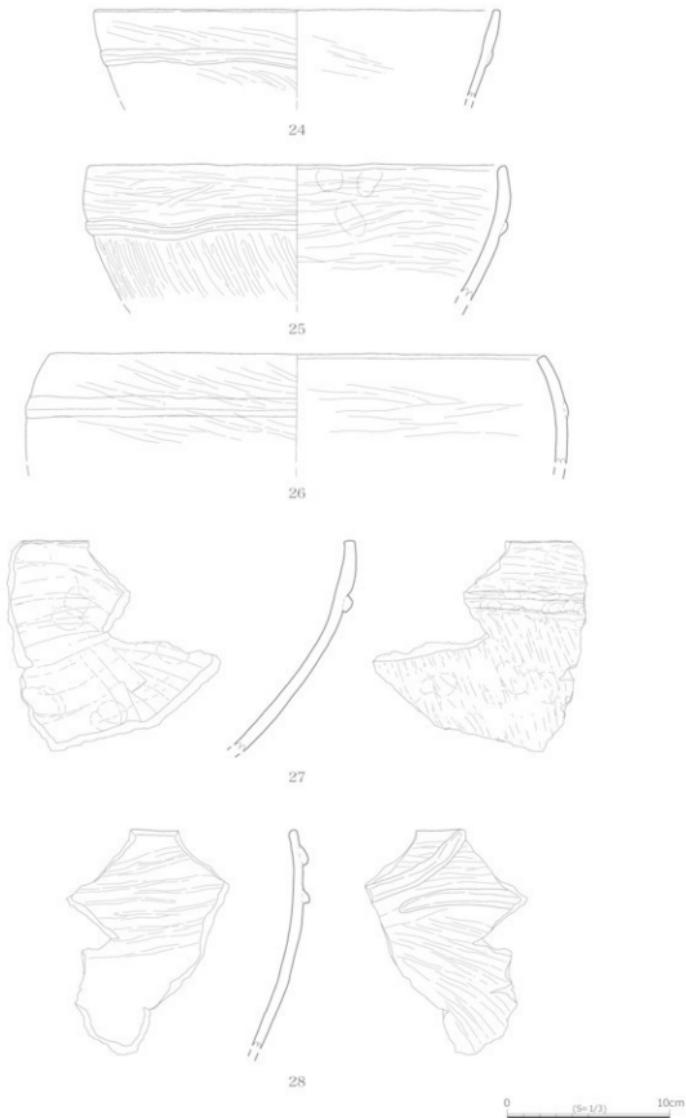
35は甕の脚部である。脚部径は復元径6.9cm, 底径は復元径4.8cm, 脚部高は2.4cmを測る。



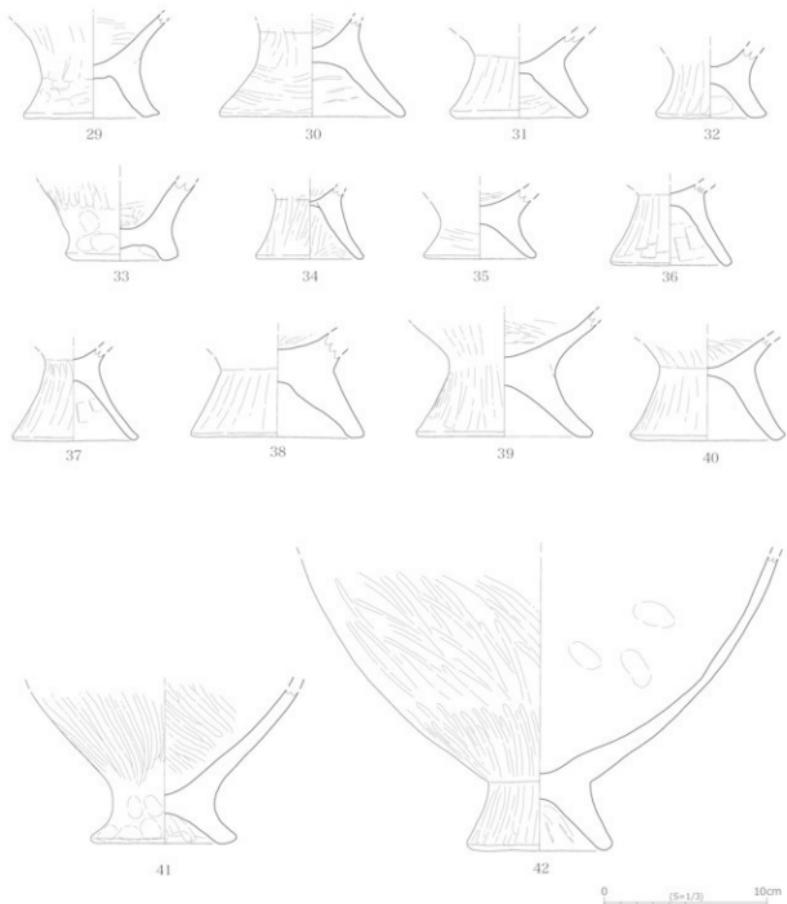
第22図 SB4 出土遺物 2



第23図 SB4 出土遺物 3



第24図 SB4出土遺物4



第25図 SB4出土遺物5

脚部はハの字に開き、脚端部は丸い。内外面ともナデ調整が主である。

36は甕の脚部である。脚部径7.4cm、底径4.0cm、脚部高4.3cmを測る。脚部は直線的に開き、脚天井部はドーム形である。内外面とも工具ナデが残る。

37は甕の脚部である。脚部径7.7cm、底径3.3cm、脚部高5.0cmを測る。脚部は直線的に開き、脚端部は丸く、器壁はやや薄い。外面はミガキ調整、内面は工具ナデがみられる。脚天井部はドーム形を呈する。

38は甕の脚部である。脚部径は復元径10.7cm、底径は復元径6.9cm、脚部高4.2cmを測る。

脚部は直線的に開く形態である。脚端部は接地部分に面をもつ。脚天井部はドーム状だが、歪みがみられる。外面は工具ナデ、内面はミガキ調整がみられる。

39は壺の脚部から胴下部である。脚部径は復元径10.5cm、底径6.8cm、脚部高3.9cmを測る。脚部はハの字に開き、脚端部の接地部分には面をもつ。脚天井部はドーム形を呈する。脚部外面は工具ナデ、内底面はミガキ調整である。

40は壺の脚部から胴下部である。脚部径は復元径9.5cm、底径は復元径9.5cm、脚部高4.6cmを測る。脚部はハの字に開き、脚天井部はドーム形を呈する。脚部外面は工具ナデ、脚部内面はナデ、内底面はミガキ調整である。

41は壺の脚部から胴下部である。脚部はハの字に開く形態を呈する。脚部径は復元径8.3cm、脚部高2.5cm、底径は復元径6.0cmを測る。脚天井部はドーム状である。内外面ともミガキ調整が施され、外面には胴下部にススの付着がみられる。

42は壺の脚部から胴下部である。脚部径は復元径8.9cm、底径は復元径6.2cm、脚部高は4.3cmを測る。脚部は直線的に開き、脚端部は丸みをおびる。胴下部は丸みを持ちながら立ち上がり、外面にはタテ方向のミガキ調整がみられる。脚部の外面調整はタテ方向のミガキ調整で、内面調整は工具ナデである。

43は大型壺の胴部から底部である。胴部には幅3.5cmの幅広突帯がめぐり、突帯には4条の鋸歯状の刻目がみられる。施文具の原体は確認できない。胴部最大径は復元径で42.4cmを測る。肩部外面は横方向のミガキ調整、胴部外面はナデ調整で仕上げられる。内面は剥落が著しく、調整不明である。

44は大型壺の肩部である。胴部最大径は復元径42.4cmを測り、肩部下には幅3.5cm、厚さ0.9cmの幅広突帯が貼り付けられる。突帯内部には四条ずつの刻目が鋸歯状に刻まれる。刻目原体は木製工具によるものである。外面は横方向のミガキ調整、内面は剥落しているため調整不明である。

45は中型の壺で、一部欠損しているがほぼ完形である。口径15.8cm、頸部径12.0cm、頸部高7.5cmを測る。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口唇部はコの字状である。胴部最大径は肩部にあり、30.5cmを測る。底径は5.5cmで平底である。口縁部外面は横方向のミガキ調整とタテ方向のナデ調整がみられ、肩部は横方向のミガキ調整、胴部は斜め方向のミガキである。内面は剥落しているため調整不明である。

46は短頸壺である。口径12.3cm、頸部径12.7cm、肩部径35.1cmを測る。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がり、口唇部は丸い。肩部が大きく張る形態を呈し、胴部形は欠損しているため不明だが、球胴形を呈すると考えられる。内外面ともミガキ調整が見られる。

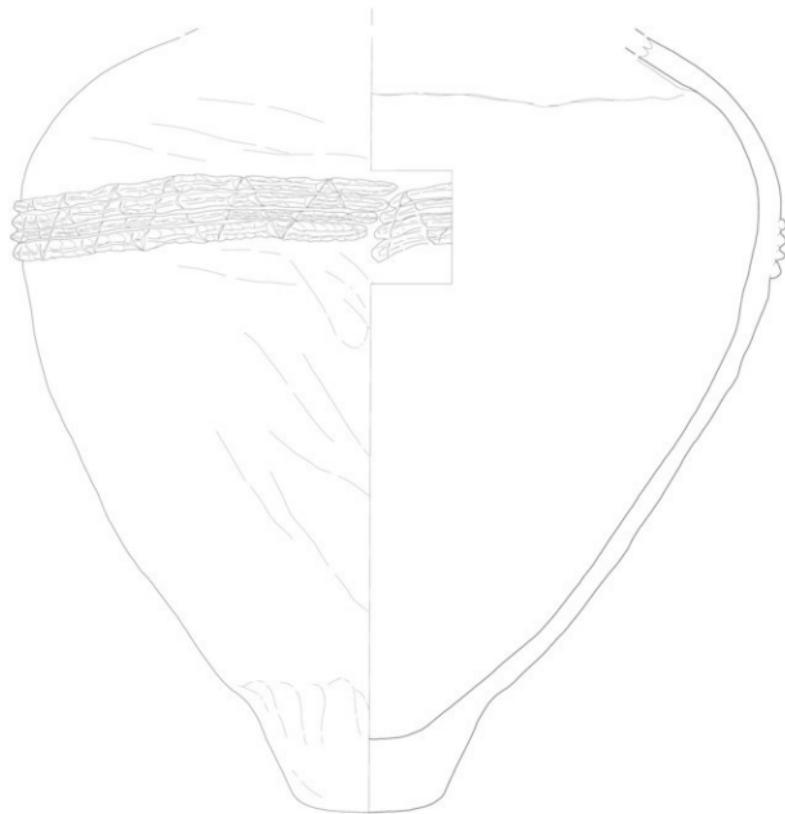
47は壺の頸部から口縁部である。口縁部は外反し、口唇部は上方に面をもつ。口径は復元径17.2cm、頸部径は13.1cmを測る。頸部には一条の貼付け突帯をもつ。内外面ともミガキ調整がみられる。

48は壺の口縁部である。外反しながら開き、口唇部は丸い。内外面ともミガキ調整である。

49は壺の幅広突帯部分である。幅広突帯の幅は3.5cmで、突帯内には3～4条の鋸歯状の刻目が施されたのち、その間を入れ子状の半裁竹簡文を充填するタイプの施文がみられる。突帯上部外面は工具ナデ調整、内面は剥落しているため不明である。

50は壺の底部で、底面はやや歪む。底径7.9cmを測り、端部からわずかに括れながら立ち上がる。内外面とも工具ナデ調整である。

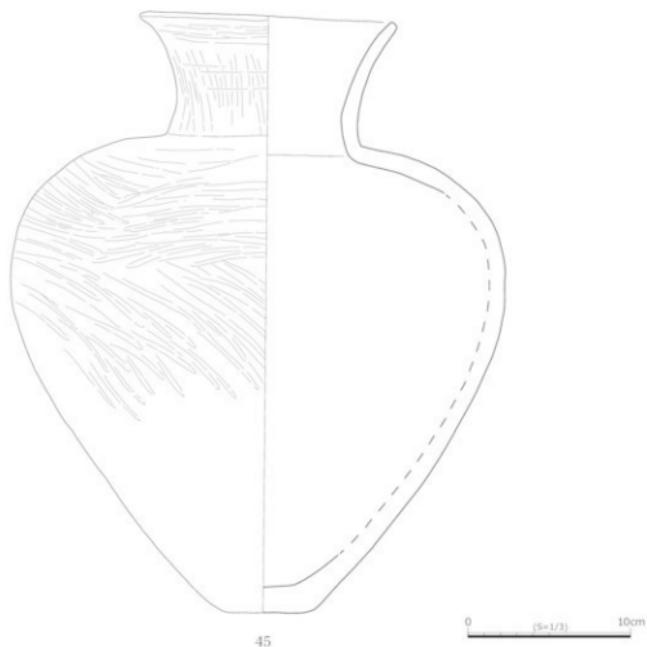
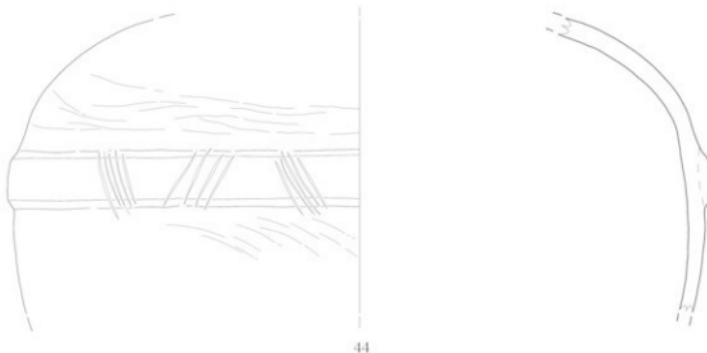
51は幅広突帯の突帯部分である。天地については不明瞭である。突帯の幅は3.1cmで突帯内部



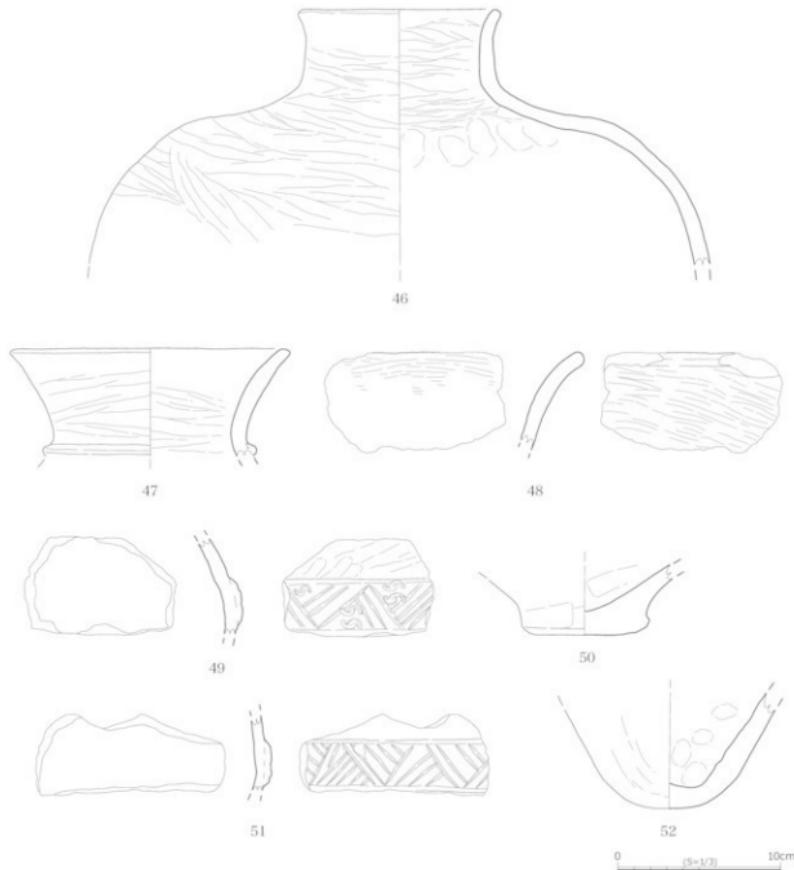
43

0 (5=1/3) 10cm

第26図 SB4出土遺物6



第27図 SB4 出土遺物 7



第28図 SB4 出土遺物8

には鋸歯状の施文が隙間なく充填される。施文の単位は4～6条である。外面はナデ調整、内面は崩落しているため不明である。

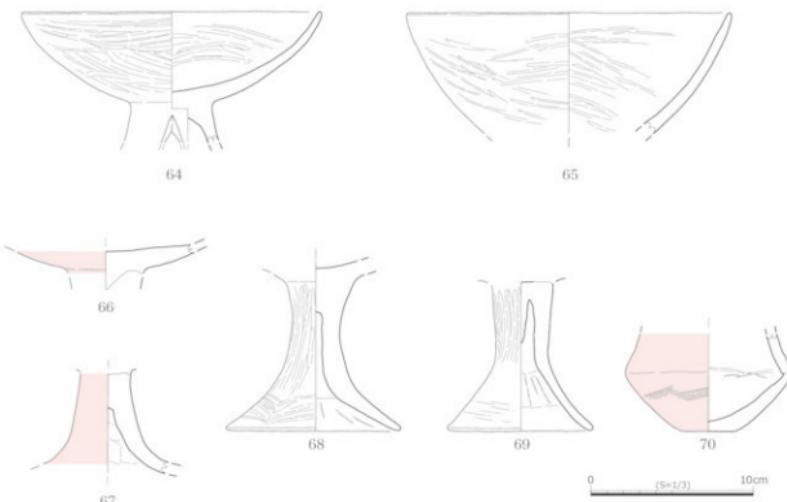
52は壺の底部である。底部形態は丸底である。内底面中央部はやや膨らみ、内面には指頭圧痕が残る。外面はナデ調整である。

53は壺の底部である。底部形態は平底で、底径は復元径13.0cmを測る。胴部は底部から直線的に立ち上がる。器面調整は内外面ともナデ調整である。

54は壺の底部である。底部形態は平底で、底径は復元径8.2cmを測る。底部から大きく開く形



第29図 SB4 出土遺物 9



第30図 SB4出土遺物 10

態で、端部はやや鋭い。内外面ともナデ調整である。

55は壺の底部で、底部形態は平底である。底径は復元径8.3cmを測る。底部から胴部にかけて膨らみをもちながら立ち上がる。器面調整は外面がナデ調整、内面はミガキ調整である。

56は壺の底部である。底部形態は内底面がわずかに立ち上がる形態で、底径5.0cmを測る。端部は丸みをおびる。内外面ともナデ調整である。

57は壺の底部である。底部形態は丸底を呈する。器面調整は外面がナデ調整、内面はミガキ調整である。

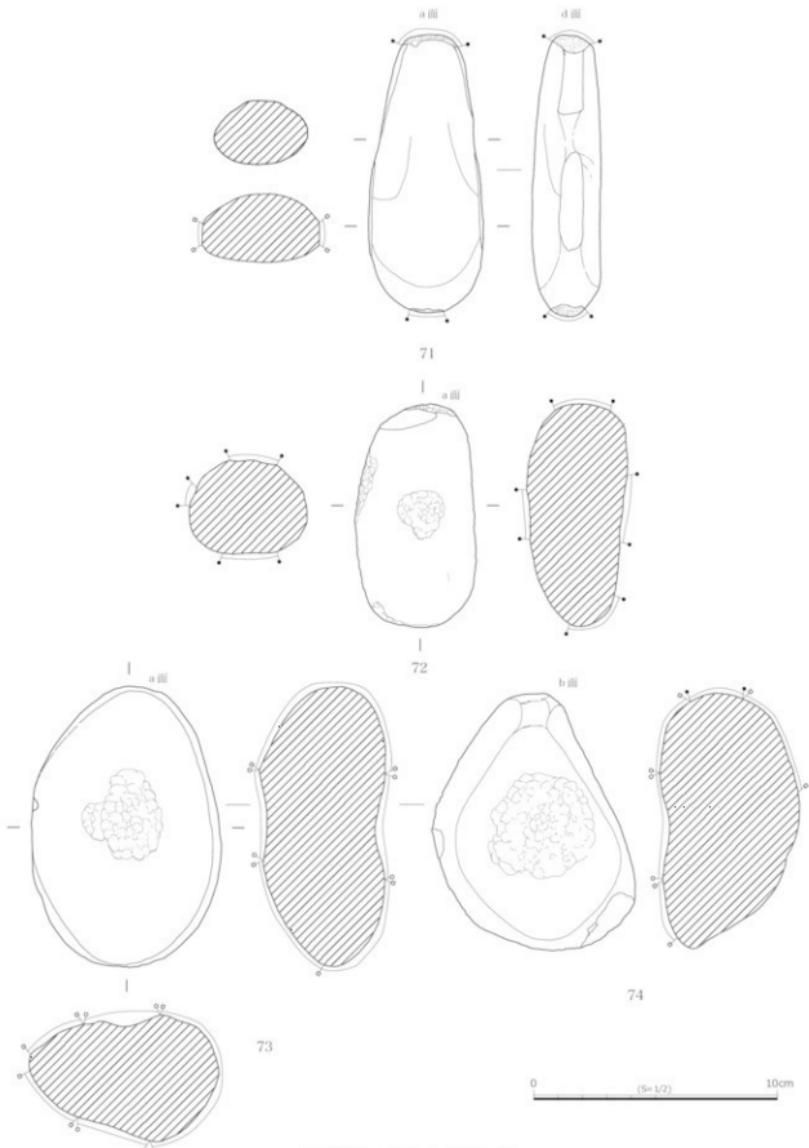
58は壺の底部である。器壁の厚さから大型壺の底部であると考えられる。底部形態は突出する丸底を呈する。内底面は整形による指頭圧痕が明瞭に残る。外面調整はナデ調整である。

59から63は鉢である。59は椀状の鉢で、口縁部が内湾する。口径は復元径21.7cmを測る。底部形態は丸底になると想定される。器面調整は内外面ともミガキ調整である。

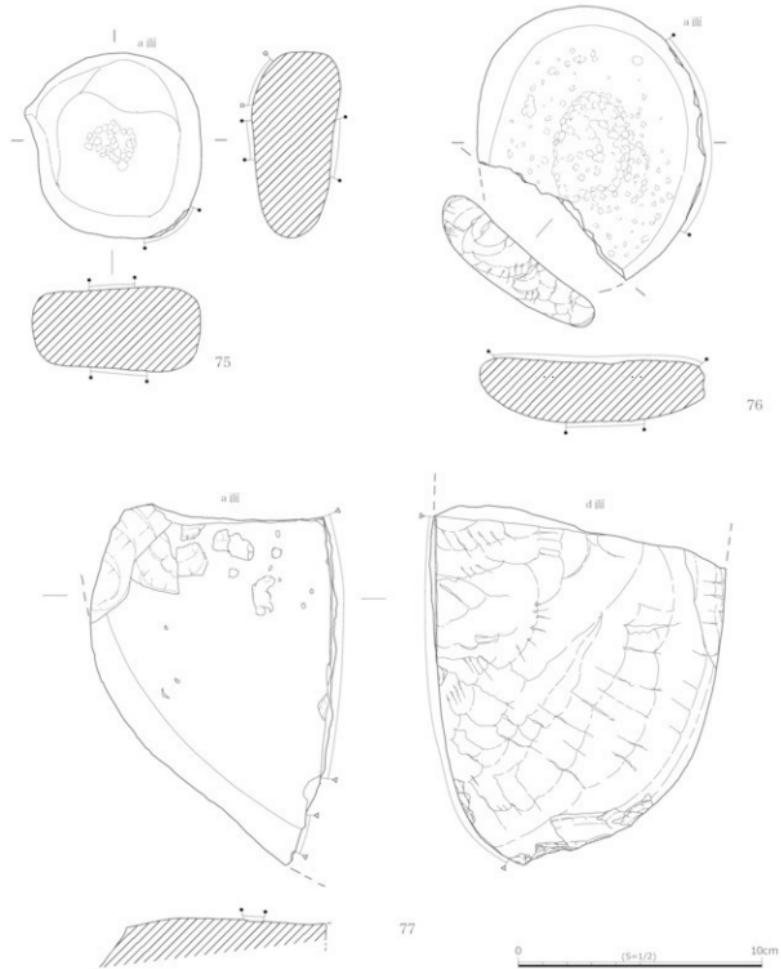
60は平底の鉢である。口縁部は内湾し、胴部は歪みがみられる。口径は22.0cm、器高9.7cm、底径は復元径8.5cmを測る。底部形態はやや厚みのある底部で、台状を呈する。器面調整は外面ミガキ調整、内面ナデ調整である。口唇部には指頭圧痕が残る。

61は高台が貼り付けられる完形品の鉢である。口径13.5cm、底径6.9cm、高台径6.9cm、高台高0.4cmを測る。椀状の器形を呈し、口唇部は丸い。高台の接地面には歪みがあり、内部にわずかに突出部をもつ。外面調整は斜め方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整がみられる。

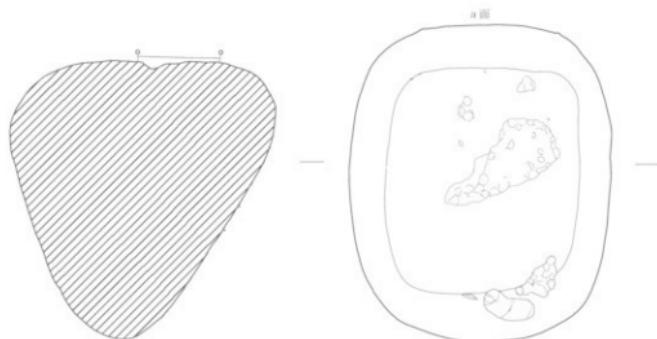
62は平底の鉢である。口径10.6cm、器高8.7cm、底径4.5cmを測り、底部はやや厚みがある。底部から口縁部までは直線的に立ち上がり、コップ状の形態を呈する。外面調整はナデ調整、内面調整はハケ調整のちナデ調整である。



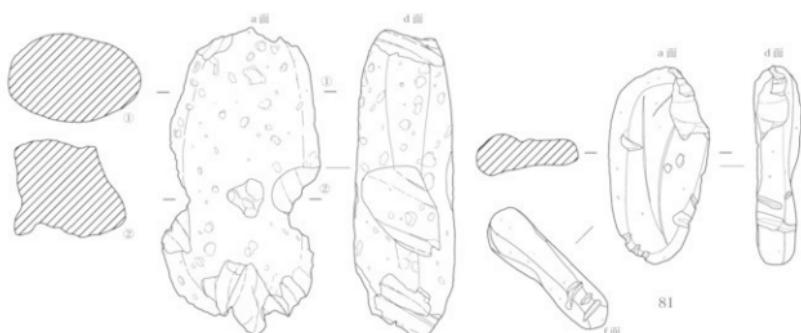
第31図 SB4出土遺物11



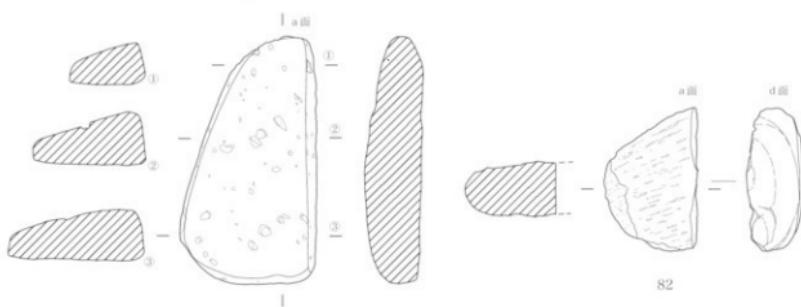
第32図 SB4 出土遺物 12



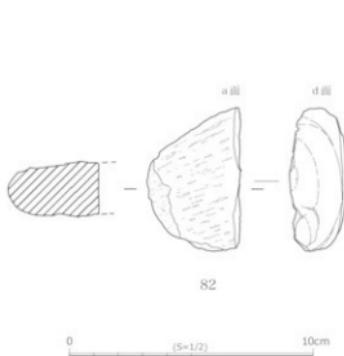
78



79



80



81

0 (S=1/2) 10cm

第33図 SB4出土遺物 13

63 は小型鉢の脚部である。脚部平面形は梢円形を呈し、脚部径は最長 6.0cm、最短 3.2cm を測る。脚端部はゆがみが大きく、ハの字状に開く。内外面ともナデ調整がみられる。

64 から 69 は高杯である。64 は高杯の杯部から脚部で、椀状の杯部をもつ。口唇部は丸い。口径は 17.8cm、杯部高 5.6cm、杯部と脚部の接合部径は 5.2cm を測る。脚部はハの字に開く形態であると考えられる。脚部には矢羽根透かしと思われる透かし孔がみられる。器面調整は内外面ともミガキ調整である。

65 は高杯の杯部である。口径は復元径 20.0cm を測り、口唇部は丸くおさめられる。内外面とも細かいミガキ調整がみられる。内面には灰褐色のストリップが塗布される。

66 は杯部と脚部の接合部分である。接合部径は復元径 4.8cm を測る。円錐塊充填の痕跡が残る。外面は赤色顔料の塗布がみられ、色調は 2.5Y4/8 赤褐である。

67 は高杯の脚部である。スカート状に開く形態で、杯部との接合部分で欠損している。外面は大きく摩減しているため、器面調整は不明だが赤色顔料（10R 赤 4/8 赤）の塗布がみられる。

68 は高杯の脚部である。脚部形態は脚端部にかけて外反するもので、客端部は丸い。脚部径は 10.7cm、脚部高 9.2cm、筒部径 3.0cm、脚接合部径は 4.3cm を測る。脚部は筒部の途中まで中空である。器面調整は外面ミガキ調整、内面工具ナデ調整である。

69 は高杯の脚部で、脚接合部で欠損している。脚部径 8.9cm、筒部径 3.3cm、脚部高 9.3cm、脚接合部径 3.7cm を測る。脚部形態は筒部のくびれ部分から直線的に開き、口唇部は丸い。筒部内面には粘土円錐塊が舌状にのびる。器面調整は外面がミガキ調整、内面は工具ナデ調整である。

70 は埴の底部から胴部である。胴部形態は大きく屈曲する形態で、接合痕、接合時の爪痕が残る。底径は 3.5cm、屈曲部までの高さは 3.6cm を測る。外面はハケ調整がわずかに残る。外底面は摩減しているため調整不明である。外面には赤色顔料の塗布がみられ、色調は 7.5R4/6 赤である。屈曲部より上方に黒斑の付着がみられる。

71 は砂岩製の梢円碟を素材とした敲石である。a 面下部と上部端に顯著な敲打痕が認められる。基部に移るにつれ細くなりソケットに装着したことを想定させるような基部と稜が認められ、側面には平坦な磨面が認められる。

72 は安山岩製の梢円碟を素材とした敲石である。a 面上下両端と左側面に敲打痕が認められる。また中央部には敲打による凹面がある。また a 面上端部の敲打痕に接する範囲には磨面がみられ、多用途であったことが伺える。

73 は安山岩製の梢円碟を素材とした凹石である。a 面とその裏面に凹面が認められる。

74 は安山岩製の不整形碟を素材とし、a 面中央部に凹面が認められる。また a 面上端部と左側端、右側下端部に敲打痕がみられる。さらに a 面全体的に磨面であることから、磨石として用いられている。

75 は扁平な安山碟を素材とし、a 面とその裏面に敲打痕による浅い凹面のある凹石である。また、a 面上部には他の面に比べなめらかな面があり、想像の域を出ないが磨石として使われた可能性がある。

76 は安山岩製の梢円碟で片面が凹んでいる面に顯著な敲打痕が認められる。受け皿状になつている面を作業面としていることから石皿と器種認定した。a 面右側面には敲打痕が認められる。a 面の裏面にも 3.3cm×2.9cm の梢円形の範囲に敲打痕がみられる。

77 は石皿である。破片形状から本来の形状は、平坦面を有する円形または梢円形を呈していたものと考えられる。石皿片の一端に剥離痕と摩減が顯著に認められることから、比較的重量を有す

る作業で、打ち下ろす動きを繰り返していたことが考えられる。

78は断面三角形状を呈する安山岩礫を素材とした凹石である。平坦面の一面を作業面とし、中央部よりやや右側に顕著な凹面が認められる。

79は人形の軽石製加工品である。楕円形の軽石を素材とし工具により切り込みを入れることにより、いわゆる人形に形成している。a面中央部両側面には側面から抉るようにして抉入がみられる。またa面とその裏面には凹面が認められる。b面下部では上記の部分に抉りを入れ、脚または性器を作り出しているかのように判断できる。a面、b面上端部は二回の切り込みが認められる。

80は軽石製加工品である。素材の軽石を全面的に研磨し、形状を整えている。

81は素材である楕円形の軽石の両面を工具によって研磨している。そのため親指・人差し指で持ちやすい形状となっている。a面左側下部と右側面に工具により刻みをつけている。a面左側面、b面における刻みの観察によると両面からそれぞれ刻んでいることが分かる。

82は楕円形状の軽石の片面に打撃を加え、分割したものである。分割面には打痕も確認されることから意図的な分割と判断できる。磨面や削面等は確認できない。

### 【SB5】(第34～38図、図版5-1～6-1)

SB5は、主軸を東西にとり、長軸3.4m、短軸3.2mの方形プランを呈する。検出面からの豊穴深さは約48cmを測る。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット5基、床面中央にカーボンが広がる範囲1基が検出された。ピットは便宜上5aから5eとした。ピット5aは長軸21cm、短軸18cmの略円形で、深さ23cmである。ピット5bは直径24cmの略円形で、深さ37cmである。ピット5cは長軸18cm、短軸16cmの楕円形で、深さ33cmである。ピット5dは長軸20cm、短軸18cmの略円形で、深さ31cmである。ピット5eは直径14cmの円形であり、深さ15cmである。

#### 〈SB5出土遺物〉

出土遺物総点数は951点である。

83は口縁部が内傾する甕である。口唇部はわずかに外反し、丸くおさめる。口径は復元径23.0cmを測る。器面調整は外面がミガキ調整、内面はナデ調整である。

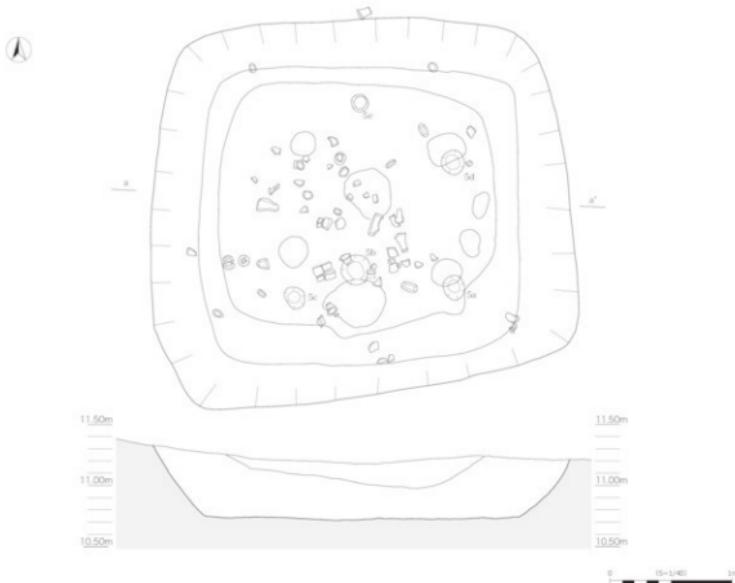
84は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、断面は台形状となる。外面調整は工具ナデ調整、内面調整はナデ調整である。

85から91は甕の脚部である。85は甕の脚部から胴下部で、脚部形態は踏ん張る形態である。脚部径は復元径4.4cm、脚部高1.1cm、底径は復元径4.1cmを測る。脚接合部には外面に指頭圧痕が明瞭に残る。

86は甕の脚部である。脚部径は復元径11.3cm、脚部高6.1cm、底径7.6cmを測る。脚接合部には断面三角形の突帯が貼り付けられる。脚天井部は丸みをおびる。内外面ともナデ調整である。

87は甕の脚部である。脚部径は復元径9.3cm、脚部高5.3cm、底径6.4cmを測る。脚部形態は直線的に開き、端部でわずかに外反する。脚天井部形態はドーム状で丸みをおびる。脚部外面はナデ調整である。

88は甕の脚部である。接合部から直線的にのび、脚端部は接地部に面をもつ。脚部径は8.9cm、脚部高は4.6cm、底径は復元径5.9cmを測る。脚天井部はドーム形である。器面調整は外面がヨ



第34図 SB5 平面図・断面図

コナデ調整、内面は工具ナデ調整がみられる。

89は甕の脚部である。脚部径7.8cm、脚部高3.1cm、底径5.3cmを測る。脚部形態は接合部からやや膨らみをもつてのびる形態で、脚端部は丸い。外面には成形時の指頭圧痕が明瞭に残り、歪みが大きい。

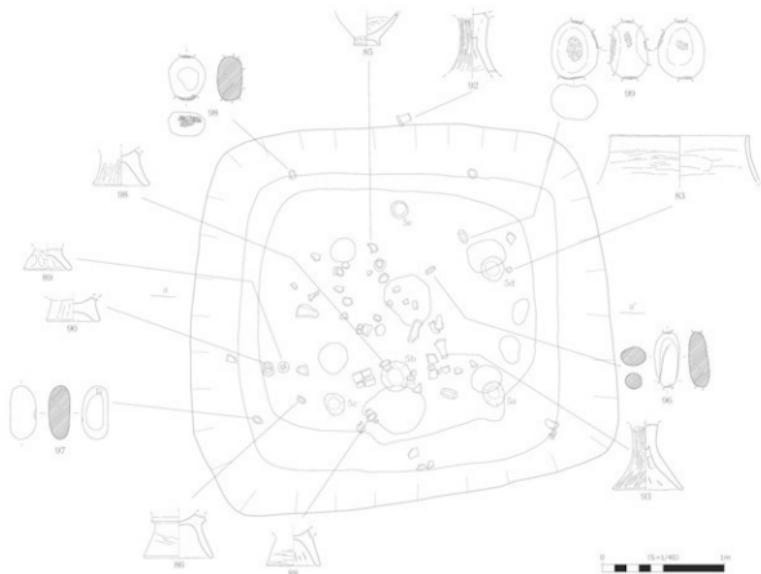
90は甕の脚部である。脚部径8.8cm、脚部高3.3cm、底径7.2cmを測る。脚接合部から直線的に短くのびる形態を呈し、接地部には面をもつ。内外面ともナデ調整である。

91は直線的に聞く甕の脚部で、口唇部は丸みをもつ。脚部径8.7cm、脚部高4.3cm、底径5.6cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。脚部外面は縦方向の工具ナデ調整がみられ、脚接合部には接合時の指頭圧痕による器面の盛り上がりがみられる。内面調整はナデ調整である。

92と93は高杯である。92は高杯の脚部で、脚端部欠損である。断面では円錐塊充填の痕跡が確認できる。器面調整は、外面が縦方向のミガキ調整、内面は工具ナデである。

93は高杯の脚部である。杯部との接合部分で欠損している。筒部から脚端部にかけて緩やかに外反し、端部は丸く仕上げられる。脚接合部は円錐塊を充填しており、円錐塊の先端は指頭圧痕がみられる。脚部径は復元径11.5cm、脚部高10.7cmを測る。外面は縦方向のミガキ調整、内面は工具ナデがみられる。

94は壺の口縁部である。口縁部形態は外反する形態で二叉状に開く。口唇部はM字状にくぼみ、丁寧なヨコナデ調整がみられる。口径は復元径20.1cmを測る。



第35図 SB5 遺物出土状況

95は壺の底部である。平底を呈するが、端部がくびれており、脚台状を呈する。底径は8.5cmを測る。底部から胴下部の立ち上がりは直線的に大きく開く形態である。外面は縦方向の工具ナデ調整、内面はハケ調整がみられる。

96は手のひらに取まるような安山岩の楕円礫を素材とした敲石である。a面上下両端に顕著な敲打痕が認められる。断面形状はa面下部付近ではほぼ約2.6cmの円形を呈している。

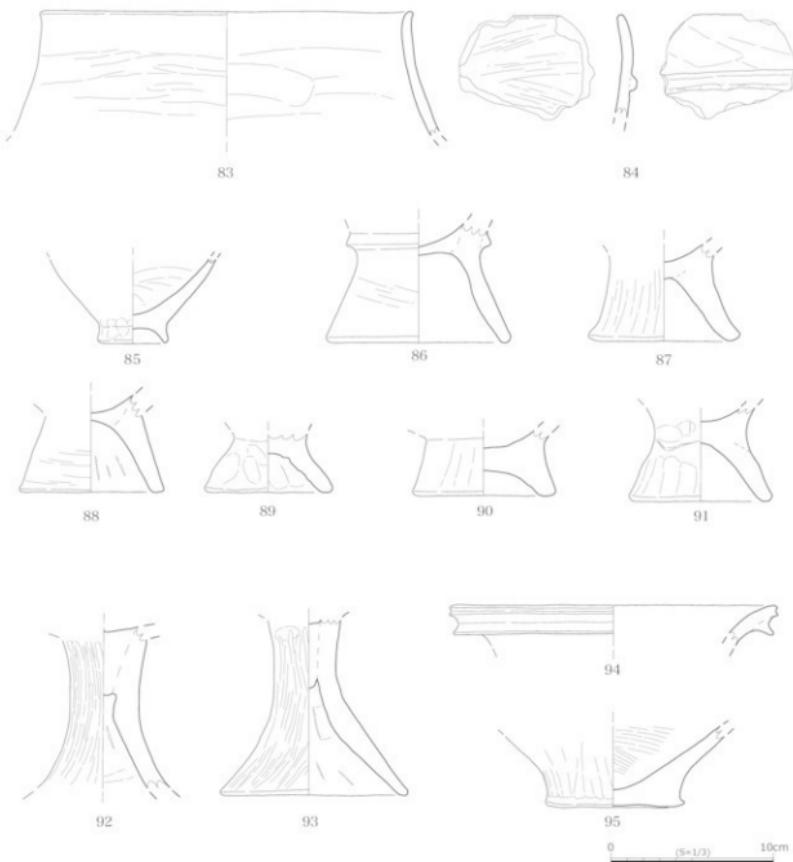
97は片面に平坦面を有する安山岩の楕円礫を用いた磨石である。b面上部に摩滅が認められる。上下両端には敲打痕が認められる。

98は砂岩の楕円礫を用いた敲石である。a面上下両端に敲打痕が認められる。またf面上部とa面の敲打痕の背後には線状痕が認められ対象物に対して削り取るような作業が行われていたことが窺える。a面の裏面中央部に敲打痕が認められる。

99は砂岩の楕円礫を用いた敲石である。a面上下両端および側面に敲打痕がみられる。

100はa面左側面に砥面が認められる砥石である。砥面の線状痕の状況から砥石の一部(a面左側部、上部、下部)は欠損していると考えられる。

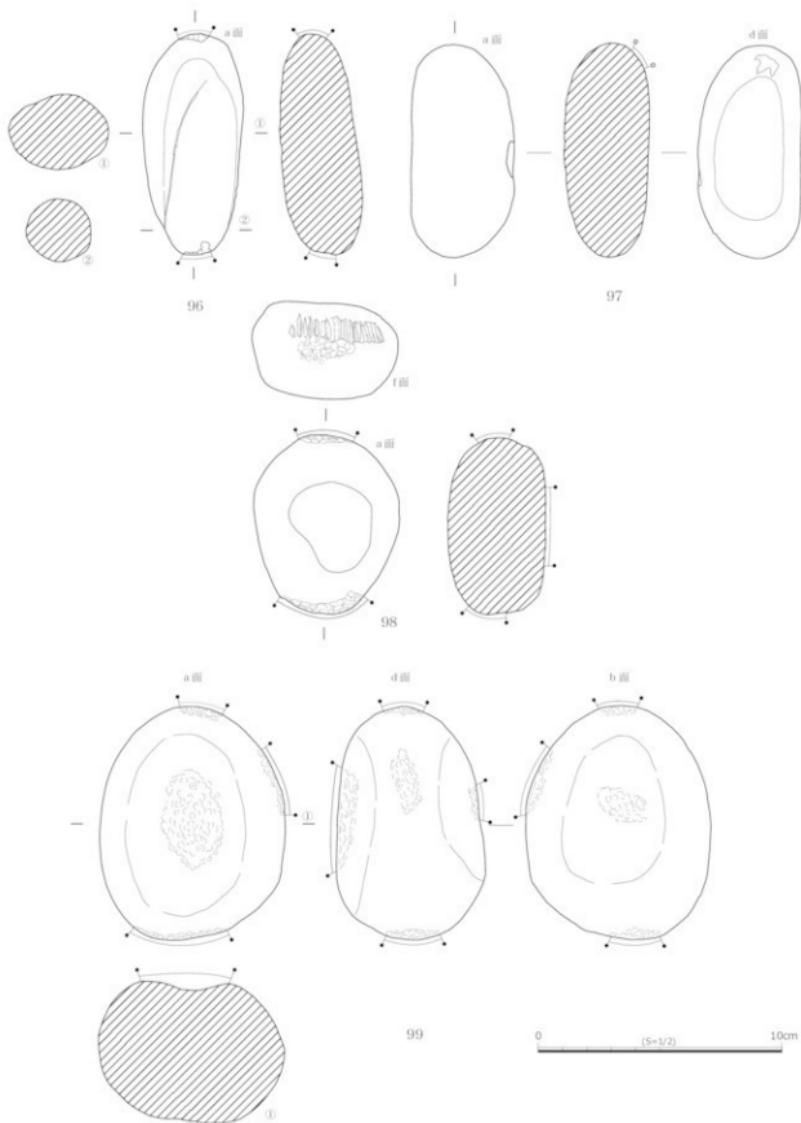
101は分割剥片である。厚さ約1.2cmの剥片の左右両端を切断した剥片である。



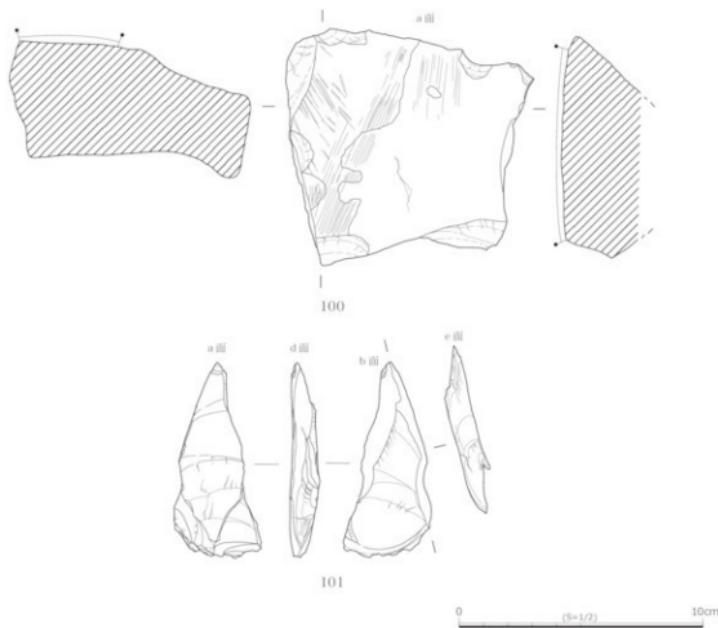
第36図 SB5出土遺物 1

## 【SB6】(第39～45図、図版6-1～7-1)

SB 6は、主軸を南北にとると考えられるが、北面が調査区外に出ているため、東西軸では一辺3.3mを測る方形プランを呈する。検出面からの堅穴深さは約44cmを測る。堅穴埋没途中の緩い窪地の段階で青コラ火山灰が降下したものとみられ、第7層青コラ火山灰層下面は堅穴中央部に向って緩やかに窪んでいる。SB 4と時期的に近似していることがいえるが、窪みが比較的浅いため、SB 4より時間的に経過した後に被災したものとみられる。



第37図 SB5 出土遺物 2



第38図 SB5出土遺物3

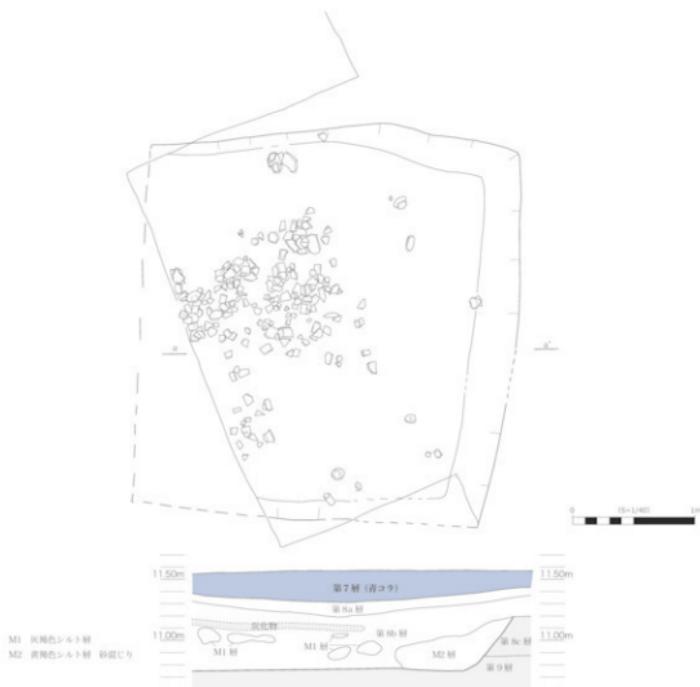
付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット1基、壁帶土坑1基、カーポンが広がる範囲1基が検出された。ピットは、長軸21cm、短軸18cmの略円形で、深さ26cmを測り、西側に段を持つ。配置位置は竪穴西面に近いもので、壁帶土坑にも接近している。壁帶土坑は西面の竪穴に接して位置し、竪穴に対して幅48cm、奥行40cmであり、深さ16cmと浅い。内部には遺物はないが、20cm程浮いて土器がまとまって出土している。床面のカーポン分布範囲は、壁帶土坑に東西軸を置いた場合、1.6m東側の床面に位置する平面形は不整形であり、長軸60cm、短軸50cmとなる。

#### 〈SB6出土遺物〉

出土遺物総点数は1,786点である。

102から114は甕である。102は甕の口縁部から胴部で、口縁部は内湾する。口唇部はコの字で、口径は復元径30.8cmを測る。口縁部下には一条の突帶が貼り付けられる。外面の器面調整は、突帶上部は横向方向のミガキ、突帶下部が縱方向のミガキ調整である。内面は不定方向のナデが施される。外面にはススの付着がみられる。

103は甕の口縁部から胴部である。口径は復元径38.2cmを測る。口唇部はコの字で、内面には稜をもつ。口縁部下には一条の断面台形の貼り付け突帶をもち、部分的に貼り付け時の指頭圧痕が



第39図 SB6 平面図・断面図

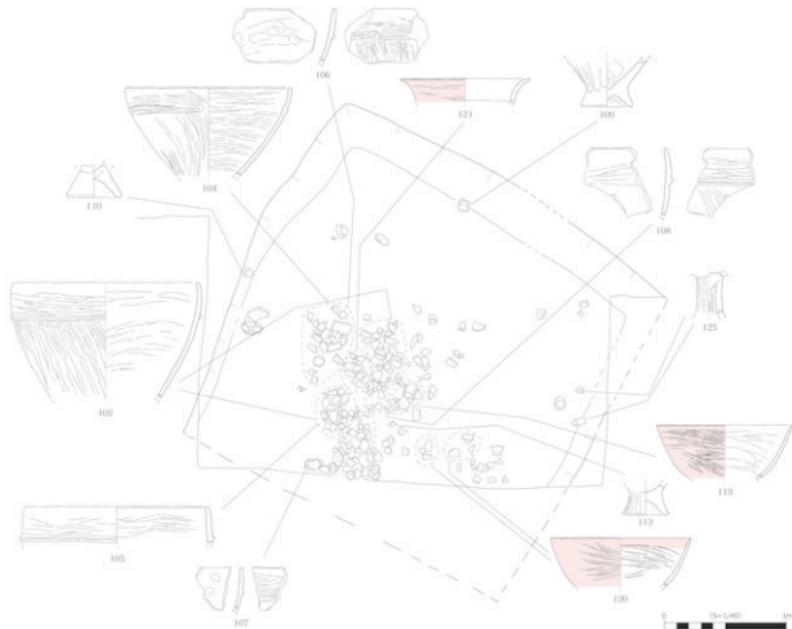
残る。器壁は歪みが大きい。外面の器面調整は、突帶上部が横方向のミガキ、突帶下部が斜め方向のミガキがみられる。内面もミガキ調整であるが、ミガキの単位が外面に比べて太い。

104は甕の口縁部から胴部である。胴下部から直線的に立ち上がる形態で、口唇部は丸い。口径は復元径 27.3cm を測る。口縁部下には一条の断面台形突帯が貼り付けられ、突帶はやや歪む。この突帶は接合せず、一方の不接合部分が欠損しているため、詳細は不明である。外面の器面調整は、突帶上部が横方向のミガキ調整、突帶下部が縦方向のミガキ調整である。内面は横方向のミガキで全体を仕上げる。

105は甕の口縁部である。口唇部は丸く、口径は復元径 30.0cm を測る。口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。内外面ともに横方向のミガキ調整が施される。

106は甕の口縁部である。口唇部はコの字状である。口縁部下には一条の絡繩突帯が施され、指頭圧痕が明瞭に残る。外面の器面調整は突帶上部が横方向のミガキ調整、突帶下部が縦方向のミガキ調整である。内面は工具ナデで仕上げられる。

107は甕の口縁部である。口唇部はコの字状である。口縁部下には一条の断面台形突帯が貼り付



第40図 SB6 遺物出土状況

けられる。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。

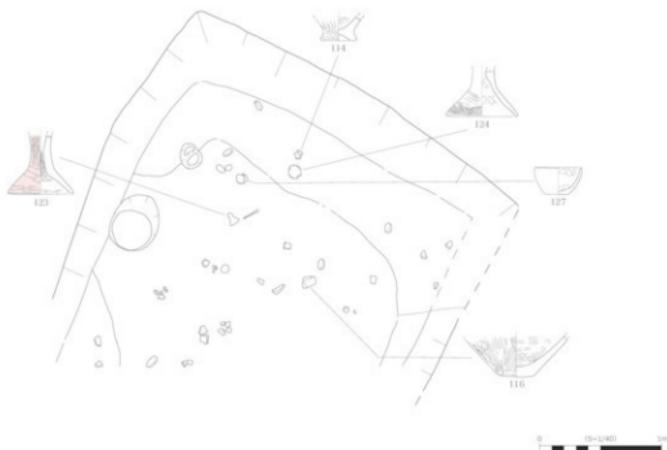
108は甕の口縁部である。口縁部は少し内湾する形態で、口唇部は上方に面をもつ。口縁部下には一条の貼付け突帯を持つ。外面調整は突帶上部が横方向のミガキ、突帶下部は縦方向のミガキである。内面調整はやや幅の広いミガキである。

109は甕の脚部から胴下部である。脚部径は復元径8.5cm、脚部高3.0cm、底径は復元径6.8cmを測る。脚部は直線的に短く開く形態で、口唇部は丸い。脚天井部形態は中央に突出部を持ち、指頭圧痕が残る。外面調整は胴下部が工具ナデ調整、脚部がナデ調整である。内底面には工具ナデ調整がみられる。

110は甕の脚部で、接合部で剥落している。脚部径は復元径9.0cm、脚部高4.3cm、底径は復元径4.9cmを測る。脚部は直線的に開き、口唇部はコの字を呈する。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整である。

111は甕の脚部である。直線的に短く開く形態で、脚部径8.8cm、脚部高2.9cm、底径7.1cmを測る。脚端部はコの字を呈する。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

112は甕の脚部である。直線的に開く形態で、脚端部は若干外反する。脚部径8.3cm、脚部高4.4cm、底部径5.8cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整である。



第41図 SB6床面上遺物出土状況

113は甕の脚部でハの字に聞く形態である。脚部径は復元径7.5cm、脚部高3.8cm、底径は復元径5.3cmを測る。脚天井部はドーム状で、端部は接地部に面をもつ。外面は工具ナデ調整、内面はナデ調整である。

114は甕の脚部から胴下部である。脚部形態はハの字に短く聞く形態で、脚端部は接地部に面をもつ。脚部径は復元径6.0cm、脚部高1.6cm、底径は復元径5.1cmを測る。脚部外面には脚接合時の指頭圧痕が残る。外面胴下部はミガキ調整、内面はナデ調整である。

115から118は壺である。115は壺の肩部である。肩部には幅広突帯が貼り付けられ、突帯部径は復元径35.0cmを測る。突帯幅は3.4cmを測り、突帯内部は四条の鋸歯文で区画される。鋸歯文で区画されたのちに、鋸歯文の間に半裁竹管文が充填される。この半裁竹管文は、Cの字状の二列、Cの字状と逆Cの字を組み合わせた二列が交互に施文される。内外面とも横方向のミガキ調整がみられる。

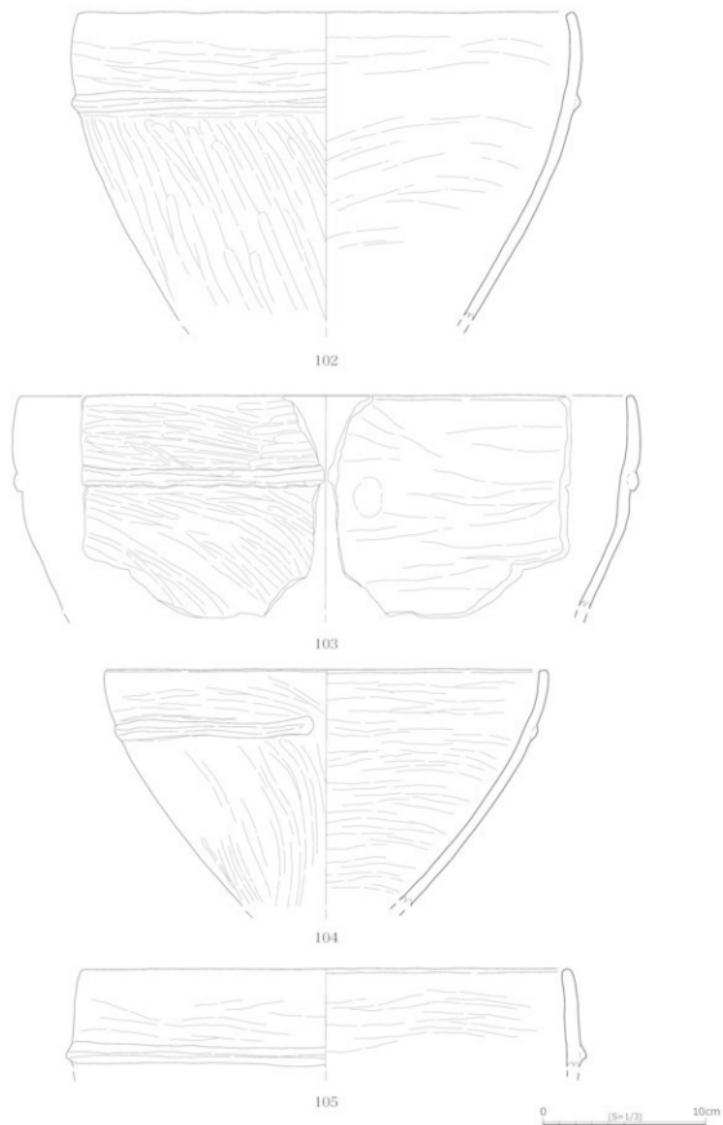
116は壺の底部から胴下部である。底部形態は座りの悪い平底で、底径5.8cmを測る。内外面ともミガキ調整がみられる。

117は壺の底部から胴下部である。底部形態は平底で、底径5.1cmを測る。外面にはスヌの付着がみられる。器面調整は内外面とも摩滅しているため不明である。

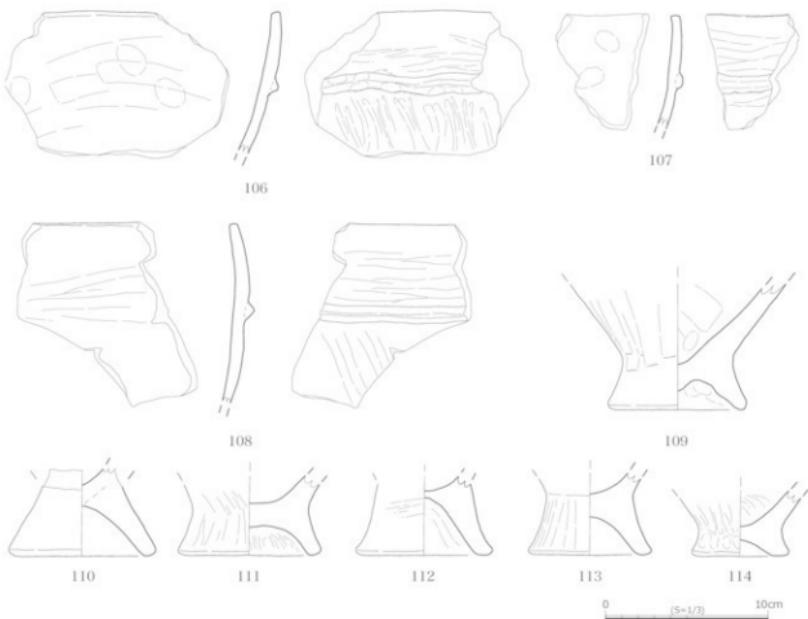
118は壺の底部から胴下部である。底部形態は平底で、端部は脚台状にくびれる。底径は6.9cmを測る。外面には指頭圧痕が残る。底部内面にはコゲがみられる。

119から125は高杯である。119は高杯の杯部である。形態は椀状を呈し、胴部でゆるやかに屈曲する。口唇部は丸く、口径は復元径22.2cmを測る。外面ミガキ調整、内面はナデ調整である。外面の全面と内面は口縁部下2cmの範囲に赤色顔料の塗布がみられる。外面には黒斑がある。

120は高杯の杯部で、椀状の形態を呈する。口唇部は先細り、丸みをおびる。口径は復元径で23.0cmを測る。内外面ともミガキ調整がみられる。外面の全面と内面は口縁部下1.7cmの範囲



第42図 SB6 出土遺物 1



第43図 SB6 出土遺物2

に赤色顔料の塗布がみられる。

121は体部が屈折する高杯の杯部である。屈折部から口唇部にかけて大きく外反する形態である。口径は復元径 21.3cm を測り、口唇部は面をもつ。内外面ともナデ調整で、赤色顔料が塗布される。

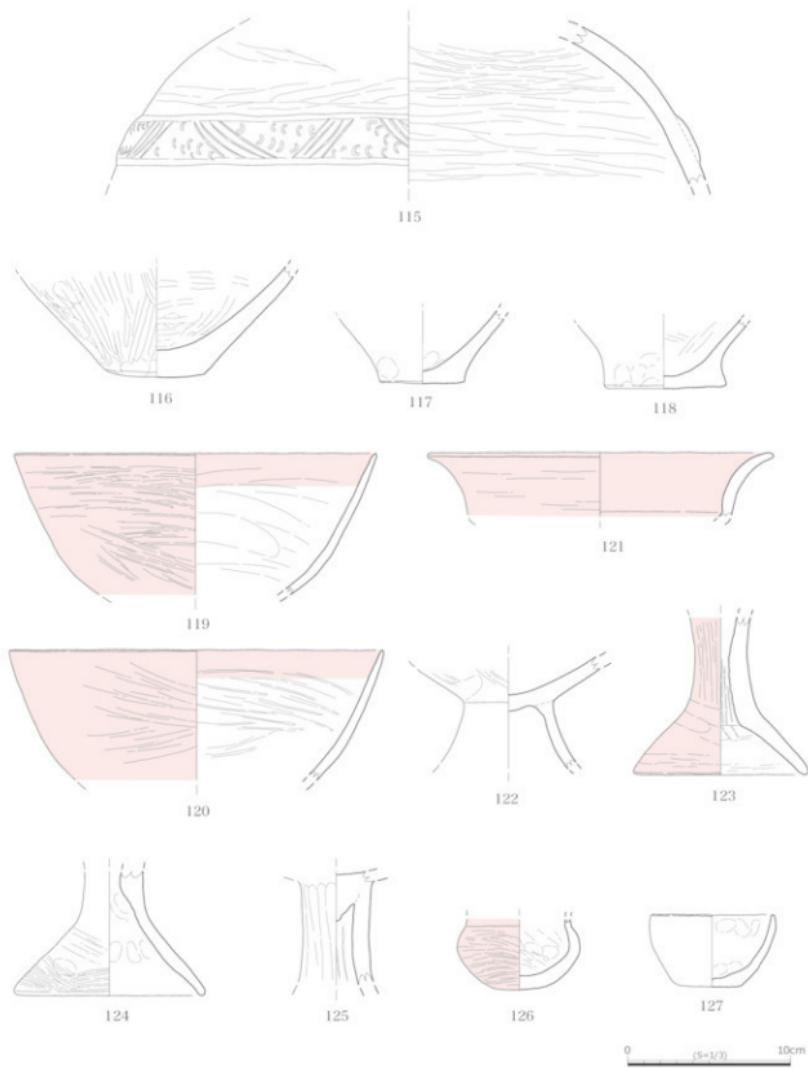
122は高杯の脚接合部から脚部である。脚部はスカート状に開く形態で、接合部には明瞭な稜がみられる。脚天井部形態は中央部分がやや突出する。脚接合部径は復元径 5.5cm を測る。内外面ともナデ調整である。胎土がやや粗いため、脚部の長い鉢の可能性もある。

123は高杯の脚部である。筒部は直線的に伸び、途中から袋状に開く。この袋状に開く部分の内面は明瞭に屈曲し、強い稜をもつ。脚部径 10.7cm、脚部高 10.7cm、筒部径 3.3cm を測る。筒部外面は縦方向のミガキ調整、端部外面はヨコナデ、内面は工具ナデがみられる。外面には赤色顔料が塗布される。

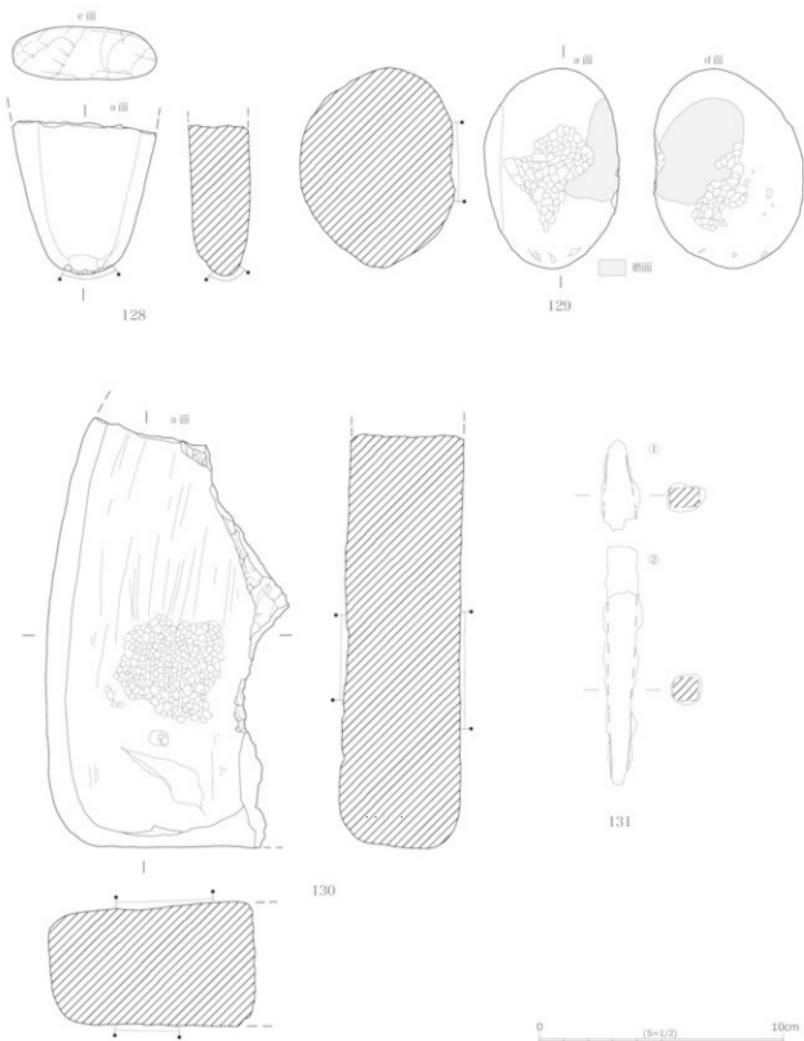
124は高杯の脚部で、筒部から端部にかけて直線的に開く。脚端部はやや内湾する。脚部径 11.7cm、筒部径 3.6cm を測る。外面はミガキ調整、ナデ調整、内面は成形時の指頭圧痕が残る。

125は高杯の脚部である。接合部から直線的にのびる形態を呈し、脚接合部径は復元径 4.1cm を測る。接合方法は円錐塊充填法を用いる。外面は縦方向のミガキ調整、内面は工具ナデがみられる。

126は壇の底部から胴部である。底部はゆるやかな平底で胴部は丸みをおびる。頸部への立ち上がりがわずかに確認できる。底径 3.5cm、胴部最大径 7.5cm、頸部径 6.5cm を測る。胴部外面は



第44図 SB6出土遺物3



第45図 SB6出土遺物4

横方向のミガキ調整、内面はナデ調整で仕上げられる。底部外面から頭部外面にかけて赤色顔料が塗布される。

127は平底の鉢である。口径7.5cm、器高4.4cm、底径3.5cmを測る。内湾する口縁部形態で、内外面ともナデ調整である。

128は扁平な楕円形の安山岩礫を用いた敲石である。a面下端部に敲打痕が認められる。またa面中央部は磨面である。上部はa面右側部からの加撃により欠損している。

129は卵形の安山岩礫を用いた敲石である。上下両端ではなくa面に敲打痕が頗著に認められる。またb面中央部にもみられる。a面右側面には磨面が認められる。この石器は手のひらに収まる大きさであり、側面に敲打痕が認められることからその使用方法も推測できる。

130は台石として利用していたものか、意図的または非意図的に分割されたものを用いた再利用の石器と考えられる。a面とその裏面中央部に敲打痕が認められ、a面のものは凹面として意識できるほど利用されていることが伺える。a面右側面の分割面三面ともa面の裏面側からの加撃で分割されている。

131は鉄器である。①と②は接合しないようだが、もともと同一個体であったことを否定するものではない。①は残存長3.7cmで断面は判然としないが長方形を呈すると判断した。②は残存長9.8cmで、断面は方形を呈するようである。現状では器種は不明であるが、刃部状の構造は見られないため、刀子のようなものではなく、また、鎌の頭部にしてはサイズが大きすぎるようと思われる。しかし、②のように厚みを有する方形の頭部は、長島町の明神古墳群の出土品中の片刃箭式の鉄鎌にも見ることができる（大西智和・鐘ヶ江賢二 2008「鹿児島県長島明神・指江古墳出土遺物の検討」『人類史研究』14）。

### 【SB7】（第46～51図、図版7-2～8-3）

SB 7は、主軸を南北にとり、長軸3.7m、短軸3.6mの方形プランを呈する。検出面からの竪穴の深さ30cmを測る。床面には5cm程度の厚みで青みを帯びた暗褐色のシルト質土で貼床が施されている。付帯遺構として、柱穴とみられるピット7基、中央土坑1基と中央土坑中に甕形土器を据えた土器炉1基が検出された。

ピットは便宜上7aから7gとした。ピット7aは長軸22cm、短軸18cm、深さ10cmである。ピット7bは長軸34cm、短軸32cmの略円形で、深さ29cmである。底部南西側に直径18cmのピットを設ける二段掘りとなる。ピット7cは直径22cmの円形で、深さ8cmである。ピット7dは直径18cmの円形で、深さ11cmである。ピット7eはピット7dに隣接してあり、長軸24cm、短軸20cmの楕円形であり、深さ13cmである。ピット7fは直径34cmの略円形で、深さ18cmである。底部北側に長軸18cm、短軸14cmのピットを設ける二段掘りとなる。ピット7gは長軸26cm、短軸22cm、深さ10cmである。底部南側に直径10cmのピットを設ける二段掘りとなる。中央土坑を挟んで対照の位置にあるピットbとfは棟支え柱と考えられ、他と比較して直径・深さとも大きく二段掘りとなっている。他のピットは方形の枠を組むためのものと考えられる。

中央土坑は長軸1.2m、短軸1m、深さ5cmを測る。中央には断面逆台形の一辺25cm、深さ13cmの略円形のピットがあり、脚部が欠損した甕形土器（筐貫式土器）が据えられていた。土器は口縁部10cm程度を床面上に露出していた。土器の北側の中央土坑内には焼けた砂と灰混



第46図 SB7 平面図・断面図

じりの土壤がみられること、土器を据えたピット内には白色の灰の堆積があったこと、そして、土器の内面中ほどに一周帯状にススが付着していたことから、土器炉と判断した。

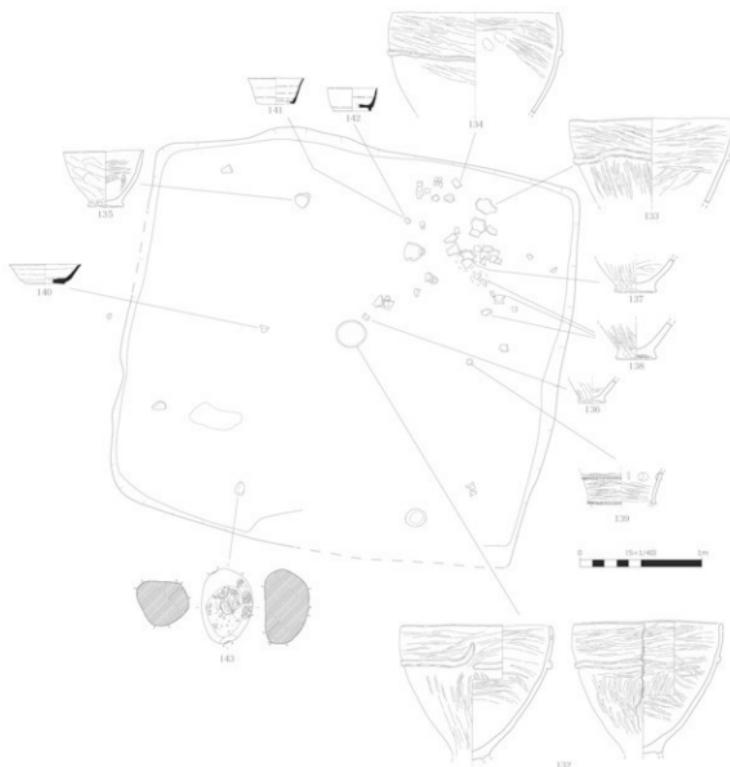
SB 7は層位断面図(第11図)からは、第7層青コラ火山灰層を掘り抜き造営されていることがわかる。青コラ火山灰層下時期は7世紀後半とされており(下山1992)、帰属時期に関しては古墳時代ではなく、古代となる。土器炉の資料は成川式の釜貫式段階の特徴を示している。

#### 文献

下山覚 1992 「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第8号 65-79

#### 〈SB7 出土遺物〉

132から134は甕である。132は住居中央に埋設された甕で、脚部が欠損している。口縁部は内湾する形態を呈し、口唇部は丸い。口径25.1cm、器部高21.0cmを測る。口縁部下には一条の断面台形突帯が貼り付けられるが、接合しない。不接合部分を正面にすると、左側が上方に伸びる形態である。また、口縁部には直径2~3mmの焼成後穿孔が2箇所認められる。穿孔部の間には、口縁部から胴部にかけての割れ口が見られることから、この穿孔は、割れ口を補修する補修孔であつ

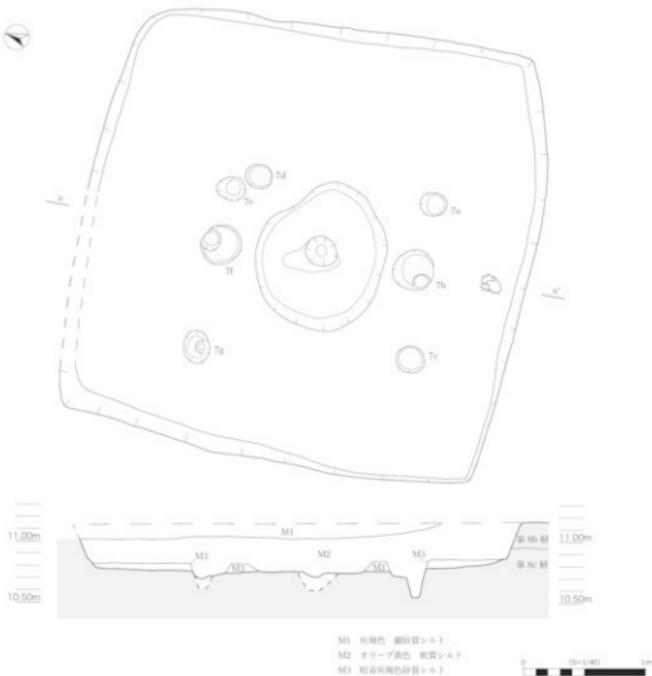


第47図 SB7 遺物出土状況

たと考えられる。実測図では不接合部分を正面にしたa面と、穿孔部分を正面にしたb面を掲載している。内外面ともミガキ調整である。外面は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴部が縦方向のミガキ調整である。内面は主に横方向のミガキ調整が施される。胴下部内面には幅3cmの帯状のスグがほぼ水平に付着している。

133は甕の口縁部から胴部である。内湾する形態を呈し、口唇部は丸い。口径27.2cmを測り、口縁部はやや歪む。口縁部下には歪みの大きい一条の絡繩突帯が貼り付けられる。内外面ともミガキ調整である。外面は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴下部が縦方向のミガキ調整である。内面は縦方向のミガキ調整のち横方向のミガキ調整がみられる。

134は甕の口縁部から胴部である。内湾する形態を呈し、口径は復元径27.3cm、最大径は口縁部下にあり復元径28.4cmを測る。口唇部はコの字を呈する。口縁部下には一条の絡繩突帯が貼り付けられ、貼り付け部分内面はやや膨らみをもつ。内外面ともミガキ調整が見られ、外面は横方向



第48図 SB7 完掘平面図・断面図

のミガキ調整、内面は横方向ないし斜め方向のミガキ調整が見られる。

135は口縁部が一部欠損しているが、鉢の完形品である。椀状の形態を呈し、底部は脚台状にくびれる。口縁部はやや外反し、口唇部は先細りする。口径は復元径13.1cm、器高9.2cm、底径5.4cm、脚部径5.9cm、脚部高0.8cmを測る。脚部は短く開き、端部は丸い。脚接合部には接合時の指頭圧痕が明瞭に残るため、歪みが大きい。内面はハケ調整、外面は工具ナデ調整である。脚下半部には黒斑がみられる。

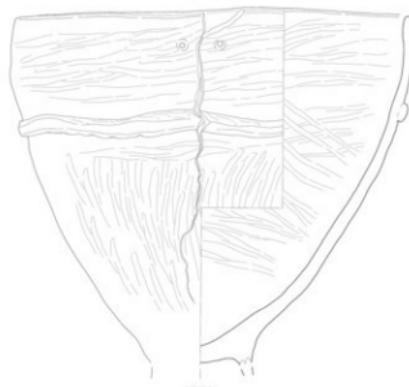
136は鉢の脚部である。脚部は短くハの字に開き、端部は丸みをおびる。脚部径4.5cm、脚部高0.9cm、底径4.1cmを測る。内外面ともナデ調整である。

137は甕の脚部から脚下部である。脚部は短く、脚台状にくびれる。脚部径6.9cm、脚部高1.0cm、底径6.5cmを測る。脚接合部は指頭圧痕が明瞭に残り、端部はゆがむ。脚下半部は椀状に立ち上がる。外面は綫方向のミガキ調整、内面はナデ調整である。

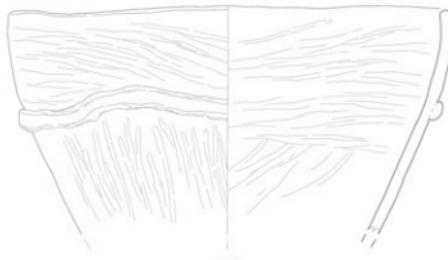
138は甕の脚部から脚下部である。脚部は短く直線的に開き、端部を丸くおさめる。脚部径は復元径6.7cm、脚部高1.6cm、底径は復元径5.9cmを測る。脚接合部には指頭圧痕が残る。脚天井



132a



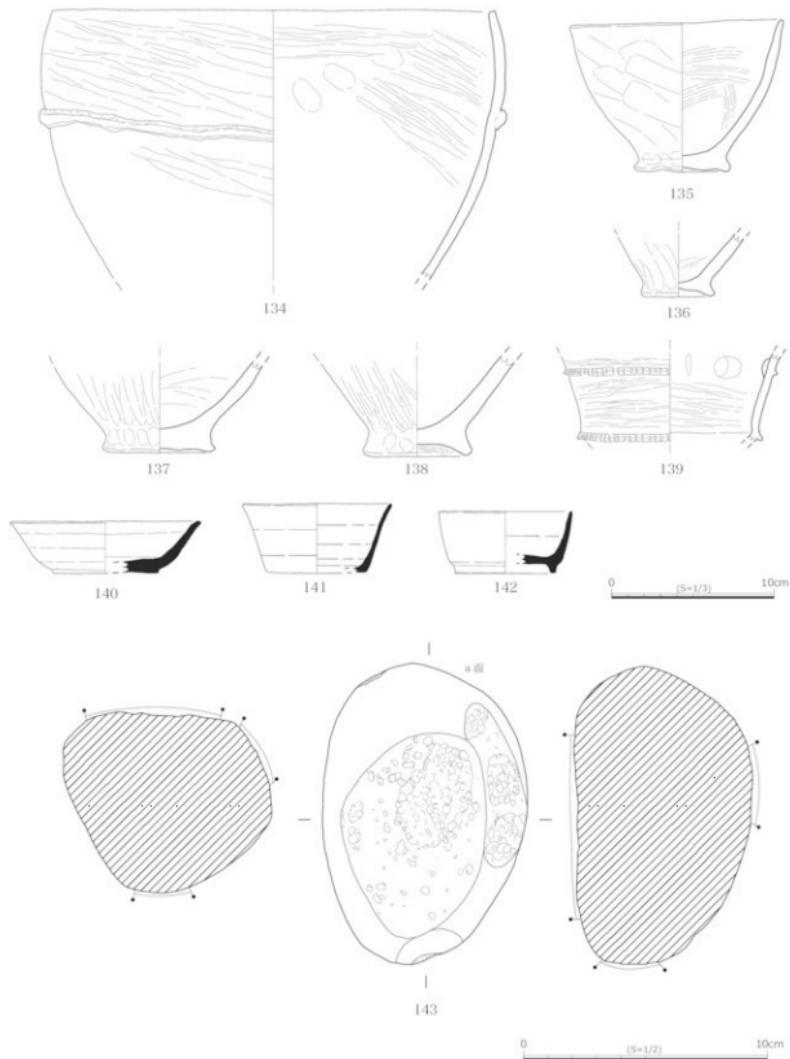
132b



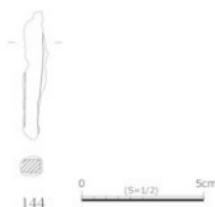
133

0 (5=1/3) 10cm

第49図 SB7 出土遺物 1



第50図 SB7出土遺物 2



第51図 SB7出土遺物3

調整で仕上げられる。

141は平底の須恵器杯である。形態は箱型で口縁部はゆるやかに外反する。口径は復元径9.2cm、器高4.3cm、底径は復元径6.1cmを測る。外面とも回転ナデ調整で仕上げられる。焼成は硬質だが、胎土はやや粗い。

142は形態が箱型で高台が付く。胴部から口縁部にかけて直線的に開く形態である。口径は復元径8.2cm、器高3.8cm、高台径は復元径6.2cm、高台高0.5cmを測る。高台は断面コの字形で、接地部分には面をもつ。

143は不整形な安山岩礫を用いた凹石である。a面中央部に敲打による凹面が認められる。またa面右側面、下端部、左側面上部とa面の裏面に敲打痕が認められ、端部を用いていたことが分かる。

144は残存長6.2cm、上方の幅は0.6cm、下方の幅は0.8cmで、断面は長方形を呈するようである。形態からは長頸繖の頸部の可能性も考えられる。

### 【SB9】(第52～55図)

SB 9は、主軸を南北にとり、長軸4.1m、短軸3.9m+ $\alpha$ の不整台形プランを呈する可能性がある。検出面からの豎穴深さは最大で73cmを測る。

埋土中にピット1基が検出された。ピットは最大径14cmの円形で、深さ11cmであった。底部から青銅製鉈145が出土した。このピットは、検出面がSB 9の検出上端より低い位置であり、また、SB 9検出面より上面で該当する遺構や関連する遺構の検出がないことから、SB 9の埋没過程において単独で設けられたピットであることになる。ピットの埋土中からは青銅製鉈が出土しており、ピットの状況からは、埋納を目的として設置した可能性が出てくる。

SB 9は、住居とした他の遺構と比較して、平面形状が異なっていること、豎穴が特段に深いこと、柱穴が検出されていないといった相違点があるため、ここでは、「住居」として分類し記載したが、それ以外の用途についても検討する必要があると認識している。ピットの設置とSB 9との関連については、検出状況からは判断できない状況である。仮に、関連性があるとすれば、SB 9の用途についても課題として捉える必要がある。

#### 〈SB9出土遺物〉

145は完形の青銅製鉈である。外面は丁寧に研磨され、型合わせの稜線は消えている。鉈口はいびつな形状である。内部に石丸を有する。全体高3.0cm、体部幅2.2cm、体部高2.3cmを測る。

部は平坦面がつくられる。外面はミガキ調整、内底面はナデ調整、脚内面はミガキ調整である。

139は高杯の杯部である。やや外反して開く形態で、同部には二条の刻目突帯が施される。刻目の間隔は平均2mmと狭く、単位は小さい。刻目の原体は不明である。内面には、一部欠損しているが、把手が貼り付けられた痕跡がみられる。内外面とも横方向のミガキ調整がみられる。胎土は非常に細かい。

140から142は須恵器の杯である。140は台状の底部がつく。胴部から口縁部にかけてゆるやかに外反して開く形態である。口唇部は外側にわずかに突出する。口径は復元径11.7cm、器高3.2cm、底径は復元径6.5cmを測る。外面とも回転ナデ調整で仕上げられる。

141は平底の須恵器杯である。形態は箱型で口縁部はゆるやかに外反する。口径は復元径9.2cm、器高4.3cm、底径は復元径6.1cmを測る。外面とも回転ナデ調整で仕上げられる。焼成は硬質だが、胎土はやや粗い。

142は形態が箱型で高台が付く。胴部から口縁部にかけて直線的に開く形態である。口径は復元径8.2cm、器高3.8cm、高台径は復元径6.2cm、高台高0.5cmを測る。高台は断面コの字形で、接地部分には面をもつ。

143は不整形な安山岩礫を用いた凹石である。a面中央部に敲打による凹面が認められる。またa面右側面、下端部、左側面上部とa面の裏面に敲打痕が認められ、端部を用いていたことが分かる。

144は残存長6.2cm、上方の幅は0.6cm、下方の幅は0.8cmで、断面は長方形を呈するようである。形態からは長頸繖の頸部の可能性も考えられる。



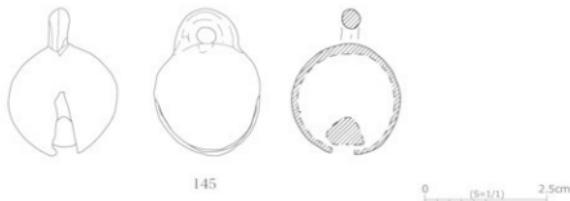
第52図 SB9 検出面遺物出土状況

146から150は甕である。146は甕の口縁部で、直口する形態を呈する。口唇部はコの字形である。口縁部下には一条の貼付け突帯を有し、刻目が施される。この刻目の間隔は大きく、原体は指頭によるものである。外面はナデ調整、内面はミガキ調整である。

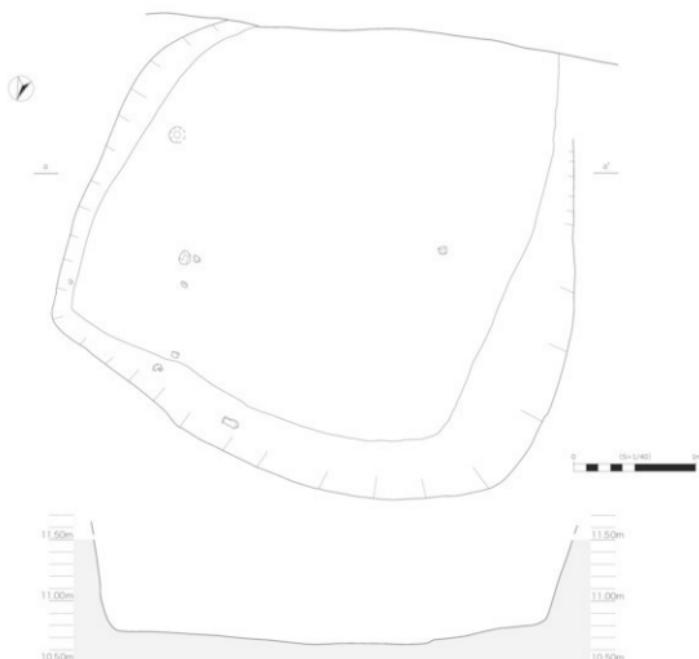
147は直口する甕の口縁部である。口唇部はコの字形である。口縁部下には一条の貼付け突帯を有し、貼付け時の強いナデにより、突出は少ない。外面の調整は、突帶上部が横方向のミガキ調整、突帶下部は縦方向のミガキ調整である。内面は斜め方向のミガキ調整がみられる。

148は甕の脚部から胴部である。脚部はハの字に短く開き、端部は丸く外反する。脚部径は復元径 9.0cm、脚部高は 1.5cm、底径は復元径 7.8cm を測る。脚天井部形態はゆがんだ平坦部をもつ。脚接合部は指頭圧痕が明瞭に残り、脚部の歪みは大きい。胴部は直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

149は甕の脚部で、直線的に開く形態である。端部は丸みをおびる。脚部径 7.0cm、脚部高 3.0cm、底径 5.9cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。脚接合線がわずかに確認でき、外面には指



第53図 SB9 検出面出土遺物



第54図 SB9 平面図・断面図

頭圧痕が残る。内外面ともナデ調整である。

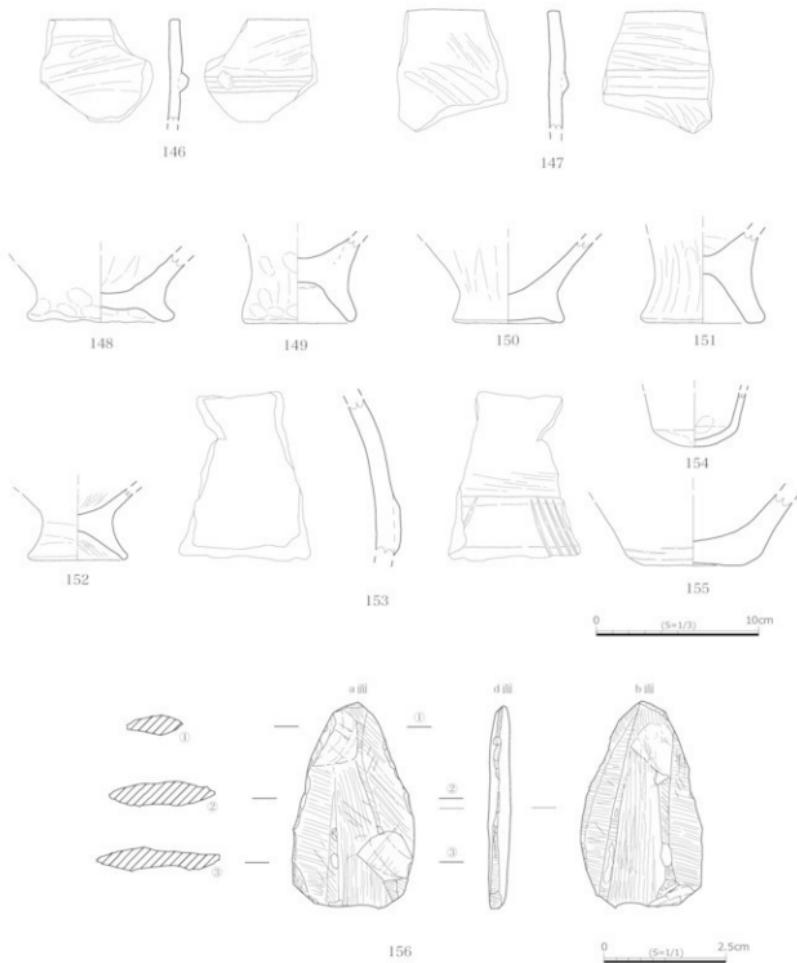
150は甕の脚部から胴下部である。脚部はわずかに上げ底状になり、端部は丸みをおびる。胴部は直線状に開く。脚部径は復元径6.8cm、脚部高1.9cm、底径は復元径6.0cmを測る。内外面ともナデ調整である。

151は甕の脚部である。脚部はハの字に開き、接地部分には面をもつ。脚部径は復元径7.7cm、脚部高3.3cm、底径は復元径6.0cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。全体的に白く発色している。

152はハの字に開く脚部から胴下部である。脚部径は復元径6.0cm、脚部高2.4cm、底径は復元径4.2cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。内底面はミガキ調整、外面はナデ調整である。外面脚接合部の上下周辺には赤色塗彩がみられる。

153は壺の胴部である。幅広突帯が貼り付けられる。突帯幅は3.7cm、厚みは最大5mmを測る。突帯内には四条の刻目が鋸歯状に施される。外面調整はナデ調整で内面は摩減のため不明である。

154は壺の底部から胴部である。底部は丸底で、胴部との境目には内外面ともゆるやかな稜をもち、復元径5.1cmを測る。胴部は直線的に開く形態である。



第55図 SB9 出土遺物

155は壺の底部で、底面はわずかに上げ底状になる。底端部は丸く、底径は復元径8.2cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。

156は頁岩製の剥片を素材とした磨製石鎌である。両面と両側面に丁寧な研磨痕が認められる。特にb面左側縁よりは幅2mm程度であるものの他の面に比べさらに丁寧に研磨されている。先端

部は欠損後に研磨により再整形をしている。

### 【SB10】(第 56・57 図、図版 8-4)

SB10 は、主軸を南西—北東にとる方形プランのコーナーと、竪穴の一部が検出された。竪穴の全体法量は不明であるが、検出された部分の竪穴最大長は 3.7 m を測る。検出面からの竪穴深さは最大で約 62cm を測る。

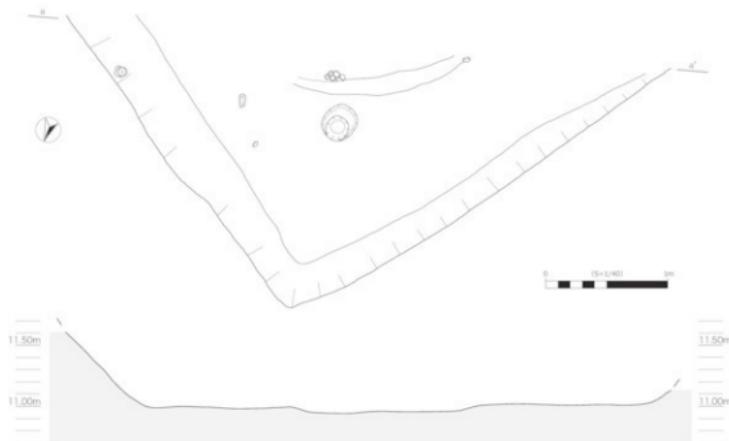
付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット 1 基が検出され、ピットに隣接して、床面の落ち込みが検出された。ピットは長軸 29cm、短軸 25cm の楕円形であり、深さ 60cm の二段掘りである。二段目は竪穴のコーナー側にずれており、長軸 20cm、短軸 16cm、深さ 53cm の円形ピットとなる。

床面に一部がみられる落ち込みについては、上端が弧状を呈し、段差 5cm を測る。古墳時代の鹿児島地域では、「方形+円形」竪穴といった特徴的な竪穴住居のプランがあるが、この落ち込みの位置からみて、二段目の竪穴の一部が検出された可能性も考えておきたい。

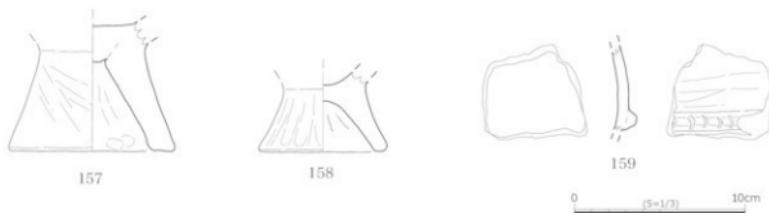
157 は甕の脚部である。直線的に開く脚部形態で、接地面にはわずかにくぼみをもつ。脚部径 9.6cm、底径 6.0cm、脚部高 5.7cm を測る。脚接合部は粘土塊を充填する方法で接合される。

158 は甕の脚部である。直線的に開く形態で、接地面にはわずかに面をもつ。脚部径 7.5cm、脚部高 4.8cm、底径 4.8cm を測る。脚部形態はドーム状である。外面調整は縦方向のナデ調整、内面は工具ナデ調整によるものである。

159 は甕の口縁部である。口唇部は欠損しているが、内湾する形態であると考えられる。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯には逆 C の字の半截竹管文が施される。内外面ともナデ調整である。



第 56 図 SB10 平面図・断面図



第57図 SB10出土遺物

## 【SB11】(第58図)

SB11は、主軸を北西—南東にとり、長軸2.8mの方形プランを呈するとみられる。検出面からの堅穴深さは約11cmを測る。調査区外に大部分が出ており、付帯遺構は検出されていない。

## 〈SB11出土遺物〉

出土遺物総点数は21点だったが、いずれも細片であった。

## 【SB12】(第58図)

SB12は、主軸を北西—南東にとる方形プランとみられる。調査区外に大部分が出ており、法量は不明である。検出面からの深さは約14cmを測る。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット2基、土坑とみられる落ち込みの一部が検出された。便宜上12aと12bとした。ピット12aは直径34cmの略円形を呈し、深さ13cmを測る。ピット12bは、長軸28cm、短軸20cmの梢円形を呈し、深さ40cmを測る。土坑とみられる落ち込みは深さ37cm程度である。ピット12bがピット上端と一部重なっている。

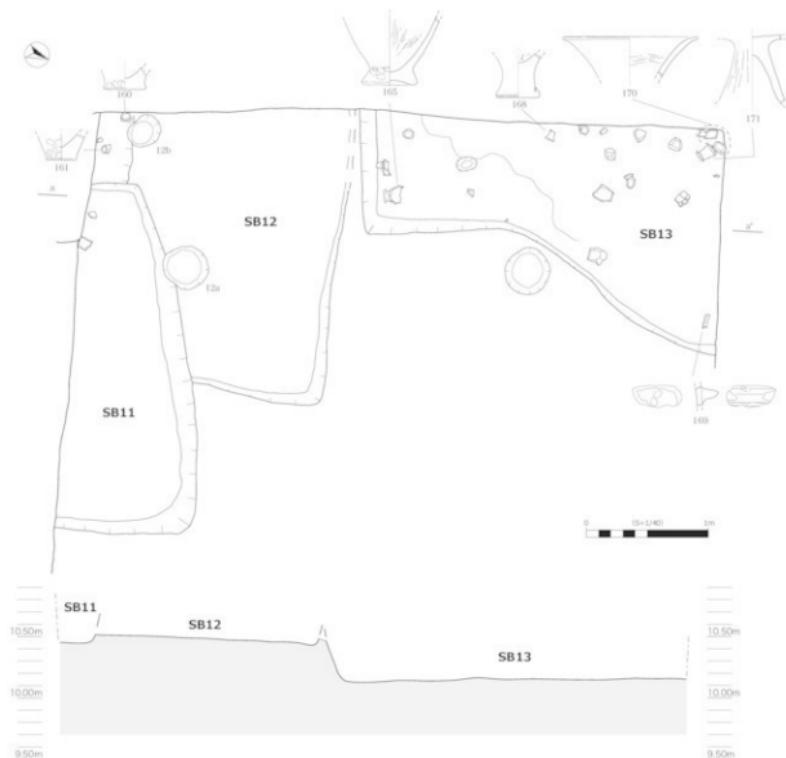
## 〈SB12出土遺物〉

160と161は甕の脚部である。160は底部が脚台状に開く形態を呈し、底径は復元径で7.0cmを測る。脚部には指頭圧痕が残る。外底面はハケ調整、内面はナデ調整である。

161は底部が上げ底状を呈する。底径は復元径5.0cmを測る。底部付近は成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。底径がやや小さいことから鉢の可能性もある。内外面ともナデ調整がみられる。

## 【SB13】(第58図、図版8-5～9-2)

SB13は、調査区外に半分以上が出ていると考えられるため、全体形は不明であるが、直角に近いコーナーから直線的に伸びた堅穴が、途中で曲線的に開き、方形と円形が組み合った柄鏡形に近い形状に見える。検出された長軸が3m、短軸が1.8mだが、全体の法量も不明である。検出面からの堅穴の深さ約26cmを測る。床面のレベルは、方形部分と円形部分で1～2cm程度の



第58図 SB11・12・13 平面図・断面図

差しかなく、遺構の切り合いの可能性も低いと考える。竪穴の深さは最深で30cmを越えており、不整形の竪穴住居の可能性もある。付帯遺構として、床面にピット1基が検出されているが、長軸18cm、短軸10cmと小型である。竪穴の外にもピット1基が検出されており、直径38cmの略円形を呈し、深さ42cmを測る。竪穴外のピットと竪穴との関係は不明である。

#### 〈SB13出土遺物〉

162から168は甕である。162は甕の口縁部から胴部である。頸部で強く屈曲し、屈曲部内面には強い稜線が認められる。屈曲部には接合線がみられる。口唇部にかけて先細りになり、口唇部はM字状にくぼむ形態である。口径は復元径29.1cm、口縁部長3.8cm、頸部径は復元径25.0cmを測る。頸部下には三条の断面三角突帯が貼り付けられ、丁寧なヨコナデがみられる。外面調整は口縁部が丁寧なヨコナデ、胴部は縦方向のハケ調整のちヨコナデ調整である。内面調整は横方向のハケ調整がみられる。器面は褐色で、胎土には雲母を多く含んでいる。



第59図 SB12出土遺物

163は甌の口縁部から胴部である。頸部で強く屈曲し、内面には強い稜線がみられる。口縁部はわずかに受け口上を呈し、口唇部はM字状にくぼむ。口径は復元径28.5cm、口縁部長2.8cm、頸部径は復元径24.8cmを測る。頸部下は欠損のため不明だが、おそらく多条突帯が貼り付けられると考えられる。外面調整は綫方向のハケ調整、内面調整はナデ調整である。全体的に褐色に発色し、胎土には雲母を多く含む。

164は甌の口縁部から胴部である。口径は23.5cmを測り、口唇部は丸い。口縁部下には一条の突帯が貼り付けられる。この突帯には指頭による間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は平均で6.9cmを測る。外面調整は突帯上部が単位の太いミガキ調整、胴部はナデ調整である。内面調整はナデ調整である。

165は甌の脚部から胴下半部である。脚部は短く聞く形態で、脚部径9.1cm、脚部高2.8cm、底径7.0cmを測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状で、端部は丸い。脚接合部には指頭圧痕が残る。胴部は緩やかに立ち上がる形態である。内外面ともナデ調整で仕上げられる。

166は甌の口縁部である。わずかに内湾する形態で、口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。この突帯は丁寧なヨコナデで貼り付けられる。内外面ともナデ調整である。

167は甌の脚部である。ハの字に長く聞く形態で、先細りになり、端部は丸い。脚部径9.0cm、脚部高2.3cm、底径5.2cmを測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状を呈する。内外面ともナデ調整で、内底面には指頭圧痕が残る。

168は甌の脚部である。中空ではなく充実した脚台で、端部はM字状にくぼむ。脚部径7.2cm、脚部高3.5cm、底径7.1cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。器面は褐色を呈し、胎土には雲母が多く見られる。

169は大型甌の突帯部である。突帯は先細りする形態で、突帯幅は約2.3cmを測り、丁寧なヨコナデ調整で仕上げられる。器面は褐色を呈し、胎土には雲母が多く見られる。

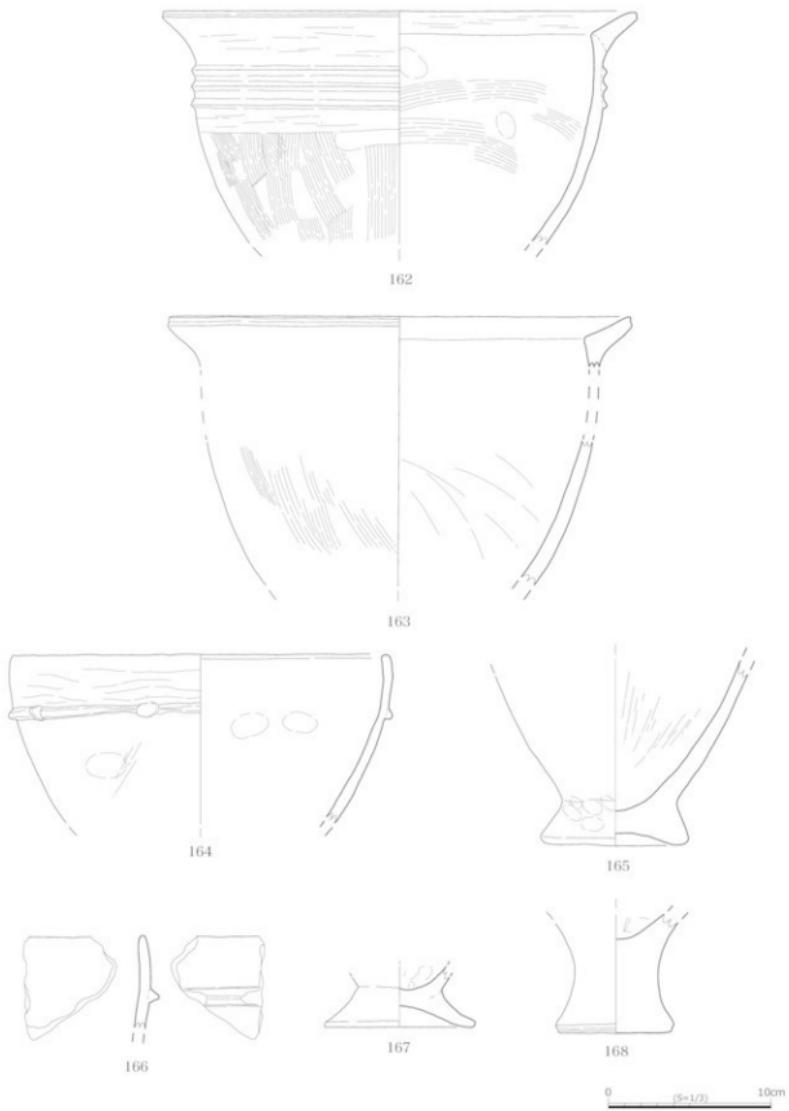
170は壺の口縁部である。ラッパ状に大きく聞く形態で、口径は復元径22.0cmを測る。端部はわずかに面をもつ。内外面ともナデ調整で、外面にはスリップ状の付着物がみられる。

171は高杯の脚部である。脚部はスカート状に聞く形態で、杯部はほぼ水平に広がる。脚接合部径は6.0cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。

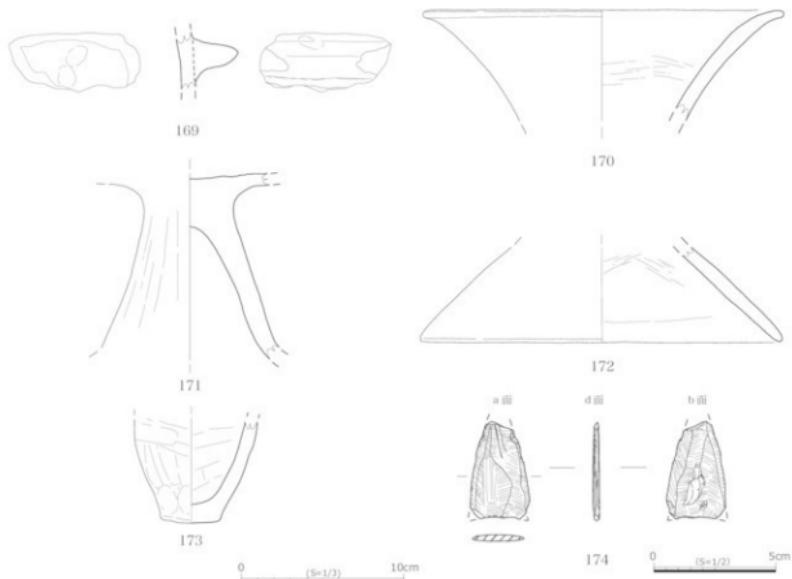
172は高杯の脚部である。脚部は直線的に聞き、端部は丸い。脚部径は復元径22.2cmを測る。内外面ともナデ調整である。

173は小型壺の底部から胴部である。底部はゆがみがみられる平底で、胴部は樽状に膨らむ。底径は3.6cmを測る。外面調整はナデ調整、内面調整は工具ナデ調整である。

174は磨製石鐵である。幅4.1cm、高さ9.0cm、厚さ4.1cmを測る



第60図 SB13出土遺物 1



第61図 SB13出土遺物2

## 【SB14】(第62・63図、図版9-3・9-5)

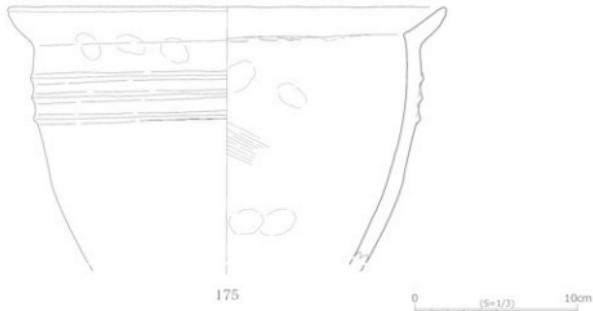
SB14は、主軸を北西—南東にとり、長軸2.9m、短軸2.1mの歪んだ柄鏡形のプランを呈する。検出面からの豊穴深さは約20cmを測る。豊穴外にピットが1基検出されているため、方形+円形の二段掘りとなる大型豊穴住居の二段目のみが検出された可能性もある。ただ、豊穴の一部はSB15と切り合っているため、一部形状が不明である。

豊穴内の付帯遺構として、柱穴とみられるピット2基、小型のピット2基、張り出し部分に設けられた土坑1基、カーボン集中箇所1箇所検出された。

ピットは便宜上14-aから14-dとした。ピット14-aは長軸30cm、短軸26cmの梢円形であり、深さ14cmを測る。ピット14-bは長軸30cm、短軸24cmの略円形であり、深さ40cmを測る。ピット14-cは長軸17cm、短軸12cmの梢円形であり、深さ17cmを測る。ピット14-dは長軸18cm、短軸14cmの梢円形であり、深さ17cmを測る。ピット14-cは、上端を礫が塞いだ状況で検出されており、主柱穴とは考えにくい。

張り出し部分の土坑は、奥行1.2m、幅1.1mを測るが、張り出し部分では幅60cm前後となる。床面とのレベル差は5cm程度である。なお、ピット14-bの周りの床面は、幅94cm程度、

第62図 SB14・15・16・18平面図



第63図 SB14出土遺物

奥行が最大で60cm、最小で20cmの範囲で、他の床面より7cm程度高くなっている。段差を意図的に設けたものとみられ、ピット14 bの部分だけ西側に張り出している。竪穴外のピットは長軸26cm、短軸22cmの楕円形で、深さ28cmを測る。

#### 〈SB14出土遺物〉

出土遺物総点数は36点である。

175は甕の口縁部から頸部である。頸部は強く屈曲する形態を呈し、内面には強い稜をもつ。口縁部はゆるやかに受け口状となり、口唇部はM字状を呈する。口径は復元径27.0cm、頸部径23.9cmを測る。頸部下には三条の断面三角尖帯が貼り付けられ、丁寧なヨコナデで仕上げられる。頸部内面の口縁部との接合部分には、接合時の爪痕が残る。内外面ともハケ調整後、ナデ調整が主体である。器面は褐色で、胎土には雲母を多く含んでいる。

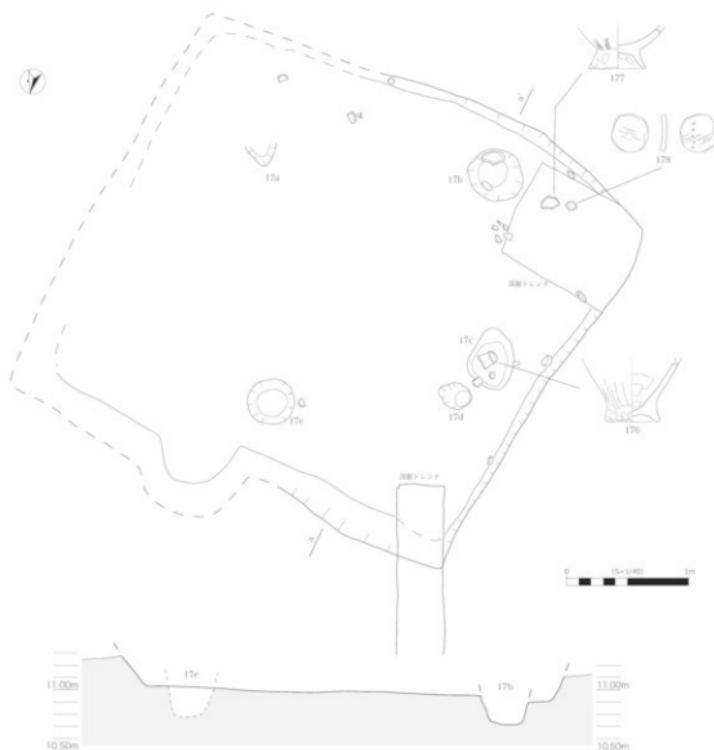
#### 【SB15・16】(第62図、図版9-4～9-5)

SB15・SB16は、切り合が大きく、また大半が調査区外に出ているため、全体形状は不明であるが、いずれも方形プランと考えられる。

SB15は、SB16に切られており、全体形は不明であるが、直角に近いコーナーが検出されており、方形プランと考えられる。検出された竪穴の一辺は3.5m以上となり、検出面からの竪穴深さは約10cmを測る。

付帯遺構として、床面にピット1基が検出された。法量は、長軸20cm、短軸18cmの略円形を呈し、深さ24cmを測る。出土遺物は無い。

SB16は、主軸をほぼ南北にとると考えられる。大半が調査区外に出でおり、全体形は不明であるが、直角に近いコーナーが検出されており、方形プランと考えられる。長軸4m以上となる。検出面からの竪穴深さは約30cmを測る。付帯遺構は検出されていない。出土遺物は無い。

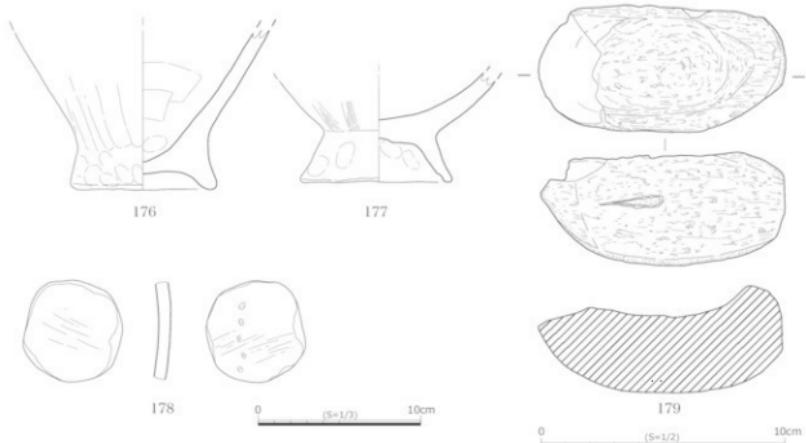


第64図 SB17 平面図・断面図

## 【SB17】(第64・65図、図版10-1)

SB17は、主軸を東西にとり、検出できた1辺3.6mの方形プランを呈する。検出面からの堅穴深さは約22cmを測る。検出した堅穴下端形状からは、幅60cm、長さ30cm程度の舌状の張り出しを設けたものである。

付帶遺構として、床面に柱穴とみられるピット5基が検出された。ピット17aは検出された軸で幅24cm、深さ11cmを測る。ピット17bは長軸46cm、短軸42cmの楕円形であり、深さ21cmを測る。ピット17cは長軸42cm、短軸38cmのゆがんだ方形様を呈し、深さ1.3mを測る。ピット17dは長軸26cm、短軸20cmの楕円形であり、深さ9cmを測る。ピット17eは直径38cmの円形であり、深さ21cmを測る。ピット17cのみが他と比較して著しく深い。また、ピッ



第65図 SB17出土遺物

ト17dはピット17cに近接しているため、柱穴の掘り直しも考慮にいれたが、開口部の径が小さく浅い。また、斜めに入り込んでいることから、ピット17cの掘り直しの可能性は低いとみられる。したがって、柱構造を構成するピットは、2穴あるいは4穴である可能性がある。ピットb・eを主軸を構成する柱穴とすれば2穴となる。一方4穴の場合、軸組みと竪穴とが90度回転しており、竪穴と軸組みとの関係に整合性が失われる。このため、ピットa・cは床面付帯遺構の可能性も出てくる。

#### 〈SB17出土遺物〉

176と177は甕の脚部から胴下部である。176は脚部が短く伸びる形態を呈し、端部は丸い。脚部径9.0cm、脚部高2.1cm、底径は8.0cmを測る。脚天井部形態はゆるやかな平坦面をもつ。脚部外面には成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。胴部は脚接合部から直線的に伸び、内底面には指頭圧痕がみられる。内外面とも工具ナデが主体である。

177は甕の脚部から胴下部である。脚部は直線的に開き、端部は丸みを帯びるが歪む。脚部径9.3cm、脚部高2.9cm、底径7.0cmを測る。脚天井部形態は歪みが大きく、中央部分がくぼむ。胴部は膨らみをもちらながら立ち上がる。外面調整はハケ調整後ナデ調整、内面調整はナデ調整である。

178は甕もしくは壺の胴部を転用した円盤土製品である。径6.0cm～6.2cmの略円形を呈する。端部は打ち欠かれ、その後研磨した痕跡がみられる。外面には直径2～3mmの打ち欠きによる列点文がみられる。

179は舟形軽石加工品である。軽石を平面形梢円に加工し、内面を抉り凹ませている。長さ



第66図 SB18出土遺物

10.2cm、幅5.1cm、厚さ4.6cmを測る。

#### 【SB18】(第62・66図、図版10-2)

SB18は、大半が調査区外に出ており、全体の法量、形状ともに不明であるが、直角に近い堅穴のコーナーが検出されているため方形プランとみられる。検出面からの堅穴深さは約5cmを測る。

#### 〈SB18出土遺物〉

180は甕の口縁部である。頸部で強く屈曲する形態で、内面には強い稜線がみられる。口唇部はM字状である。内面調整はハケ調整、外面はナデ調整である。

#### 【SB19】(第67図)

SB19は、一部の検出であり、法量や平面形状も不明である。検出面からの堅穴深さは約10cmを測る。出土遺物は無い。

#### 【SB20】(第67図)

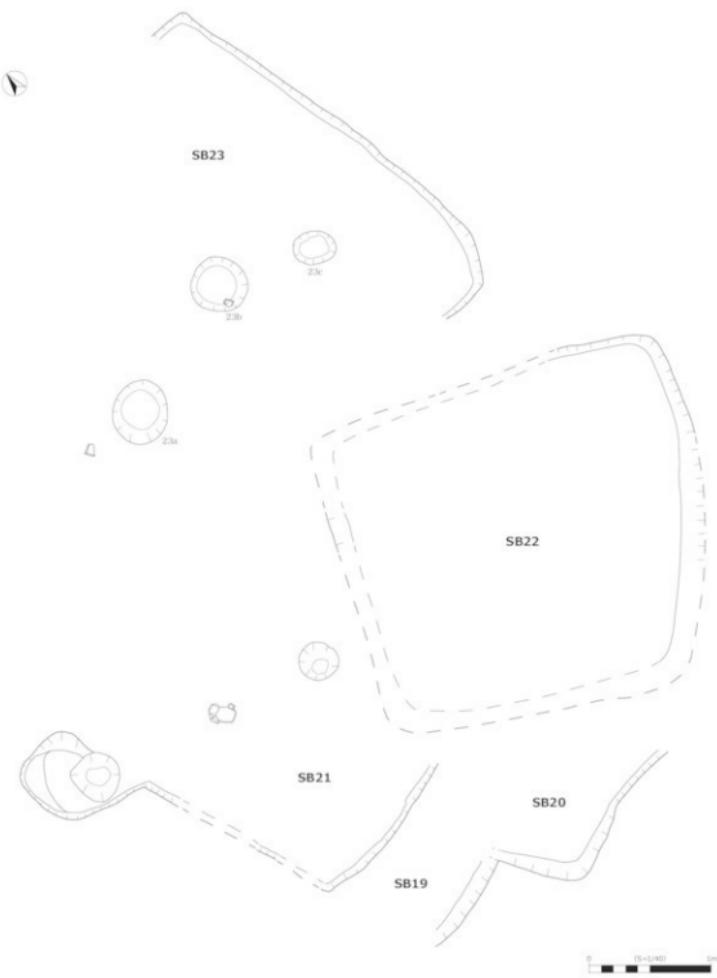
SB20は、一部の検出であり、法量は不明である。直角に近いコーナーが検出されており、方形プランの可能性がある。検出面からの堅穴深さは約20cmを測る。SB20～22については出土遺物総点数1,425点を数える。

#### 【SB21】(第67・68図)

SB21は、一部の検出であり、法量は不明であるが、直角に近いコーナーが検出されており、方形プランを呈すると考えられる。また、堅穴一辺に幅80cm、長さ60cmの舌状の張り出し部分が検出されている。検出面からの堅穴深さは約10cmを測る。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット1基、張り出し部分に土坑1基が検出された。ピットは、長軸32cm、短軸32cmの円形であり、深さ34cmを測る。張り出し部分の土坑は、長短軸40cmを測り、略円形を呈する。深さ20cmを測り、断面形状はすり鉢状を呈する。

#### 〈SB21出土遺物〉



第67図 SB19・20・21・22・23平面図



第68図 SB21出土遺物

出土遺物総点数は799点である。

181は壺の口縁部である。直線的に開く形態で、口唇部は二叉状になる。口径は復元径22.3cmを測る。口縁部内面は微小な突出部分をもつ。外面ともナデ調整がみられる。胎土には雲母が多く混入する。

182は壺の口縁部である。口縁部は大きく外反する形態を呈し、口唇部はわずかに垂下する。口唇部は丸みをおびる。外面調整はハケ調整後ナデ調整、内面調整はハケ調整である。

#### 【SB22】(第67・69図)

SB22は、堅穴の各辺が部分的に検出されているが、それから復元した形状は方形プランと考えられる。推定長軸3.0m、短軸3.2mの方形プランを呈すると推定される。検出面からの堅穴深さは約23cmを測る。付帯遺構は切り合いのため検出されていない。

##### 〈SB22出土遺物〉

183は甌の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の突帶が貼り付けられる。外面ともナデ調整がみられる。

184は高杯の脚部である。ハの字に開く脚部で、杯部との接合部分で欠損している。脚接合部は復元径2.8cmを測る。外面ともナデ調整がみられる。赤色塗彩はみられないが、全体的に橙色の発色である。

#### 【SB23】(第67図)

SB23は、堅穴一辺のみの検出であり、全体形は不明であるが、直角に近い角度で曲がる2コーナーが検出されているため、方形プランと考えられる。検出された一辺の長さは3.3mとなる。検出面からの堅穴深さは約13cmを測る。付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット3基が検出された。ピットは便宜上23aから23cとした。ピット23aは長軸56cm、短軸44cmの楕円形であり、深さ29cmを測る。ピット23bは長軸46cm、短軸44cmの略円形であり、深さ21cmを測る。ピット23cは長軸36cm、短軸26cmの楕円形であり、深さ13mを測る。ピット23aと23bは規模や深さが類似しているため、この2穴を柱穴とし、検出された一辺の対辺までの距離が柱穴から同距離と仮定すると、堅穴長軸は4mを越える可能性がある。



第69図 SB22出土遺物

#### 〈SB23出土遺物〉

出土遺物総点数は930点であったが、いずれも細片であった。

#### 【SB24】(第70図)

SB24・SB25・SB26は、調査区外に大半が出ており、全体形状は知ることができないが、いずれも方形プランと考えられる。

SB24は主軸を南北にとるとみられる。竪穴の推定長は3mである。検出面からの竪穴深さは約14cmを測る。付帯遺構として、床面に一辺約1mの土坑1基、柱穴の可能性があるピット2基が検出された。ピットは便宜上24aと24bとした。ピット24aは長軸18cm、短軸16cmの梢円形で、深さ8cmである。ピット24bは、直径36cmの略円形で、深さ68cmの二段掘りである。出土遺物は無い。

#### 【SB25】(第70・71図)

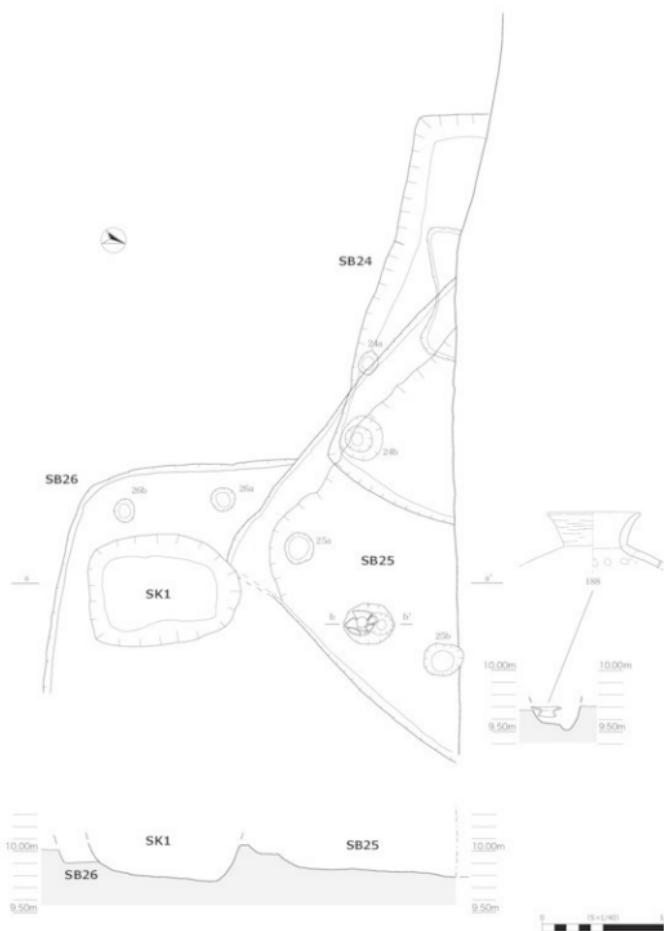
SB25は、主軸を南西・北東にとる方形プランと考えられる。検出した竪穴の最大辺は3m以上である。検出面からの竪穴深さは約9cmを測る。付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット2基、土坑1基が検出された。ピットは便宜上25aと25bとした。ピット25aは長軸26cm、短軸26cmの梢円形で、深さ15cmである。ピット25bは、長軸32cm、短軸24cmの梢円形で、深さ23cmである。土坑は長軸40cm、短軸32cmの梢円形を呈し、二段掘りとなる。埋土中から壺188が出土している。

#### 〈SB25出土遺物〉

出土遺物総点数は238点である。

185は甕の口縁部から胴部である。口縁部は内湾する形態で、口唇部はコの字状を呈する。口径27.8cmを測る。口縁部下には一条の貼付け突帯が見られ、接合しない。不接合部分を正面にするとき、左側がわずかに上方へのびる。突帯内には刻目が施され、この刻目の間隔は平均8.7cmを測る。突帯の原体は一部に木目が見られることから、木製工具であると考えられる。外面調整はナデ調整、外面は工具ナデ調整、ナデ調整である。

186は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、

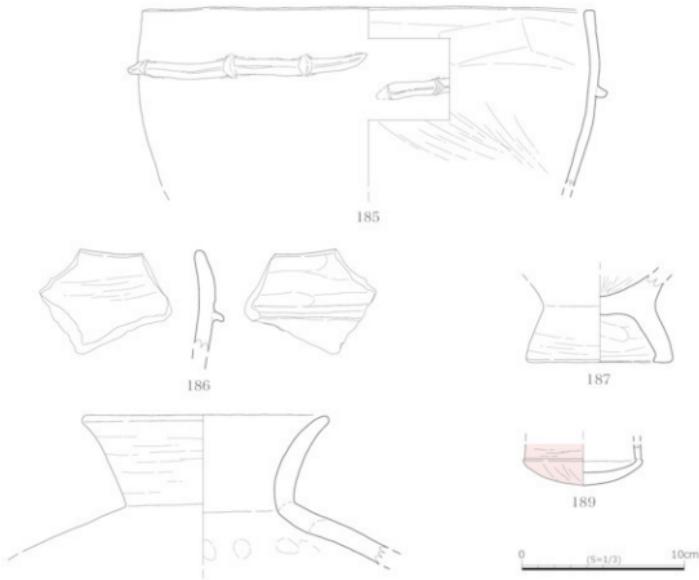


第70図 SB24・25・26 平面図・断面図

やや垂下する形態である。内外面ともナデ調整がみられる。

187は甕の脚部である。脚部はやや膨らみを持ちながら開き、端部は内面に突出部分をもつ。脚部径は復元径9.0cm、脚部高3.5cm、底径は6.9cmを測る。脚天井部形態は中央がわずかに突出する形態である。外面調整はナデ調整、内面調整は工具ナデ調整である。

188は壺の口縁部から肩部である。口縁部はゆるやかに外反する形態で、口唇部はコの字状を呈する。口径は復元径15.2cm、口縁部高5.5cmを測る。頸部は強く屈曲し、肩部にかけて膨らみをもつ。頸部径は10.4cmを測る。口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整である。頸部内面には



第71図 SB25出土遺物

成形時の指頭圧痕が残る。

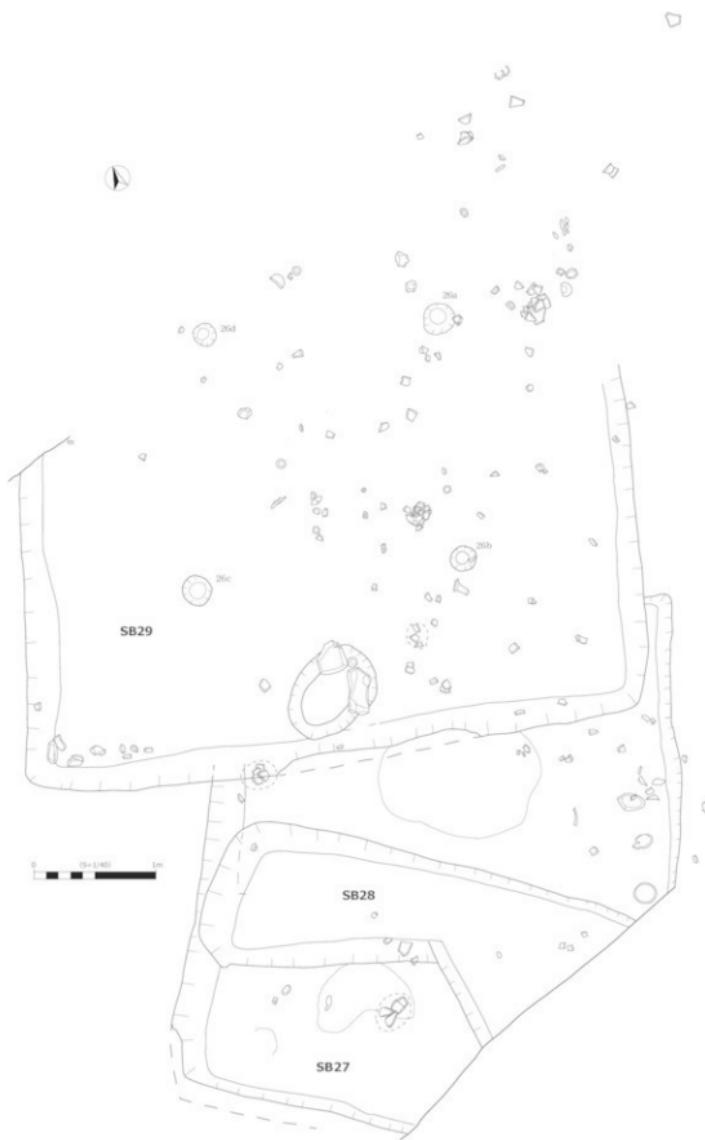
189は壇の底部から胴部である。底部は平底を呈する。胴部は強く屈曲し、外面に段を有する。胴部最大径は復元径7.3cmを測る。胴部から肩部は直線的に立ち上がる。外面は赤色塗彩がみられる。

#### 【SB26】(第70図)

SB26は、主軸を南北にとる方形プランのコーナーのみの検出である。検出された竪穴は一辺1.6m程度であり、全体の法量は不明である。検出面からの竪穴深さは約12cmを測る。付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット2基が検出された。ピットは便宜上26aと26bとした。ピット26aは直径19cmの円形で、深さ28cmである。ピット26bは、長軸18cm、短軸18cmの楕円形で、深さ30cmである。出土遺物は無い。

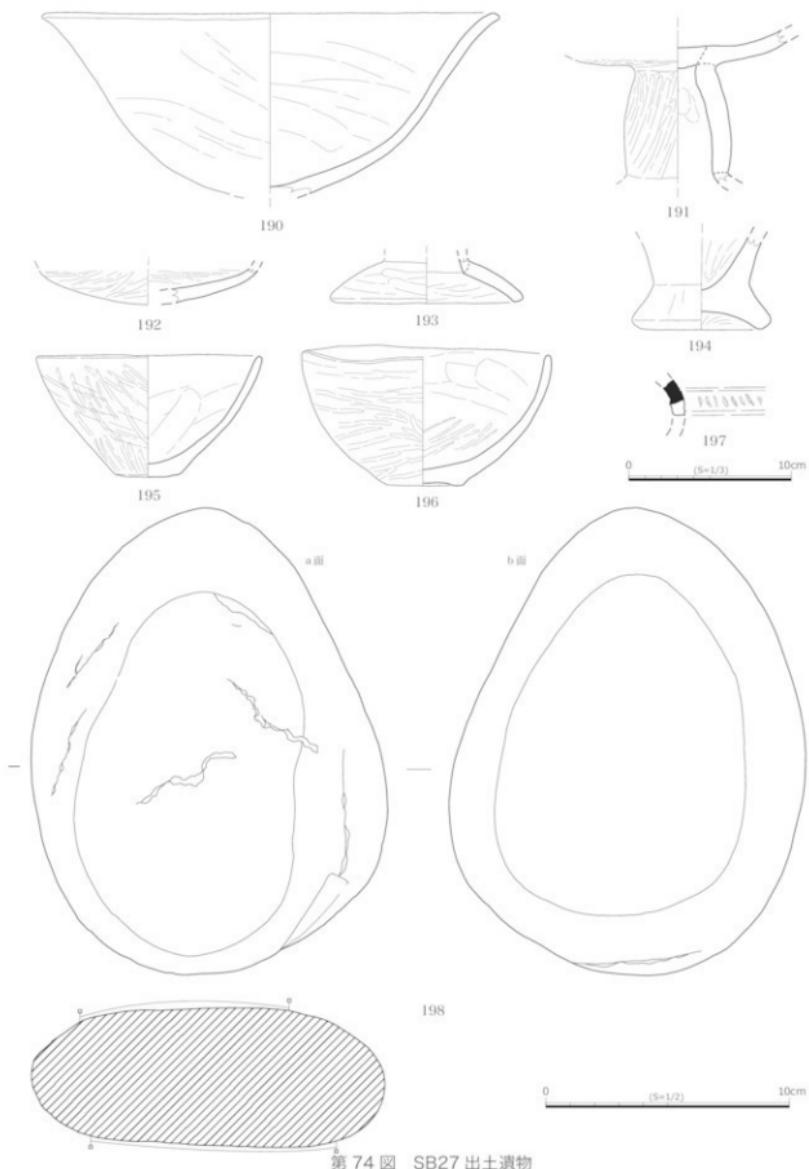
#### 【SB27】(第72~74図)

SB27は、主軸を北東-南西にとり、長軸推定4m、短軸3.8mの方形プランを呈する。検出面からの竪穴深さは約15cmを測る。付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット1基、カーポ



第72図 SB27・28・29 平面図

### 第73図 SB27・28・29 遺物出土状況



第74図 SB27出土遺物

ンが広がる範囲2基が検出された。ピット27 aは長軸18cm、短軸16cmの円形を呈し、深さ7cmである。カーボンが広がる範囲は北側のものが長軸1.3m、短軸0.8mを測る梢円形を呈する。南側のものは、幅0.8m程度の不整形を呈する。

#### 〈SB27出土遺物〉

出土遺物総点数は752点である。

190は高杯の杯部である。胴部は丸みをおび、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部はコの字を呈する。口径は復元径28.1cm、杯部高は推定高11.1cmである。内外面ともナデ調整である。

191は高杯の脚部である。脚部はエンタシス状を呈し、下部は大きく開く形態であると考えられる。脚接合部径は5.0cm、筒部径6.8cm、筒部高6.8cmを測る。杯部は大きく開く形態で、杯部と脚部との接合は粘土塊を充填して接合している。外面調整は縦方向のミガキ調整で、内面はナデ調整である。

192は高杯の杯部である。椀状の形態を呈する。内外面ともミガキ調整である。

193は高杯の脚部である。やや膨らみながらのびる形態で、口唇部はコの字状を呈する。脚部径は11.8cmを測る。筒部は直線的にのびる。内外面ともナデ調整である。

194は甌の脚部である。短くのびる脚部形態で、口唇部はコの字状である。脚部径は復元径8.5cm、脚部高2.8cm、底径は復元径5.9cmを測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状を呈する。胴部は直線的にのびる。内外面ともナデ調整である。

195は鉢である。平底でボウル状の形態を呈する。胴部から口縁部にかけてやや膨らみをもちらながら立ち上がり、口唇部は丸い。口径は復元径13.9cm、器高7.5cm、底径4.0cmを測る。外面調整は縦方向のミガキ調整後ナデ調整、内面調整はナデ調整である。

196は鉢である。底部はやや上げ底上で、ボウル状を呈する。胴部から口縁部にかけて丸みをおび、口唇部は丸く、口縁部はゆがむ。口径15.3cm、器高8.0～8.5cm、底径4.7cmを測る。外面調整は胴下部は横方向のミガキ調整、口縁部はヨコナデ調整である。

197は須恵器甌の胴部片である。胴部には櫛状施文具による刻みが施されている。

198は厚さ約7.5cmの扁平な梢円碟を用い、a・b両面の平坦面を使用している。平坦面は他の面と比べ滑らかであり、全体的に摩減している。敲打今は特に認められない。

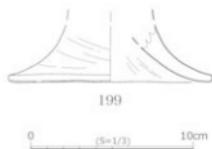
#### 【SB28】(第72・73・75図)

SB28は、不整形を呈する土坑状の遺構である。SB27の床面のカーボン集中部を一部切って掘削されたものとみられる。形状からは住居の可能性は低いと考えられる。

#### 〈SB28出土遺物〉

出土遺物総点数は368点である。

199は高杯の脚部で、ハの字に開く形態を呈する。脚部径は復元径12.5cmを測り、脚端部は面をもつ。内外面ともナデ調整である。



第75図 SB28出土遺物

## 【SB29】(第 72・73・76・77 図)

SB29 は、主軸を北東—南西にとり、一辺 5.1 m の方形プランを呈する。検出面からの豊穴深さは最大で約 48cm を測る。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるビット 4 基、土坑 1 基が検出された。ビットは便宜上 29 a から 29 d とした。ビット 29 a は長軸 28cm、短軸 26cm の略円形であり、深さ 57cm である。ビット 29 b は直径 20cm の略円形であり、深さ 48cm である。ビット 29 c は長軸 26cm、短軸 24cm の略円形であり、深さ 48cm である。ビット 29 d は直径 20cm の略円形であり、深さ 49cm である。土坑は南辺の豊穴下端中央にあり、長軸 82cm、短軸 58cm の楕円形を呈し、深さ 20cm 程度である。主柱穴 4 基で上部構造を支える構造となる。上端と下端の形状は同様である。土坑の中心軸は豊穴の中心軸とはずれている。上端には礫が 2 点出土している。

## 〈SB29 出土遺物〉

出土遺物総点数は 2,267 点である。

200 は甕の口縁部である。頸部は屈曲し、内面は強い稜線をもつ。口縁部は直線的にのび、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。口縁部は内外面ともヨコナデ調整、頸部内面はナデ調整である。

201 は甕の口縁部である。口縁部は直口し、端部は内湾気味である。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯はゆがむ。内面はミガキ調整、外面はナデ調整である。

202 は甕の口縁部片である。口唇部形態は欠損のため不明だが、口縁部下には一条の絡繩突帯をもつ。内外面ともナデ調整である。

203 は甕の脚部から胴下部である。脚部径 6.6cm、脚部高 2.0cm、底部径 5.4cm を測る。脚接合部には接合時の指頭圧痕が明晰に残る。脚端部は内面に突出する部分がみられる。脚天井部は小さな平坦面をもつ。内外面ともナデ調整である。

204 は鉢の底部である。平底の底部で、底径は復元径 4.6cm を測る。底部から胴部にかけては丸みをもって立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

205 は壺の胴部である。胴部には幅 2.4cm のやや幅の狭い突帯をもつ。突帯内は鋸歯状の刻目が施される。刻目の原体は木製工具であると考えられる。外面はナデ調整で、内面は摩滅のため調整不明である。

206 は壺の底部から頸部である。胴部は球胴状で、底部はまるみをもった平底である。胴部最大径 10.8cm、底径 3.5cm、器部高 8.1cm を測る。内底面には粘土を付加した痕跡がみられ、指頭圧痕が残る。胴部内面の屈曲部分は接合線が残り、指頭圧痕がみられる。頸部内面は成形時のシボリ痕跡が残る。外面調整はミガキ調整で、外面全体に赤色塗彩がみられる。

207 は壺の底部から頸部である。底部は座りの悪い平底で、底径は 3.2cm を測る。胴部下部が算盤玉状に膨らむ形態で、胴部最大径は 11.6cm を測る。胴部最大径部内面には接合痕跡がみられる。口縁部形態は欠損のため不明だが、受け口状になるものと考えられる。

208 は高杯の脚部である。スカート状に開く脚部形態で、口唇部は丸みをもつ。脚部径は復元径 10.7cm、脚部高 7.8cm を測る。脚接合部で欠損しており、粘土塊を充填する形で接合される。脚天井部は接合時の指頭圧痕がみられる。赤色塗彩はみられないが、外面は橙色の発色である。内外

面ともナデ調整である。

209は高杯の脚部である。ハの字に開く形態で、口唇部はコの字状である。脚部径は復元径14.8cmを測る。外面調整はミガキ調整で、外面には赤色顔料の塗彩がみられる。

210は須恵器二重口縁壺の口縁部である。第一口縁部は端部に面をもち、第二口縁部はくの字に強く屈曲する形態を呈する。

211は須恵器杯蓋である。口径は復元径11.8cm、口縁部高3.0cmを測る。口唇部は丸みをおびる。内外面とも回転ナデ調整で、硬質な焼成である。

212は鉄製鉈である。ほぼ全形が残存している。断面形はいずれも刃部が薄いU字状を呈し、基部は方形断面を呈する。長さ13.7cm、刃部の最大幅1.9cmを測る。

213は安山岩の楕円礫を用い、a面下端部左側面とb面中央部に敲打痕が認められる。法量的に手のひらに取まるもので、手の指先からわずかに使用面の顔が出来るぐらいである。

214は平坦面を三面有する安山岩の不整形な礫を用いた凹石である。a面中央部に凹面が認められるが平坦面のごく限られた範囲である。またa面左側面と右側面(d面)に敲打痕が認められる。上部はa面中央部からの加撃により欠損している。

215は断面形状が隅丸三角形を呈する楕円礫を用いた凹石である。三面中央部それぞれに凹面が認められる。またa面上下両端と左側面(d面)に敲打痕が認められる。

### 【SB30】(第78・79図)

SB30は、主軸を南北にとり、長軸2.2m以上、短軸2.1m程度の方形プランを呈する。

検出面からの豎穴深さは約22cmを測る。

付帯遺構は検出されていない。豎穴住居にしては法量が小さいと考えられるが、方形+方形の豎穴住居の場合であれば、2段目の豎穴の法量程度となる。29号住居の豎穴との切り合いが不明瞭であるため断言できないが、29号住居床面レベルと30号の床面レベルが15cm程度の差しかないことから、あるいは1段目の豎穴が掘削により失われ、検出されていない可能性も考えておく必要がある。

#### 〈SB30出土遺物〉

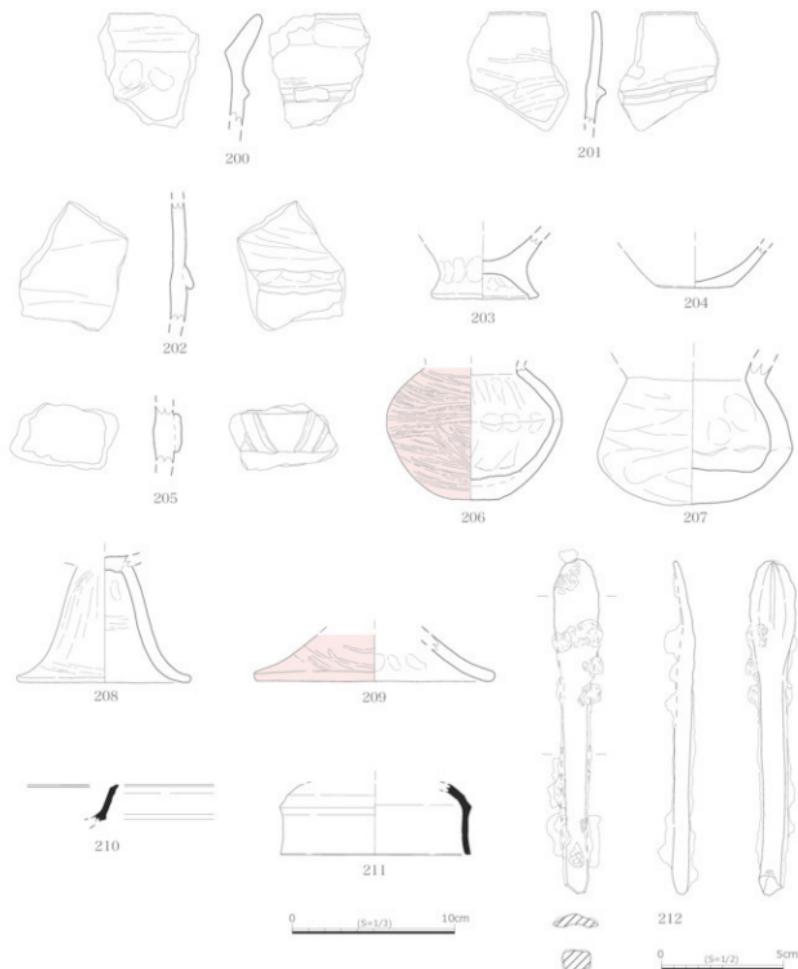
出土遺物総点数は143点である。

216は甌の口縁部である。やや内湾気味の口縁部で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。外面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、脣部は縦方向のミガキ調整である。内面調整は工具ナデ調整で、口唇部には成形時の指頭圧痕がみえる。

217は甌の脚部で、短く踏ん張る形態を呈する。接地部には平坦面をもち、口唇部はややゆがむ。脚部径8.7cm、脚部高3.4cm、底径7.0cmを測る。脚天井部形態はドーム状で、指頭圧痕がみられる。内底面はナデ調整、外面は全体的に摩減しているため調整不明である。

218は甌の脚部で、ハの字状に開く形態である。接地部には平坦面をもつ。脚部径は復元径10.7cm、脚部高4.0cm、底径は復元径6.6cmを測る。脚天井部形態は粘土の付加やユビオサエによってゆがみが大きく、不整形である。内外面ともナデ調整である。内底面にはコゲの付着がみられる。

219はやや踏ん張る形の脚部で、接地部には面をもつ。脚部径7.2cm、脚部高2.0cm、底径は

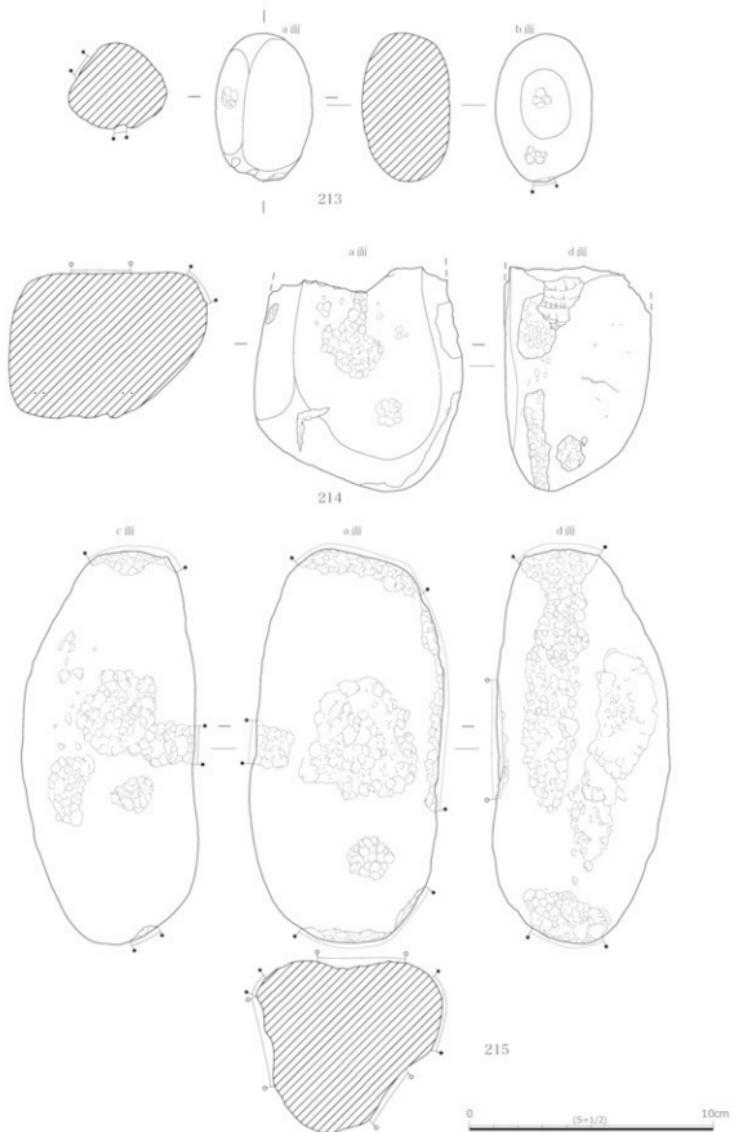


第76図 SB29出土遺物1

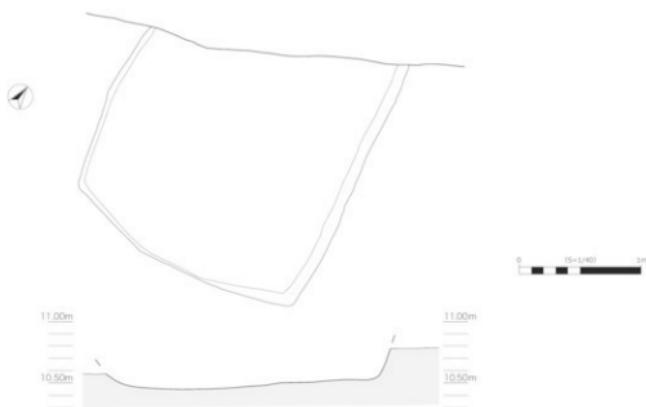
復元径 5.4cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内画面ともナデ調整がみられる。

220 は平底の鉢である。ボウル状の形態を呈し、口唇部は丸い。口径は復元径 11.8cm、底径 5.4cm、器高 6.1cm を測る。口縁部内面には成形時の指頭圧痕がみられ、外面は工具ナデ調整である。胴下部から底部外面にかけて黒斑がみられる。

221 は高杯の脚部である。大きくハの字に開く形態で、脚内部に接地面をもつ。口唇部はコの字



第77図 SB29 出土遺物 2



第78図 SB30平面図・断面図

状である。脚部径は復元径 17.5cm、脚部高 6.7cm、脚接合部径 5.0cm を測る。杯部は水平に開く形態である。外面調整は細かいミガキ調整、内面調整はナデ調整である。外面全体と杯部内面、脚部内面の一部に赤色顔料の塗彩がみられる。

222 は須恵器甌の口縁部である。二重口縁をもち、第一口縁端部は平坦面がみられる。口径は復元径 10.2cm を測り、外面には櫛描き波状文が施されている。

### 【SB31】

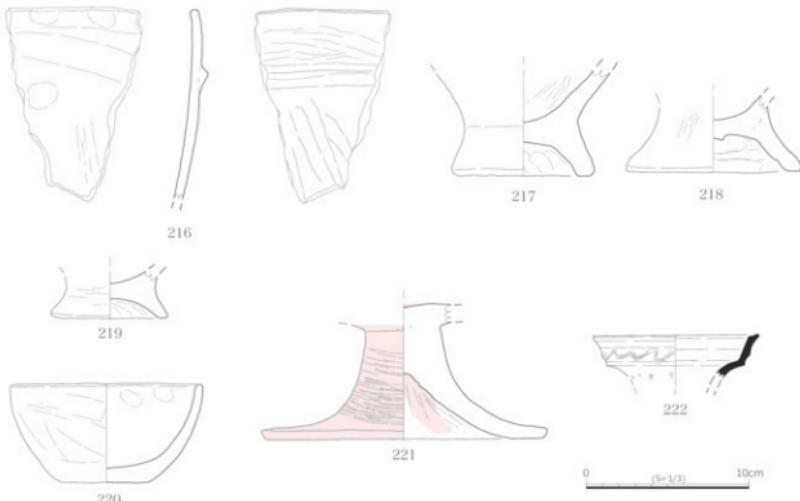
SB31 は、平面形状の検出記録がなく、プランや規模は不明であるが、北壁層位断面で断面のみ確認された住居跡である。第6層から第7層青コラ火山灰層を掘り抜いて造営されている。掘り込み深さは 30cm 程度とみられる。出土遺物等は不明である。

### 【SK1】(第 70 図)

SB25 を切って掘削された土坑が 1 基検出された。長軸 124cm、短軸 88cm の不整形であり、北面には辺を作り出し、南面は丸く取まる形状を呈する。下端形状は隅丸方形を呈する。位置関係から、26 号住居の床面土坑を疑ったが、26 号住居を切った 25 号を切っていることからその可能性はない。遺物は出土していない。

### 【溝状遺構 1】(第 80・81 図)

溝状遺構 1 は、18 号住居に一部重なった位置で検出され、18 号住居に切られている。長さ 3.2 m、



第79図 SB30出土遺物

幅は最大 50cm、深さ 20cm 前後を測り、両端が閉じている。用途は不明である。

溝状遺構 2 は、調査区東端の SB 9 に接して検出され、SB29 と接続するような状態で検出した。途中で方向を変えており、「く」の字状を呈する。検出全長 8 m であり、溝幅は 64cm ~ 70cm を測り、深さは 20cm ~ 34cm を測る。断面は U 字形を呈する。SB 9 との切り合い関係は不明瞭であり、接続部分の反対側には連続する溝の検出はない。このため、集落内の排水用として設置された溝ではなく、SB 9 と一緒に遺構、土地を区画する目的の溝、あるいは、何らかの構造物を囲む目的で設置した等の可能性が考えられる。構造物を囲む目的である場合は、位置関係から SB30 の可能性も棄却できない。ただ、SB 9 については、竪穴住居の項でも記載したように、平面形状や深さ、柱穴の検出がなく、竪穴住居の可能性に疑問がある。このため、SB 9 と一緒に遺構と仮定した場合は、SB 9 が水溜め用の土坑であった可能性も出てくる。

遺物は 1 点出土している。223 は甕の脚部で、脚部径 8.8cm を測る。

#### 【溝状遺構 2】(第82図)

溝状遺構 2 は、調査区東端の SB 9 から、SB 7 に向い伸びている状態で検出された。途中で方向を変えており、「く」の字状を呈する。検出全長 8 m であり、溝幅は 64cm ~ 70cm を測り、深さは 20cm ~ 34cm を測る。断面は U 字形を呈する。

SB 9 との新旧関係については、溝状遺構 2 は北側層位断面において 8a 層中位からの掘り込みであることが判明している。一方、SB 9 は南側層位断面において第 8a 層下位からの掘り込みで

あることが確認できることから溝状遺構2がSB9よりも新しいと判断できる。

## (2) 第9層出土遺物 (第83～103図)

第9層は古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田カルデラ降下軽石を若干含む。やや粘質であり、厚さは50cm～1m程度である。第9層中から遺構が掘りこまれた場合は土色などからの判別が困難であり、下位層の第10層に達している場合は、第10層上面で検出できる。第9層の形成は、出土須恵器から5世紀から6世紀代の集落形成による地層の搅乱と、複数回にわたる河川の氾濫などによる堆積などの要因が複合しているとみなされる。

224から316は甕である。224は甕の口縁部から胴部で、屈曲する頸部をもつ。内面にはやや強い稜線が入る。口径は復元径26.0cm、頸部径は復元径23.3cm、口縁部長2.6cmを測る。口唇部はM字にくぼむ形態である。頸部から胴部にかけては膨らみを持たない寸胴状の形態である。外面調整は工具ナデ調整、内面はナデ調整で、胴部には指頭圧痕がみられる。

225は甕の口縁部である。頸部で逆し字に屈曲する形態で、内面には小さな突出部をもつ。口唇部は内面にわずかに突出し、外面はM字にくぼむ形態である。口径は復元径35.0cm、頸部径は復元径30.4cm、口縁部長2.8cmを測る。内外面ともナデ調整が主体である。

226は甕の口縁部から胴部である。内湾する形態を呈し、口唇部はコの字状である。口径は復元径30.8cmを測る。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、この突帯内部にはやや間隔の広い刻目が施される。刻目の間隔は平均2.5cmである。内外面ともナデ調整で仕上げられ、外面にはスリップ状の付着物がみられる。

227は甕の口縁部から胴部である。バケツ状に大きく開く形態を呈し、口唇部は上方に面をもつ。口径は復元径32.8cmを測る。口縁部下には一条の絡繩突帯が貼り付けられ、突帯下方にはユビオサエが明瞭に残る。外面は工具ナデ調整、内面はナデ調整である。突帯貼り付け部分の内面には指頭圧痕が列状にみられることから、突帯貼付け時の成形痕跡であると考えられる。

228は甕の口縁部から胴部である。口縁部は大きく内湾する形態で、口唇部は丸く内面には稜をもつ。口径は復元径32.0cmを測る。口縁部下や低い位置に一条の貼付け突帯が巡る。突帯内には刻目が施され、刻目の原体は木製工具であると考えられる。内外面ともナデ調整で仕上げられる。

229は甕の口縁部から胴部で、胴部から口縁部にかけて直線的に広がる形態を呈する。口径は24.2cmを測る。口唇部は丸みをもち、口縁部下には断面台形の貼付け突帯を一条もつ。この突帯は接合せず、不接合部分を正面にした場合、右側が下方へのびる形態である。外面調整は胴下部が縱方向のミガキ調整、口縁部はナデ調整である。内面調整は工具ナデ調整の痕跡がみられる。

230は甕の口縁部から胴部である。内湾する形態で、口唇部はコの字を呈し、内面に稜線をもつ。口径は復元径26.0cmを測る。口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。内外面ともナデ調整がみられる。

231は甕の口縁部である。内湾する形態を呈し、口縁部下には一条の絡繩突帯をもつ。口径は復元径35.0cmを測る。突帯内部には間隔の広い刻目が施される。刻目の間隔は平均4.0cmを測る。刻目原体は布目が確認できることから、木製工具に布を巻き付けたものであると考えられる。

232は甕の口縁部から胴部である。頸部でゆるやかに屈曲する形態で、口唇部はコの字である。胴部は膨らみをもち、内面には成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。内外面とも工具ナデ調整が主体で、

一部内面にハケ調整がみられる。

233は甌の口縁部である。短く屈曲する頭部をもち、内面には丸みをおびた突出部がある。口縁部は受け口状を呈し、口唇部はM字状にくぼむ。頭部内面には接合痕がみえる。表面は褐色系の発色で、胎土には雲母を多く含んでいる。

234は甌の口縁部である。頭部でゆるやかに屈曲する形態で、口唇部は丸い。内外面ともヨコナデ調整である。

235は甌の口縁部である。ゆるやかに内湾する形態で、口唇部はコの字状である。口径は復元径 27.6cm を測る。口縁部下には一条の絡繩突帯が貼り付けられる。内外面ともナデ調整である。

236は甌の口縁部である。直口する形態で、口唇部は丸みをおびる。口縁部下には一条の貼付け突帯がめぐり、やや垂下気味である。内外面ともナデ調整がみられる。

237は甌の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯がみられる。内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整で仕上げられる。

238は甌の口縁部である。ゆるやかに外反する口縁部をもち、口唇部はコの字状になる。内外面ともナデ調整である。

239は甌の口縁部である。内湾する形態で、口唇部はコの字状である。器壁は成形時のユビオサエによりゆがんでいる。内外面ともナデ調整である。

240は甌の口縁部である。直口する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯を持ち、突帯下方には貼り付け時の指頭圧痕がみられる。内外面ともナデ調整である。

241は甌の口縁部から胴部である。頭部から口縁部にかけてゆるやかに外反する形態で、口唇部は先細りとなる。口径は復元径 22.2cm を測る。頭部下には一条の絡繩突帯をもち、欠損のため詳細は不明だが接合しない突帯である。突帯の不接合部分を正面にした場合、右側が下方へのびる形態を呈する。突帯内には間隔の広い刻目をもち、刻目の間隔は平均 3.2cm である。刻目原体は木製工具であると考えられる。内外面ともナデ調整である。

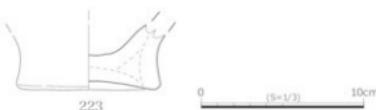
242は甌の口縁部から胴部である。頭部でくの字に屈曲する形態を呈し、口縁部は直線的に開く。口唇部は丸みをおび、口径は復元径 21.4cm を測る。頭部内面は強く突出し、稜線がみられる。内外面ともナデ調整で仕上げられる。

243は甌の口縁部である。内湾する形態で、口唇部はコの字状である。口縁部下には一条の貼付け突帯を持ち、突帯内には刻目が施される。刻目原体は指頭によるものである。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。

244は甌の口縁部から胴部である。頭部で屈曲する形態で、口唇部はコの字状である。胴部は球胴状に膨らむ形態であると考えられる。内面はナデ調整、外面は頭部から口縁部にかけて縱方向の



第80図 溝状遺構1平面図



第 81 図 溝状遺構 1 出土遺物

工具ナデのちヨコナデがみられる。

245 は甕の口縁部である。頸部でゆるやかに屈曲し、直線的に開く形態である。口唇部は丸みをおびる。頸部下には一条の貼付け突帯をもち、間隔の広い刻目が施される。刻目の間隔は平均 2.8cm で、原体は木製工具である。内面は工具によるナデ調整、外面はナデ調整である。口唇部には黒斑の付着がみられる。

246 は直口する甕の口縁部である。口唇部は丸みをおびる。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯下方にはユビオサエの痕跡がわずかに残る。内外面ともナデ調整である。

247 は甕の口縁部である。内湾する形態で口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯内部には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は 3.3cm +  $\alpha$  である。刻目原体は指頭によるものである。外面調整は突帯上部が横方向のミガキ調整、胴部は縦方向のミガキ調整である。内面はナデ調整である。

248 は甕の頸部から胴部片である。頸部下に多条突帯をもつタイプで、一段目の突帯上部には焼成後穿孔がみられる。この穿孔径は 5mm で、補修孔であると考えられる。内面はハケ調整、外面はヨコナデ調整である。土器胎土には雲母が多く含まれる。

249 は甕の口縁部である。口唇部は丸く、口縁部下には一条の貼付け突帯をもつ。この突帯は一部欠損しているが、突帯の痕跡から接合しない突帯と判断できる。不接合部を正面にした場合、右側が下方へのびるタイプである。突帯内には間隔の広い刻目が施され、刻目の間隔は 4.4cm +  $\alpha$  である。刻目原体は木製工具によるものである。内外面ともナデ調整である。

250 は甕の口縁部である。頸部で屈曲し、短くのびる形態である。口唇部はコの字になる。外面調整はナデ調整、内面調整は工具ナデ調整である。

251 は大型甕の口縁部である。頸部で強く屈曲する形態で、頸部で逆 L 字に屈曲し、受け口状になる。頸部下には一条の貼付け突帯があげられ、強いヨコナデが見られる。頸部と突帯の間には径 7mm の穿孔がみられる。内面はハケ調整、外面はナデ調整である。

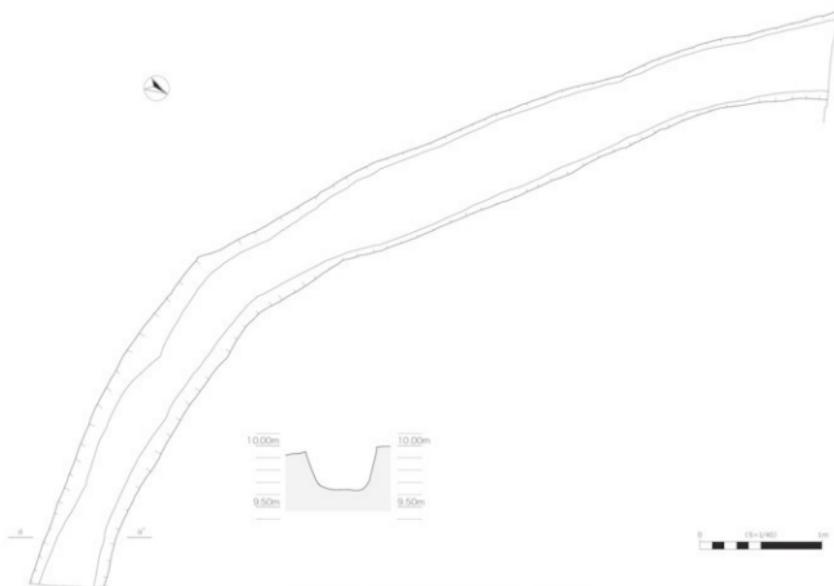
252 は甕の口縁部から胴部である。直口する口縁部をもち、口唇部はコの字になる。外面胴下部にミガキ調整がわずかにみられるが、全体的にナデ調整が主体である。

253 は甕の口縁部である。内湾する形態で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯内には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は 3.4cm を測る。刻目原体は木製工具であると考えられる。内外面ともナデ調整である。

254 は甕の口縁部である。口縁部がゆるやかに内湾する形態で、口唇部はコの字状である。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち、突帯内部には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は 4.0cm +  $\alpha$  で、原体は木製工具によるものである。内外面とも工具ナデ調整である。

255 は甕の口縁部である。内湾する口縁部で、口唇部は丸い。口縁部下には一条の貼付け突帯をもち。突帯内部には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は 6.3cm +  $\alpha$  で、刻目原体は指頭によるものである。内外面ともナデ調整がみられる。

256 は甕の口縁部である。直口する口縁部で、口唇部はコの字状を呈する。口縁部下には一条の貼付け突帯を持ち、突帯内部には間隔の広い刻目が施される。この刻目の間隔は 4.7cm を測り、原体は木製工具である。内外面とも工具ナデ調整がみられる。



第82図 溝状遺構2平面図・断面図

257は大型甕の突帯部である。突帯は断面台形状で、突帯上方は平坦面をつくる。外面調整はナデ調整、内面調整は剥落のため不明である。

258は甕の口縁部である。直口する口縁部形態で、口唇部は丸く、ゆがんでいる。口縁下部には一条の貼付け突帯がめぐり、突帯内部には刻目が施される。この刻目の間隔は2.6cmを測り、原体は指頭によるものである。内外面ともナデ調整がみられる。

259は甕の胴下部である。底部付近から直線的に開く形態を呈する。内外面ともナデ調整がみられ、内底面付近は工具ナデ調整による工具痕跡がみられる。外面にはススが付着する。

260は甕の脚部から胴下部である。脚部は短くハの字に開く形態を呈し、口唇部はコの字状になる。脚部径9.3cm、脚部高3.0cm、底径7.5cmを測る。脚天井部形態は中心部が下方に膨らむ形態である。胴部は脚接合部からやや膨らみを持ちながら立ち上がる。内外面ともナデ調整がみられる。

261から316は甕の脚部である。261はわずかに上げ底上になるが、充実した脚台で、端部はM字状にくぼむ。脚部径は復元径8.1cm、脚部高4.2cm、底径は復元径7.6cmを測る。外面は縦方向の丁寧なハケ調整、内面はナデ調整である。内底面にはコゲが付着する。

262はハの字に開く形態の脚部で、接地部には面をもつ。脚部径は復元径6.8cm、脚部高1.8cm、底径は復元径4.6cmを測る。脚天井部形態は平坦面をもつ。胴部は丸みをもちながら立ち上がり、脚接合部には指頭圧痕が列状にみられる。

263は短く直線的に開く脚部形態で、口唇部はコの字状である。器壁はややゆがみをもつ。脚部径7.4cm、脚部高2.2cm、底径5.6cmを測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状である。内外面ともナデ調整である。

264はくびれながらハの字に開く形態の脚部形態で、口唇部は丸い。鉢の可能性もある。脚部径5.8cm、脚部高2.0cm、底径4.2cmを測る。脚天井部形態は平坦である。胴部は膨らみを持ちながら立ち上がる。脚接合部はヨコナデ調整、内面はナデ調整である。

265は上げ底状の脚部形態を呈し、口唇部は丸い。脚部径は復元径9.1cm、脚部高2.7cm、底径は復元径7.1cmを測る。脚天井部形態はゆるやかなドーム状である。内外面ともナデ調整である。

266は短く開く形態の脚部で、接地部には面をもつ。脚部径は復元径8.1cm、脚部高2.3cm、底径は復元径6.6cmを測る。天井部形態は低いドーム状である。外面調整は胴下部に縦方向のミガキ調整がみられる。内面はナデ調整で、コゲが付着する。

267は短く開く脚部で、口唇部は丸みをおびる。脚部径9.9cm、脚部高2.6cm、底径8.7cmを測る。脚天井部形態は中心部分がわずかに膨らむ形態である。脚部は全体的に指頭圧痕が残り、ゆがみがんだ形態である。外面はナデ調整、内面は工具ナデ調整の痕跡がみられる。

268はハの字に開く脚部形態を呈し、口唇部はコの字状だが、内面にわずかに突出部をもつ。脚部径は復元径7.7cm、脚部高1.9cm、底径6.0cmを測る。脚天井部形態は平坦面をもつ。外面はナデ調整、脚内面は工具ナデ調整である。

269はハの字に開く脚部で、端部は丸みをもつ。脚部径10.8cm、脚部高2.9cm、底径8.6cmを測る。脚天井部形態は低いドーム状である。脚外面には接合時の指頭圧痕が明瞭に残り、ゆがみも大きい。内底面はミガキ調整、その他はナデ調整である。

270は断面三角形状に突出した脚部形態で、端部は先細りする。脚部径8.3cm、脚部高3.0cm、底径7.6cmを測る。脚天井部形態はドーム状を呈する。内外面ともナデ調整である。

271はハの字に開き、脚端部にかけて先細りする形態を呈する。脚部径は復元径7.7cm、脚部高2.5cm、底径は復元径6.5cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。胴部は直線的に開く形態で、内外面ともナデ調整で仕上げられる。

272は短く直線的に開く形態を呈し、端部は丸みをおびる。脚部径は復元径9.2cm、脚部高3.3cm、底径は復元径7.4cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

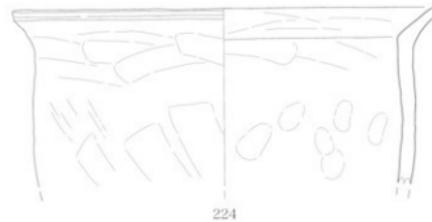
273は脚部が袋状となる形態を呈し、端部は丸い。脚部は内外面とも接合時の指頭圧痕が多く残り、ゆがみが大きい。脚部径は復元径7.1cm、脚部高2.4cm、底径は復元径5.7cmを測る。脚天井部形態は中心部が突出する形態である。

274は上げ底状になる底部である。底径は復元径8.3cmを測る。底端部は丸みをおびる形態で、胴下部にかけてゆるやかに膨らみをもつ。外面にはハケ調整の痕跡がみられる。

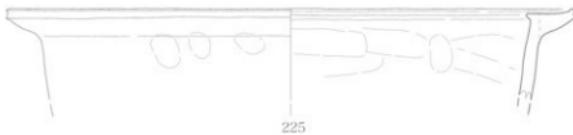
275は短く先細りしながらのびる形態の脚部で、端部は丸い。脚部径は復元径9.4cm、脚部高2.4cm、底径は復元径7.5cmを測る。内外面ともナデ調整が見られるが、脚接合部外面には接合線が明瞭に残る。

276は脚台状にくびれる底部をもつ甕である。脚部径は復元径9.2cm、脚部高1.8cm、底径は復元径6.6cmを測る。脚部には接合痕跡が残り、底部まで整形した後に、脚部を附加したことがわかる。胴部は球胴状に膨らむ形態を呈する。内外面とも工具ナデ調整である。脚端部には黒斑がみられる。

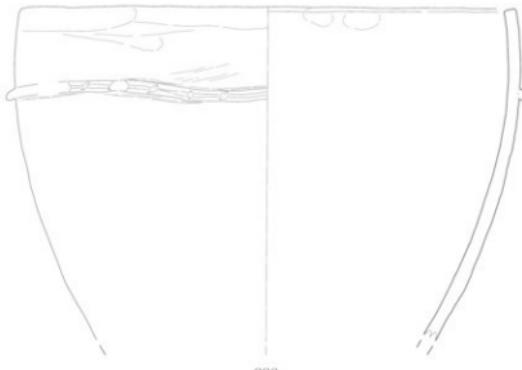
277は脚台状にくびれる底部をもつ甕である。脚部径10.2cm、脚部高2.0cm、底径9.4cmを測る。



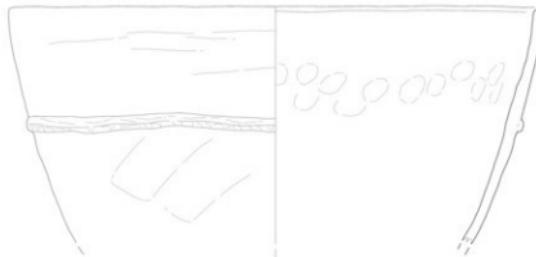
224



225



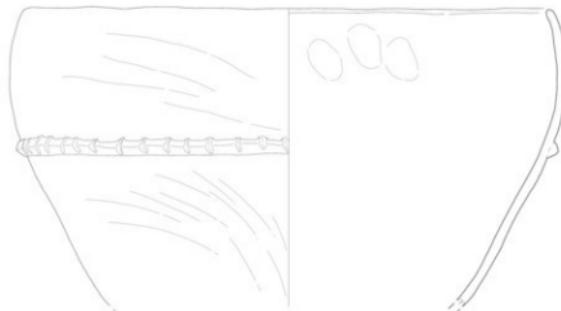
226



227

0 (3=1/3) 10cm

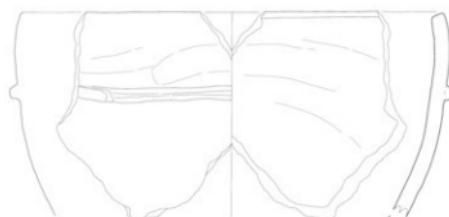
第83図 第9層出土遺物1



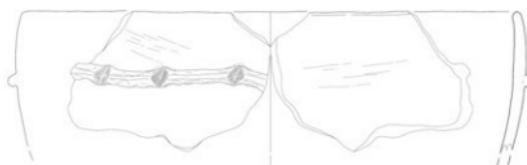
228



229



230



231

0 (S=1/3) 10cm

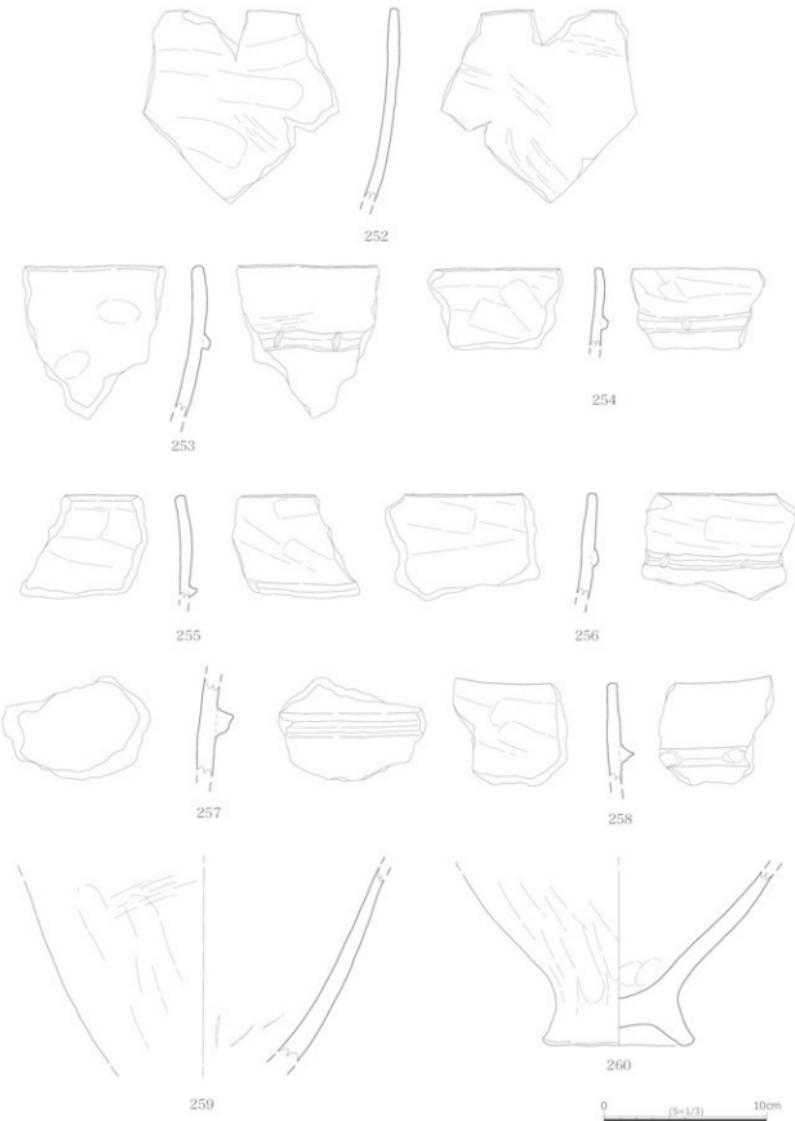
第 84 図 第 9 層出土遺物 2



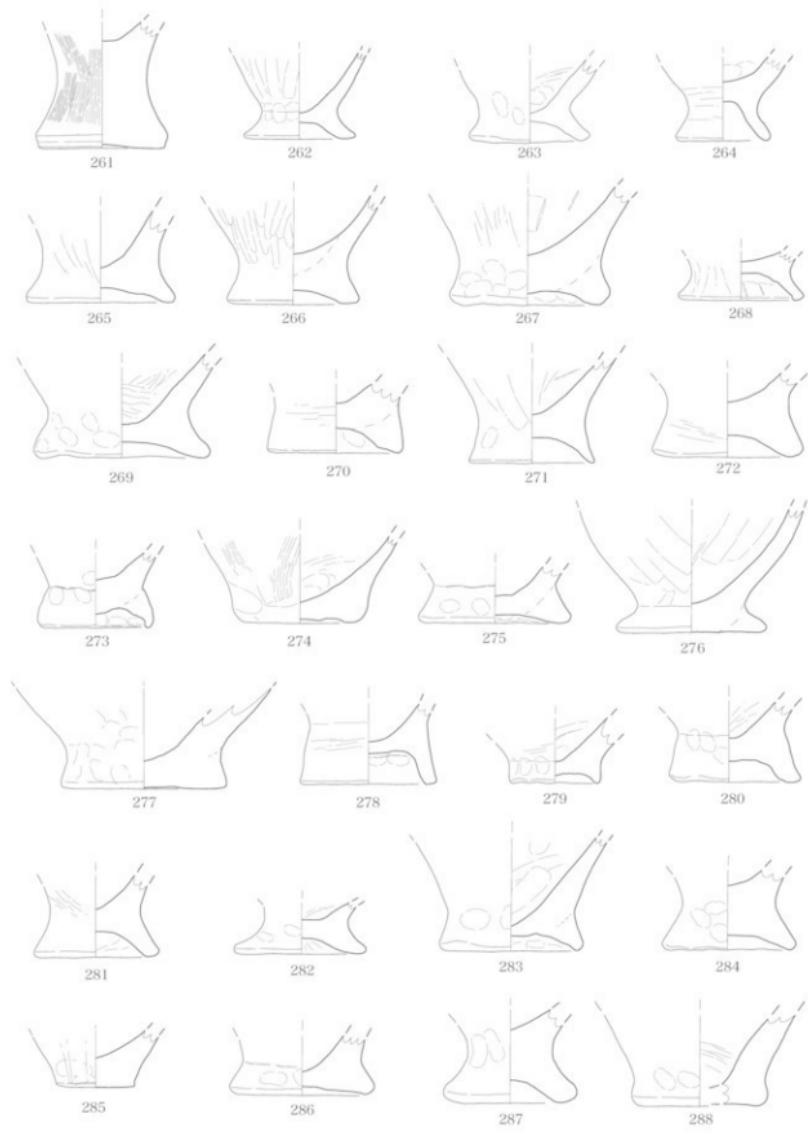
第85図 第9層出土遺物3



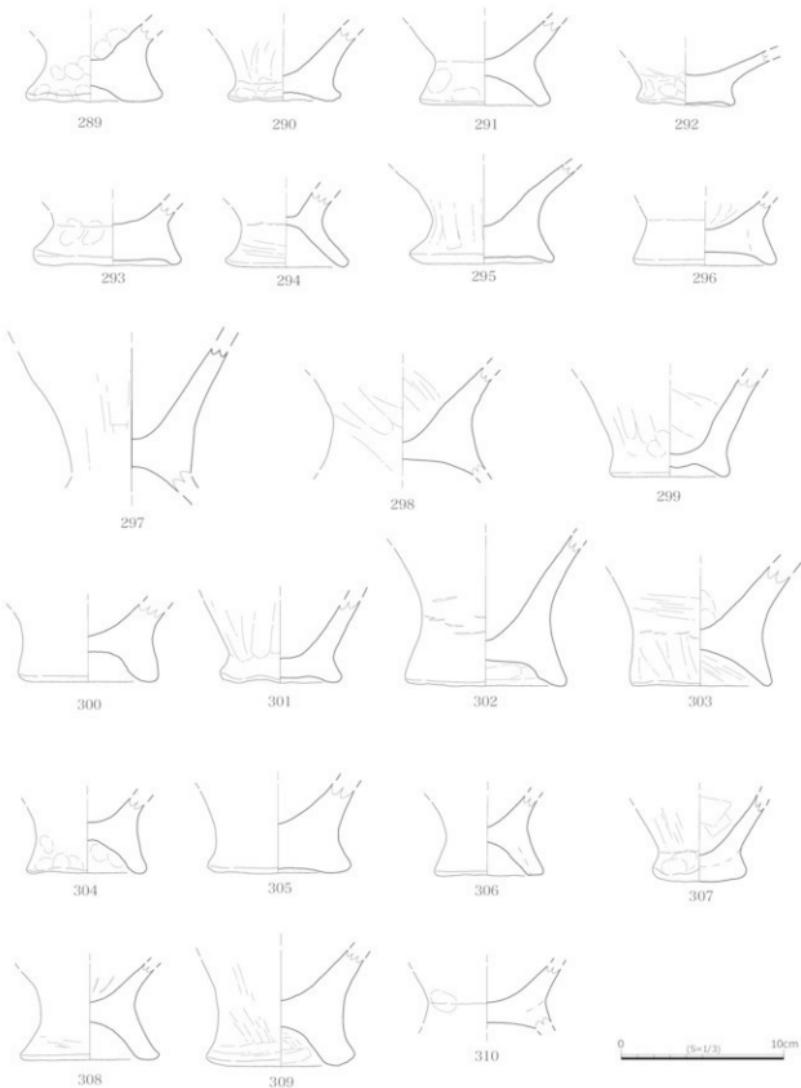
第86図 第9層出土遺物 4



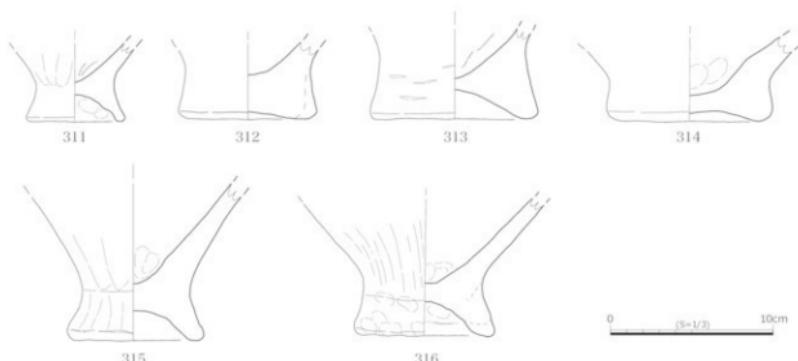
第87図 第9層出土遺物 5



第88図 第9層出土遺物 6



第89図 第9層出土遺物7



第90図 第9層出土遺物8

底端部は丸みをもつ。内外面ともナデ調整で、脚外面には成形時の指頭圧痕が残る。脚接合部には接合線がみられる。

278は箱形の脚部形態で、接合部には面をもつ。脚部径8.4cm、脚部高3.0cm、底径7.2cmを測る。脚天井部形態は平坦面をもつ形態である。内外面ともナデ調整がみられる。

279は短くのびる脚部形態で、端部は先細りになる。脚部形態は復元径5.6cm、脚部高1.4cm、底径は復元径5.7cmを測る。脚天井部形態は中心部がわずかに膨らむ。脚接合部には指頭圧痕が明瞭に残り、ゆがみがみられる。内外面ともナデ調整である。

280はハの字に開く脚部形態で、端部は丸みをもつ。脚部径8.0cm、脚部高3.0cm、底径6.6cmを測る。脚天井部形態は平坦面をもつ。内外面ともナデ調整で、外面には接合時の指頭圧痕が残る。

281は直線的に開く形態の脚部で、口唇部はコの字状である。脚部径7.7cm、脚部高2.7cm、底径5.5cmを測る。脚天井部形態は平坦である。内外面ともナデ調整がみられる。

282はハの字に開く形態の脚部で、端部は丸みをおびる。脚部径8.1cm、脚部高2.0cm、底径5.1cmを測る。脚天井部形態は低いドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

283は短く開く脚部形態で、端部に向かって先細りする形態である。脚部径は復元径8.8cm、脚部高2.4cm、底径は復元径7.7cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。脇部は直線的にのびる形態である。内外面ともナデ調整がみられる。

284は短く開く脚部形態で、脚部径は復元径8.1cm、脚部高3.0cm、底径5.7cmを測る。脚天井部形態は低いドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

285は平底の底部である。端部はわずかにくびれ、脚台状にもみえる。底径4.7cmを測る。外面調整は工具ナデ調整、内面調整はナデ調整である。

286は上げ底状の脚台で、端部は丸い。脚部径は復元径8.9cm、脚部高2.0cm、底径は復元径7.2cmを測る。脚天井部形態は低いドーム状である。脚接合部外面は工具を当てた痕跡がみられる。

287はハの字に開く脚部形態を呈し、端部は丸みをおびる。脚部径は復元径8.2cm、脚部高3.1cm、底径は復元径5.2cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整である。

288はくびれた底部形態で脚台状を呈する。底径は復元径8.3cmを測る。胸部はやや外反しながら立ち上がる。外面調整はナデ調整、内面はミガキ調整である。

289は短く開く形態で、脚部径8.4cm、脚部高2.7cm、底径は復元径6.1cmを測る。脚部外面には成形時のユビオサエが明晰に見える。脚天井部形態は小さなドーム状を呈する。

290は短くハの字に開く形態を呈し、端部は先細りする。脚部径6.9cm、脚部高1.3cm、底径6.0cmを測る。脚部外面には接合時の指頭圧痕が残る。脚天井部形態は低いドーム状である。内外面ともナデ調整である。

291は直線的に開く形態の脚部で、端部はコの字状である。脚部径は復元径8.0cm、脚部高2.6cm、底径は復元径6.1cmを測る。脚天井部径はドーム状を呈する。内外面ともナデ調整である。

292はわずかに上げ底となる脚部形態を呈する。脚部径6.0cm、脚部高1.1cm、底径5.5cmを測る。脚接合時の指頭圧痕が明晰に残り、口唇部はゆがみが大きくなる。胸部は大きく開く開きながら立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

293は上げ底状になる脚部形態で、端部がコの字に飛び出す形態を呈する。脚部径9.1cm、脚部高2.5cm、底径7.0cmを測る。脚天井部形態は平坦面をつくり、丁寧なナデ調整が施される。内外面ともナデ調整である。

294はハの字に開く脚部形態を呈し、端部は丸い。脚部径7.5cm、脚部高2.9cm、底径は復元径5.0cmを測る。脚天井部はドーム状を呈する。脚部外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整である。

295は上げ底状になる脚部で、端部に向かい先細りになる。脚部径6.5cm、脚部高2.4cm、底径8.3cmを測る。脚接合部から胴下部にかけて外反しながら立ち上がる。脚部天井は平坦面をもつ。外面調整は工具ナデ調整、内面調整はナデ調整である。

296は直線的に短く開く脚部形態を呈し、端部は丸みをおびる。脚部径は復元径8.8cm、脚部高2.8cm、底径は復元径7.1cmを測る。脚天井部形態は平坦面をもち、断面には脚部内面に粘土を充填した痕跡がみられる。内外面ともナデ調整である。

297は脚接合部から胴下部である。胸部は直線的にのびる形態を呈する。底径8.1cmを測る。脚天井部形態はドーム状となる。外面調整は工具ナデ調整、内面はナデ調整である。内底面にはコゲがみられる。

298は脚接合部から胴下部である。胸部は外反しながら開く形態を呈する。底径は復元径8.5cmを測る。脚天井部形態は低いドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

299は短く開く形態の脚部で、端部は丸みをおびる。脚部径は復元径7.3cm、脚部高1.5cm、底径は復元径7.0cmを測る。脚天井部形態は中央が膨らむ形態を呈する。脚接合部から胴下部にかけて直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

300は短く直線的にのびる脚部で、端部は丸みをおびる。脚部径8.6cm、脚部高2.7cm、底径8.0cmを測る。脚天井部形態は平坦である。内外面ともナデ調整がみられる。

301は低くハの字に開く脚部で、端部は丸みをおびる。脚部径7.5cm、脚部高1.6cm、底径6.4cmを測る。脚端部はゆがみが大きく、波うった形態である。内外面ともナデ調整で、内底面にはコゲの付着がみられる。

302はハの字に開く形態の脚部で、端部は先細りとなる。脚部径9.9cm、脚部高4.2cm、底径7.8cmを測る。脚天井部形態はゆるやかに平坦面をつくりだす。脚接合部外面には工具ナデ痕跡がみられ、胸部は外反しながら立ち上がる。内外面ともナデ調整である。

303は直線的にのびる脚部形態で、端部にかけて先細りとなる。脚部径8.8cm、脚部高2cm、

底径 7.9cm を測る。脚天井部はドーム状を呈する。脚接合部には工具ナデの痕跡が残り、脚下部にかけて外反しながら立ち上がる。外面は工具ナデ調整、内底面は摩滅のため不明である。

304 は直線的にのびる脚部形態で、端部は丸みをおびる。脚部径 7.4cm、脚部高 2.6cm、底径 6.3cm を測る。脚天井部はドーム状である。脚端部には成形時の指頭圧痕が残る。内外面ともナデ調整である。

305 は上げ底状となる脚部形態で、端部は丸みをもつ。脚部径 8.8cm、脚部高 2.2cm、底径 7.4cm を測る。内外面ともナデ調整が施される。

306 は直線的に開く脚部で、接地部には面をもつ。脚部径 6.7cm、脚部高 2.4cm、底径 5.2cm を測る。脚天井部形態はドーム状で、脚部内面には粘土貼り付けの接合線がみえる。

307 は脚台状の底部で、丸底に近い。脚部径は復元径 8.8cm、脚部高 1.6cm、底径は復元径 7.9cm を測る。断面には丸底の底部成形後に、粘土を付加し脚台を作り出している痕跡が確認できる。外面調整はナデ調整、内面調整は工具ナデ調整である。

308 はハの字に開く形態の脚部で、接地部には面をもつ。脚端部はわずかに外反する。脚部径 8.5cm、脚部高 3.0cm、底径 5.8cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられる。

309 は短く開く脚部形態で、端部はコの字状である。接地部は脚部径 9.1cm、脚部高 3.0cm、底径 7.6cm を測る。脚天井部形態はドーム状である。内外面ともナデ調整がみられ、内底面には全面にススの付着がみられる。

310 は脚接合部から脚下部である。底径は復元径 7.2cm を測る。脚天井部形態はドーム状を呈する。内外面ともナデ調整である。

311 は直線的に開く脚部形態で、接地部には面をもつ。脚部径 6.1cm、脚部高 2.3cm、底径 4.8cm を測る。脚天井部は指頭圧痕によってゆがみがみられるが、ドーム状を呈する。内外面ともナデ調整である。

312 は上げ底状の脚部形態である。脚部径は復元径 8.5cm、脚部高 3.0cm、底径は復元径 7.6cm を測る。脚端部には粘土を付加した痕跡がある。内外面ともナデ調整がみられる。

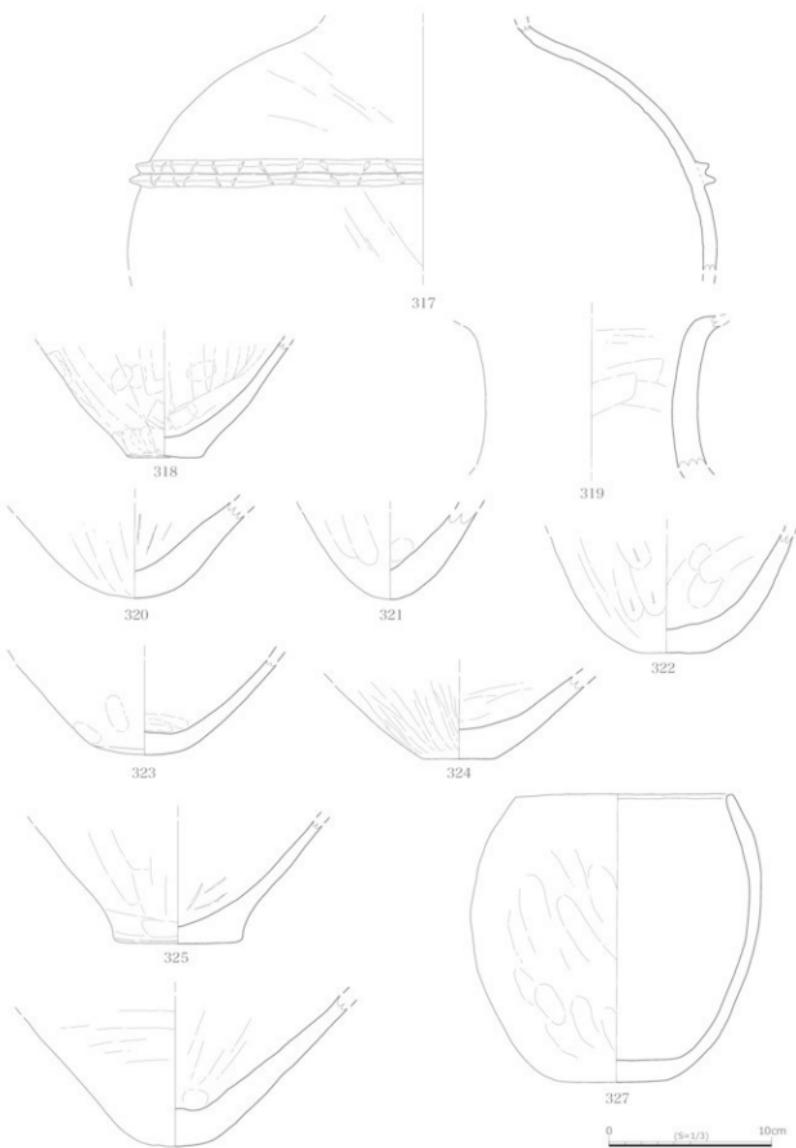
313 は直線的に先細りしながらのびる脚部形態を呈する。脚部径 10.3cm、脚部高 2.3cm、底径 9.0cm を測る。脚天井部形態はドーム状を呈する。脚部外面には工具ナデの痕跡がみられる。内外面ともナデ調整である。

314 は甕の脚部で、端部は丸みをもつ。脚部径は復元径 10.2cm、脚部高 2.6cm、底径 9.8cm を測る。脚天井部はゆるやかな平坦面をもつ。内外面ともナデ調整である。

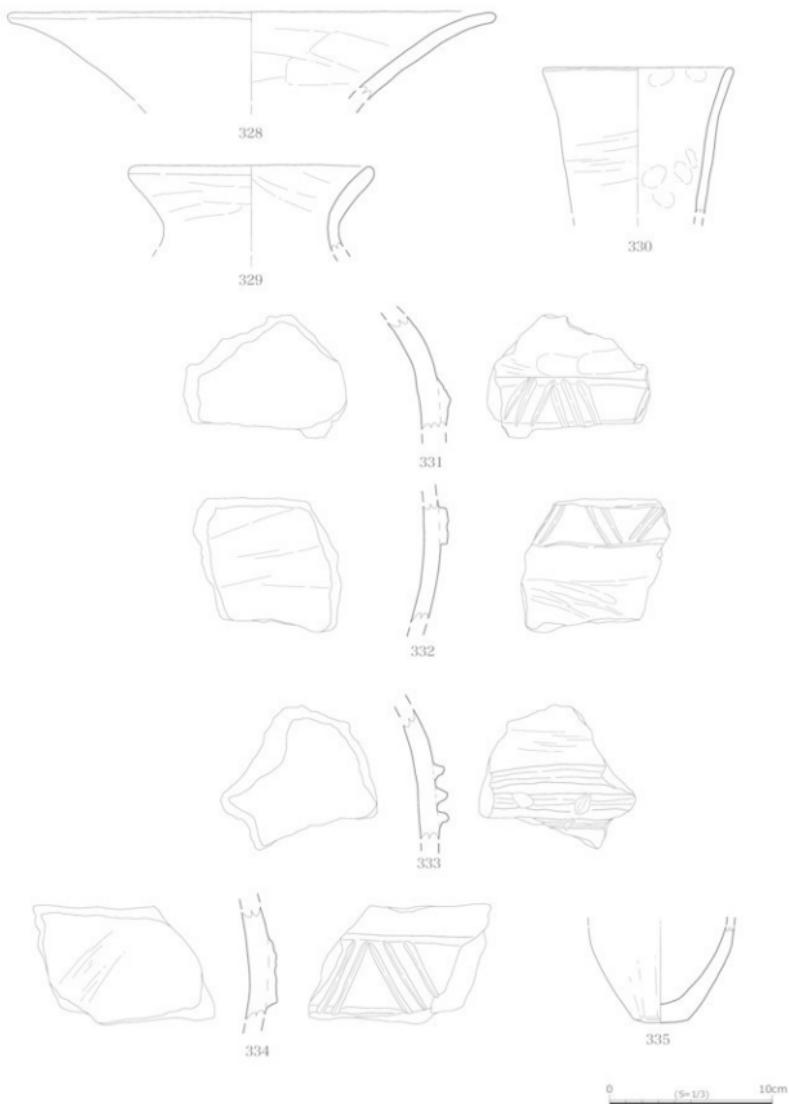
315 はハの字に開く脚部形態で、接地部に面をもつ。脚部径 8.4cm、脚部高 2.9cm、底径は復元径 6.6cm を測る。脚端部には粘土を付加した痕跡が確認できる。脚天井部形態はドーム状を呈する。外面は工具ナデ調整、内面はナデ調整である。

316 は脚部から脚下部である。直線的に開く脚部形態で、脚部径は 8.6cm、脚部高 2.0cm、底径 7.3cm を測る。脚天井部形態はドーム状で、摩滅しているが内外面ともナデ調整が主体で、脚外面には指頭圧痕が明晰に残る。また、脚端部には粘土を付加した痕跡がみられる。

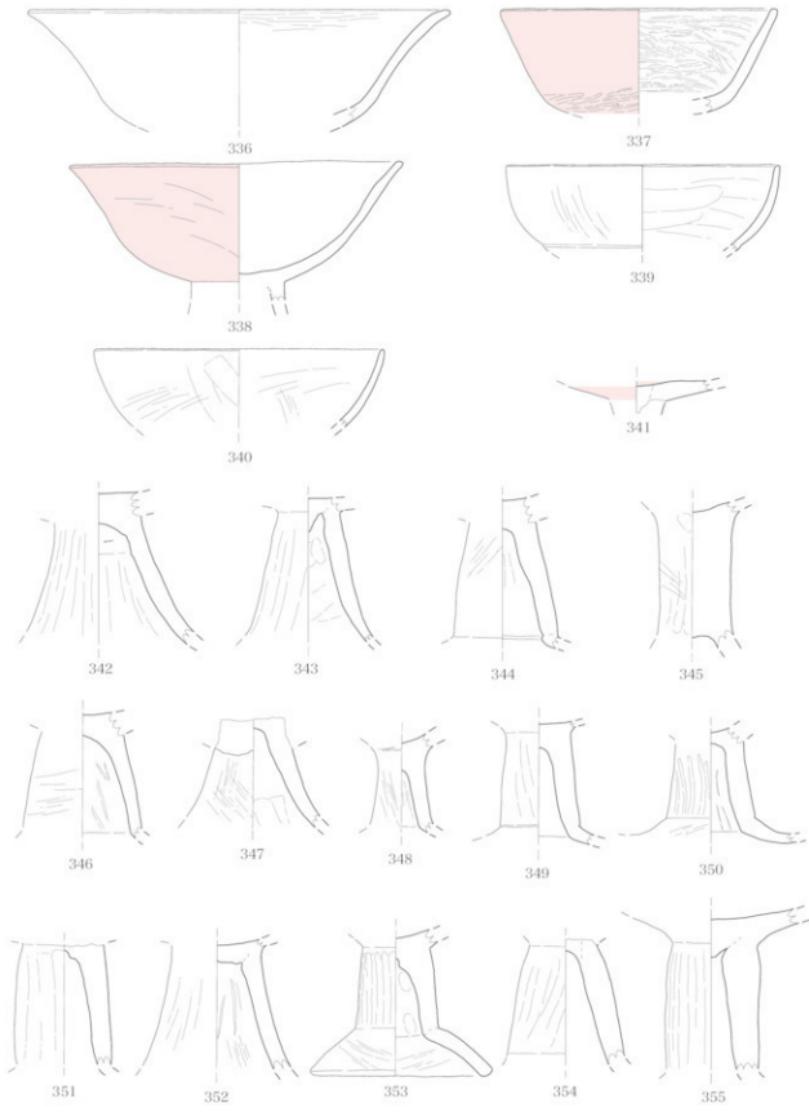
317 から 335 は壺である。317 は壺の頸部から胴部である。胴部最大径は復元径 36.0cm を測る。肩部には二条の突帯がめぐる。この突帯は粘土帯を貼り付けた後に、ヨコナデによって二条の突帯を作り出す「見かけ多条突帯」である。突帯幅は 1.7cm を測り、二条の突帯内部には刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具である。外面調整はナデ調整で、内面調整は摩滅により不明で



第91図 第9層出土遺物9

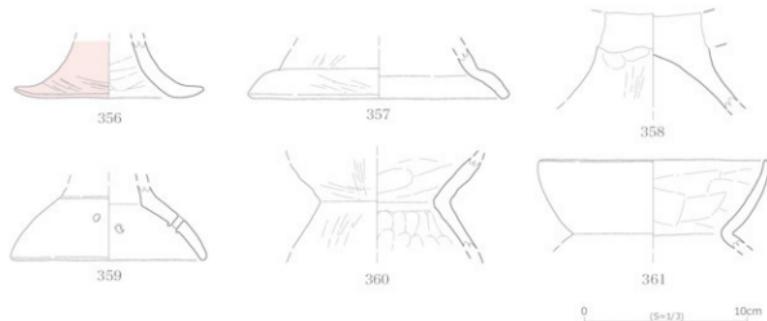


第92図 第9層出土遺物 10



第93図 第9層出土遺物 11

0  
(5=1/2)  
10cm



第94図 第9層出土遺物12

ある。

318は壺の底部から胴下部である。底部は指頭圧痕によってわずかに上げ底状となる。底径は復元径4.6cmを測る。底部から胴下部にかけて丸みをもちらながら立ち上がり、底端部には成形時のユビオサエが残る。内外面とも工具ナデが主体である。

319は大型壺の頸部である。口縁部はつよく外反する形態で、頸部は直線的にのびる。頸部径は復元径13.0cmを測る。内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整がみられる。

320は壺の底部で、丸底を呈する。内底面には赤色顔料が固結したような物質が付着している。内外面とも工具ナデ調整である。

321はやや尖底気味の壺底部である。胴下部にかけて直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整がみられる。

322は壺の底部である。底部形態はゆるやかな平底で、底径は復元径で4.0cmを測る。内面調整はナデ調整、外面は下方へのケズリ調整がみられる。

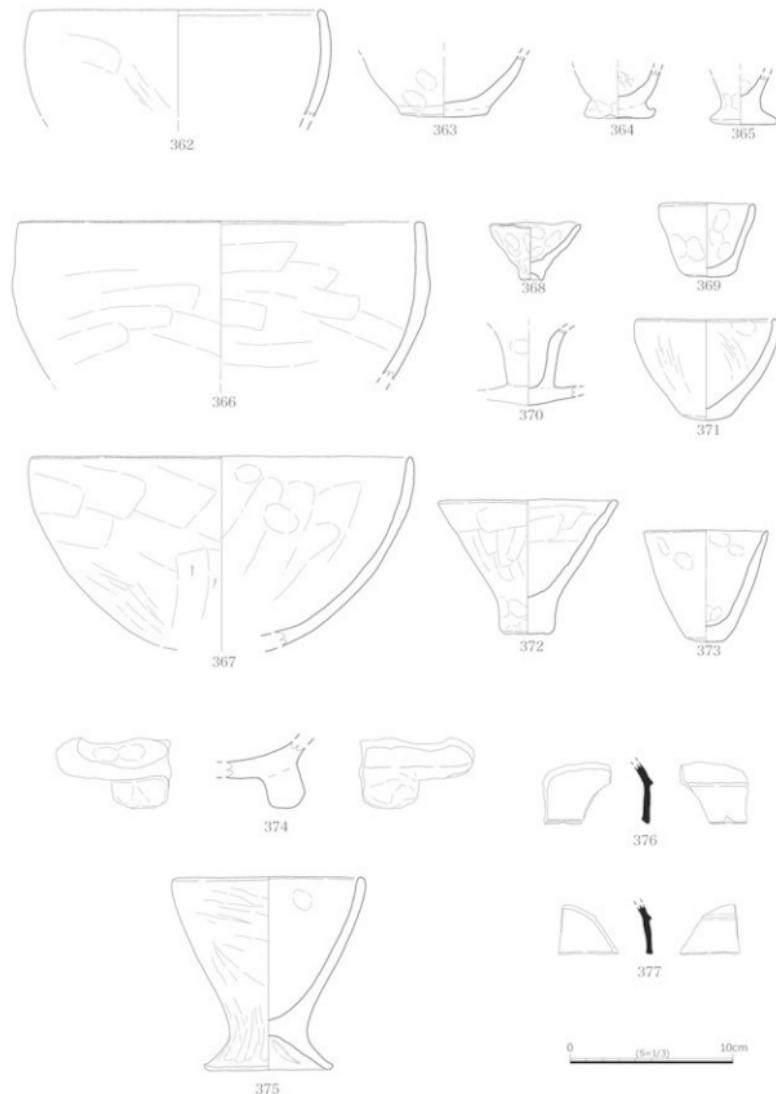
323は底部が丸みをおびた甕底部である。底径は5.4cmを測り、底端部にはゆるやかな稜線がみられる。胴部は直線的に立ち上がり、立ち上がり部分は摩滅している。内外面ともナデ調整である。

324は壺の底部から胴下部で、底部は平底を呈する。底径は復元径4.4cmを測る。底端部はシャープな作りで、胴下部にかけて膨らみをもちらながら立ち上がる。外面は縦方向のミガキ調整、内面はナデ調整が施される。

325は壺の底部から胴下部で、底部は平底を呈する。底径は復元径8.0cmを測る。底端部は丸みをもち、くびれをもちらながら立ち上がる。外面調整は、胴下部が縦方向のナデ調整、のちに底部に横方向のナデ調整がみられる。内底面には工具ナデ調整の痕跡がある。

326は壺の底部から胴下部で、底部形態はやや尖底気味の丸底である。胴下部にかけて直線的に立ち上がる。胴下部外面調整は横方向のナデ調整、内面は縦方向のナデ調整である。

327は無頸壺である。底部は平底で、胴部は球胴に膨らむ。口縁部は内湾し、端部は丸みをもつ。口径は復元径13.5cm、器高17.8cm、底径7.0cm、胴部最大径は17.7cmを測る。内外面ともナデ調整である。



第95図 第9層出土遺物13

328は壺の口縁部である。大きく外反する口縁部形態で、口径は復元径で30.0cmを測る。口唇部は丸く、内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整がみられる。

329は短頸壺である。口唇部は丸く、頸部でくの字に屈曲するが、内面の稜線は緩い。口径は復元径15.2cmを測る。内外面ともナデ調整である。

330は長頸壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる形態を呈し、口唇部は丸みをもつ。口径は復元径11.7cmを測る。内外面ともナデ調整である。

331から334は壺胴部の幅広突帯である。331は突帯内部に三条ずつの刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具によるものである。突帯の幅は3.6cmを測る。突帯端部は丁寧なヨコナデがみられる。

332は突帯内部に二条ずつの刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具である。突帯幅は2.4cmを測り、断面はコの字を呈する。外面調整はミガキ調整、内面調整はナデ調整である。

333は三条の多条突帯が貼り付けられる壺胴部片である。突帯は一条ずつ貼り付けられるもので、突帯貼付け後に一條の刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具である。外面はナデ調整、内面は摩減しており調整不明である。

334は突帯内部に三条ずつの刻目が鋸歯状に施される。刻目原体は木製工具による。突帯幅は4.4cmを測る。内外面ともナデ調整である。

335は小型壺の底部である。やや丸みをもつ底部で、自立はしない。底径は3.4cmを測る。外面は工具ナデ調整、内面はナデ調整である。

336から359は高杯である。336は高杯杯部で、口縁部がゆるやかに外反する形態を呈する。口唇部は丸く、口径は復元径26.0cmを測る。内外面ともナデ調整である。

337は箱形の杯部で、胸屈曲部から口縁部にかけて直線的に開く。口径は復元径17.0cm、杯部高7.0cmを測る。内外面とも単位の細かいミガキ調整が施され、外面には赤色塗彩がみられる。

338は杯部から脚接合部である。形態は椀状を呈し、口縁部はわずかに外反する。口径は復元径20.5cm、杯部高7.0cm、脚接合部径は5.7cmを測る。内外面とも摩減が著しいが、杯部外面には赤色塗彩がみられる。

339は椀状の杯部で、口唇部は丸い。口径は復元径16.8cmを測る。胸部には凹線状のくぼみがみられる。内外面ともナデ調整である。

340は椀状の杯部で、口径は復元径17.8cmを測る。内外面ともナデ調整である。

341は脚接合部で、接合部径は復元で3.6cmを測る。内外面とも赤色塗彩がみられる。杯接合方法は円錐塊を充填するものである。

342から359は高杯脚部である。342はスカート状に開く脚部形態で、脚接合部径は5.2cmを測る。外面はミガキ調整、内面はナデ調整、ケズリ調整がみられる。

343は緩やかに開く脚部形態で、脚接合部は3.9cmを測る。杯接合方法は円錐塊を充填するものである。内外面ともナデ調整である。

344は脚部の途中から強く屈折して開くものである。脚接合部径は4.1cmを測る。内外面ともナデ調整である。

345は筒状の充填脚部で、筒部径は4.3cmを測る。欠損しているが脚部に向かって緩やかに外反する形態であると考えられる。

346はわずかにエンタシス状を呈する脚部形態で、途中で屈折する。脚接合部径は5.0cmを測る。外面はナデ調整、内面は工具ナデ調整である。

347はスカート状に聞く脚部形態で、脚接合部で剥落している。杯接合方法は脚部を杯部に挿入する法で、接合部径は復元径4.8cmを測る。内外面ともナデ調整がみられる。

348は筒部の途中から屈折する脚部形態である。脚接合部径は2.9cmを測る。内外面ともナデ調整である。

349はわずかにエンタシス状を呈する筒部を持ち、筒部の途中から強く屈折する脚部である。脚接合部径は4.0cm、屈折部径は4.8cmを測る。内外面ともナデ調整である。

350は筒部からやや反り返りながら屈折する脚部形態をもつ。脚接合部径は4.1cm、屈折部径は5.3cmを測る。外面調整は縦方向のミガキ調整、内面は工具ナデ調整である。

351はエンタシス状の筒部である。脚接合部径は4.9cm、屈折部径は5.8cmを測る。外面はナデ調整、内面は摩滅のため調整不明である。

352はスカート状に聞く脚部形態で、脚接合部で剥落している。脚接合部径は5.3cmを測る。杯接合方法は脚部を杯部に挿入する方法である。内外面ともナデ調整がみられる。

353は屈折部から袋状に聞く脚部である。端部はコの字状となり、脚部径は11.2cmを測る。筒部は直線に立ち上がり、筒部径4.1～5.1cmを測る。筒部外面は縦方向のミガキ調整、内面はミガキ調整である。

354はわずかにエンタシス状筒部をもつ脚部である。脚接合部径は4.1cm、屈折部径は7.1cmを測る。内外面ともナデ調整である。

356は脚端部が反り返る形態のもので、脚部径は復元径で11.7cmを測る。内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整で赤色塗彩がみられる。

357は脚部下半から屈折して短く膨らむ形態を呈し、端部はコの字状である。脚部径は復元径16.0cmを測る。内外面ともナデ調整である。

358はハの字に聞く形態の脚部で、杯部との接合部分で剥落している。内外面ともナデ調整である。脚接合部径は復元径6.8cmを測り、脚部を杯部に挿入する方法で接合される。

359は屈折部から袋状に聞く形態を呈し、穿孔がみられる。脚部径は復元径12.0cm、穿孔径は0.6cmを測る。内外面ともナデ調整である。

360と361は培である。360は頸部で強く屈曲する形態を呈し、頸部径は復元径8.0cmを測る。頸部内面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内外面ともナデ調整が主体である。

361は受け口状口縁をもつ培で、頸部から球聴状に膨らむ形態であると考えられる。口径は復元径14.1cm、頸部径は復元径9.8cmを測る。内面は工具ナデ調整、外面はナデ調整である。

362から375は鉢である。362は椀状の鉢で、口縁部は内湾する。口径は復元径18.2cmを測り、口縁部内面には稜線がみられる。内外面ともナデ調整である。

363は鉢の底部から胴下部である。底部形態は座りの悪い平底で、底面には粘土を付加した痕跡がある。底径は復元径5.4cmを測る。内外面ともナデ調整である。

364は小型の鉢である。球状の形態に粘土を貼り付け、脚台状にしたもので、底径は4.4cmを測る。内外面ともナデ調整である。

365は小型鉢で、欠損しているがコップ状の形態になると考えられる。底部には粘土を貼り付け、脚台状となる。脚部径は4.1cm、脚部高1.2cm、底径2.5cmを測る。内外面ともナデ調整である。

366は大型の鉢である。椀状の形態を呈するが、口縁部は直立する。口径は復元径25.0cmを測る。内外面とも工具ナデ調整がみられる。

367はボウル状の鉢で、底部は欠損しているが丸底を呈すると考えられる。口径は復元径

23.7cm、器高は推定 17.0cm を測る。内外面とも工具ナデ調整が主体だが、外面胴下半にはケズリ調整がみられる。

368 は手捏ねの小型鉢である。盃状の形態で、底部は脚台状となる。口径 5.6cm、器高 3.3～3.6cm、脚部径 1.5cm、脚部高 0.7cm、底径 1.8cm を測る。内外面ともユビオサエが埋隙に残る。

369 はグラス状の鉢である。底部は平底で、口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口径は復元径 5.9cm、器高 4.6cm、底径 2.8cm を測る。内外面ともナデ調整である。

370 は燭台形の鉢で、器部は大きく外反する。底部は水平に広がるが、全形は不明である。内外面ともナデ調整である。

371 は丸底状の小型鉢である。口縁部は内湾し、口径は復元径 8.8cm、器高 6.2cm を測る。内外面ともナデ調整である。

372 は漏斗形を呈する小型鉢で、底部は厚く、直線的に突出する。口縁部にかけて直線的に開く形態で、口径は復元径 11.0cm、器高 8.2cm、底径は復元径 3.3cm を測る。内外面とも工具ナデ調整で、底部にはユビオサエがみられる。

373 はコップ形の小型鉢で、底部から口縁部にかけて直線的に開く。口縁部はユビオサエによりやや先細りする。口径は復元径 7.6cm、器高 6.9cm、底径 2.5cm を測る。

374 は脚付土器で、幅 3.5cm ほどの脚が付けられる。器部にはゆるやかな平坦面がみられる。残存する脚の横にはもう一つの脚が貼り付けられていた痕跡がみられ、本来二脚～三脚であったと考えられる。

375 は椀状の器部に脚部がつく鉢である。口縁部はわずかに内湾し、脚部はハの字に開く。口径は復元径 11.9cm、器高 12.1cm、底径 4.8cm、脚部径 7.9cm、脚部高 2.3cm を測る。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。外面には黒斑がみられる。

376 と 377 は須恵器杯蓋である。ともに口唇部が M 字にくぼむ形態を呈し、丁寧な回転ナデがみられる。377 には自然釉の付着がみられる。

378 は頁岩製の剥片を素材とした両面加工石器である。上端部は欠損している。b 面上面部の大きな剥離面には磨面が認められる。

379 は扁平な梢円碟の剥片を素材とした楔形石器である。a・b 両面の上下両端に剥離痕が認められる。b 面上面部の 2 枚の剥離痕が他の面に比べ摩滅しているのは、使用によるものと考えられる。

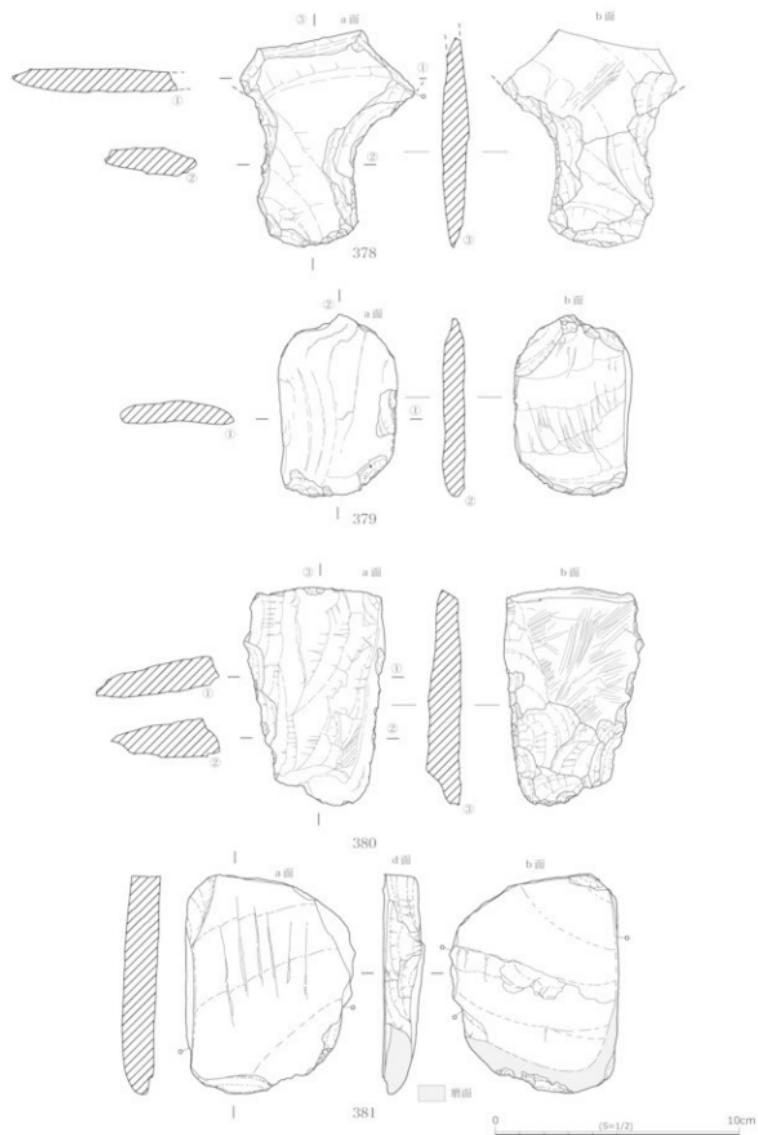
380 は下端部に自然面を残す横長剥片を素材とし、d 面左側部と b 面下部両側部に二次加工が施されている。また b 面上面部には磨面が認められる。

381 は厚さ約 1.3cm の剥片を素材とした削器である。a 面右側部 (d 面) にみられるような二次加工が施されたのち、b 面下端部を使用面として削器として使われている。使用面の断面は丸みを帯び、顕著な摩滅が認められる。

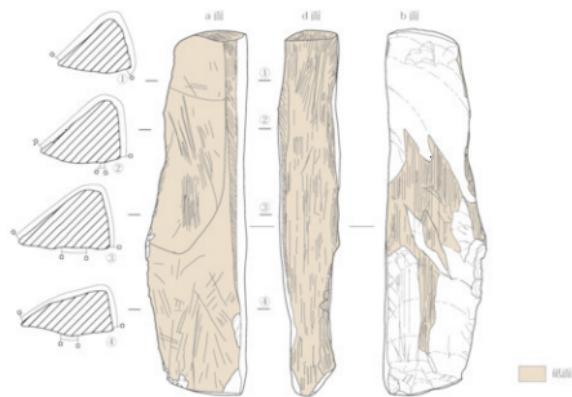
382 は断面隅丸の棒状碟を用いた砥石である。四面に砥面があり、下端部には敲打痕が認められることから、多機能の石器である。また d 面上面部にも敲打痕があるが、凹面となっていることから何らかの道具の加撃があったと考えられる。

382 は長さ 15cm の頁岩製の剥片を素材とした砥石である。a 面と d 面を主な砥面として利用されており、また b 面の主要剥離面にも砥面が認められる。砥面には線状痕がみられ、特に a 面上面部と d 面上面部には幅 1～2mm の線状痕があることから、鋭利な道具を研いだことが想定できる。a 面上下両端にも磨面がある。a 面左側縁は剥片の縁辺であるが、使用により稜が潰れている。

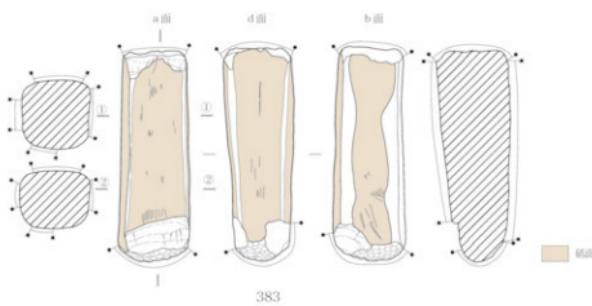
383 は板状の砂岩碟を用いた砥石である。a・b・c 面に砥面が認められ、a・b 面はその砥面の



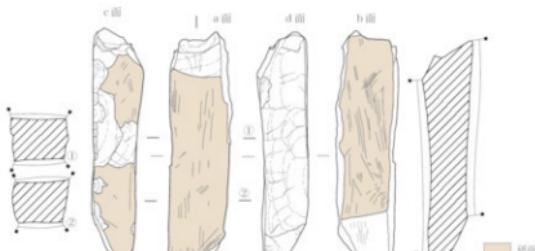
第96図 第9層出土遺物 14



382



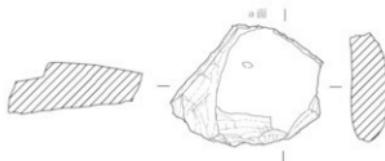
383



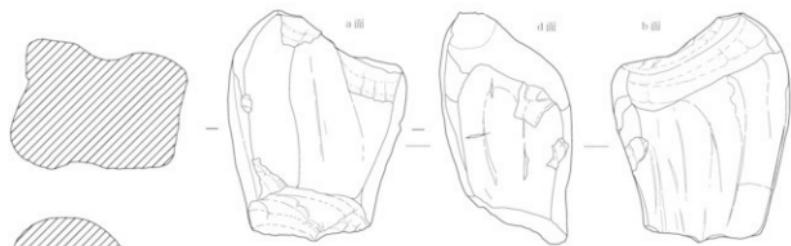
384

0 (5=1/2) 10cm

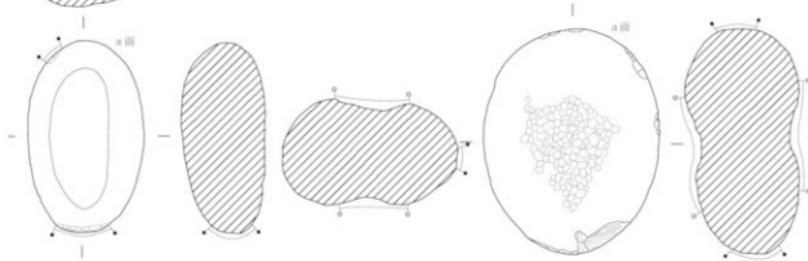
第97図 第9層出土遺物 15



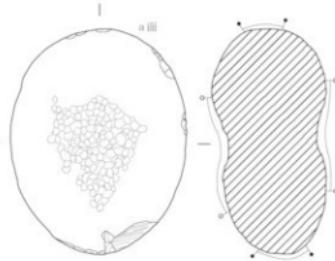
385



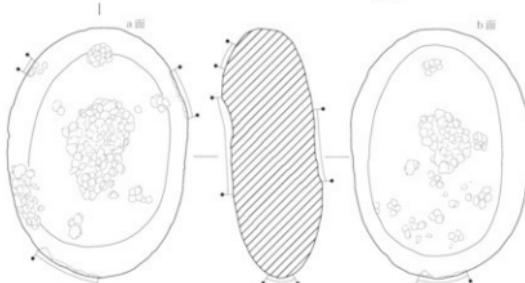
386



387



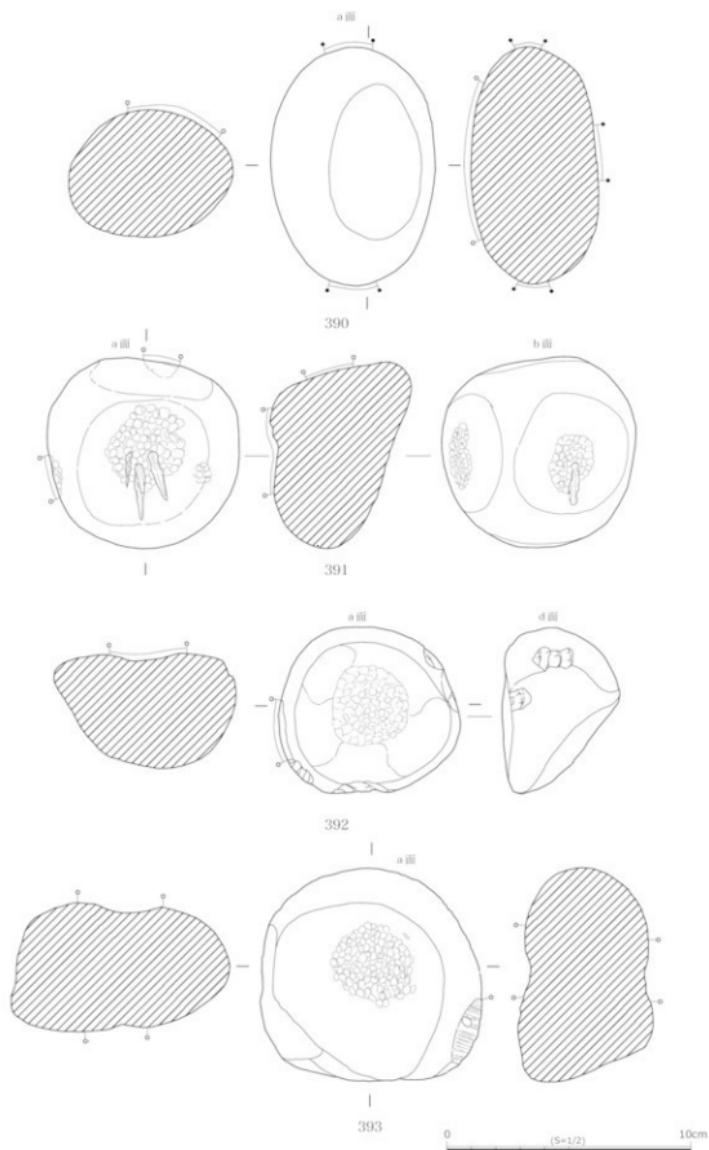
388



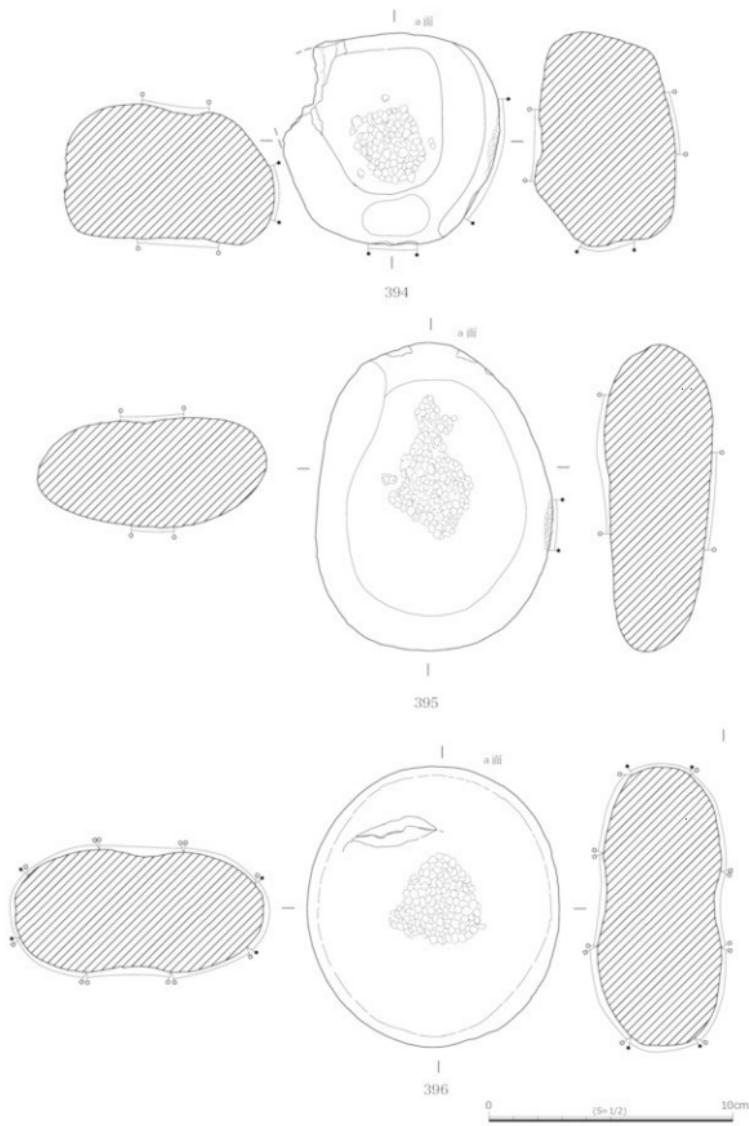
389

0 (5=1/2) 10cm

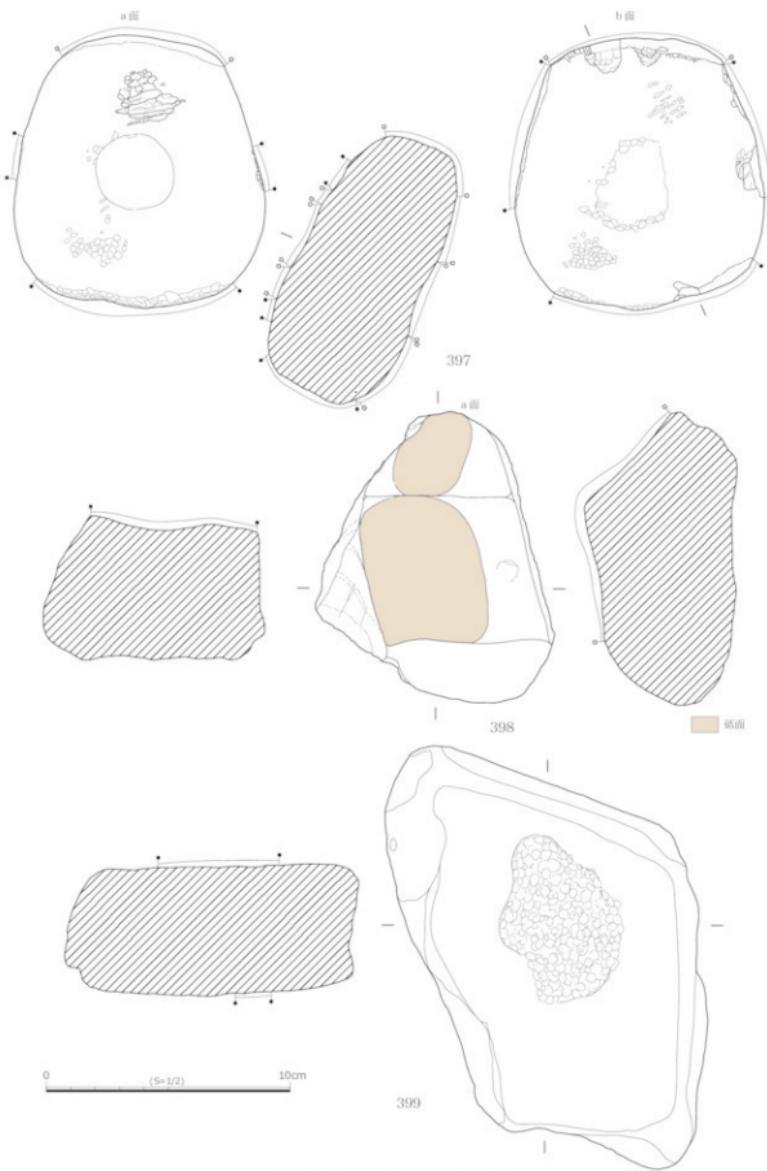
第98図 第9層出土遺物 16



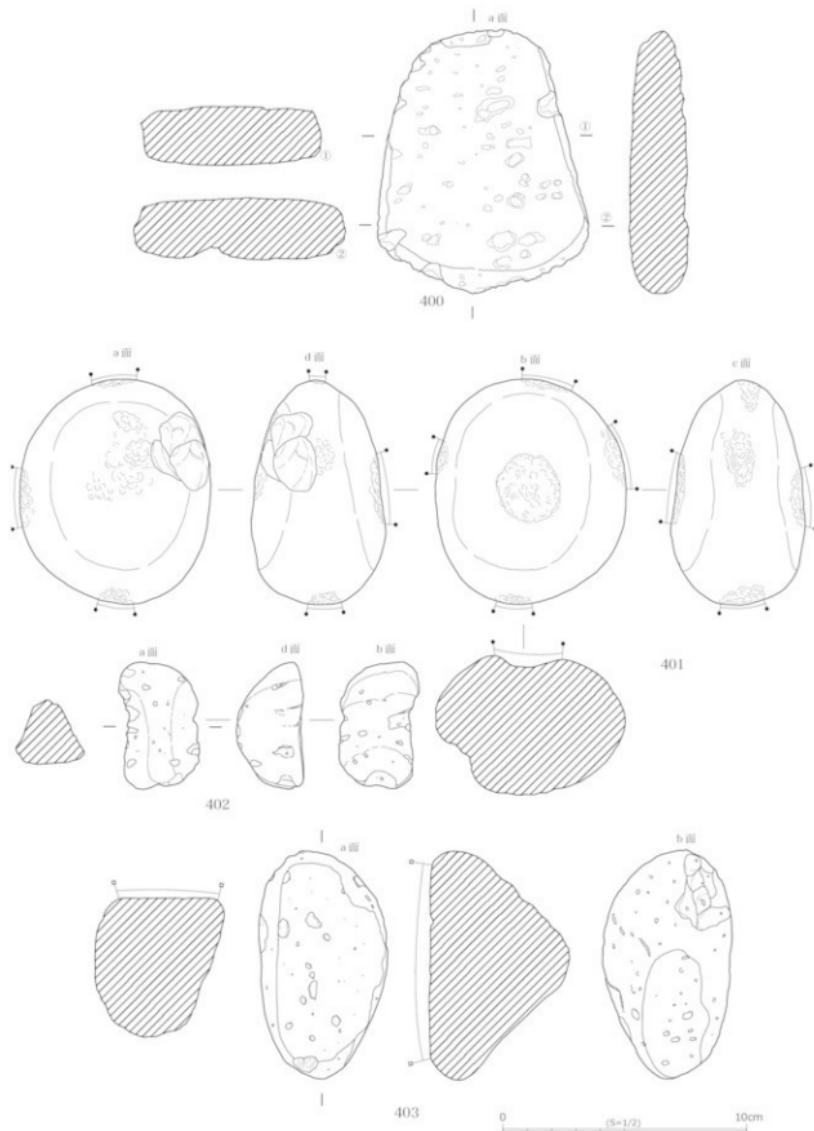
第99図 第9層出土遺物 17



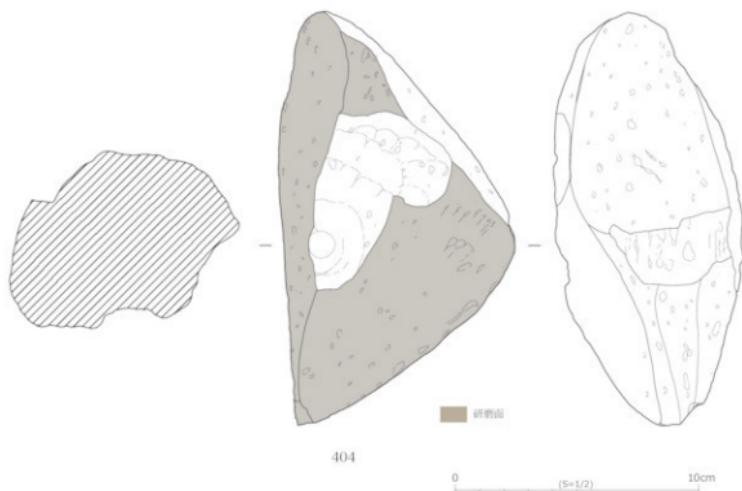
第100図 第9層出土遺物18



第101図 第9層出土遺物 19



第102図 第9層出土遺物 20



第103図 第9層出土遺物 21

曲面から用いられた方向が推測でき、おおむね下部から上面に向けて縦方向の使用が想定できる。d面はb面側からの加撃による剥離面である。

385は砂岩を素材とした砥石片である。砥面はa面中央部にみられる平坦面がみられる。砥面の中でも特にa面右側部はややへこみが認められることから使用頻度が他の面より高かったものと推測できる。砥石全体の全体形は周囲の意図的な打撃により不明である。

386は砂岩礫を素材とした砥石である。四面に砥面があり、a・b・d面に断面凹面を呈している。特にa面が顕著である。a面左側面の砥面には幅6mm長さ5.4cmの溝状の砥面がある。b・d面には使用による線状痕が明瞭に認められる。

387は安山岩の楕円礫を用いた敲石である。a面の上下両端に敲打痕が認められる。

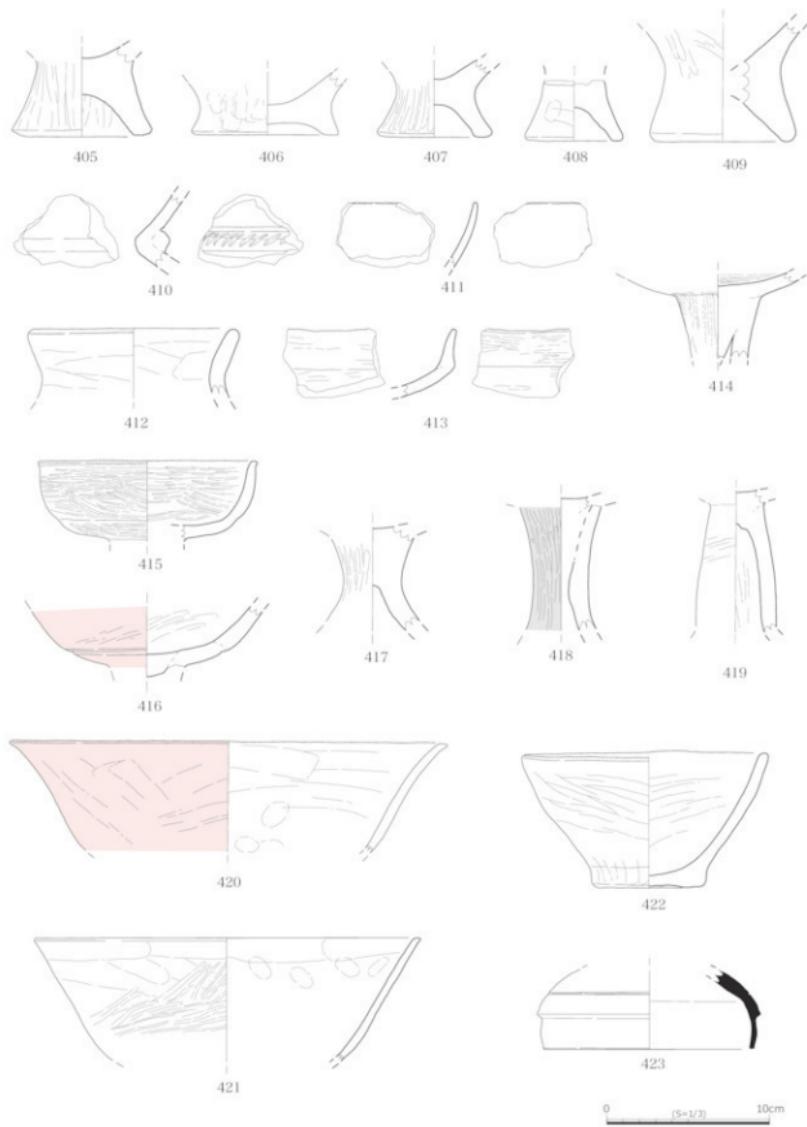
388は安山岩の楕円礫を用いた凹石である。a面とその裏面の中央部に凹面が認められる。またa面左側部下部には削面がある。また石器周辺には敲打痕が認められる。

389は安山岩の楕円礫を用いた凹石である。a・b両面中央部に敲打による凹面が認められる。またa面下部、a面左側面中部・上部より、右側面上部よりに敲打痕が認められる。

390は砂岩の楕円礫を用いた敲石である。a面上下両端に浅い敲打痕が認められる。a面中央から右側面にかけて磨面が認められる。a面裏面中央部にわずかに敲打痕が認められる。敲打痕はいずれも浅いものである。

391は断面隅丸三角形を呈する安山岩礫を用いた凹石である。a面中央部・上部とb面左・右側面に凹面が認められる。a面左側面下部には敲打痕が認められる。なおb面右側面凹面の周辺は他の面より滑らかであり、磨面と考えられる。またa面、b面の凹面には棒状の削痕がみられる。

392は平坦面を有する安山岩の不整形礫を用いた凹石である。平坦面中央に約深さ約2.5mm程



第104図 第8層出土遺物

度の凹面がある。a面下部と右側面上部には剥離面が認められることから、何らかの打撃を行ったものと考えられる。またa面左側面には一部磨面が認められるが、後世の搅乱によるものと推測できる。

393は平坦面を有する不整形な安山岩礫を用いた凹石である。凹面にはa面とその裏面の中央部に認められ、よりa面の方がくぼみの深さは深い。またa面右側面下部には線状痕が認められ、敲打だけではない別の使われ方が行われていたことが推測できる。

394は不整形な安山岩礫を用いた凹石である。a面とその裏面に凹面が認められるがよりa面が深い。a面右側部と下部に敲打痕が認められる。a面左側面上部はb面からの加撃により欠損している。

395は扁平な面を有する楕円形礫を用いた凹石である。a面中央部とその裏面中央部に敲打による凹面が認められる。またa面右側面に敲打痕が認められる。

396はほぼ円形に近い安山岩礫を用いた凹石である。a面中央部とその裏面に凹面が認められる。凹面の深さはほぼ同じ約2mmを測る。またa面とその裏面の凹面の周辺は磨面である。石器の全集には敲打痕が認められる。

397は厚さ約5.6cmを測る楕円形の砂岩礫を用いた凹石である。a・b面中央部に凹面があるが、敲打痕のち磨面として利用されている。上下両端は形状が平坦面になるほど利用されている。a・b面とも凹面の左下部には敲打痕が、右上部には約2mmの棒状のもので削るような行為があったと推測される。両面の位置関係が同じことから決められた作業によるものと思われる。

398は分割面をa面左側部とa面裏面に有する砂岩礫を用いた砥石である。a面中央部に2面砥面がありいずれも凹面を呈している。

399は平坦面を有する不整形な安山岩礫を用いた台石である。a面とその裏面に敲打痕が認められる。敲打痕が認められる範囲外は平坦面であるが、磨面は認められない。

400は軽石の両面と側面を平坦に加工しながら、全体的な形状を整えた加工品である。a面下端部は角を有するように加工されている。用途は不明である。

401は安山岩を用いた凹石である。a面・d面の一部が欠損している。

403は軽石的一面に加工を施したものと考えられる軽石製加工品である。

404はa面に磨面が認められる軽石である。縦断面は隅丸三角形を呈しており、手のひらで持ちやすい形態と言える。

## 第5節 8層出土遺物（第104図）

古墳時代に相当する扇状地堆積物層であり、5～30cmほど堆積する。層中には、スコリアのブロック（開聞岳の7世紀第4四半期の噴出物堆積層と休止期を挟んで下位に存在する初期の噴出物）や、砂層、池田湖起源の噴出物のブロック、池田湖降下軽石等を含む。古墳時代時などのローリングを受けたものが検出される。

405から410は甕である。405はハの字に開く脚部形態で、端部は平坦である。脚部径8.6cm、脚部高4.0cm、底径5.9cmを測る。脚天井部形態はドーム状で、内外面ともミガキ調整が施される。

406は短く開く脚部形態を呈し、接地面は平坦である。脚部径8.6cm、脚部高1.8cm、底径8.0cmを測る。脚天井部形態はゆるやかに平坦になる。内面はナデ調整、外表面は工具ナデ調整である。

407はハの字に開く形態の脚部で、接地面は平坦、端部はやや丸みをおびる。脚部径7.0cm、脚部高3.0cm、底径4.8cmを測る。脚天井部形態はドーム状である。外面は縦方向のミガキ調整、内面はナデ調整である。

408はハの字に開く形態の脚部で、接地面は平坦である。脚部径は復元径6.0cm、脚部高3.7cmを測る。脚接合部で欠損している。内外面ともナデ調整がみられる。

409は直線的にのびる脚部形態で、端部は丸い。脚部径は復元径9.0cm、脚部高4.7cm、底径は復元径7.1cmを測る。外面はわずかにミガキ調整がみられるが、ナデ調整が主体である。

410は攢の頭部である。くの字に強く屈曲する頭部で、屈曲部外面には一条の刻目突帯が貼り付けられる。口縁部は欠損しているが、直線的にのびるものと考えられる。

411は鉢の口縁部である。内湾する形態で、器壁は薄い。内外面ともナデ調整である。

412は短頸壺の口縁部である。口唇部は丸く、口径は復元径13.0cmを測る。内外面とも工具ナデ調整がみられる。

413は高杯の口縁部である。胴部で屈折して直立する口縁部で、口唇部は先細りする。内外面とも横方向のミガキ調整がみられる。

414は高杯の脚接合部から脚部である。脚接合部径は5.5cmを測る。脚部はややくびれる形態を呈し、内面には接合時の円錐塊が見える。脚外面は縦方向のミガキ調整、杯部は横方向のミガキ調整である。

415は椀状高杯の杯部である。口唇部は外反し、口径は復元径13.5cm、杯部高は4.9cmを測る。杯部の屈折部は凹線状にくぼみがみられる。内外面とも横方向の丁寧なミガキ調整が主体で、外面は赤色塗彩がみられる。

416は高杯の杯部で、脚接合部で欠損している。杯部形態は椀状で、外面には凹線状のくぼみがみられる。脚接合部は円錐粘土塊を充填する方法で接合される。内面はミガキ調整、外面はナデ調整である。

417はくびれた形態の脚部で、大きくスカート状に開く形態を呈すると考えられる。内外面ともミガキ調整で、外面には黒斑がみられる。

418はわずかにくびれた形態の脚部で、脚接合部で欠損している。接合方法は粘土円錐塊を充填する方法である。外面は縦方向のミガキ調整で、全体的に黒い発色である。

419はエンタシス状を呈する脚部で、脚部途中で屈折する形態である。脚接合部径は3.4cmを測る。内外面ともナデ調整である。

420は高杯の杯部で、大きく外反する形態を呈する。口唇部は上方に面をもつ。口径は復元径27.0cmを測る。内外面とも工具ナデ調整がみられる。

421は高杯の杯部で、直線的に開く形態である。口唇部は上方に面を持ち、口径は復元径23.7cmを測る。口縁部外面は丁寧なヨコナデ調整、体部外面はミガキ調整、内面はナデ調整がみられる。

422は平底鉢で、底面はわずかに上げ底になる。椀状の形態で、口唇部は丸く、口径は15.2cmを測る。器高8.0～8.4cm、底径7.3cmを測る。外面はミガキ調整、内面はナデ調整がみられる。

423は須恵器杯蓋である。口唇部は平坦面をもち、口径は復元径13.0cmを測る。内外面とも丁寧な回転ナデがみられる。

## 第4節 古代の遺構と遺物

### (1) 遺構

古代に位置づけられる遺構として竪穴住居跡1基(SB1), 掘立柱建物跡2軒(SB2・8)がある。本来は、SB7とSB31も古代の遺構へ含まれるべきだが、調査時の整理状況を優先したため、節が別れることとなってしまった。

SB1・7・31は7世紀後半に位置づけられる第7層(青コラ火山灰層)上位の第6層から掘り込まれて作られていることから、7世紀後半から第6層(紫コラ火山灰層:874年)の間に位置づけられる。

#### 【SB1】(第13図、第106図～第108図)

SB1は、第7層青コラ火山灰層を掘り抜いて造営された竪穴建物である。また、竪穴埋没途中の窪地の状態で紫コラ火山灰が降下したものとみられ、第5層紫コラ火山灰層は竪穴中央部に向って窪んでいる。橋牟礼川遺跡地内では、平成4年度・5年度において、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡で検出された4基の竪穴建物が同様の検出状況であった(下山他1996)。このことから、1号竪穴建物の造営時期は6世紀後半以降、874年までの間であると言える。

主軸を略東西にとり、長軸3.7m、短軸3.6mの略方形プランを呈する。東面に幅1.2m、長さ0.2m程度の張り出しがある。

付帯遺構として、床面に柱穴とみられるピット5基、床面中央の土坑1基(中央土坑)、北面竪穴下端に溝状の遺構等が検出された。中央土坑は長軸78cm、短軸76cmの略円形であり、深さは12cm程度、浅い逆台形の断面を呈する。土坑の床面中央から南東にややずれて直径16cm程度の浅い窪みが検出され、この内部でカーボンが出土した。なお、中央土坑検出面10cm程度上のレベルでは炭化物がまとまって検出されたが、土坑の埋土(青コラ火山灰のブロックを含むシルト質土壤)中にはカーボンが少量含まれる状況があったことから、建物埋没途上に形成されたカーボンとみられる。

床面のピットは便宜上a～eとした。法量は、ピットaが最大径19cmの円形で深さ26cm、ピットbが最大径15cmの楕円形で深さ55cm、ピットcが最大径18cmの楕円形で深さ36cm、ピットdが最大径18cmの楕円形で深さ64cm、ピットeが最大径39cmの楕円形で深さ19cmである。ピットdとeは隣接し、深さ1cm程度の溝状の窪みで繋がっている。

北面の竪穴下端で検出された溝状遺構は、全長2.6m程度で幅20cm程度、深さ5cm程度であるが、北面中央付近で中央土坑に向って奥行き70cm程度で台形状に張り出す形状となる。埋土は青コラ火山灰の混じるサラサラした砂質シルト土である。

ピットの配置に関しては、例えば西面からピットbまでが26cm、東面からピットaまでが1.1mとなり、床面西側に著しく偏っている状況である。また、ピット配置は竪穴東面に向って開く台形状となる。このような形状の例として、古墳時代に帰属する宮ノ前遺跡3号住居跡があり、主柱配置が台形状であり、かつこれが竪穴の南面に偏った配置となっている(弥栄・中島1981)。いずれにしても、柱や梁材の曲がりやゆがみに対応した柱配置の調整の範疇を超えていると考えられる。したがって、これらの建物では垂木の角度が西面と東面で異なる等の、上部構造の特徴を反映



第105図 古代遺構配置図



第106図 SB1 平面図・断面図

したものである可能性も考慮したい。なお、柱ピットeは他のピットに比べ浅く、東側に1基離れた位置にある。上部構造を構成する柱穴かは不明である。

#### 〈SB1 出土遺物〉

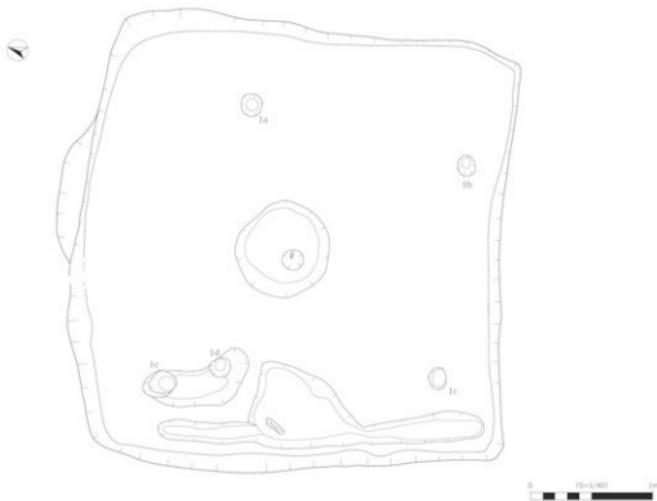
SB1 出土遺物は平面図を見る限り、土器・石器・獸骨などが出土していることがわかるが、明確に SB1 出土であることが判明した遺物は須恵器杯 424 のみであった。SB1 の出土遺物に関しては今後の整理作業を通じて再検討する必要がある。

424 は須恵器杯である。口径 15.8cm を測り、底部形態は不明である。口唇部は丸みを帯び、脣部から口縁部にかけて直線的に開く形態である。表面の発色は淡黄色であるが、硬質である。丁寧な回転ナデの痕跡が見られる。

#### 文献

弥栄久志・中島哲郎 1981 『宮之前遺跡』指宿市埋蔵文化財調査報告書 5

下山覚・中摩浩太郎・渡部徹也・鎌田洋昭 1996 『橋牟礼川遺跡 X I』指宿市埋蔵文化財調査報告書 21



第107図 SB1 完掘平面図

## 【SB2】(第109図)

SB2は梁間2.8m、桁行5.6mを測る。柱の法量は、柱1が長軸24cm、短軸22cm、柱2が長軸23cm、短軸22cm、柱3が長軸22cm、短軸20cm、柱4が長軸46cm、短軸40cm、深さ50cm、柱5が直径26cm、柱6が長軸34cm、短軸32cm、深さ64cmを測る。柱間は梁間で1.6m・1.3m・1.4m、桁行で1.4mとなる。柱穴は平面形が梢円形あるいは略円形を呈する。2段掘りになるのは、柱穴4・5の2基であり、他は素掘りとなる。

周辺の出土遺物は建物南側で青銅製帶金具464と須恵器452がある。SB2に伴うものであるかは不明である。



第108図 SB1 出土遺物



第109図 SB2平面図

## 【SB8】(第110図)

SB8は梁間2.9m、桁行4.7mを測る。柱1が長軸57cm、短軸52cm、深さ80cm、柱2が長軸40cm、短軸40cm、深さ86cm、柱3が長軸40cm、短軸34cm、深さ82cm、柱4が長軸59cm、短軸44cm、深さ66cm、柱5が直径44cm、深さ84cm、柱6が長軸70cm、短軸54cm、深さ78cm、柱7が長軸64cm、短軸44cm、深さ68cm、柱8が長軸59cm、短軸40cm、深さ74cm、柱9が長軸50cm、短軸46cm、深さ60cm、柱10が直径42cm、深さ54cmを測る。柱穴は平面形が梢円形あるいは略円形を呈し、二段掘りとなる。柱7・8以外は、柱穴底部に柱が入るピットがある形状であるが、断面には柱痕がみられるが、柱7・8は深さ20cm程度の柱穴を設け、底部に倍近く深いピットを設けたものである。

周辺出土遺物は建物東面の桁直下で、須恵器杯蓋443、墨書き土器「真」436・437がある。

2号と8号建物の周辺あるいは内部で焼土が検出されている。2号は柱列の内部であり、8号は南西角の柱穴に接した部分とその外側である。

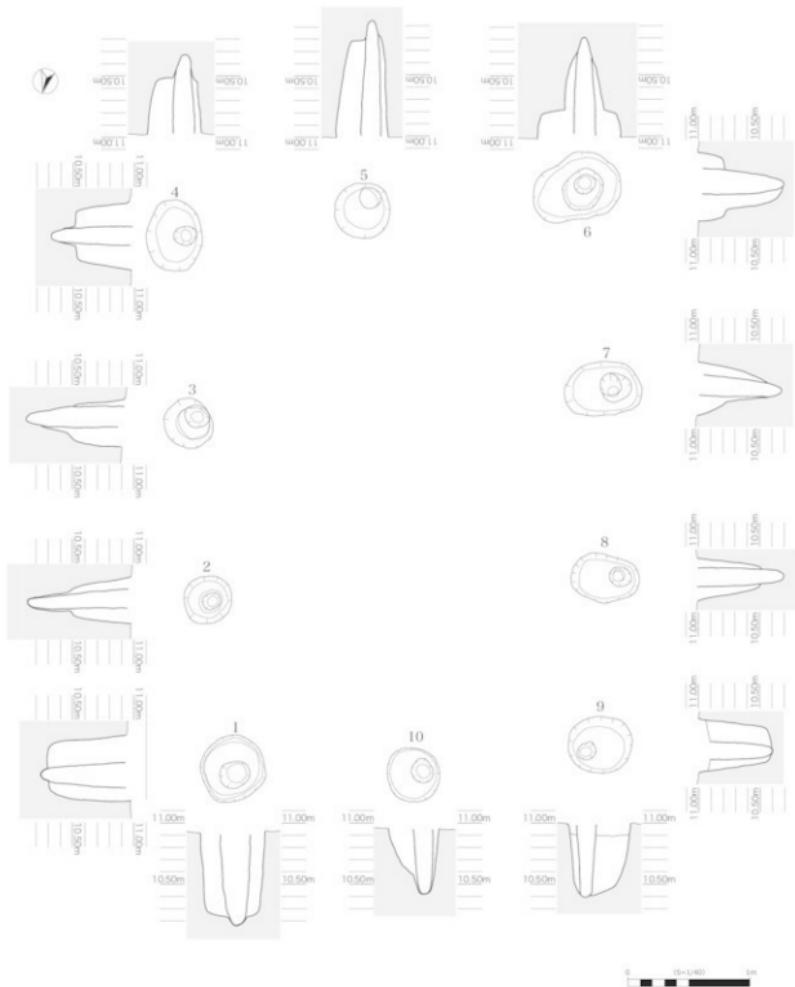
## &lt;SB8出土遺物&gt;

425は須恵器杯蓋である。口径15.0cm、器高2.4cmを測る。つまみはなく、口唇部は嘴状に屈曲する。

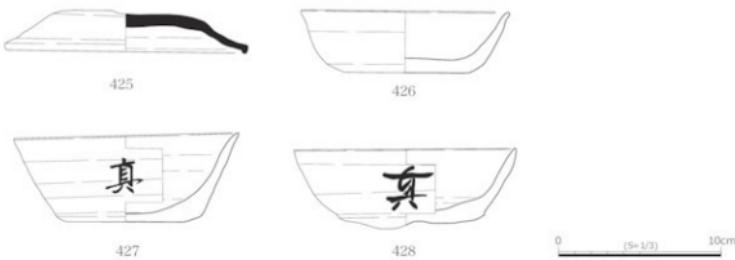
426は土師器杯である。口径12.4cm、器高3.9cm、底径8.0cmを測る。底部外面には、回転ヘラ切りの痕跡がみられ、底端部はゆるやかなケズリがみられる。

427は墨書き土師器杯である。口径13.5cm、器高5.7cm、底径8.0cmを測る。体部外面には楷書体「真」が書かれている。底部外面には回転ヘラ切りの痕跡がみられる。

428は墨書き土師器杯である。口径13.7cm、器高4.2~5.2cm、底径8.7cmを測る。外底面は手持ちヘラ切りの痕跡がみられ、ゆがみが大きい。体部外面には行書体「真」が書かれている。



第110図 SB8 平面図・柱穴断面図



第111図 SB8出土遺物

## (2) その他の遺構

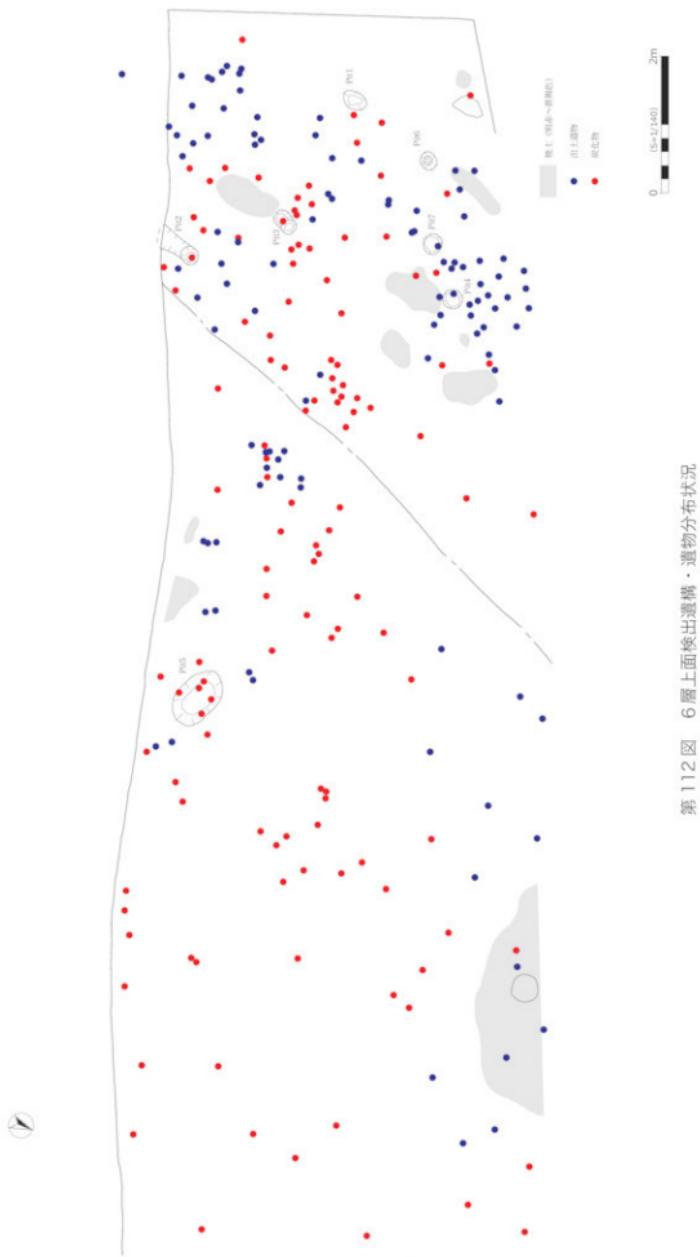
貞觀16（874）年の開聞岳噴火に伴う第5層紫コラ火山灰層直下の第6層上面では、畠遺構等はみられず、土坑1基、ピット7基と焼土及びカーボン集中箇所が検出された。なお、ピット等の遺構に関しては、874年に極めて近い時期の遺構であるが、874年の埋没遺構ではない。

土坑1は、第6層中に帰属する1号竪穴建物の全体形検出のため設けられた、抵幅部で検出された。検出面は第6層上面であり、他の第6層上面検出のピットよりも規模が大きく、土坑とした。埋土は黄灰色の軟質土であり、土器小片を含んでいた。長軸66cm、短軸38cm、深さ34cmである。東端に段を形成する。土坑断面形状は逆台形を呈する。

Pit1は、隅丸三角形を呈し、長軸40cm、短軸32cm、極めて浅いものである。Pit2は、円形ピットと溝状の掘り込みの組み合わせであり、円形ピットは長軸27.5cm、短軸25.5cm、深さ27cmであり、溝状の掘り込みは長さ77.5cm以上、最大幅30cmである。Pit3は、楕円形の二段掘りであり、長軸36cm、短軸24.5cm、深さ25cmである。Pit4は、円形を呈し、径27.5cmを計る。Pit5は、大型の楕円形を呈し、長軸92.5cm、短軸55cm、深さ8cmである。Pit6は、円形の二段掘りであり、長軸30cm、短軸23cmを計る。Pit7は、円形を呈し、長軸30cm、短軸28cmを計る。ピットに関しては、Pit5を除くと、直径4m程度の範囲にまとまって配置するようみえるが、配置に規則性が見られず、一つの遺構を構成するものとは考えにくい。

焼土及びカーボン集中箇所については、調査区の西側に偏って検出されている。焼土範囲は長軸60cmから長軸1m程度の不整楕円形を呈し、ピット3南側に1箇所、ピット4の周辺に4箇所、ピット5の南西に大小1箇所ずつ検出された。焼土集中範囲周辺にはカーボンが集中して検出されている。一方、これらとは別に、調査区中央の北側壁面に向って長軸3m程度の範囲でやや黒味を帯びた土色の部分があり、中央部分に直径45cm程度のカーボンを含む範囲が検出されている。この周辺でもカーボンがある程度検出されているが、ピット集中箇所で検出した焼土とは形状が異なっており、形成要因が異なっているものと考えられる。

なお、ピット集中箇所と焼土・カーボン集中箇所とは概ね重なる傾向があるとみえる。また、調査時において、ピット集中範囲の6層上面が硬く締まっていることが記録されており、また、その部分では6層上面が平坦で、かつ、8世紀代の須恵器が集中して出土している。これらを総合すると、874年に極めて近い時期において、ピットを用いた何らかの構造物の存在した可能性が考えられる。



第112図 6層上面検出遺構・遺物分布状況



第113図 Pit1出土遺物

焼土・カーボン集中箇所はその構造物に伴うか、または、構造物の焼失、あるいは構造物廃棄後の処分のための焼却等が想定できるかもしれない。なお、この場所の直下に当たる第6層中においては、掘立柱建物と焼土とか関連する状況で検出されていることは示唆に富むと考えられる。ただ、ピット群は建物を構成することは考えにくいことから、それ以外の構造物を検討する必要があるところである。

#### 〈Pit1出土遺物〉

429は壺である。胴部が張る形態で、最大径は12.2cmを測る。底部はゆるやかな丸底となっている。頸部からは欠損しているが、内径しながら直線的にのびる形態であると考えられる。

430は甕もしくは瓶の把手である。器面は摩滅が著しく、調整等は確認することができない。

### (3) 第6層出土遺物

奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は874年開闢岳噴出物層に直接被覆され、旧地表面の地形をそのままに留めている。第6層は標準層位では、a, b, cの3分層が可能である。a層は腐食が進行しており、特に畠跡周辺では黒色が強くなる。b層はオリーブ褐色を呈するが、河川跡付近では砂層となる場合がある。c層は7層青コラの二次堆積層である。

431～437は甕である。431は甕の胴部から口縁部で、口縁部にかけてゆるやかに外反する形態である。器壁のゆがみが大きく、外面には単位の太い工具ナデがみられる。敷領遺跡3号建物跡から出土している成川式土器と類似タイプの甕である。

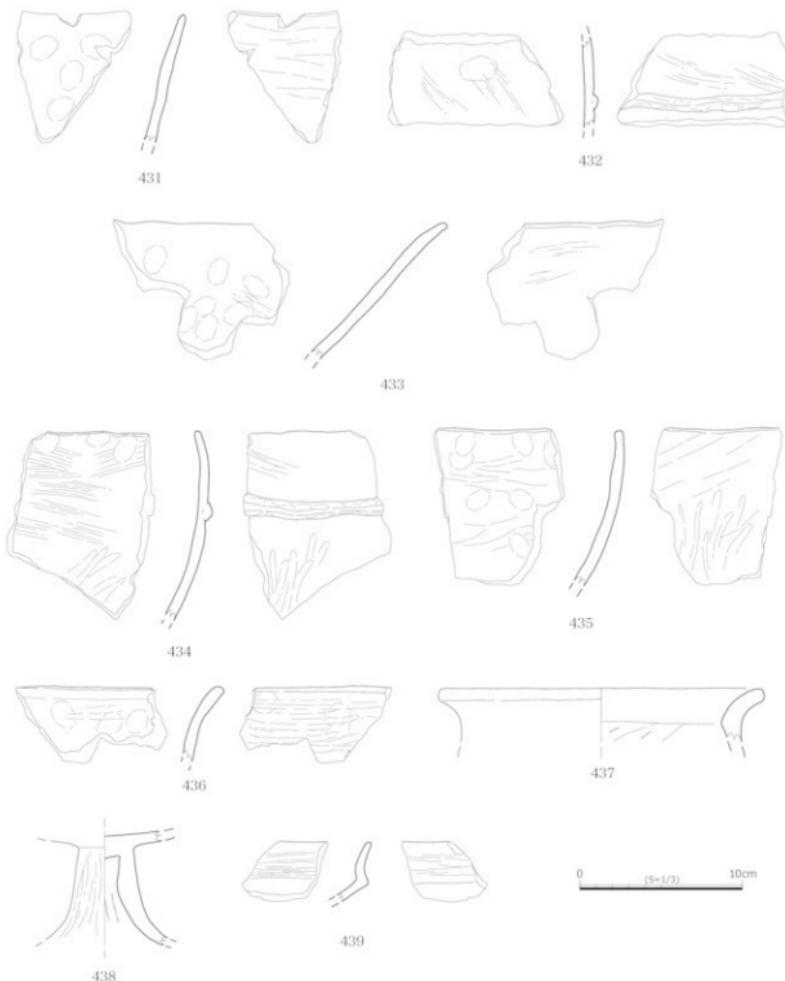
432は甕の突帶部である。一条の絡繩突帶が貼り付けられており、内外面はナデ調整で仕上げられる。

433は大きく外反する甕の胴部から口縁部である。口唇部はゆるやかなコの字状である。内外面ともナデ調整で、内面には指頭圧痕が多く見られる。

434は内湾する形態の甕の胴部から口縁部である。口縁部下には一条の絡繩突帶が貼り付けられる。内面はハケ調整、外面は突帶下部に縦方向のミガキ調整がみられる。

435は内湾する形態の甕の口縁部である。口唇部はコの字を呈する。内面は横方向のミガキ調整、外面は縦方向のミガキ調整がみられる。

436は口縁部からわずかに外反する形態の甕である。口唇部は丸く、器壁は重みが大きい。内面はナデ調整、外面は横方向のミガキ調整がみられる。

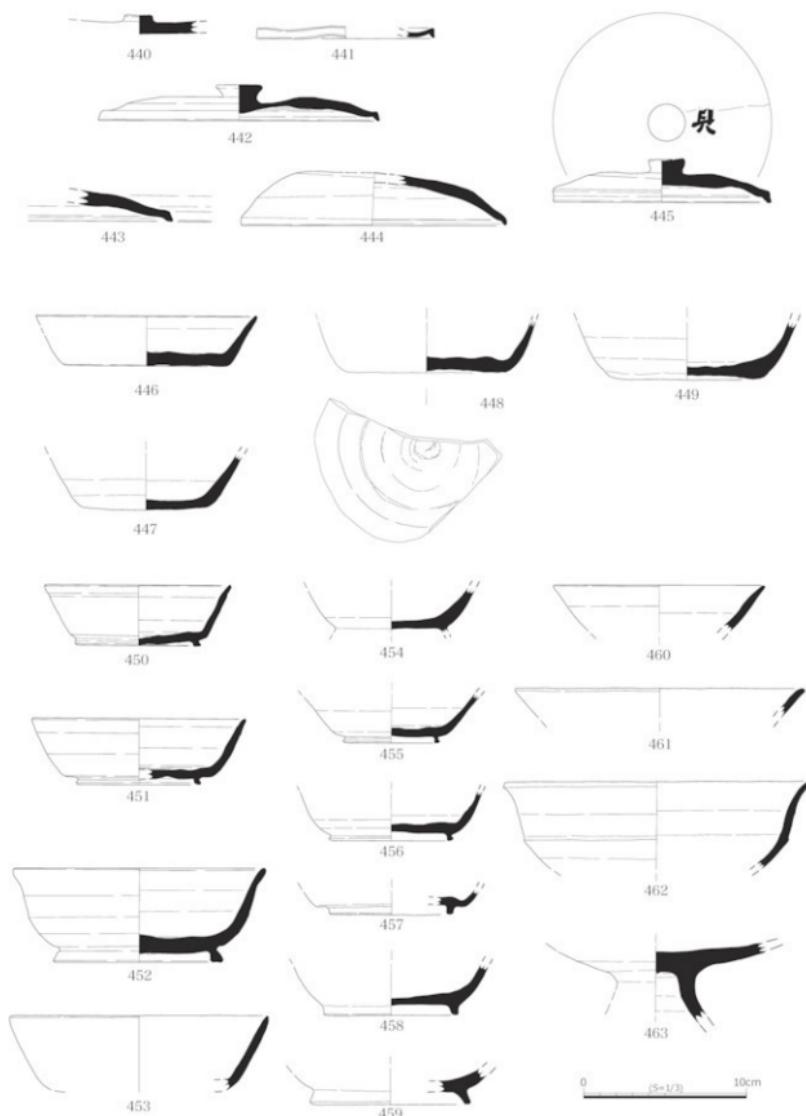


第114図 第6層出土遺物1

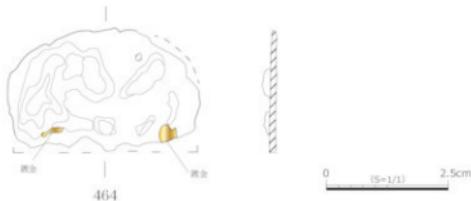
437はくの字に外反する壺の口縁部である。口径は復元径20.0cm、頸部径14.6cmを測る。頸部内面には強い稜がみられ、屈曲部下には斜め方向のケズリがみられる。

438・439は高杯である。438は高杯の脚部で、スカート状に大きく開く形態を呈する。脚接合部径は3.4cmを測る。外面には縦方向のミガキ調整がみられる。

439は高杯の口縁部である。杯部は体部で強く屈曲する形態で、口唇部にかけて外反する。内外面とも横方向のミガキ調整がみられる。



第115図 第6層出土遺物2



第116図 第6層出土遺物3

440は須恵器杯蓋のツマミ部分である。ツマミ径は1.7cmを測る。

441は須恵器杯蓋の端部である。ややゆがみが大きく、口径は復元径11.0cmを測る。

442は須恵器杯蓋である。口径17.4cm、器高2.2cm、ツマミ径2.8cmを測る。口唇部は嘴状になる。

444はツマミのない須恵器杯蓋である。口唇部は緩やかに嘴状になり、口径16.2cm、器高3.3cmを測る。全体形は歪みが大きい。

445は須恵器杯蓋で、ツマミ上面がやや凹んでいる。口径13.2cm、器高2.5cm、ツマミ径2.2cmを測る。天井部外面のツマミ横に墨書がある。欠損のため、墨書の全体は不明であるが、「真」の下半にみえる。天井部は回転ヘラケズリのちナデ調整がみられる。口唇部のカエリは痕跡程度である。発色は赤みをおびる。

446は須恵器杯である。口径13.5cm、器高3.0cm、底径9.9cmを測る。口縁部が外反し、内外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ調整が行われる。外底面は回転ヘラケズリ後にナデが行われる。

447は赤焼須恵器杯である。底径7.8cmを測り、底面がわずかに膨らむ。内外面とも回転ナデ調整がみられる。

448は須恵器杯である。底径9.6cmを測り、底部は上げ底状となる。内外面とも回転ナデ調整で仕上げられ、外底面は回転ヘラ切りの痕跡がみられる。

449は赤焼須恵器杯である。底径は復元径9.0cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で、底部は上げ底状となる。外底面には手持ちヘラ切りの痕跡がみられる。

450から459は高台付きの須恵器杯である。450は高台径7.5cm、高台高0.3cm、口径11.4cmを測る。口縁部にかけて直線的に開く形態を呈する。

451は高台径7.5cm、高台高0.3cm、器高3.9cm、口径12.9cmを測る。高台は短く開く形態を呈し、口縁部にかけて直線的に開く。

452は高台径10.2cm、高台高0.7cm、口径15.3cm、器高5.7cmを測る。胴部は椀状に丸みをおびる形態で、高台は踏ん張る形で開く。口唇部は外反する。

453は口径15.6cmを測る。底部形態は不明である。口縁部にかけて直線的に開く。

454は高台が欠損しているが、高台付須恵器である。体部は椀状に開く。

455は高台径5.7cm、高台高0.4cmを測る。内外面とも回転ナデ調整である。発色は青灰色を呈する。

456は高台径7.5cm、高台高0.3cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で、高台内面は回転ヘラケズリのち回転ナデ調整である。内面の発色は褐色をおびる。

- 457 は高台径 7.5cm、高台高 0.5cm を測る。高台の形状は箱形である。
- 458 は高台径 8.1cm、高台高 0.5cm を測る。高台内面は回転ヘラケズリのち、回転ナデ調整である。高台の形状は箱形で、体部はやや膨らみをもちらがら立ち上がる。発色は赤焼である。
- 459 は高台径 9.9cm、高台高 0.9cm を測る。高台はハの字に聞く形態で、やや高めである。高台接地面はわずかに M 字にくぼむ。
- 460 は口径 12.9cm を測る。口唇部は先細りとなり、直線的に聞く形態である。
- 461 は口径 17.7cm を測る。
- 462 は口径 18.6cm を測る。体部は膨らみをもち、外面には稜線をもつ。外面の発色は赤みをおび、体部下半はヘラケズリのち回転ナデ調整がみられる。
- 463 は須恵器高杯の脚部である。脚部はハの字状に大きく聞く。尽きない面は調整痕が消えケズリの痕跡が残る。外面は回転ヘラケズリのちナデ調整が行われる。盤の可能性もある。
- 464 は青銅製丸鞘である。幅 3.9cm、高さ 2.5cm、厚さ 0.1cm で半円形を呈する。右上部に一箇所孔が残っているが、鋸が発達した左上部にも孔があるものとみられる。表面の一部に金が残っており、鍍金が施されていたものと考えられる。SB2 の南側で出土した。

第3表 住居別遺物集計表

	幾 形 土 器	壺 形 土 器	高 杯 形 土 器	環 形 土 器	鉢 形 土 器	石 器	輕 石	不 明	計
SB 2	12	2						89	103
SB 3	61	8	1		4	15	4	795	888
SB 4	251	20	6	3	3	55	19	3,244	3,601
SB 5	85	12	2			13	14	825	951
SB 6	136	11	1	5	2	27	10	1,594	1,786
SB 9	315	46	21	9	1	40	14	2,613	3,059
SB 10	26	8	2		6	4		338	384
SB 13	17	8			1		1	146	173
SB 14	1	1			2	1		31	36
SB 20～22	126	24	12	3	4	16	5	1,235	1,425
SB 21	92	14		5	3	6	1	678	799
SB 23	112	19	10	2	2	6		779	930
SB 25	39	3	6	2	4	8	2	174	238
SB 27	98	10	9	2	1	8	1	623	752
SB 27～28	22	4	2	5		4		200	237
SB 28	46	4	1	7	3	3	1	303	368
SB 29	271	42	33	14	16	45	23	1,823	2,267
SB 30	19		1	2		4	2	115	143

第4表 VI区出土遺物収容表1

番号	区	層	遺構	部位	寸法					色調			剖面	目	剖面番号	
					口横	基高	高幅	断面横	断面高	その他	内面	外面				
1	C24	10	便	口～便槽部	30.0cm					7.5V97/4横	10V98/2灰黄褐	10V95/3C-5A-1 黄褐		石英、角閃石、白 色粒	1035	
2	C24	10	便	口縁部						7.5V98/5横	7.5V98/6縦	7.5V98/2縦		石英、長石、黒曜 石	1019	
3	C24	10	便	便槽		6.0cm	7.0cm	1.3cm		2.5V97/4横断面	10V98/4横	10V98/3横		石英、角閃石、白 色粒	1018	
4	C24	103	便	口～便～側槽	30.5cm					7.5V98/2横	7.5V97/4横断面	—		石英、角閃石、白 色粒	1238	
5	C24	103	便	便槽		(5.7cm)	(9.7cm)	9.8cm		7.5V98/4横	7.5V98/6縦	2.5V97/4横断面		石英、白色粒	737	
6	C24	103	便	便槽		(10.0cm)				10V98/5C-5A-1 黄褐	10V98/2横	10V98/6縦		石英、角閃石	649	
7	C24	103	便	口～側槽	(16.2cm)					7.5V98/7横	10V98/7横	10V98/3横		石英、角閃石、白 色粒	734	
8	C24	103	便	底面	(9.0cm)					3V98/6縦	7.5V98/4C-5A-1 横	10V98/8縦		石英、白色粒	1401	
9	C24	103	便	底面	(6.3cm)					10V97/4C-5A-1 横	2.5V98/6縦	2.5V98/6縦		石英、角閃石	649	
10	C24	103	二丁土槽	便槽	2.6cm	2.2cm	0.8cm			10V98/7横	10V98/7横	10V98/3横		石英、鵝卵石		
11	C24	103	高杯	便槽						2.5V95/5C-5A-1 横	2.5V95/5C-5A-1 横	10V98/7横		石英、角閃石		
12	C24	103	高杯	便槽?						10V95/9横	2.5V97/7横	2.5V97/1灰白		石英、角閃石、白 色粒	1248	
13			高杯?							10V97/4横	10V98/7横	10V98/7横		石英、赤褐色	10784	
14			高杯							7.5V97/6横	7.5V97/6横	7.5V97/6横		石英、白色粒		
15			高杯							10V98/6C-5A-1 横	10V98/6C-5A-1 横	10V98/6C-5A-1 横		石英、角閃石	948	
16	B-C24	104	便	口～側槽	(26.6cm)	20.5cm	4.9cm			2.5V95/4C-5A-1 横	10V95/4横	7.5V97/2明褐色		石英、角閃石、白 色粒	1021	
17	B24	104	便	口～側槽	(21.4cm)	24.1cm	4.8cm	7.0cm	2.0cm	2.5V95/4C-5A-1 横	—	10V95/4横		石英、角閃石	1027	
18			便	口～側～側槽	(30.8cm)					2.5V95/1C-5A-1 横	2.5V95/1C-5A-1 横	10V97/3C-5A-1 黄褐		石英、角閃石		
19			便	口～側～側槽	(31.0cm)					2.5V95/1C-5A-1 横	2.5V95/1C-5A-1 横	10V97/2灰白		石英、角閃石	956	
20	C24	104	便	口～側～側槽	24.1cm					10V97/6横	7.5V98/6横			鵝卵石、黑色粒	947	
21	C24	104	便	口～側～側槽	(26.2cm)					10V97/1C-5A-1 横	2.5V98/6横	2.5V98/6横		石英、角閃石	1051	
22			便	口～側～側槽	(27.0cm)					10V97/1C-5A-1 横	2.5V98/6横	2.5V98/6横		石英、角閃石	918	
23	B-C24	104	便	口～側～側槽	(29.0cm)					10V97/1C-5A-1 横	10V97/2灰白	10V97/2灰白		石英、角閃石	943	
24	C24	104	便	口～側槽部	(25.8cm)					10V97/2横	2.5V95/4C-5A-1 横	2.5V95/4C-5A-1 横		石英、角閃石	1084	
25	B24	104	便	口～側槽部	(25.0cm)					10V98/2横	2.5V97/2明褐色	10V98/2灰白		石英、角閃石	1048	
26	B24	104	便	口～側槽部	(30.2cm)					10V97/2横	10V97/2横	7.5V98/2灰白		石英、角閃石	958	
27	C24	104	便	口縁部						2.5V95/1C-5A-1 横	2.5V95/1C-5A-1 横	10V98/4明褐色		石英、角閃石	1052	
28	B24	104	便	口～側～側槽						2.5V97/4横	2.5V98/4横	2.5V98/4横		石英、角閃石	811	
29	B24	104	便	口～側下部						7.5V97/3C-5A-1 横	2.5V95/4C-5A-1 横	2.5V95/4C-5A-1 横		石英、角閃石、黑 色粒	1021	
30	B24	104	便	脚～脚下部		6.1cm	(8.1cm)	2.5cm		7.5V97/3横	7.5V97/3横	7.5V97/2明褐色		石英、角閃石、黑 色粒	1020	
31	B24	104	便	脚		6.1cm	(10.0cm)			7.5V97/3横	7.5V97/3横	7.5V97/2明褐色		石英、角閃石、白 色粒	1069	
32	C24	104	便	脚		5.5cm	4.5cm			7.5V95/4C-5A-1 横	2.5V97/4C-5A-1 横	10V97/4C-5A-1 横		石英、角閃石	1065	
33	B24	104	便	脚		6.1cm	4.9cm	1.3cm		7.5V95/4C-5A-1 横	2.5V97/4C-5A-1 横	2.5V97/4C-5A-1 横		石英、角閃石、黑 色粒	1013	
34	B24	104	便	脚		6.0cm	6.3cm	3.6cm		2.5V98/3C-5A-1 横	10V97/2横	10V97/2横		石英、角閃石、白 色粒	1013	
35	B24	104	便	脚		4.8cm	(8.9cm)	2.4cm		2.5V97/4C-5A-1 横	10V98/1横	10V98/1灰白		石英、角閃石	1041	
36	B24	104	便	脚		4.6cm	7.4cm	4.3cm		10V98/2横	10V98/2横	10V98/2横		石英、角閃石	1070	
37	B24	104	便	脚		3.3cm	7.5cm	5.0cm		2.5V97/2横	2.5V97/2横	2.5V97/2明褐色		石英、角閃石	1136	
38	C24-26	104	便	脚		(8.6cm)	(10.7cm)	4.2cm		10V97/2横	10V98/1灰白	10V98/1灰白		石英、角閃石	1032	
39	B24	104	便	脚～側下部		6.0cm	(10.5cm)	3.8cm		2.5V98/3C-5A-1 横	10V98/4明褐色	10V98/4明褐色		石英、角閃石、白 色粒	1022	
40	C24	104	便	脚～側下部		(9.0cm)	(9.5cm)	4.6cm		2.5V98/4横	7.5V98/6横	2.5V98/4明褐色		石英、角閃石	946	
41	B24	104	便	脚～側下部		(6.0cm)	(8.0cm)	2.5cm		2.5V98/3C-5A-1 横	10V98/4C-5A-1 横	10V98/4C-5A-1 横		石英、角閃石、長 石	1079	
42			便	脚～側下部		(6.2cm)	(8.0cm)	4.3cm		2.5V97/3横	—	2.5V97/3横		石英、角閃石	1069	
43			大型壺	脚～底部						帶環幅3.5cm	10V98/4C-5A-1 横	10V98/4C-5A-1 横		石英、角閃石		
44	B24	104	大型壺	脚～底部						帶環最大径(42.4cm)	2.5V97/4C-5A-1 横	2.5V96/6横	10V95/6縦	石英、角閃石、白 色粒、砂	1331	
45	B24	104	大型壺	脚～底部						帶環高7.5cm	7.5V97/4C-5A-1 横	7.5V97/4C-5A-1 横	—	石英、角閃石	1010①	
46	C24	104	大型壺	脚～底部						帶環高11.2cm	10V98/4C-5A-1 横	10V98/4C-5A-1 横	10V97/2明褐色	石英、角閃石	1123	
47	C24	104	大型壺	脚～口縁部						帶環高12.7cm	10V98/4C-5A-1 横	10V98/4C-5A-1 横	2.5V97/3明褐色	石英、角閃石	996	
48	B24	104	大型壺	脚～底部						帶環高13.1cm	2.5V98/6横	2.5V98/6横	2.5V98/6横	石英、角閃石、長 石、黑曜石	1011	
49	B24	104	大型壺	脚～底部						10V98/4C-5A-1 横	10V98/4C-5A-1 横	10V98/4C-5A-1 横	—	石英、角閃石	1010②	
50	B24	104	大型壺	脚～底部						2.5V98/7横	7.5V98/7横	7.5V98/7横		石英、角閃石、白 色粒	971	
51	B24	104	大型壺	脚～底部						—	7.5V97/6縦	7.5V97/6縦	7.5V97/6縦		石英、帶環、白色 砂	1010③
52			大型壺	脚～底部						2.5V97/6縦	7.5V97/6縦	2.5V97/6縦		石英、角閃石	1141	
53			大型壺	脚～底部						2.5V98/6縦	2.5V98/6縦	2.5V98/6縦		石英、角閃石、白 色粒	1066	

第5表 VI区出土遺物観察表 2

番号	区	層	遺構	部類	寸法					色調				種別	目上番号	
					口径	脚高	底径	脚底径	脚底高	その他	内面	外面	断面	月		
54	B26	504	壺	底部		(8.2cm)				2.5V96/6橙	2.5V97/3桃赤梗	2.5V97/3桃赤梗		石英、角閃石	1018	
55	B26	504	壺	底部		(9.3cm)				3V98/2白	3V97/2明褐色			石英、輝	1126	
56	C26	504	壺	底部		9.0cm				2.5V96/6橙	2.5V96/6橙	2.5V96/6橙		石英、角閃石、白 色粒	1060	
57	C26	504	壺	底部						1005/6赤	1006/4C2.5V1赤 梗	1006/4C2.5V1赤 梗		石英、角閃石、白 色粒	974	
58	C26	504	壺	底部						2.5V97/4桃赤梗	2.5V97/4桃赤梗	2.5V97/4桃赤梗		石英、角閃石、白 色粒		
59	C26	504	鉢	口～脚部	(21.7cm)					2.5V96/6橙	1005/6赤	1006/4C2.5V1赤 梗		黄地粒	1061	
60	B26	504	鉢	口～底部	22.0cm	9.7cm	(9.5cm)			1006/4C2.5V1赤 梗	1006/4C2.5V1赤 梗	1006/4C2.5V1赤 梗		石英、角閃石	1068	
61	B26	504	鉢	口～脚部	13.5cm	6.8cm				高台径:6.5cm 高台高:6.4cm	3V97/2明褐色	2.5V97/3桃赤梗	2.5V7/2灰黃	石英、角閃石	1039	
62	C26	504	鉢	口～底部	10.6cm	8.7cm	8.5cm			3V97/4C2.5V1赤 梗	2.5V97/4桃赤梗	2.5V97/4桃赤梗		角閃石、白色粒	945	
63	B+ C26	504	鉢	脚部				6.0cm	3.2～4.6cm	萬古青:2.0cm 底径:5.5cm	10V94/3C2.5V1 黄地粒	10V94/4C2.5V1 黄地粒	10V97/4C2.5V1 黄地粒		角閃石	926
64	B26	504	高杯	新～脚部	17.8cm					析底径:5.6cm 腰合径:5.2cm	3V97/8	3V98/8	3V97/8	桂皮、小繭	1133	
65	B26	504	高杯	脚部	(20.8cm)					3V95/2白	3V96/6白	3V96/6白		白地粒	1009	
66	C25	504	高杯	新部						複合接縫:4.8cm	10V97/3明黃地	3V97/8	2.5V7/2灰黃	2.5V4/8赤梗	石英、白色粒	963
67	B25	504	高杯	脚部						2.5V7/2灰黃	2.5V7/4灰黃	2.5V96/6白		石英、白色粒	1063	
68	B26	504	高杯	脚部		10.7cm	9.2cm			筒前徑:3.0cm 腰合接縫:4.3cm	10V92/2白	10V92/1黑	10V92/1黑	桂皮粒	1137	
69	B26	504	高杯	脚部		8.9cm	9.3cm			筒前徑:3.0cm 腰合接縫:3.7cm	2.5V97/4C2.5V1 白			桂皮粒、織入	1024	
70	C26	504	壺	底～脚部				3.5cm		3V97/8	7.5V6/6白	3V97/8		白地粒	1058	
73	C25	505	壺	口縫部	(23.0cm)					3V97/4C2.5V1 白	7.5V96/2C2白			石英、角閃石、黃 色粒	1190	
84	C25	505	壺	口縫部						10V95/3灰黃地	10V94/3白			石英、角閃石	984①	
85	C25	505	壺	脚～脚部	(4.1cm)	(4.0cm)	1.1cm			7.5V96/6白	10V95/3明黃地	10V97/4C2.5V1 黄地		石英、角閃石	1085	
86	C25	505	壺	脚部		7.6cm	(11.0cm)	6.1cm		2.5V95/6(明)赤梗	2.5V96/6白	1005/6白		石英、白色粒、黑 色粒	1082	
87	C25	505	壺	脚部		6.4cm	(9.2cm)	5.3cm		1006/6赤梗	2.5V96/6白	1006/6赤梗		石英、角閃石	1083	
88	C25	505	壺	脚部	(5.0cm)	4.8cm				1005/6(明)黄地	10V97/3明黃地			石英、角閃石、白 色粒	1081	
89	C25	505	壺	脚部	5.3cm	7.6cm	3.3cm			2.5V97/2明赤梗	3V98/2白	1006/8赤梗		石英、角閃石	1178	
90	C25	505	壺	脚部	7.2cm	8.6cm	3.3cm			2.5V97/3桃赤梗	1006/6赤梗	1006/6赤梗		石英、角閃石、白 色粒	1177	
91	C25	505	壺	脚部	5.6cm	8.7cm	4.3cm			1006/6赤梗	2.5V96/6白	1006/8赤梗		石英、角閃石	982	
92	C25	505	高杯	脚部						7.5V97/2灰黃地	7.5V97/3灰黃地	7.5V7/1灰白		石英、角閃石、白 色粒	1198	
93	C25	505	高杯	脚部						3V97/8	3V97/8	3V97/8		石英、角閃石、白 色粒	1191	
94	505	壺	口縫部	(20.1cm)						7.5V96/6白	7.5V96/6白			白地粒、赤色粒		
95	C25	505	壺	底				8.5cm		10V96/3C2.5V1 黄地	7.5V96/6白			石英、角閃石	984②	
102	C25	506	壺	口～脚部	(20.8cm)					10V98/3灰白	10V98/1灰白	10V98/1灰白		石英、角閃石、白 色粒	1021	
103	C25	506	壺	底						2.5V97/4脚	2.5V98/4脚	2.5V98/4脚		石英、角閃石	1129	
104	C25	506	壺	口～脚部	(27.3cm)					1006/6赤梗	1006/4C2.5V1 白	1006/2赤梗		石英、角閃石	110①	
105	C25	506	壺	口縫部	(30.0cm)					7.5V98/2白	7.5V98/3C2.5V1 白	10V98/2白		石英、角閃石、黃 色粒	1147	
106	C25	506	壺	脚部						7.5V98/2白	7.5V97/2明赤梗	2.5V97/3桃赤梗		石英、角閃石、黃 色粒	114②	
107	C25	506	壺	脚部						2.5V96/4C2.5V1 黄地	7.5V97/2明赤梗			石英、角閃石	113②	
108	C25	506	壺	脚部						3V98/2白	3V98/2白	3V98/2白		石英、角閃石	1151	
109	C25	506	壺	脚～脚下部	(6.8cm)	(8.5cm)	3.8cm			2.5V7/2灰黃	1006/6赤梗	2.5V7/2灰黃		石英、角閃石、白 色粒	1142	
110	C25	506	壺	脚部	(4.9cm)	(9.0cm)	4.3cm			7.5V98/4灰白	7.5V98/4灰白	7.5V98/4灰白		石英、角閃石、黃 色粒	1147	
111	C25	506	壺	脚部	7.1cm	8.8cm	2.9cm			10V98/4灰白	7.5V97/2明赤梗	2.5V97/3桃赤梗		石英、角閃石、黃 色粒	114②	
112	C25	506	壺	脚部	5.8cm	8.3cm	4.4cm			2.5V97/4脚	2.5V97/4脚	1005/6赤		石英、角閃石	1121	
113	C25	506	壺	脚部	(5.3cm)	(7.8cm)	3.8cm			10V96/3C2.5V1 白	7.5V97/1明黃地	7.5V97/1明黃地		石英、角閃石	1120	
114	C25	506	壺	脚～脚下部	(5.1cm)	(6.0cm)	4.5cm			3V98/2白	7.5V98/2白	2.5V97/4桃赤梗		石英、角閃石、白 色粒	1284	
115	C25	506	壺	脚～脚部						3V96/3C2.5V1 白	7.5V98/2白	7.5V98/2白		石英、角閃石	1220	
116	C25	506	壺	脚～脚下部						2.5V95/6明赤梗	7.5V98/2白	7.5V98/2白		石英、角閃石、黃 色粒	1235	
117	C25	506	壺	底～脚下部						2.5V96/6白	7.5V98/2白	2.5V98/2白		石英、角閃石、黃 色粒	1210	
118	C25	506	壺	底～脚下部						2.5V96/6赤梗	2.5V96/6赤梗	10V97/4C2.5V1 白		石英、角閃石、黃 色粒	1207	
119	C25	506	高杯	新部	(22.2cm)					3V98/6白	7.5V97/8	7.5V97/8		1004/8赤	1198	
120	C25	506	高杯	新部	(23.8cm)					3V98/6白	—	1004/8赤		石英、白色粒	1164	
121	C25	506	高杯	新部	(21.3cm)					3V97/8	3V97/8	3V97/8		石英、白色粒	1148	
122	C25	506	高杯	腰合接縫～脚部						脚接縫:5.5cm	7.5V97/2明褐色	3V97/4C2.5V1 白		石英、角閃石、白 色粒	113①	
123	C25	506	高杯	脚部						10.7cm	10.7cm	3V97/8		石英、角閃石、白 色粒	1220	
124	C25	506	高杯	脚部						11.7cm	11.7cm	7.5V98/2明黃地		石英、角閃石、白 色粒	1220	

第6表 VI区出土遺物観察表3

番号	区	編	遺構	部位	寸法						色調	断面	剖面	目次番号	
					口幅	裏幅	高さ	横幅	脚踏幅	脚踏高					
125	C25	S16	高杯	脚踏							脚踏合造形(4.1cm)	7.5V96/6縦	7.5V96/6縦	7.5V94/1横尻	石灰、角閃石、褐色
126		S16	可	底～脚踏							脚踏最大幅:7.5cm 脚踏厚:6.5cm	7.5V97/9縦	2.5V97/9縦	2.5V95/1赤尻	石英、白色粒
127	C25	S16	鉢	足形	7.5cm	4.4cm	3.8cm				10V108/1赤黄縦	10V108/2赤白	10V108/2赤黄縦	10V108/2赤白	石英、角閃石
130a		S17	便	口～脚踏	25.1cm	21.0cm					10V97/6明黄縦	2.5V95/6明赤縦	2.5V95/6明赤縦		石英、角閃石 ①
132b		S17	便	口～脚踏	25.1cm	21.0cm					10V97/6明黄縦	2.5V95/6明赤縦	2.5V95/6明赤縦		石英、角閃石 ②
133	C26	S17	便	口～脚踏	27.2cm						10V98/28合	10V98/28白	10V98/28白		石英、白色粒
134	C26	S17	便	口～脚踏	(27.3cm)						最大幅(28.4cm) 脚踏合造形	2.5V95/6明赤縦	2.5V95/6明赤縦		石英、角閃石
135	C26	S17	鉢	足形	(13.1cm)	9.2cm	5.4cm	5.3cm	0.8cm		10V97/6明黄縦	2.5V95/62.5cm× 4.5cm	2.5V95/62.5cm× 4.5cm		石英、赤褐色
136	C26	S17	鉢	脚踏		4.1cm	4.5cm	0.9cm			10V97/6明黄縦	2.5V94/6赤縦	2.5V94/6赤縦		石英、白色粒
137	C26	S17	便	脚～脚踏		6.5cm	6.3cm	1.0cm			7.5V97/6赤縦	2.5V7/6赤縦	2.5V7/6赤縦		石英、纖
138		S17	便	脚～脚踏下部		(6.8cm)	(6.7cm)	1.6cm			7.5V97/6明黄縦	10V96/7赤縦	10V96/7赤縦		石英、白色粒
139		S17	便	脚～脚踏下部							DY93/42.5cm× 1.5cm	2.5V95/62.5cm× 1.5cm	2.5V95/62.5cm× 1.5cm		石英、白色粒
140	C26	S17	便	底～底脚	11.7cm	3.2cm	(6.5cm)				N3/時縫	N3/4K	N3/4K		綠色
141	C26	S17	便	底～底脚	9.2cm	4.3cm	6.1cm				7.5V7/1赤縦	10V7/1赤白	10V7/1赤白		やや砂粒質
142	C26	S17	便	底～底脚	8.2cm	3.8cm					N5/8K	N4/8K	N7/8K合		砂
146		S19	便	口縫							2.5V97/7赤歩縫	7.5V99/2赤白	7.5V99/2赤白		石英、角閃石
147		S19	便	口縫							7.5V97/2明赤縦	7.5V96/1縦	7.5V97/2明赤縦		石英
148		S19	便	脚～脚踏		(7.8cm)	(9.0cm)	1.3cm			7.5V98/1赤縦	7.5V98/1赤黄縦	7.5V98/1赤白		石英、角閃石
149		S19	便	脚踏		5.8cm	7.8cm	3.0cm			2.5V94/1赤縦	10V65/6縦	10V4/6赤		石英、白色粒
150		S19	便	脚～脚踏下部		(6.0cm)	(6.6cm)	1.9cm			10V8/10縫	10V8/2赤縦	10V8/2赤縦		石英、角閃石
151		S19	便	脚踏		(6.0cm)	(7.7cm)	3.3cm			10V8/2赤白	10V8/2赤白	10V8/2赤白		石英、角閃石
152	B27	S19	便	脚～脚踏下部		(4.2cm)	(6.0cm)	2.4cm			10V9/12縫	2.5V97/62.5cm× 1.5cm	2.5V97/62.5cm× 1.5cm		石英、白色粒
153		S19	便	脚踏							骨縫幅:3.5cm	2.5V96/6縫	2.5V96/6縫		石英
154	B27	S19	便	底～脚踏							10V7/42.5cm× 4.5cm	10V7/42.5cm× 4.5cm	10V7/42.5cm× 4.5cm		石英、角閃石
155		S19	便	底		(8.2cm)					10V5/6縫	2.5V97/6赤歩縫	2.5V97/6赤歩縫		石英、角閃石
157	B28	S10	便	脚踏		6.8cm	9.6cm	5.7cm			10V7/31.5cm× 4.5cm	10V7/31.5cm× 4.5cm	10V8/2赤白		石英、角閃石
158	B28	S10	便	脚踏		4.8cm	7.5cm	4.8cm			7.5V98/2赤縦	7.5V98/2赤縦	7.5V98/2赤白		石英、角閃石
159	B28	S10	便	口縫							10V8/2赤縫	7.5V98/2赤縫	7.5V98/2赤縫		石英、角閃石
160	C24	S112	便	脚踏		(7.0cm)					2.5V95/62.5cm× 1.5cm	2.5V95/6赤歩縫	2.5V95/6赤歩縫		石英、白色粒
161	C24	S112	便	脚踏		(8.0cm)					2.5V94/1赤縫	2.5V95/6赤歩縫	2.5V95/6赤歩縫		石英、白色粒
162	C25	S113	便	口～脚踏	(29.1cm)						脚踏幅(29.0cm) 脚踏長:3.8cm 脚踏厚:2.4cm 口縫幅:3.8cm	10V93/12cm× 1.5cm	7.5V93/12cm× 1.5cm	7.5V94/1縫	石英、角閃石、鐵
163	C25	S113	便	口～脚踏	(28.5cm)						10V93/12cm× 1.5cm	7.5V93/12cm× 1.5cm	7.5V93/12cm× 1.5cm		石英、角閃石、鐵
164	C25	S113	便	口縫	(23.5cm)						脚踏合造形:6.3cm 脚踏幅:6.3cm	10V5/1赤縫	10V5/1赤縫		石英、角閃石
165	C24	S113	便	脚踏		7.8cm	9.1cm	2.8cm			10V6/4赤縫	10V6/6赤縫	10V6/6赤縫		石英、角閃石、白色粒
166	B25	S113	便	口縫							10V7/21.5cm× 4.5cm	2.5V96/6縫	2.5V96/6縫		石英、角閃石
167	B25	S113	便	脚踏		5.2cm	9.8cm	2.3cm			10V7/21.5cm× 4.5cm	10V7/21.5cm× 4.5cm	10V8/2赤縫		石英、角閃石、鐵
168	C24	S113	便	脚踏		7.1cm	7.2cm	3.5cm			7.5V98/6縫	7.5V98/6縫	7.5V98/6縫		石英、角閃石、青苔
169	C24	S113	大型便	突牽縫							突牽縫:2.5cm	10V7/21.5cm× 4.5cm	10V7/21.5cm× 4.5cm		石英、角閃石、白色粒
170	C24	S113	便	脚踏	(22.0cm)						10V8/21.5cm× 4.5cm	2.5V96/6縫	2.5V96/6縫		石英、角閃石
171	C24	S113	高杯	脚踏							脚踏合造形:6.0cm	2.5V97/2明赤縫	10V7/31.5cm× 4.5cm		石英、角閃石
172	B25	S113	高杯	脚踏							10V7/31.5cm× 4.5cm	7.5V97/31.5cm× 4.5cm	7.5V97/31.5cm× 4.5cm		石英、角閃石
173		S113	便	底～脚踏		3.4cm					7.5V97/6縫	7.5V97/31.5cm× 4.5cm	7.5V97/31.5cm× 4.5cm		石英、角閃石
175	C24	S114	便	口～脚踏	(27.0cm)						無踏幅(25.3cm)	10V7/6/42.5cm× 1.5cm	10V7/6/42.5cm× 1.5cm		蛋白、白色粒、半透明
176	C25	S117	便	脚踏	8.0cm	9.0cm	2.1cm				10V6/42.5cm× 1.5cm	2.5V97/6赤縫	2.5V97/6赤縫		白色粒
177	C25	S117	便	脚踏	7.0cm	9.3cm	2.9cm				2.5V97/6赤縫	2.5V97/6赤縫	2.5V97/6赤縫		褐色粒
178	C25	S117	口縫上塗	品							幅:6.0~6.2cm	10V6/2赤縫	2.5V96/2赤縫		石英、角閃石
180	C25	S118	便	口縫							10V9/6/赤縫	10V9/6/赤縫	10V9/6/赤縫		石英、角閃石、青苔
181	C26	S121	便	口縫	(22.3cm)						脚踏合造形(2.8cm)	7.5V97/62.5cm× 1.5cm	7.5V97/62.5cm× 1.5cm		石英、青苔、白色粒
182	C25	S121	便	脚踏							10V7/6/赤縫	10V7/6/赤縫	10V7/6/赤縫		石英、青苔、黑色斑
183	B25	S122	便	口縫							10V7/6縫	10V7/6縫	10V7/6縫		白色粒
184	B25	S122	高杯	脚踏							脚踏合造形(2.8cm)	10V8/2赤縫	2.5V97/6赤縫		石英
185	C26	S125	便	口～脚踏	(27.4cm)						脚踏合造形:8.7cm	2.5V97/62.5cm× 1.5cm	2.5V97/62.5cm× 1.5cm		石英、角閃石
186	C26	S125	便	口縫							10V6/3/赤縫	10V7/6縫	10V7/6縫		石英、角閃石

第7表 VI区出土遺物觀察表4

品号	区	属	被覆	部位	寸法				色調	固形相	取上量		
					口徑	高さ	底径	脚直径					
187	C26	3025	黒	被膜		6.3mm	(9.0mm)	3.5cm	IVYH/67-45°-櫻	IVYH/67-45°-櫻	100%水	石英、角閃石	2665
188	C26	3025	黒	口～周囲	(15.0mm)				IVYH/67-45°-赤	IVYH/67-45°-赤	100%水	石英、角閃石、鷹	2711
189	C26	3025	黒	底～脚部					IVYH/70-65°-櫻	IVYH/70-65°-櫻	100%水	石英、赤紫色	2617
190	B25	3027	高斯	被膜	(28.0mm)				IVYH/70-65°-白	IVYH/70-65°-白	7.5mm/250粒	石英、角閃石	2750
191	B26	3027	高斯	被膜					IVYH/70-65°-黄	IVYH/70-65°-黄	2.5mm/4块水槽	石英、角閃石	2847
192	B26	3027	高斯	被膜					IVYH/70-65°-白	IVYH/70-65°-白	2.5mm/250粒	石英	2649
193	B26	3027	高斯	被膜					IVYH/70-65°-白	IVYH/70-65°-白	2.5mm/250粒	石英、角閃石	2596
194	B26	3027	黒	被膜	(13.0mm)				IVYH/70-65°-白	IVYH/70-65°-白	2.5mm/250粒	石英、角閃石	2597
195	B26	3027	黒	口～底面	4.0cm	7.5cm	4.0cm		IVYH/70-65°-櫻	IVYH/70-65°-黄	10mm/250粒	石英、角閃石、白色粒	2667
196	B26	3027	黒	底面	4.0cm	15.0cm	8.0~8.5mm	4.7cm	IVYH/70-65°-白	IVYH/70-65°-白	10mm/250粒	石英、角閃石	2668
197												吸55~94	
199	B26	3028	高斯	被膜					IVYH/66-黄鐵	IVYH/66-櫻	IVYH/66-櫻	白色粒	2595
200	C27	3028	黒	口縁部					IVYH/66-白	IVYH/66-白	10mm/250粒	石英、角閃石、白色粒	2613
201	C26	3028	黒	口縁部					IVYH/66-白	IVYH/66-白	10mm/250粒	石英、角閃石	2688
202	C26	3028	黒	口縁部					IVYH/66-白	IVYH/66-白	10mm/250粒	石英、角閃石	2699
203	C26	3028	黒	脚～下部		5.4cm	6.8cm	2.0cm	IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/4块水槽	石英、角閃石	2792
204	C26	3028	黒	底部	(4.0cm)				IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/7.5cm	擦痕、暗紅粒	2665
205	C27	3029	黒	被膜					IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/7.5cm	石英、角閃石、櫻色粒	2797
206	C25	3029	黒	底～擦痕		3.5cm			IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/65粒	雪母	2800
207		3029	黒	底～擦痕		3.2cm			IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/65粒	吸55~68	
208	C27	3029	高斯	被膜		(10.0mm)	7.8cm		IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石	2826
209		3029	高斯	被膜		(14.0mm)			IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/9块水槽	吸55~93	
210	C26	3029	黒	口縁部					IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石	2824
211	C26	3029	黒	底～擦痕	(11.0mm)				IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石	2842
212	C27	3030	黒	口縁部					IVYH/66-白	IVYH/66-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石、白色粒	2861
213	C27	3030	黒	被膜		7.8cm	8.7cm	3.4cm	IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石、擦痕	2863
214	C27	3030	黒	被膜		(8.6cm)	(10.7cm)	4.5cm	IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石、黃	2861
215	C26	3030	黒	被膜		(5.4cm)	7.2cm	2.0cm	IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石、黑	2798
216	C27	3030	黒	口縁部	(11.0mm)	6.1cm	5.4cm		IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石、櫻色粒	2860
217	C27	3030	黒	被膜					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	雪母	2862
218	C27	3030	黒	被膜					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	吸55~68	
219	C26	3030	黒	被膜					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石、黑	2824
220	C27	3030	黒	口～周囲	(11.0mm)	6.1cm	5.4cm		IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石	2824
221	C27	3030	高斯	被膜		(17.0mm)	6.7cm		IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/9块水槽	石英、角閃石	2857
222		3030	黒	底～擦痕	(10.2mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/9块水槽	吸55~90	
223	C26	3030	黒	被膜		8.4cm	(8.8cm)	2.0cm	IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/9块水槽	石英、角閃石	2842
224	C25	9	黒	口～脚部	(26.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	石英、褐色	2188
225	C24	9	黒	口縁部	(30.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石	1798
226	C25	9	黒	口～脚部	(30.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/7块水槽	石英、角閃石	1872
227	C26	9	黒	口～脚部	(32.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/8块水槽	石英、角閃石、黑色粒	2445
228	C25	9	黒	口～脚部	(32.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/8块水槽	石英、角閃石	1905
229	C25	9	黒	口～脚部	24.0cm				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	—	石英、角閃石	1878
230	C25	9	黒	口～脚部	(26.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/8块水槽	石英、角閃石	2183
231	B25	9	黒	口縁部	(30.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	100%水	石英、角閃石、白	2047
232	C24	9	黒	口縁部					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	7.5mm/45粒	石英、角閃石、露晶	1664
233	C24	9	黒	口縁部					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	7.5mm/45粒	石英、長石、露晶	2673
234	C26	9	黒	口縁部					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	7.5mm/45粒	石英、褐黃色	2673
235	C26	9	黒	口縁部	(27.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	7.5mm/45粒	石英、角閃石	2579
236	B25	9	黒	口縁部					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	100%水	石英、角閃石、白	2047
237	C25	9	黒	口縁部	(22.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	2.5mm/45粒	石英、角閃石	1711
238	B25	9	黒	口縁部	(21.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	100%水	石英、角閃石、一般②	2392
239	C24	9	黒	口縁部					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	100%水	石英、角閃石	1769
240	C27	9	黒	口縁部					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	100%水	石英、角閃石	2765
241	C24	9	黒	口～脚部	(22.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	100%水	石英、角閃石、白	1663
242	C25	9	黒	口～脚部	(21.0mm)				IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	100%水	石英、角閃石	1664
243	C25	9	黒	口縁部					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	100%水	石英、角閃石	1769
244	C25	9	黒	口～脚部					IVYH/67-45°-白	IVYH/67-45°-白	100%水	石英、角閃石、白	1610

第8表 VI区出土遺物観察表5

番号	区	層	遺物	形態	部位	寸法						色調	調和度	目上番号			
						口径	高さ	底径	脚跡部	脚跡高	その他	内面	外面	裏面	片		
245	CIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:2.8cm	1095/6.0cm	1095/6.0cm	1095/6.0cm		角開石,白色	1802
246	CIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:2.8cm	1095/6.0cm	1095/6.0cm	1095/6.0cm		石英,角開石,褐色	1728
247	CIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:3.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,褐色	2198
248	CIS	9	便	脚一側脚片							銅目黄赤開闊:3.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,褐色	1908
249	CIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:3.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,白色	1827
250	CIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:4.4cm*	3/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	1095/6.0cm		石英,角開石,白色	1775
251	CIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:4.4cm*	3/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	1095/6.0cm		石英,混色	2299
252	CIS	9	便	口一側脚							銅目黄赤開闊:4.4cm*	3/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		角開石	1780②
253	CIS	9	便	口縁部	(21.4cm)						銅目黄赤開闊:3.4cm	1095/6.0cm	1095/6.0cm	1095/6.0cm		石英,褐色	1638
254	CIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:4.0cm*	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1747
255	CIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:4.5cm*	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1747
256	CIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:4.7cm	2.5/95/6.0cm	1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1747
257	CIS	9	便	袋状部							銅目黄赤開闊:4.7cm	2.5/95/6.0cm	1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,白色	1991
258	BIS	9	便	口縁部							銅目黄赤開闊:4.8cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	2001②
259	CIS	9	便	脚上部							1095/6.0cm	1095/6.0cm	1095/6.0cm		石英,角開石	1760	
260	CIS	9	便	脚一側下部		7.5cm	9.3cm	3.0cm			1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	2487	
261	CIS	9	便	脚部		(7.6cm)	(9.1cm)	4.2cm			1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	2767	
262	CIS	9	便	脚部		(4.6cm)	(6.8cm)	1.8cm			1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1713	
263	CIS	9	便	脚部		4.6cm	5.8cm	2.0cm			1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	1095/6.0cm		石英,角開石,赤色	1320	
264	CIS	9	便	脚部		4.2cm	5.8cm	2.0cm			1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,褐色	1665	
265	CIS	9	便	脚部		(7.1cm)	(9.1cm)	2.7cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1437	
266	CIS	9	便	脚部		(6.6cm)	(8.1cm)	2.3cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,褐色	1629	
267	CIS	9	便	脚部		6.7cm	9.3cm	2.8cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1638	
268	CIS	9	便	脚部		6.0cm	(7.7cm)	1.9cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	2453	
269	CIS	9	便	脚部		8.6cm	10.8cm	2.9cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	2691	
270	BIS	9	便	脚部		7.0cm	8.3cm	3.0cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1403②	
271	CIS	9	便	脚部		(6.5cm)	(7.7cm)	2.5cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1319	
272	CIS	9	便	脚部		(7.4cm)	9.2cm	3.2cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1319	
273	CIS	9	便	脚部		(5.7cm)	(7.1cm)	2.4cm			1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,白色	1308	
274	CIS	9	便	脚部		9.0cm					2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,褐色	1427	
275	CIS	9	便	脚部		(7.8cm)	(9.4cm)	2.4cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,白色	1210	
276	CIS	9	便	脚部		6.0cm	9.2cm	1.8cm	脚跡部: (8.6cm)		2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,白色	1210	
277	CIS	9	便	脚部		9.4cm	10.2cm	2.0cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,黃,黒,雲母	1448	
278	CIS	9	便	脚部		7.2cm	8.4cm	3.0cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		中-中白,透明玻璃	1735	
279	CIS	9	便	脚部		(5.7cm)	(6.8cm)	1.4cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,赤,白,雲母	1879	
280	CIS	9	便	脚部		6.0cm	(8.0cm)	3.0cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,褐色(少)	1439	
281	BIS	9	便	脚部		5.5cm	7.7cm	2.7cm			—	1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,黃	2552
282	BIS	9	便	脚部		5.1cm	8.1cm	2.0cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	2485	
283	CIS	9	便	脚部		(7.7cm)	(8.8cm)	2.4cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,褐色	2152	
284	CIS	9	便	脚部		5.7cm	(8.1cm)	3.0cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1663	
285	CIS	9	便	脚部		4.7cm					—	1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,黃	1337
286	CIS	9	便	脚部		(7.2cm)	(8.9cm)	2.0cm			—	1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1578
287	CIS	9	便	脚部		(8.2cm)	(8.2cm)	3.1cm	脚跡部: (8.6cm)		1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石,透明玻璃,黑色	1842	
288	CIS	9	便	底部		(8.3cm)					2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	2111	
289	CIS	9	便	脚部		(8.1cm)	8.4cm	2.7cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,褐色	1452	
290	CIS	9	便	脚部		6.0cm	6.8cm	1.3cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,褐色	1471	
291	CIS	9	便	脚部		(8.1cm)	(8.9cm)	2.6cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石,透明玻璃,黑色	2066	
292	CIS	9	便	脚部		5.5cm	6.0cm	1.1cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	2435	
293	CIS	9	便	脚部		(8.3cm)					2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石	1342	
294	CIS	9	便	脚部		7.8cm	9.1cm	2.5cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,褐色	1668	
295	CIS	9	便	脚部		(8.0cm)	7.5cm	2.8cm			—	1095/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,黃	2020②
296	BIS	9	便	脚部		8.3cm	8.5cm	2.4cm			2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,黃	1444	
297	CIS	9	便	脚一側下部		8.1cm					2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm	2.5/95/6.0cm		石英,角開石,黃	1444	

第9表 VI区出土遺物觀察表6

番号	区	層	地質	品種	部位	寸法			その他	色調			累計数	台上番号	
						口径	筒高	底径		断面	外面	断面	内面		
298	C24	9	變	圓筒		[8.5cm]				SY08/10(白)	SY08/10(白)	2.5V07/4(赤茶)		石英、角閃石	1462
299	B24	9	變	圓筒		[7.3cm]	1.5cm			SY07/10(黒)	SY08/6(黒)	SY08/6(黒)		石英、褐色	1543
300	C25	9	變	圓筒		8.6cm	8.6cm	2.7cm		2.5V08/6(黒)	SY08/10(黒)	2.5V08/6(黒)		石英、白色	1616
301	C24	9	變	圓筒		6.4cm	7.5cm	1.6cm		無口で下平	2.5V05/6(明赤)	2.5V05/6(橙)		石英、角閃石	
302	C25	9	變	圓筒		7.8cm	9.8cm	4.2cm		2.5V06/10(黒, 黄)	2.5V06/10(黒)	2.5V06/10(黒)		石英、角閃石	1675
303	C25	9	變	圓筒		7.8cm	8.6cm	2.8cm		1005/6(赤)	7.5V06/6(黒)	2.5V05/6(明赤)		石英、角閃石、石	1761
304	C25	9	變	圓筒		6.3cm	7.4cm	2.8cm		SY07/6(赤)	2.5V06/6(黒)	2.5V05/6(黒)		石英、輝石	2114
305	C25	9	變	圓筒		7.4cm	8.6cm	2.2cm		2.5V07/6(赤赤)	2.5V07/6(明赤)	2.5V07/2(明赤)		石英、角閃石	2668
306	C25	9	變	圓筒		5.2cm	6.7cm	2.0cm		2.5V07/6(赤赤)	10V07/10(黒, 黄)	SY07/2(赤)		石英、角閃石	2746
307	C25	9	變	圓筒		[7.9cm]	[0.8cm]	1.6cm		10V08/10(黒, 黄)	2.5V06/10(赤)	1005/6(赤)		石英	2748
308	C25	9	變	圓筒		5.8cm	6.5cm	2.8cm		2.5V06/6(黒)	SY07/10(黒, 黄)	2.5V07/7(赤赤)		石英、角閃石	2759
309	C25	9	變	圓筒		7.6cm	9.1cm	2.8cm		7.5V08/6(黒)	SY07/2(黒)	10V08/10(黒, 黄)		石英、角閃石、白	2762
310	C25	9	變	圓筒		[7.2cm]				2.5V07/6(赤赤)	SY07/10(黒, 黄)	2.5V07/7(赤)		石英、角閃石、白	2775
311	C25	9	變	圓筒		4.8cm	6.1cm	2.3cm		10V07/10(黒, 黄)	2.5V06/6(黒)	1005/6(赤)		石英、角閃石	2843
312	C25	9	變	圓筒		[7.6cm]	[6.5cm]	3.0cm		SY08/6(黒)	SY08/10(黒)	SY08/6(黒)		石英、角閃石、白	2862
313	C25	9	變	圓筒		9.0cm	10.3cm	2.3cm		SY07/2(黒)	10V08/10(黒, 黄)	1005/6(赤)		石英、角閃石、白	2874
314	9	變	圓筒			9.8cm	[10.2cm]	2.8cm		2.5V05/6(明赤)	2.5V07/4(赤赤)	2.5V07/7(赤赤)		石英、角閃石	2889
315	C25	9	變	圓筒		6.4cm	8.4cm	2.3cm		2.5V07/10(赤)	2.5V07/10(黒)	2.5V07/7(赤)		石英、角閃石、白	2799
316	C25	9	變	圓筒		7.3cm	8.6cm	2.8cm		10V06/10(黒, 黄)	2.5V05/4(赤赤)	10V06/10(黒)		石英、角閃石	2900
317	C25	9	赤	盤	斜下部				斜面最大径：(36.0cm) 厚さ約：1.7cm	2.5V05/6(赤, 黄)	2.5V07/4(赤)	2.5V07/7(赤)		石英、角閃石、白	2906
318	C24	9	赤	盤	斜下部	(4.6cm)				SY07/6(赤)	SY07/6(赤)	7.5V05/1(純赤)		赤鉄	
319	C24	9	大型盤	盤					盤直径：(13.0cm)	1005/6(赤)	2.5V05/6(明赤)	1005/6(赤)		石英、赤鉄	2943
320	C24	9	赤	盤					1005/6(赤)	2.5V05/6(赤)	2.5V07/7(赤赤)		石英、角閃石、白	2952	
321	C25	9	赤	盤					1005/6(赤)	2.5V06/6(赤)	1005/6(赤)		石英、角閃石、白	2954	
322	9	赤	盤			(4.0cm)				2.5V04/6(赤, 黄)	2.5V06/6(赤)	1004/6(赤)		石英、角閃石、白	2957
323	C24	9	赤	盤		5.4cm				2.5V06/6(赤)	7.5V07/10(黒, 黄)	7.5V07/10(黒, 黄)		石英、角閃石、白	2959
324	C25	9	赤	盤	斜下部	(4.4cm)				10V07/10(黒, 黄)	2.5V07/2(赤)	2.5V07/2(赤)		石英、角閃石、白	2967
325	C25	9	赤	盤	斜下部	(8.0cm)				SY08/10(黒)	2.5V07/6(赤)	2.5V07/7(赤)		石英、角閃石	2974
326	C24	9	赤	盤	斜下部					1006/6(赤, 黄)	2.5V07/2(明赤)	2.5V07/7(明赤)		石英、角閃石	2982
327	C24	9	無縫合	盤	斜下部	(11.5cm)	17.8cm	7.0cm	斜面最大径：(17.5cm)	1005/6(赤)	7.5V08/6(赤)	—	石英、角閃石、白	2986	
328	C25	9	赤	盤	斜下部	(10.0cm)				1005/6(赤)	1004/6(赤)	1004/6(赤)		石英、角閃石	2994
329	C24	9	無縫合	盤	斜下部	(11.0cm)				SY07/6(赤)	SY07/7(赤)	10V07/1(純赤)		石英、角閃石	2995
330	C25	9	長盤	盤		(11.7cm)				2.5V07/6(赤)	SY07/10(明赤)	2.5V07/6(赤)		石英、角閃石	3003
331	C25	9	赤	盤					黄帶赤：3.6cm	2.5V05/6(赤, 黄)	2.5V05/2(赤赤)	2.5V05/6(赤, 黄)		石英、褐色	3023
332	B24	9	赤	盤					黄帶赤：2.4cm	2.5V07/10(赤)	7.5V07/10(赤)	7.5V07/10(赤)		石英、角閃石、白	3041
333	H25	9	赤	盤					黄帶赤：2.4cm	2.5V07/6(赤)	2.5V07/6(赤)	2.5V07/6(赤)		石英、角閃石	3040
334	C25	9	赤	盤					黄帶赤：4.4cm	2.5V07/10(赤赤)	SY07/2(赤赤)	2.5V07/4(赤赤)		石英、角閃石	3073
335	C25	9	小型盤	底盤		3.4cm				SY08/6(赤)	2.5V06/6(赤)	2.5V06/6(赤)		石英、褐色	3048
336	C24	9	高杯	杯		(28.0cm)				2.5V05/10(赤, 黄)	2.5V05/4(赤, 黄)	2.5V05/10(赤, 黄)		石英、角閃石、白	3118
337	C25	9	高杯	杯		(17.0cm)			杯高：7.0cm	2.5V06/6(赤)	—	7.5V05/2(赤)	1005/6(赤)	石英、褐色	3136
338	C24	9	高杯	杯		(20.0cm)			杯高：7.0cm	SY06/6(赤)	SY06/6(赤)	SY06/6(赤)		石英、角閃石	3144
339	C24	9	高杯	杯		(16.8cm)			杯高合計：5.3cm	2.5V07/6(赤)	7.5V07/6(赤)	SY07/6(赤)		白鉄、褐色	3161
340	C25	9	高杯	杯		(17.8cm)			杯高合計：6.6cm	10V04/2(赤, 黄)	7.5V05/6(赤, 黄)	7.5V05/7(赤, 黄)		石英、褐色	3162
341	C25	9	高杯	新縫合合					新縫合合計：5.6cm	7.5V08/6(浅黃)	2.5V07/6(赤)	7.5V08/2(赤)		石英、白色	3163
342	C25	9	高杯	盤					新縫合合計：5.2cm	2.5V07/2(赤赤)	2.5V07/2(赤赤)	2.5V07/2(赤赤)		石英、角閃石、褐色	3184
343	C24	9	高杯	盤					新縫合合計：5.1cm	SY07/10(赤, 黄)	2.5V06/6(赤)	2.5V06/6(赤)		石英、角閃石	3192
344	B25	9	高杯	盤					新縫合合計：4.1cm	2.5V06/6(赤, 黄)	2.5V06/6(赤)	2.5V06/6(赤, 黄)		石英、角閃石	3216
345	B25	9	高杯	盤					新縫合合計：4.3cm	SY08/10(赤)	1006/6(赤)	1006/6(赤)		石英、角閃石、白	3217
346	C24	9	高杯	盤					新縫合合計：5.0cm	2.5V07/6(赤)	2.5V07/6(赤)	2.5V07/6(赤)		石英、角閃石	3256
347	C24	9	高杯	盤					新縫合合計：4.8cm	1005/6(赤)	1005/6(赤)	1005/6(赤)		石英、角閃石	3255
348	C25	9	高杯	盤					新縫合合計：4.8cm	2.5V08/6(赤赤)	2.5V08/6(赤)	2.5V08/6(赤)		石英、角閃石	3266
349	C25	9	高杯	盤					新縫合合計：4.8cm	SY07/10(赤, 黄)	7.5V05/6(赤, 黄)	2.5V06/6(赤)		石英、褐色	3273
350	B25	9	高杯	盤					新縫合合計：4.8cm	SY07/10(赤, 黄)	1006/6(赤)	1006/6(赤)		石英、角閃石	3249

第10表 出土遺物観察表7

番号	区	層	遺物	器種	部位	寸法				色調			説明	目上番号			
						口径	底面	底径	脚部径	脚底高	その他	内面	外面	裏面			
301	C25	9	高杯	脚部							新鋸合剖面: 0.9cm 新鋸合底径: 5.8cm	1985/412/54-7 1985/412/54-8	1985/6赤 1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 黑 石英, 角閃石, 黑	1741	
302	C25	9	高杯	脚部							新鋸合剖面: 1.3cm	1985/3赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 黑 石英, 角閃石, 黑	1723	
303	C25	9	高杯	脚部		11.2cm					脚部径: 4.1~5.1cm	1985/6赤	1986/210白	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1721	
304	C25	9	高杯	脚部							新鋸合剖面: 1.1cm 新鋸合底径: 1.0cm	1985/4赤 1985/4赤	1985/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1689	
305	C25	9	高杯	脚部							脚部径: 5.7cm	1986/6赤	1985/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1744	
306	C25	9	高杯	脚部		(11.7cm)					2.5V95/2赤	2.5V95/2赤	1984/6赤	白 白	黑色粘土 黑色粘土	1707	
307	C27	9	高杯	脚部		(18.0cm)					1987/412/54-1 1987/412/54-2	1987/6赤 1987/6赤	1987/6赤 1987/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1760	
308	C26	9	高杯	脚部							脚縫合剖面: 0.8cm	1985/6赤	2.5V95/2赤	1985/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2408
309	C24	9	高杯	脚部		(12.0cm)					2.5V95/412/54-1 2.5V95/412/54-2	1987/412/54-1 1987/412/54-2	1987/412/54-1 1987/412/54-2	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1456	
310	C27	9	骨	脚部							脚部径: 0.8cm	1987/6赤	1986/210白	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2711	
311	C27	9	骨	口~脚部		(14.1cm)					脚部径: 0.8cm	1986/210白	1987/312/54-1	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2773	
362	C26	9	骨	脚部		(18.2cm)					2.5V95/6赤	2.5V95/6赤	1985/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2484	
363	C25	9	骨	底~脚Y部		(3.4cm)					1987/412/54-1	2.5V95/2赤	2.5V95/2赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1996	
364	C25	9	小型鉢	底部		4.6cm					1987/7/21赤	1987/7/21赤	1987/7/21赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2436	
365	C25	9	小型鉢	底部		2.5cm	4.1cm	1.2cm			2.5V97/7脚赤	2.5V97/7脚赤	2.5V97/7脚赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1890	
366	C25	9	大型鉢	口縫部		(25.0cm)					1986/6赤	1986/6赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2178	
367	C25	9	鉢	口~脚部		(23.7cm)	対応1.8cm				7.5V95/6赤	2.5V95/6赤	2.5V95/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2338	
368	B25	9	小型鉢	口~底部		5.6cm	3.3~3.6cm	1.8cm	1.3cm	0.7cm	1987/7/21赤	1987/7/21赤	—	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2143	
369	B25	9	鉢	口~底部		(3.9cm)	4.6cm	2.8cm			1987/412/54-1 1987/412/54-2	1986/6赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2011	
370	C25	9	縦口沿鉢	底部							1986/6赤	2.5V95/2赤	1985/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2061	
371	C26	9	小型鉢	口~底部		(0.8cm)	4.2cm				2.5V97/7脚赤	2.5V97/7脚赤	2.5V97/7脚赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2378	
372	C24	9	小型鉢	口~底部		(11.8cm)	8.2cm	(3.3cm)			2.5V99/6浅黄	2.5V99/6浅黄	2.5V99/6浅黄	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1776	
373	C24	9	小型鉢	口~底部		(7.6cm)	4.8cm	2.5cm			1988/210白	1988/210白	1988/210白	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1662	
374	C25	9	縦口沿鉢	脚部							2.5V95/2赤	1986/6赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2105	
375	C27	9	鉢	口~脚部		(11.9cm)	12.3cm	4.8cm	7.9cm	2.3cm	2.5V95/2赤	1986/6赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2729	
376	C22	9	灰岩胎形	底部							2.5V97/1赤	1986/1赤	1986/1赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	371	
377	C24	9	灰岩胎形	底部							1987/412/54-1 1987/412/54-2	1987/2脚赤	1987/2脚赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1316	
405	C25	9	甕	脚部		5.3cm					2.5V95/2赤	1986/6赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	839	
406	B24	9	甕	脚部							2.5V96/412/54-1 2.5V96/412/54-2	1986/6赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	790	
407	B24	9	甕	脚部							2.5V96/7/21赤	2.5V96/7/21赤	2.5V96/7/21赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	774	
408	C25	9	甕	脚部							2.5V98/2赤	2.5V98/2赤	2.5V98/2赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	744	
409	B25	9	甕	脚部		(7.1cm)	(9.0cm)	4.7cm			1989/210赤	2.5V97/2赤	2.5V97/2赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1350	
410	C26	9	甕	脚部							2.5V95/2赤	1986/6赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1350	
411	C26	9	甕	口縫部							1986/412/54-1 1986/412/54-2	1986/6赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1364	
412	C25	9	脚縫合	口縫部		(13.8cm)					2.5V98/2赤	2.5V97/7脚赤	1987/2脚赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1092	
413	C26	9	高杯	口縫部							2.5V98/6赤	2.5V98/6赤	2.5V98/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	938	
414	B26	9	高杯	脚部							2.5V97/4赤	1986/9赤	1986/9赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1387	
415	B25	9	高杯	脚部		(13.5cm)					2.5V97/4赤	—	2.5V97/4赤	2.5V97/4赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1351
416	B25	9	高杯	脚部							1985/6赤	2.5V98/4赤	1985/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1080①	
417	B25	9	高杯	脚部							1985/6赤	2.5V98/4赤	1985/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1080②	
418	C25	9	高杯	脚部							2.5V97/4赤	2.5V97/4赤	2.5V97/4赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	668	
419	C25	9	高杯	脚部							2.5V97/4赤	1987/6赤	1987/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	676	
420	C23	9	高杯	脚部		(27.8cm)					1985/7/21赤	2.5V97/4赤	1985/7/21赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	411	
421	C23	9	高杯	脚部		(23.7cm)					1986/6赤	1987/8赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	407	
422	B25	9	甕	完形		15.2cm	4.0~4.4cm	7.3cm	7.0cm	1.3cm	1988/210白	1988/210白	1988/210白	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1368	
423	C26	9	灰岩胎形	底部		(13.0cm)					1986/6赤	2.5V97/4赤	1986/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	2591	
424	B25	9	灰岩胎形	口縫部		(15.8cm)					2.5V98/2赤	1986/9赤	1986/9赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1092	
425	C27	9	灰岩胎形	底部		15.0cm	2.6cm				1987/4赤	—	2.5V97/4赤	2.5V97/4赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	941
426	B25	9	土師器	脚部		12.0cm	3.9cm	8.0cm			2.5V98/4赤	2.5V98/4赤	2.5V98/4赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	938	
427	C27	9	土師器	完形		13.5cm	4.7cm	8.0cm			1985/6赤	2.5V98/4赤	1985/6赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	940	
428	B27	9	土師器	完形		13.0cm	4.2~5.1cm	8.7cm			1.5V98/4赤	2.5V98/4赤	2.5V98/4赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	9394	
429	C24	9	甕	脚部							1.5V98/4赤	1988/210白	1988/210白	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1086	
430	C24	9	甕	脚部							1.5V98/4赤	1987/4赤	1987/4赤	白 白	石英, 角閃石, 白 石英, 角閃石, 白	1086	

VII区出土遺物観察表

第11表 出土遺物観察表9

番号	区	層	遺物	部位	寸法					色調	説明	出土番号				
					口幅	脚高	高さ	脚距離	脚間隔	その他	内面	外側	脚面	月		
431	C24	6	甕	口部							2.5VH/4CL/45° 赤系	2.5VH/4CL/45° 赤系	石系、縦目付	418		
432	C25	6	甕	口部							SYVH/4CL/45° 赤系	DYVH/2CL/45° 赤系	石系、舟型付	492		
433	C25	6	甕	口部							10H/4/6脚間 2.5cm	SYVH/3CL/45° 赤系	石系、白色系	377		
434	C25	6	甕	口部							SYVH/4CL/45° 赤系	DYVH/2CL/45° 赤系	赤褐色系	592		
435	C24	6	甕	口部							2.5VH/5CL/45° 赤系	10H/4/6脚間 2.5cm	石系、白色系	520		
436	B24	6	甕	口部							2.5VH/4脚赤系	SYVH/4CL/45° 赤系	石系、黄色	791		
437	B27	6	甕	口部	(20.8cm)						瓶径:14.6cm	10VH/4脚黄系	7.5VH/3脚	SYVH/4脚	1119	
438	B25	6	高杯	脚部							斜板合脚:3.4cm	2.5VH/4脚黄	2.5VH/4脚赤系	石系、舟型付	632	
439	C25	6	高杯	脚部							SYVH/6脚赤系	7.5VH/4脚	N5/6脚	600		
440	B24	6	高足高杯	脚部							フタ径:1.7cm	7.5VH/1脚白	7.5VH/1脚白	細底、白色系	473	
441	C25	6	高足高杯	脚部	(11.8cm)						7.5VH/1脚	7.5VH/1脚	7.5VH/1脚黒	白色船	375	
442	C24	6	高足高杯	脚部	17.4cm	2.3cm					フタ径:2.8cm				465	
443	C23	6	高足高杯	脚部											148	
444	C24	6	高足高杯	脚部	16.2cm	3.3cm									33	
445	C25	6	高足高杯	脚部	13.2cm	2.3cm					フタ径:2.2cm	SYVH/2脚赤系	7.5VH/3CL/45° 赤系			
446	C24	6	高足高杯	口～脚部	13.5cm	3.0cm	9.9cm								62	
447	C24	6	高足高杯	脚～瓶部			7.8cm				7.5VH/3脚	7.5VH/3脚	7.5VH/6脚	細底	662	
448	C25	6	高足高杯	脚～瓶部			9.6cm				SYVH/1脚赤系	SYVH/1脚赤系	2.5VH/1脚赤系	2.5VH/1脚赤系	679	
449	C26	6	高足高杯	脚～瓶部			(9.0cm)				SYVH/6脚	7.5VH/6脚	7.5VH/6脚	細底、白色船	636	
450	C26	6	高台付瓶	口部	11.4cm	7.8cm					高台径:7.5cm 高台高:0.8cm	2.5VH/7脚白	2.5VH/2脚白	細底	631	
451	B21	6	高台付瓶	口部	12.9cm	3.9cm	(7.6cm)				高台径:7.5cm 高台高:0.8cm	2.5VH/7脚白	2.5VH/7脚白		1076	
452	C25	6	高台付瓶	口～脚部	15.3cm	5.7cm					高台径:10.2cm 高台高:0.7cm	2.5VH/7脚白	2.5VH/7脚白	細底、白色船	652	
453	C24	6	高台付瓶	口～脚部	(15.8cm)						高台径:7.5cm 高台高:0.8cm	2.5VH/7脚白	2.5VH/7脚白	細底	695	
454	C25	6	高台付瓶	脚部								7.5VH/6脚	7.5VH/6脚	7.5VH/6脚	石系	664
455	C24	6	高足杯	脚部							高台径:5.7cm 高台高:0.4cm	7.5VH/2脚赤系	2.5VH/7脚赤系	N5/1脚	917	
456	B-C27	6	高足杯	脚～瓶部							高台径:7.5cm 高台高:0.3cm	SYVH/1脚黒	SYVH/1脚黒	SYVH/1脚黒	白色船	
457	H24	6	高足杯	底部			(9.2cm)				高台径:5.7cm 高台高:0.5cm	SYVH/1脚黒	SYVH/1脚黒	SYVH/1脚黒	細底、白色船	624
458	C24	6	高足杯	脚～瓶部							高台径:8.1cm 高台高:0.5cm	10VH/2脚黒	10VH/2脚黒	10VH/2脚黒	石系	537
459	H24	6	高足杯	瓶部							高台径:8.0cm 高台高:0.6cm	7.5VH/3脚	NS/6脚	7.5VH/1脚白	細底、白色船	579
460	B25	6	高足杯	口部	12.9cm						高台径:8.0cm 高台高:0.6cm	SYVH/1脚	10VH/1脚	10VH/1脚	白色船	8
461	C24	6	高足杯	口部	17.7cm						SYVH/2脚白	SYVH/2脚白	7.5VH/1脚白	細底、白色船	412	
462	H24	6	高足杯	口～脚部	16.6cm						2.5VH/1脚赤系 7.5cm	2.5VH/4脚赤系	N7/6脚	細底		
463	HC25	6	高足杯	脚部											900	

第12表 出土遺物観察表10（石器）

番号	区	層	遺物	部位	寸法	重さ	材質	出土番号		
71			石片	断面	砂岩	11.4cm	4.7cm	2.8cm	227.6g	1074
72			石片	断面	安山岩	9.2cm	5.8cm	4.2cm	294.7g	1072
73			石片	断面	安山岩	11.6cm	7.6cm	5.3cm	412.7g	1071
74			石片	断面	安山岩	10.8cm	8.4cm	5.4cm	441.4g	1067
75			石片	断面	安山岩	7.4cm	7.2cm	3.7cm	313.0g	1124
76	E-25		石片	断面	安山岩	11.2cm	9.4cm	2.5cm	301.3g	479
77			石片	断面	安山岩	14.8cm	12.2cm	11.8cm	259.7g	1128

第13表 出土遺物観察表11(石器)

番号	区	層	遺物	岩種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上番号
78			SB4	圓石	安山岩	13.0cm	10.8cm	11.4cm	2425.6g	1125
79			SB4	軽石製加工品(人型)	軽石	12.6cm	6.5cm	4.2cm	115.5g	1950
80			SB4	軽石製加工品	軽石	10.3cm	5.6cm	3.3cm	27.8g	851
81			SB4	軽石製加工品	軽石	8.1cm	4.1cm	1.8cm	15.2g	1135
82			SB4	軽石製加工品	軽石	5.9cm	3.8cm	2.4cm	12.6g	999
96			SB5	軽石	安山岩	9.6cm	4.1cm	3.3cm	185.8g	1189
97			SB5	軽石	安山岩	8.7cm	4.2cm	3.5cm	205.4g	1180
98			SB5	軽石	砂岩	7.4cm	6.0cm	4.0cm	269.3g	1171
99	C-25		SB5	軽石	安山岩	9.6cm	7.6cm	5.3cm	656.2g	1188
100	E-25		SB5	軽石	砂岩	9.8cm	10.2cm	7.3cm	671.7g	1179
101	C-25		SB5	分倒剥片	頁岩	8.6cm	3.5cm	1.2cm	31.8g	1184
128	C-25		SB6	軽石	安山岩	6.4cm	5.9cm	2.6cm	124.8g	1227
129	C-25		SB6	軽石	安山岩	8.2cm	6.5cm	6.1cm	385.0g	1267
130			SB6	台石(刃物)	安山岩	18.6cm	9.8cm	5.8cm	1541.3g	1213
143	C-26		SB7	圓石	安山岩	12.4cm	8.4cm	7.3cm	1061.8g	1296
156			SB9	圓石右縫	頁岩	3.2cm	2.5cm	0.6cm	5.4g	1400
174			SB13	圓石右縫		4.1cm	6.0cm	4.3cm		範例3-106
179			SB17	舟形軽石製加工品	軽石	10.2cm	6.1cm	4.6cm		範例の119番
198			SB27	石皿	安山岩	19.2cm	14.6cm	7.6cm	2200.0g	2891
213			SB29	軽石	安山岩	6.1cm	4.1cm	3.6cm	124.5g	2838
214			SB29	圓石	安山岩	9.2cm	6.5cm	6.0cm	697.0g	2815
215	B-29	9	SB29	圓石	安山岩	18.2cm	8.4cm	7.2cm	1182.8g	2845
270	B-25	9	圓石		安山岩	18.2cm	8.4cm	7.2cm	1183.5g	2891
378	B-26	9	画面加工石器	頁岩	8.9cm	7.1cm	1.3cm	66.5g	1923	
379	C-25	9	橢形石器		安山岩	7.3cm	5.0cm	0.8cm	45.7g	1496
380	C-24	9	二次加工のある剥片	頁岩	9.0cm	5.8cm	1.3cm	93.7g	1449	
381	C-24	9	削石	砂岩	9.0cm	6.8cm	1.3cm	103.3g	1493	
382	C-24	9	軽石	頁岩	15.0cm	4.2cm	2.5cm	186.4g	1660	
383	C-24	9	軽石	砂岩	8.7cm	2.9cm	2.9cm	128.8g	1778	
384	C-25	9	軽石	砂岩	9.4cm	2.6cm	2.1cm	75.8g	1882	
385			軽石片	砂岩	9.0cm	6.4cm	2.0cm	69.8g	2387	
386	C-24	9	軽石	砂岩	9.4cm	7.4cm	5.2cm	442.8g	1647	
387	C-25	9	軽石		安山岩	7.9cm	4.7cm	3.5cm	196.7g	2519
388	C-24	9	圓石		安山岩	9.2cm	7.3cm	4.4cm	458.1g	1463
389	C-26	9	圓石		安山岩	10.2cm	7.6cm	3.6cm	446.6g	1600
390	C-25	9	軽石	砂岩	9.8cm	6.8cm	5.3cm	113.5g	2166	
391	B-25	9	圓石		安山岩	7.8cm	8.9cm	5.3cm	484.2g	2107
392	B-26	9	圓石		安山岩	6.8cm	7.5cm	4.3cm	320.8g	1920
393	B-26	9	圓石		安山岩	8.7cm	9.8cm	5.4cm	643.2g	1921
394	C-24	9	圓石		安山岩	8.7cm	8.8cm	5.8cm	692.8g	1451
395	B-25	9	圓石		安山岩	13.6cm	9.8cm	4.6cm	880.2g	1930
396	C-25	9	圓石		安山岩	13.6cm	10.3cm	5.8cm	931.4g	985
397	C-25	9	圓石	砂岩		11.0cm	10.3cm	5.6cm	1028.2g	1869
398			軽石	砂岩		8.0cm	9.8cm	7.0cm	944.4g	2816
399	B-26	9	台石		安山岩	17.4cm	12.3cm	5.4cm	1961.4g	1610
400	C-25	9	軽石製加工品	軽石	砂岩	10.8cm	8.7cm	2.5cm	97.2g	1843
401			軽石		安山岩	9.2cm	7.8cm	5.3cm	569.2g	1438
402	B-25	9	軽石製加工品	軽石		5.2cm	3.4cm	2.3cm	10.8g	一般
403			圓面もつ軽石	軽石		8.4cm	5.3cm	5.3cm	65.8g	2346
404	B-26	9	圓面のあ心軽石製加工品	軽石		17.0cm	9.4cm	6.8cm	229.8g	979
426	C-24	9	SB1	穿穴のあ心軽石製加工品	軽石	9.0cm	8.4cm	5.2cm	83.2g	1463

## 第4章 VII区の調査成果

### 第1節 調査の概要

VII区の調査は昭和61年7月30日から昭和62年3月20日まで実施された。調査区は指宿駅西部土地区画整備事業に伴い、南北方向に新設される幹線道路予定地に設けられた(第117図)。

### 第2節 遺構

VII区において検出された遺構は、溝1、溝2、河川跡である(第118～120、136図)。

溝1は、第5層紫コラ火山灰層直下において、断面形状がレンズ状を呈した浅い溝状遺構として検出された。検出面での溝幅は約1.2m、深さ19cmであり、東西方向に設けられている。溝は、第6層中から掘削されたものとみられ、第7層青コラ火山灰層を掘り抜き、第9層に達し掘削され



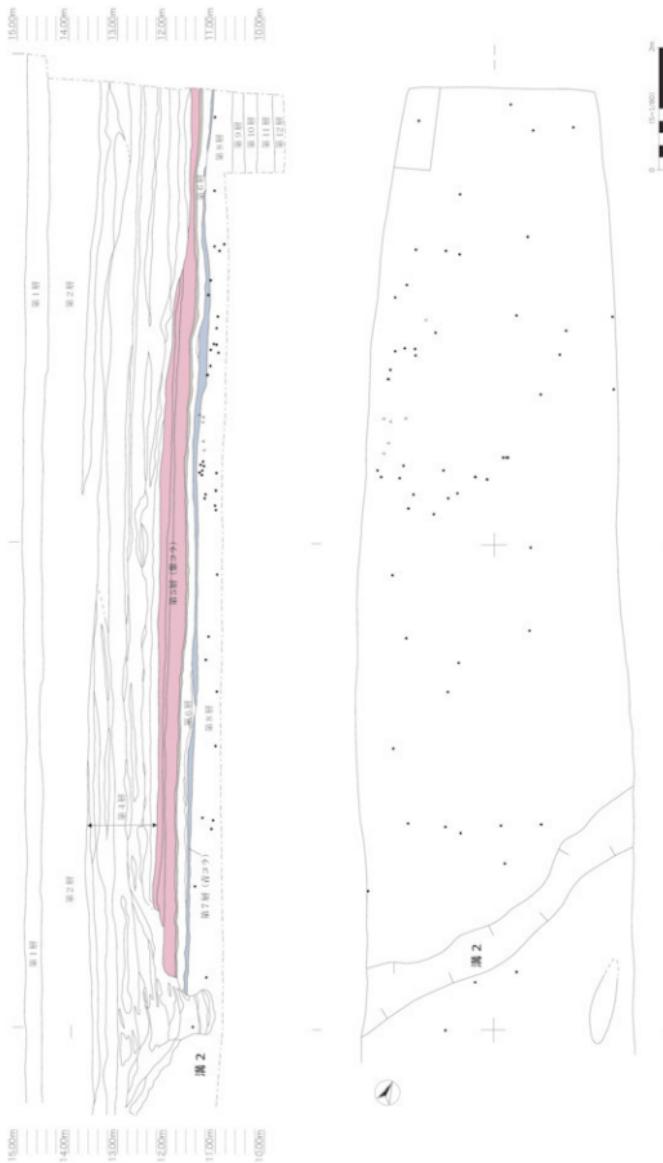
第117図 VII区の位置



第118図 VIII区西壁土層断面図・平面図



第119図 VII区西墨土層断面図・平面図2



第120図 VIII区西壁土層断面図・平面図3



第121図 溝1出土遺物

ており、掘削当初の断面形はU字を呈し、深さ49cm程度であったものとみられる。溝の両外側の6層上面がかまぼこ状の高まりがみられ、西壁層位断面では北側において、幅95cm程度、高さ7cm程度の規模となる。この高まりの形成要因は、第6層中に薄い堆積層が複数形成された結果であることが見て取れる。層位断面においては、高まりの端部に青コラ火山灰ブロックがみられるため、溝の掘削の際の廃土を積み上げたことによって形成されたものとみられる。

一方、溝内の埋土堆積状況は下半分に青灰褐色シルト、軽石を含む砂層等の水成堆積物が確認でき、上半分には第6層上位層と同様の層序がまとまって入り込んでいる。溝掘削廃土上には第6層上位層が極めて薄く堆積しており、第6層上面に近い時期に掘削されたことが考えられるが、溝内下半分が流水により埋もれた後に、第6層の上位層がまとまって入り込み、その後874年の開闢岳噴火で埋没したとみられる。

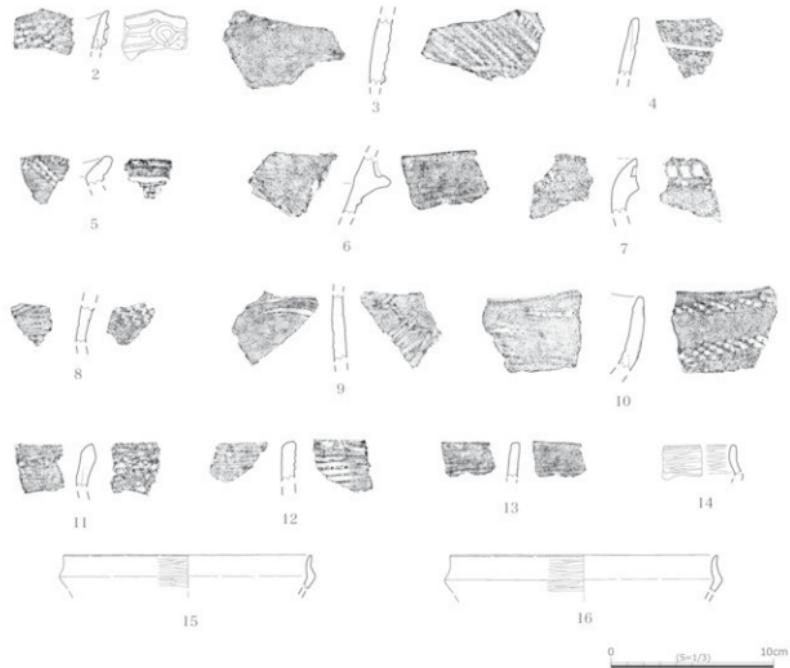
溝1の用途に関しては、VII区では同時期の遺構が溝1しか検出されていない状況であるが、隣接するIX区を斜めに横切って検出された河川跡に向かって伸びているようである。IX区の第6層中では、VII区により近い西半では道跡が複数条検出され、東半では密に設置された杭列複数条と道跡複数条が検出されているが、この段階での土地の用途は明確にはなっていない。統いて、第6層上位から874年（C期）において畠が造営されている。特にIX区西半部分の畠はVII区にむかって造営されていることは確実とみられる。IX区の敵方向が溝1の方向と近似していること（第136図）に注目したい。VII区の層位断面図（第118～120図）を見る範囲では、第6層上面に部分的に微妙な凹凸がみられるが、IX区西半の畠跡の敵状況に類似している。これは凹凸が極めて小さく、休閑畠とみられているものであり、VII区の第6層上面の微妙な凹凸が畠の敵痕跡であるなら、溝1は畠地に伴う施設の可能性が出てくる。なお、溝1の底部レベルはIX区河川底部には届かないことから導水施設とは考えにくい。

溝2は、第4層上位から掘削されており、中近世に帰属するものとみられる。

河川跡は、指宿駅西部土地区画整備事業に伴う発掘調査区のうち、I区、II区、III区、IV区、VII区、IX区で検出されたものである。河川の流下方向は蛇行しており、I区東端に向け北方向へ流下したが、II区西端で東へ方向を変えIII区へと流下し、III区東端付近で北東へ方向を大きく変え、IV区西端をかすり、VII区南端で北西へ方向転換する。さらに、VII区中央付近で北に方向を変え、IX区を斜めに流下している。河川の埋没課程に関しては、火山灰を主体とする1度目の土石流で一旦埋没したが、その後発生した2度目の土石流によりV字に抉られ埋没している。2度目の土石流堆積物は大小の礫を多く含んでいることが知られている（中摩ほか2016）、本調査区での詳細は不明である。

#### 〈文献〉

中摩浩太郎・鎌田洋昭・恵島瑛子 2016 『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（56）



第122図 繩文時代出土遺物

### 第3節 繩文時代の遺物

2から16は縄文土器である。

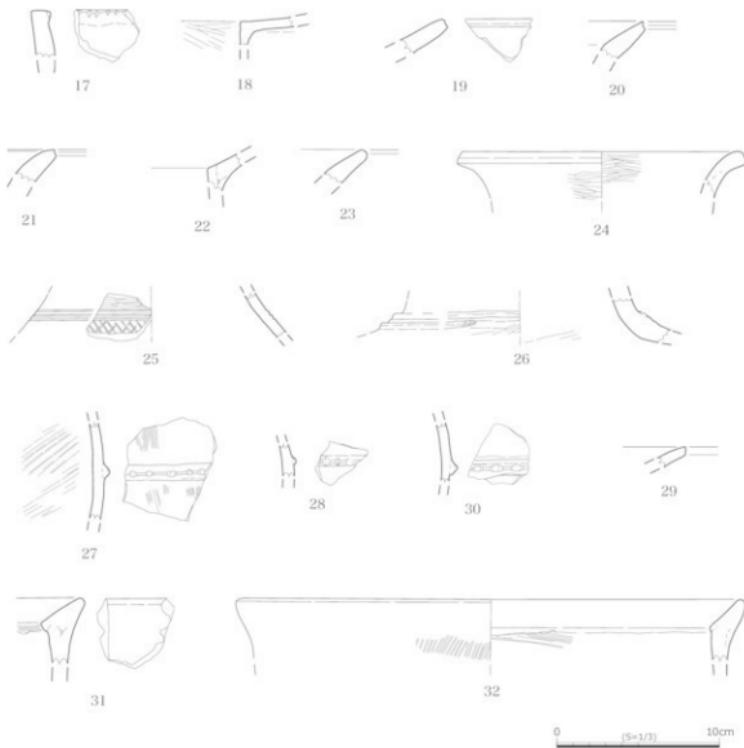
2は深鉢の口縁部である。波状口縁であり、やや外傾する形態を呈する。粘土紐を2条巡らせ、波頂部には紐を円形に貼り付ける文様を施す。

3は胴部である。粘土紐を巡らせ、貝殻条痕が施される。

4～12は縄文時代後期に位置づけられる土器である。

4・5は指宿式土器に位置づけられる。4は深鉢の口縁部である。棒状工具による沈線文を施す。内外面ともナデ調整である。5は鉢の口縁部である。肥厚させ、逆「く」の字状に屈曲する形態を呈する。外面には沈線文、内面には二枚貝の貝殻腹縁部による幾何学文様を施す。外面はナデ調整、内面は貝殻条痕のちナデ調整である。

6・7は市来式土器に位置づけられる深鉢の口縁部である。断面三角形状に肥厚させる形態を呈し、外形は「く」の字状に屈曲する。6は屈曲部の上下に、二枚貝の貝殻腹縁部による連続刺突文や棒状工具による連点文を施す。ナデ調整である。7は口唇部下に棒状もしくはヘラ状工具による



第123図 弥生時代出土遺物

連点文を施す。ナデ調整である。

8～10は丸尾式土器に位置づけられる深鉢の口縁部である。8・9はやや外反する形態を呈する。二枚貝の貝殻腹縁部による連続刺突文を施す。内面はナデ調整、外面は貝殻条痕である。10は波状口縁であり、緩く「く」の字に屈曲する形態を呈する。口唇部下と屈曲部に二枚貝の貝殻腹縁部による連続刺突文を施す。内面はナデ調整、外面は貝殻条痕である。

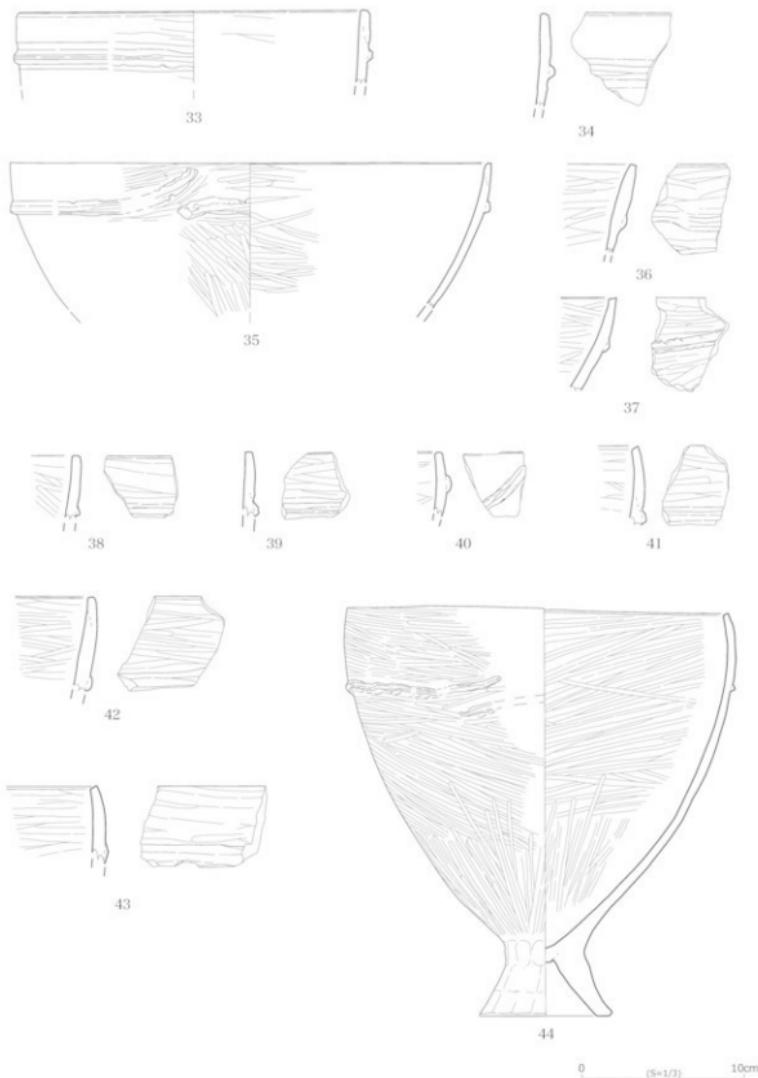
11は深鉢の口縁部である。口唇部は肥厚させ三角形状に仕上げる。

12は深鉢の口縁部である。口唇部はやや平らに仕上げる。調整は貝殻条痕である。

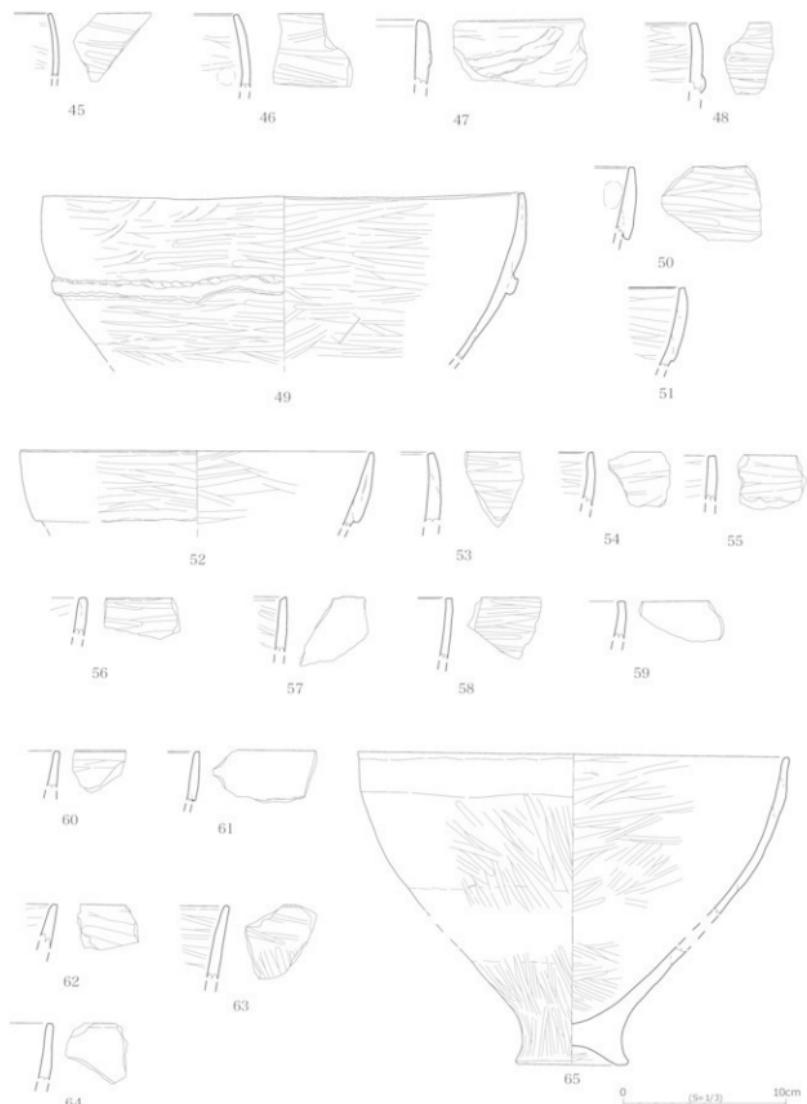
13は浅鉢の口縁部である。直立し口唇部はやや平らに仕上げる。調整は貝殻条痕のちミガキを施す。

14～16は、刻目突帯文をもつ深鉢と共に出土する浅鉢に類似する資料であるが、いずれも小片のためどの型式に属するものか判断が難しい。

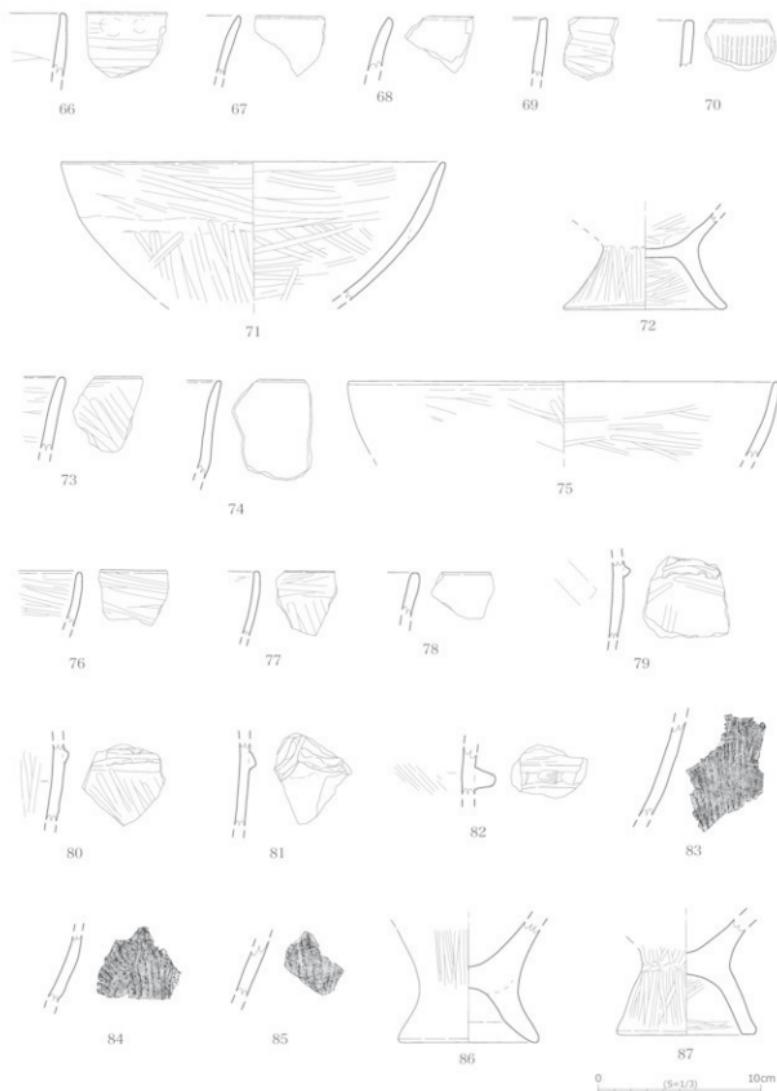
14は精製浅鉢の口縁部～頸部である。頸部は短く口縁端部はやや外反する形態を呈する。内外面ともミガキ調整を施す。15・16は精製浅鉢の口縁部～胴部である。胴部で強く屈曲し、頸部は



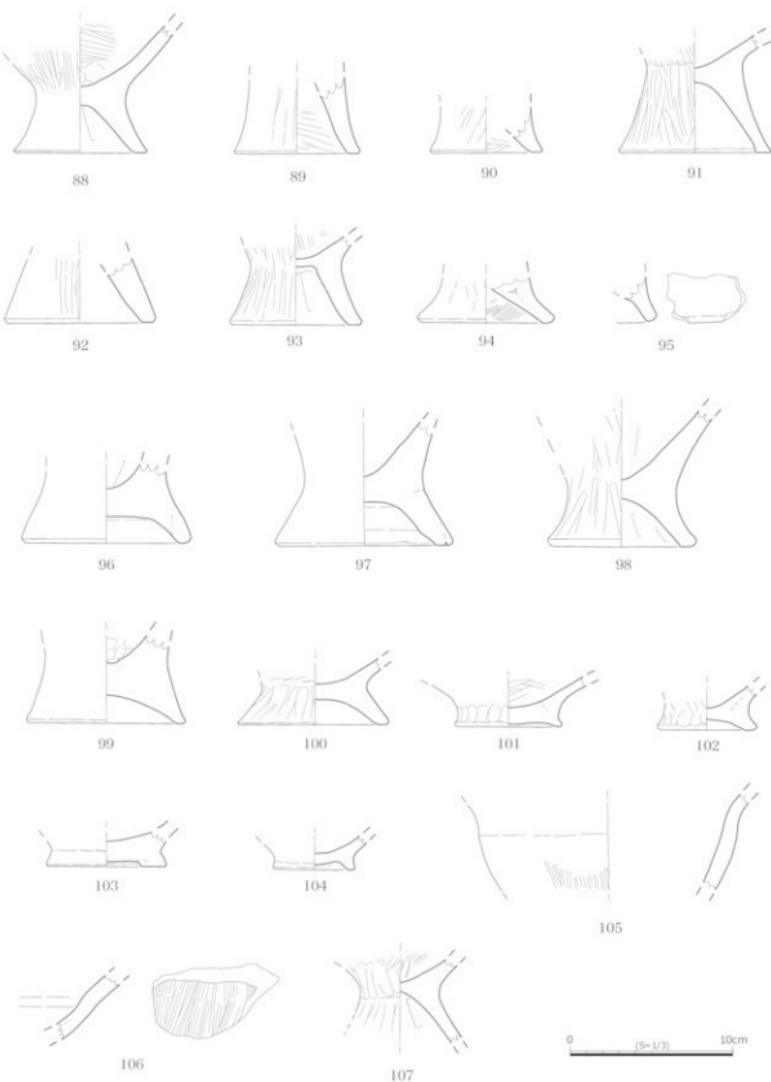
第124図 古墳時代出土遺物 1



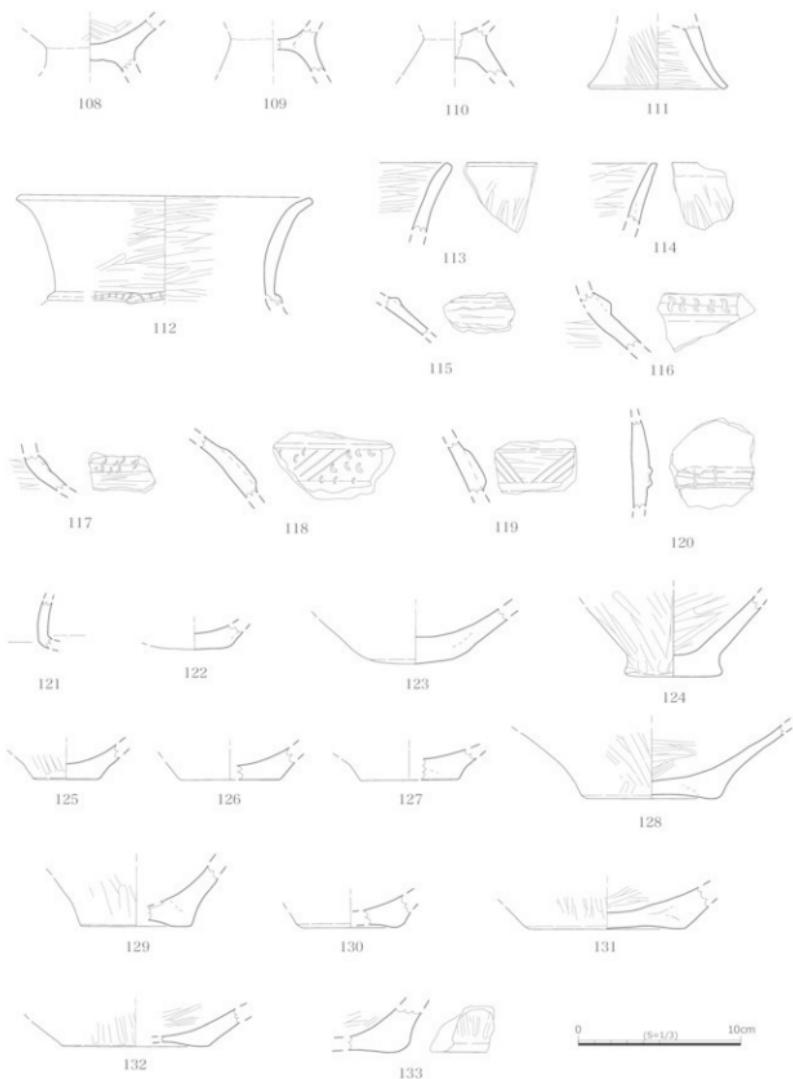
第125図 古墳時代出土遺物2



第126図 古墳時代出土遺物3



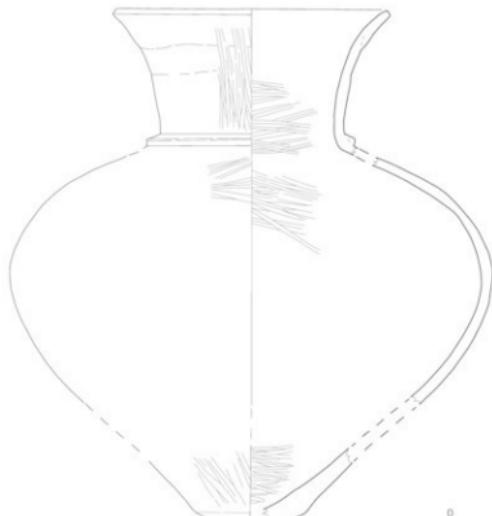
第127図 古墳時代出土遺物 4



第128図 古墳時代出土遺物 5



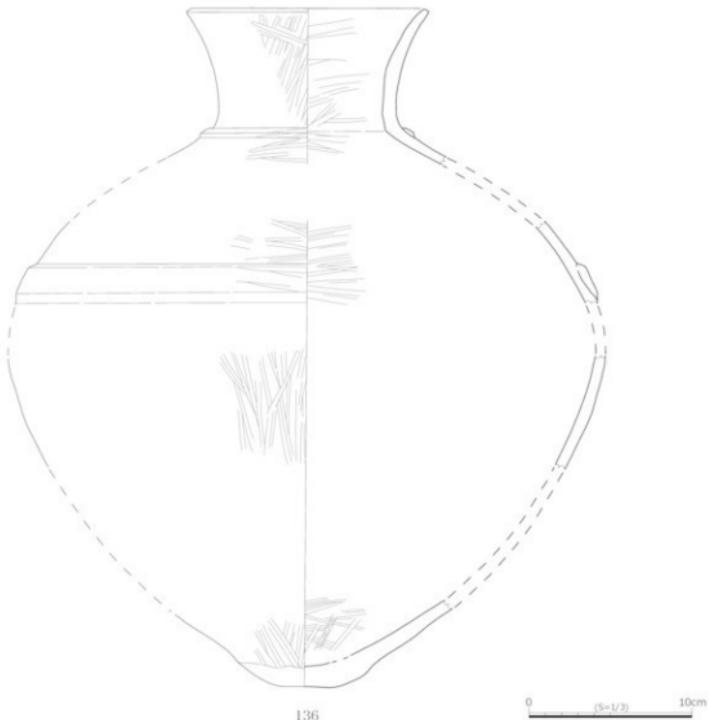
134



135

0 (S=1/3) 10cm

第129図 古墳時代出土遺物 6



第130図 古墳時代出土遺物7

短く口縁部にかけて直立し、端部はやや外反する形態を呈する。調整は内外面ともミガキ様ナデである。

#### 第4節 弥生時代の遺物

17から23は甌である。17は口唇部に刻目が施される。

18は逆L字に屈曲する頸部で、内面には強い稜線がみられる。

19から21は口縁部で、先細りする形態である。口唇部はM字にくぼむ。22は、くの字に屈曲する頸部で、口縁部は欠損のため不明である。内面には強い稜線がみられる。23は口唇部が丸みをもつ甌の口縁部である。

24から30は壺である。24は外反する形態の壺口縁部で、復元径で17.2cmを測る。口唇部はわずかにくぼみがみられる。内外面ともミガキ調整である。

25・26は壺の頸部で、26は頸部に三条の沈潜とその下部に鋸歯文が施される。

26 は屈曲部に二条の貼り付け突帯がみられる頸部である。二条のうちの一条は突帯端部が見える。

27 から 29 は壺の胴部である。いずれも一条の突帯が貼り付けられ、その上から刻目が施される。刻目原体は木製工具と考えられる。

31 と 32 は甕の口縁部から頸部で、頸部内面には突出部をもつ。32 は復元径 30.5cm を測り、口縁部はわずかに受け口状になる。内面はハケ調整、外側はタタキ調整である。

## 第5節 古墳時代の遺物

33 から 111 は甕である。33 は直口する形態の甕の口縁部で、口径は復元径で 21.4cm を測る。口縁部下には一条の貼付け突帯がみられる。内外面ともミガキ調整である。

35 はバケツ状の形態を呈する甕である。口径は復元径 29.6cm を測り、口唇部内面には棱線がみられる。口縁部下には一条の絡繩突帯が貼り付けられるが、接合しない。不接合部を正面にした場合、左側が右上方へのびる。内外面ともミガキ調整である。

36 から 43 は甕の口縁部片である。いずれも口縁部下に一条の絡繩突帯をもつ形態で、内外面ともミガキ調整である。

44 は完形の甕である。口縁部は内湾する形態で、口径は 23.5cm を測る。口唇部はコの字状で、内面に稜をもつ。口縁部下には一条の絡繩突帯をもつ。この突帯は接合せず、不接合部を正面にした場合、左側の突帯が右上方へ、右側の突帯が左下方へのびる。脚部はハの字状に開き、接地部には面をもつ。内外面ともミガキ調整で、胴下部には縱方向のミガキ調整がみられる。

45 から 48 は甕の口縁部片である。47 は口縁部下に一条の貼付け突帯が見られ、口唇部近くに突帯端部がのびている。

49 は広口に広がる甕の口縁部から胴部である。口径は復元径 29.6cm を測り、口縁部はやや肥厚する。口縁部下には一条の絡繩突帯が貼り付けられる。内外面ともミガキ調整が施される。

50 から 63 は甕の口縁部片である。いずれも内外面ともナデ調整が見られる。50 から 52 の口縁部は肥厚する形態を呈し、50 についてはやや垂下する。

65 はバケツ状の形態を呈する鉢である。口縁部は直口気味に立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。口径は 26.5cm、器高 19.1cm を測る。脚部は短く開く形態を呈し、脚部径 6.7cm、脚部高 1.2cm、底径 6.1cm を測る。内面は横方向のミガキ調整、外側は縱方向のミガキ調整がみられる。

71 は甕もしくは鉢の胴部から口縁部である。口縁部付近はわずかに肥厚し、接合痕がみられる。口径は復元径 23.7cm を測る。内外面ともミガキ調整である。

72 は甕の脚部で、ハの字に開く形態を呈する。脚部径 10.2cm、脚部高 3.9cm、底径 4.2cm を測る。外側は縱方向のミガキ調整、内面は横方向のミガキ調整がみられる。

75 は甕の口縁部である。口径は復元径 26.7cm を測る。内外面ともミガキ調整がみられる。

79 から 82 は甕の突帯部である。79 から 81 は絡繩突帯が貼り付けられ、81 は不整合部がみられる。不整合部を正面にした場合、左側が右上方へのびる。

86 から 104 は甕の脚部である。86 はハの字に開く脚部形態で、脚部径 8.7cm、脚部高 3.9cm、底径 6.0cm を測る。外側にはミガキ調整がみられる。

87 は脚部径 8.4cm、脚部高 4.2cm、底径 5.1cm を測る。やや踏ん張る形に開く脚部形態で、接地部には面をもつ。内外面ともミガキ調整がみられる。

88は脚部径8.2cm、脚部高3.5cm、底径5.5cmを測る。直線的に開く脚部形態を呈する。

89は脚部径7.6cmを測る。内外面ともミガキ調整である。

90は短く開く脚部形態を呈し、脚部径6.8cmを測る。内外面ともミガキ調整がみられる。

91は直線的に開く脚部形態で、脚部内面はドーム状を呈する。脚端部は接地面をもち、内面にわずかに突出部をもつ。脚部径9.3cm、脚部高4.4cm、底径5.9cmを測る。内外面ともミガキ調整である。

93はハの字に開く脚部形態で、脚天井部は平坦面をもつ。脚部径8.0cm、脚部高3.6cm、底径5.6cmを測る。内外面ともミガキ調整である。

94は脚部径7.9cmを測る。短くハの字に開く脚部形態で、断面には接合痕がみられる。

96は短く開く脚部形態で、脚部径10.0cm、脚部高2.5cm、底径8.0cmを測る。

97はやや大型の脚部で、脚部径11.0cm、脚部高3.5cm、底径7.3cmを測る。脚端部と脚接合部に接合痕がみられる。脚天井部形態はゆるやかなドーム状である。

98は直線的に開く脚部形態で、脚部径9.2cm、脚部高3.7cm、底径6.7cmを測る。外面はミガキ調整で、内面は工具ナデ調整がみられる。

99は先細りする脚部形態で、脚部径9.9cm、脚部高3.0cm、底径7.8cmを測る。脚部形態はドーム状である。

100は直線的に開く脚部形態で、端部には接地面をもつ。脚部径9.9cm、脚部高2.1cm、底径6.5cmを測る。外面にはミガキ調整がみられる。

101はやや上げ底状となる底部形態で、くびれをもつ。底部径6.6cmを測り、端部は丸みをもつ。胴部にかけて大きく開く形態を呈する。

103は高台状になる底部形態で、端部には幅1.5cmの接地面をもつ。

105は小型甕の頸部から胴下部である。胴部外面はミガキ調整、頸部外面はナデ調整がみられる。

112から136は壺である。112は壺の頸部から口縁部である。口径17.8cmを測り、頸部からゆるやかに外反する形態を呈する。頸部には一条の刻目突帯が施される。

115から117は壺の頸部で一条の貼付け突帯をもつ。116は半裁竹管をあわせた逆S字の刻目、117は逆C字の半裁竹管による刻目が施される。

118から119は幅広突帯である。118は肩部に施された幅広突帯で、三条の鋸歯文の間にC字形の半裁竹管文が充填されるものである。

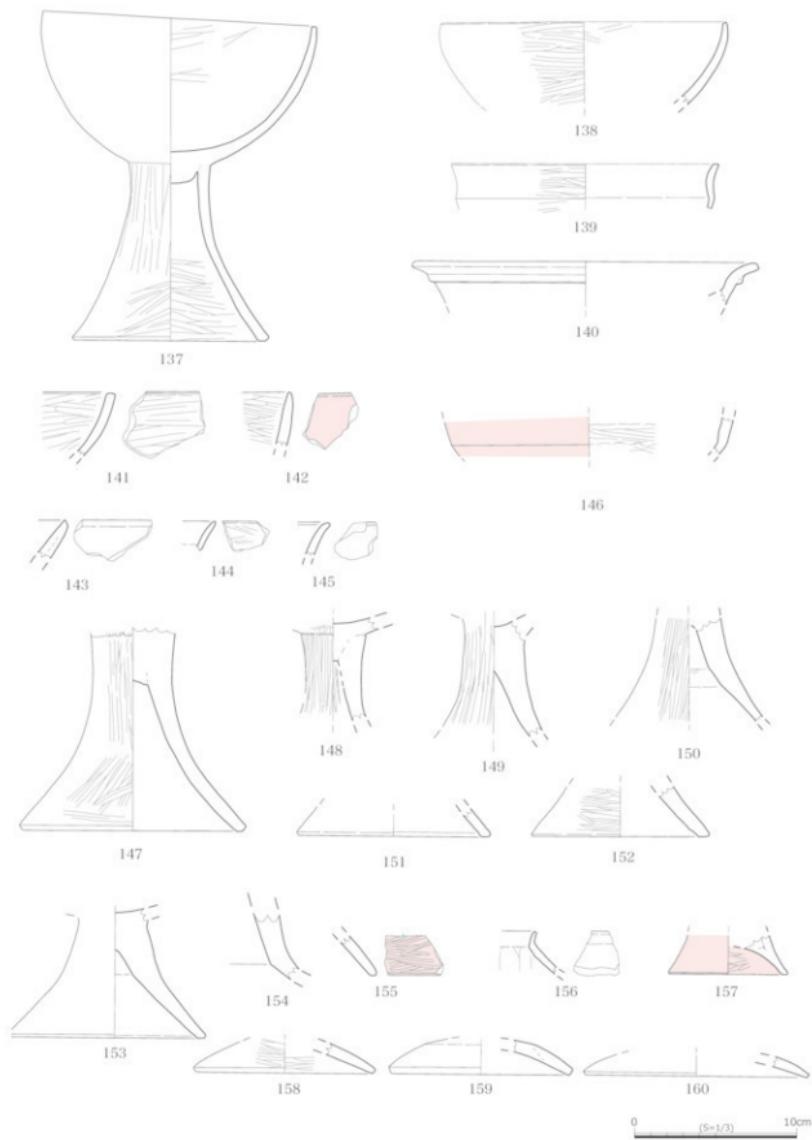
119は三条の鋸歯文が施された幅広突帯である。

134は脚台状の底部を有する壺である。口径15.0cm、器高30.7cm、底径は6.3cm、脚台高0.9cmを測る。胴部最大径がやや下方にあり、27.0cmを測る。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がり、口唇部はわずかに肥厚する。内外面ともミガキ調整がみられる。

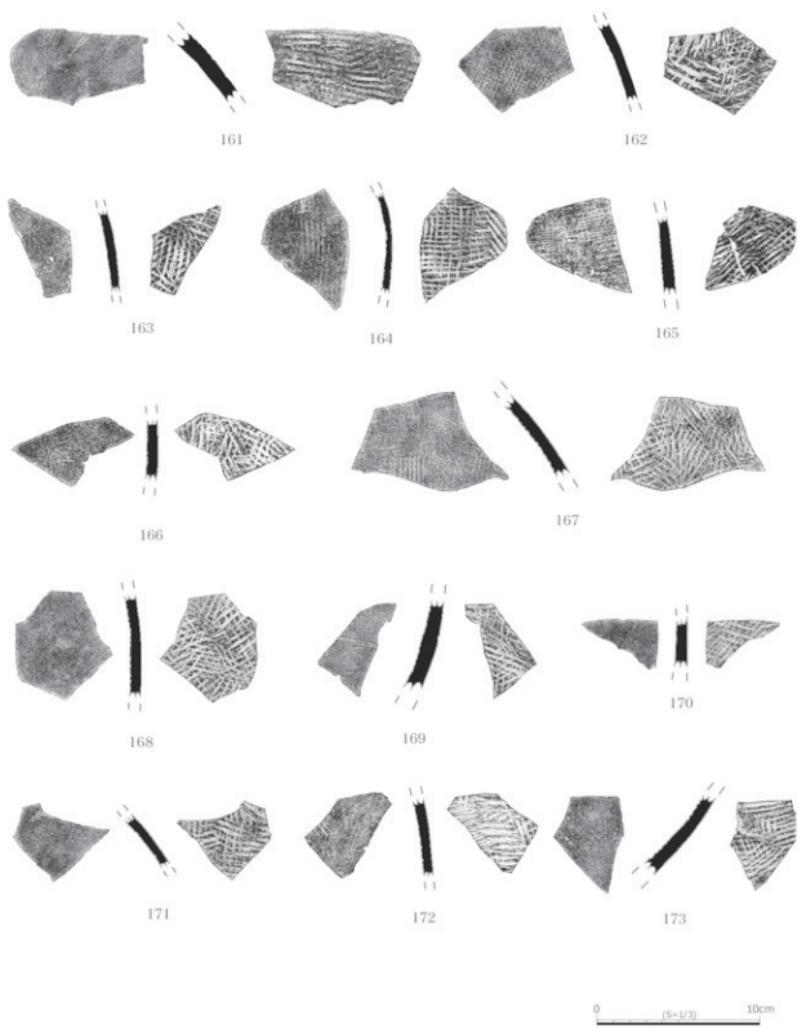
135は胴部が大きく張る壺で、頸部には一条の貼付突帯をもつ。口径16.7cm、器高31.4cm、底径4.7cmを測る。胴部最大径は29.8cmを測る。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がり、口唇部はわずかに肥厚する。内外面ともミガキ調整がみられる。

136は底部がやや丸みをおびる大型の壺で、胴部と頸部に貼り付突帯を有する。口径14.3cm、器高341.8cm、底径3.3cmを測り、底部にはわずかに平坦面がみられる。胴部には所謂幅広突帯が施されるが、無文である。胴部最大径は、幅広突帯直下にあり、36.0cmを測る。内外面ともミガキ調整がみられる。

137から160は高杯である。137は楕円形の杯部をもつ高杯で、口径16.9cm、器高19.7cm、脚



第131図 古墳時代出土遺物 8

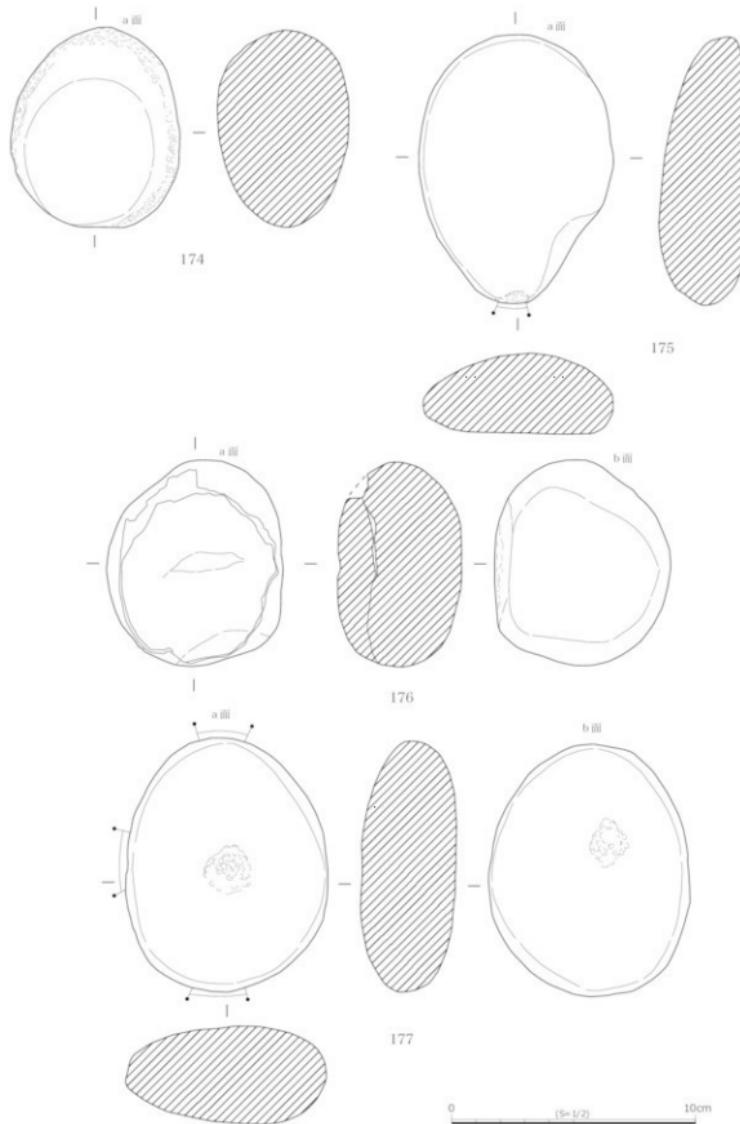


第132図 古墳時代出土遺物9

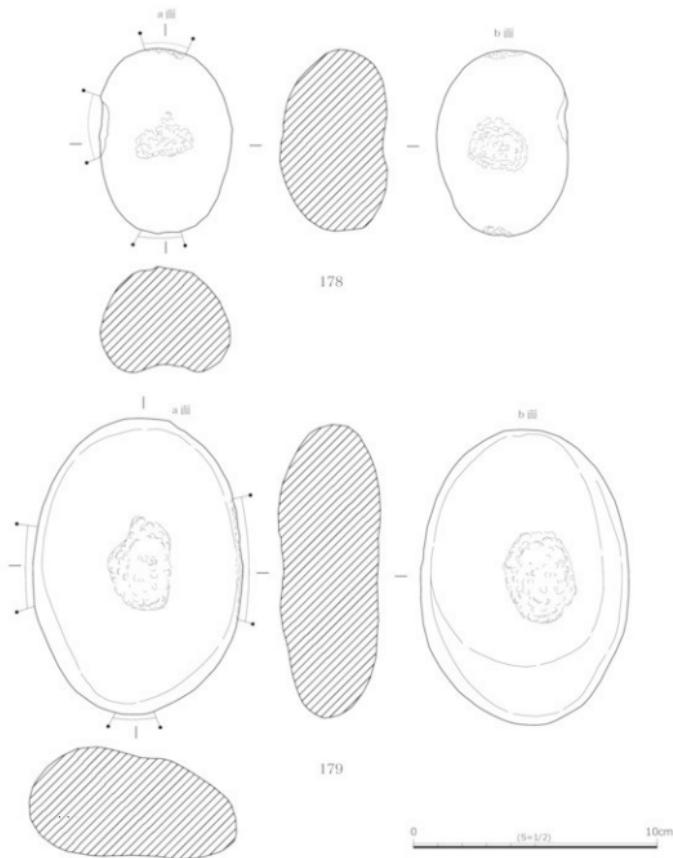
接合部径 4.8cm、脚部径 12.0cm、脚部高 10.8cm を測る。脚部はハの字に広がる形態である。内外面ともミガキ調整が施される。

138は高杯の杯部で、口径 17.6cm を測る。杯部形態は椀状を呈し、内外面ともミガキ調整がみられる。

147は高杯の脚部でハの字に開く。脚部径 13.5cm、脚部高 12.3cm を測る。外面はミガキ調整



第133図 古墳時代出土遺物 10



第134図 古墳時代出土遺物11

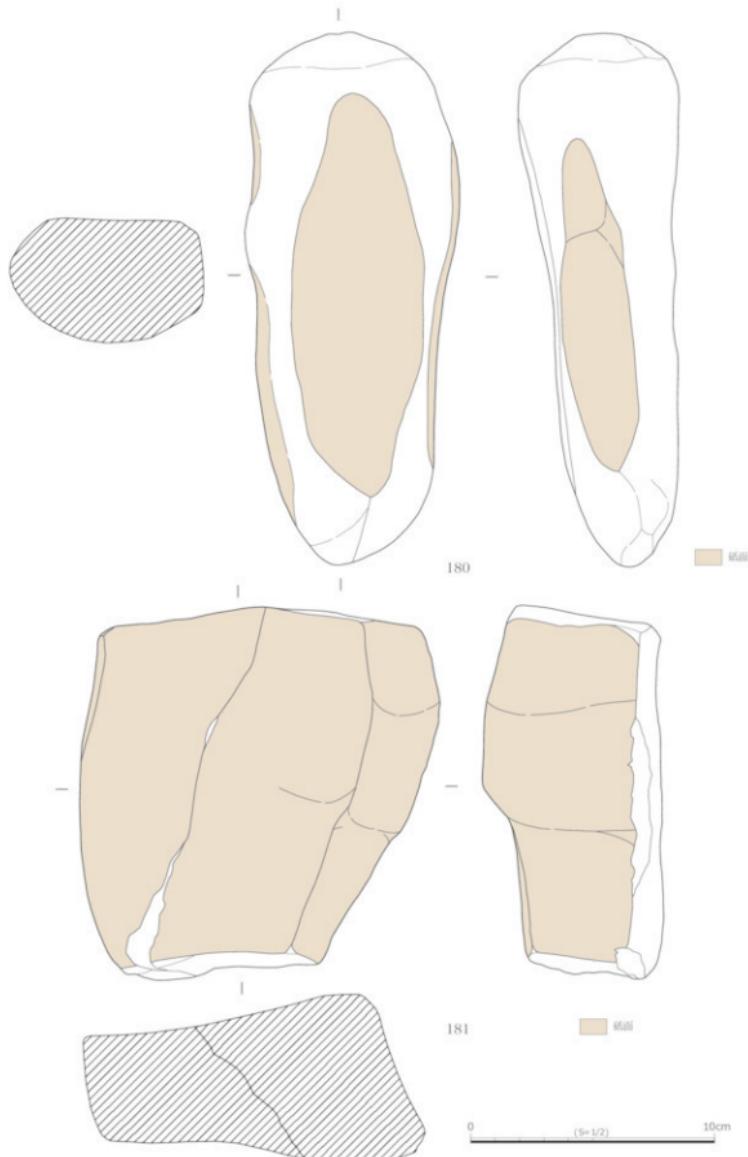
がみられる。

153は高杯の脚部である。直線的に脚部形態を呈し、脚部径11.5cmを測る。口唇部は丸く、接地部には面をもつ。

161から173は須恵器胸部片である。形態が分かるものは少なく、傾きは疑問である。

174は、安山岩製の楕円礫を用いた敲石である。a面のほぼ全周に敲打痕が認められる。特に、a面右側面上部が顕著である。

175は、平坦面を有する安山岩製の不整形礫を用いた敲石である。a面下端部に敲打痕が認められる。a面裏面は平坦面であり、一部に摺面が認められる。



第135図 古墳時代遺物 12



第136図 VII区 874年面検出遺構および周辺調査区

176は、安山岩製の楕円礫を用いた敲石である。a面上端部に敲打痕による剥離痕が認められる。また、a面下端部は平坦であり磨面として用いられていると考えられる。また、b面も他面と比較して滑らかであることから同様の使用が想定される。この石器は受熱によって一部が剥落し、2点接合となっている。接合面は赤く変色している。

177は、安山岩製の扁平な楕円礫を用いた凹石である。a面中央部に敲打による浅い凹面が認められる。また、a面上下両端と右側面に敲打痕が認められる。

178は、平坦面を有する安山岩製の楕円礫を用いた凹石である。a・b面中央部に敲打による凹面が認められる。また、a面上下両端と右側面に敲打痕が認められる。b面は平坦面であり、中央部の凹面周辺は他面と比較して滑らかであることから、磨面として用いられたと考えられる。

179は、平坦面を有する安山岩製の楕円礫を用いた凹石である。a・b面中央部に敲打による凹面が認められる。また、a面上下左右端部に敲打痕が認められる。b面は平坦面であり、中央部の凹面周辺は他面と比較して滑らかであることから、磨面として用いられたと考えられる。

180は、シルト質泥岩礫を用いた砥石である。a面中央部とd面中央部と右側面下部に砥面が認められる。a・d面中央部の砥面は使用により凹面となっており、その使用頻度の高さが窺える。また、a面上端部には敲打痕が認められる。

181は、砂岩礫を用いた台石である。a面の裏面中央部に直径1.5cm前後範囲に敲打痕が認められる。また、a面左側面下部とd面右側面には敲打による剥離痕が認められる。

この石器は、a面上部の端部が受熱により黒色に変色している。石器は2つに分割されているが、受熱によって2点に破損した可能性も考えられる。なお、その内のひとつ（a面右半分）は、さらにa面下端部が受熱し一部が黒色に変色している。

第14表 VII区出土遺物観察表1

番号	区	層	遺種	器種	部位	寸法					色調				撮影番号
						口径	底高	高さ	脚脚長	脚脚高	その他	内面	外面	断面	片
1	Q14	遺物通串	SD1	便	口縁部						2.5VHS/3C,4S+ 規	1.09H/3C,4S+ 規	0.08/1赤灰	角閃石	
2	Q14	8	深鉢	口縁部							1.0VHS/1黒灰	7.5VHS/2K黒	EVA/2Kオーリーブ	石英	387
3	S14*	8	深鉢	網目							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/3C,4S+ 規	EVA/3C,4S+ 規	網目,透明範物	
4	M14	8	深鉢	口縁部							1.0VHS/1黒灰	7.5VHS/2K黒	EVA/2Kオーリーブ	角閃石	
5	Q14	10	鉢	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/3C,4S+ 規	EVA/3C,4S+ 規	角閃石	
6	Q14	9	深鉢	口縁部							1.0VHS/3C,4S+ 規	1.0VHS/2K黒	EVA/3C,4S+ 規	白色粒,金星母	378
7	E-T	8	深鉢	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	1.0VHS/1黒灰	7.3VHS/2K黒	白色織	
8	Q14	9	深鉢	口縁部							2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	7.5VHS/2K黒	白色織	
9	Q14	10	深鉢	口縁部							1.0VHS/3C,4S+ 規	1.0VHS/3C,4S+ 規	1.0VHS/3C,4S+ 規	石英,金星母	391
10	S14*	8	深鉢	口縁部							1.0H/1暗赤	2.5VHS/1黒灰	2.5VHS/1黒灰	織	
11	P15	8	深鉢	口縁部							1.0VHS/1黒灰	7.5VHS/2K黒	EVA/1黒灰	石英,金星母	384
12	L14	8	深鉢	口縁部							2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	7.5VHS/2K黒	透的範物	10
13	S14*	8	深鉢	口縁部							2.5VHS/1黒灰	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	白色織	
14	P14*	8	浅鉢	口～腹部		15.3cm					2.5VHS/1黒灰	2.5VHS/1黒灰	2.5VHS/1黒灰	白色織	
15	Q14*	8	浅鉢	口～腹部		15.3cm					1.0VHS/1黒灰	7.5VHS/2K黒	1.0VHS/1黒灰	透的範物	
16	E-T	8	浅鉢	口～腹部		16.4cm					2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	1.0VHS/1黒灰	角閃石	
17	G-I	8	便	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	透的範物	
18	M15	8	便	口縁部							2.5VHS/4	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	透的～白色粒子	90
19	L15	8	便	口縁部							1.0VHS/3C,4S+ 規	1.0VHS/2K黒	1.0VHS/1黒灰	白色範物	
20	S14*	8	便	口縁部							2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	1.0VHS/1黒灰	石英	
21	M15	8	便	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	1.0VHS/2K黒	1.0VHS/1黒灰	透的範物	89
22	C14*	8	便	網目							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	1.0VHS/1黒灰	金星母	
23	Q15	8	便	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	透的範物	223
24	G-I	8	便	口縁部		17.2cm					2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石,透的範物	
25	Q14	9	便	網目							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	石英,透的範物,織	
26	L15	8	便	網目							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	1.0VHS/2K黒	透的範物	
27	G-I	8	便	網目							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	1.0VHS/1黒灰	透的範物	
28	L14	8	便	網目							1.0VHS/1黒灰	1.0VHS/2K黒	1.0VHS/2K黒	角閃石,透的範物	64
29	S14*	8	便	網目							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石,透的範物	
30	T15	8	便	口～腹部							2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石,透的範物,織	249
31	S14*	8	便	口～腹部							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石	
32	R14	9	便	口～腹部		30.5cm					2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	黒質の歩合子	388
33	K15	8	便	口縁部		21.4cm					2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石	
34	S14*	8	便	口～歩合部							2.5VHS/2K黒	2.5VHS/1黒灰	2.5VHS/2K黒	角閃石,透的範物	
35	L14*	8	便	口縁部		29.6cm					2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石	64
36	R15	8	便	口縁部							1.0VHS/1黒灰	1.0VHS/2K黒	1.0VHS/2K黒	角閃石	319
37	K14	8	便	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石	
38	Q14*	8	便	口縁部							1.0VHS/1黒灰	1.0VHS/1黒灰	2.5VHS/1黒灰	角閃石	
39	L14*	8	便	口縁部							2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石	
40	L15	8	便	口縁部							2.5VHS/2K黒	2.5VHS/1黒灰	2.5VHS/1黒灰	角閃石	
41	M14*	8	便	口縁部							2.5VHS/1黒灰	2.5VHS/1黒灰	1.0VHS/2K黒	角閃石	
42	P14	8	便	口縁部							2.5VHS/2K黒	1.0VHS/2K赤	2.5VHS/2K黒	角閃石	338
43	M15	8	便	口縁部							2.5VHS/2K黒	1.0VHS/2K赤	2.5VHS/2K黒	角閃石	126
44	L15	8	便	完形		23.5cm	25.1cm	8.0cm	3.3cm		2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石,透的範物	
45	L15	8	便	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石,透的範物	41
46	L15	8	便	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石,透的範物	49
47	M15	8	便	口縁部							2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/1黒灰	角閃石	141
48	P14*	8	便	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石	
49	L15	8	便	口縁部		29.6cm					2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/2K黒	角閃石	
50	L15	8	便	口縁部							1.0VHS/2K黒	1.0VHS/2K黒	1.0VHS/2K黒	角閃石	
51	M14*	8	便	口縁部							N/A/0K	1.0VHS/2K黒	1.0VHS/2K黒	角閃石	
52	L15	8	便	口縁部		21.7cm					1.0VHS/2K黒	1.0VHS/2K黒	1.0VHS/2K黒	角閃石	13
53	T15	8	便	口縁部							2.5VHS/3C,4S+ 規	2.5VHS/2K黒	2.5VHS/1黒灰	角閃石	269

第15表 VII区出土遺物観察表2

番号	区	層	遺物	基種	部位	寸法						色調	断面	剖和形	地主 番号		
						口幅	底高	高径	脚周径	脚底高	その他						
54	L15	8	鉢	口縁部								DY95/25cm	DY95/10cm	7.SY95/25cm	角開石	41	
55	M14 <sup>a</sup>	6	甕	口縁部								7.SY96/35cm					
55	15											7.SY96/35cm					
56	Q14	6	甕	口縁部								2.SY95/20cm	100L/20cm	100L/20cm	角開石	213	
57	N15	8	甕	口縁部								DY95/20cm	DY95/10cm	7.SY95/20cm	角開石, 透明動物	161	
58	L15	6	甕	口縁部								DY95/20cm	DY95/10cm	7.SY95/20cm	角開石	40	
59	L15 <sup>a</sup>	6	甕	口縁部								DY95/10cm	7.SY95/10cm	7.SY95/10cm	角開石		
60	M14 <sup>a</sup>	6	甕	口縁部								DY95/25cm 黄褐色	7.SY95/25cm	2.SY95/10cm	角開石		
61	N14	6	甕	口縁部								DY95/35cm	DY95/10cm	DY95/10cm	角開石	153	
62	M14 <sup>a</sup>	11	甕	口縁部								DY95/20cm	2.SY95/10cm	7.SY95/20cm	角開石		
63	L14	6	甕	口縁部								DY95/10cm	7.SY95/10cm	100L/10cm	角開石	61	
64			甕	口縁部								DY95/20cm	7.SY95/20cm	100S/10cm	透		
65	M14	8	鉢	浅形	26.5cm	19.1cm	6.1cm	6.7cm	1.2cm			100S/10cm	7.SY95/20cm	100S/10cm	角開石	105	
66	M14 <sup>a</sup>	6	甕	口縁部								DY95/25cm	DY95/10cm	100S/10cm	透		
67	S14	6	甕	口縁部								DY95/35cm	DY95/10cm	100S/10cm	透明動物		
68	S14	6	甕	口縁部								DY95/20cm	DY95/10cm	100S/10cm	角開石	364	
69	L14 <sup>a</sup>	6	甕	口縁部								DY95/35cm	DY95/10cm	100S/10cm	角開石		
70	P14 <sup>a</sup>	6	甕	口縁部								DY95/10cm	DY95/20cm	2.SY95/20cm	角開石, 透明動物		
71	L15	6	鉢	側縫~側縫								復元理23.7cm	7.SY95/20cm	7.SY95/20cm	角開石	48	
72	L15	6	甕	脚縫		4.2cm	10.3cm	3.9cm				DY95/20cm	DY95/10cm	7.SY95/20cm	角開石, 透明動物	41	
73	M14 <sup>a</sup>	6	甕	口縁部								DY95/35cm	DY95/10cm	2.SY95/20cm	角開石		
74	S14	6	甕	口縁部								DY95/20cm	DY95/10cm	7.SY95/20cm	角開石, 透明動物		
75	M14 <sup>a</sup>	11	甕	口縁部								復元理26.7cm	100V/25cm 黄褐色	100V/10cm	角開石		
76	L15	6	甕	口縁部								DY95/20cm	DY95/10cm	7.SY95/20cm	角開石		
77	T14	6	甕	脚縫								DY95/10cm	DY95/10cm	7.SY95/10cm	角開石, 透明動物	256	
78	L15 <sup>a</sup>	6	甕	脚縫								DY95/10cm	DY95/10cm	7.SY95/10cm	角開石, 透明動物	352	
79	N15	6	甕	脚縫								DY95/20cm	2.SY95/10cm	7.SY95/20cm	透明動物	110	
80	L15	6	甕	脚縫								DY95/20cm	7.SY95/10cm	7.SY95/10cm	角開石, 透明動物		
81	M15	6	甕	脚縫								DY95/10cm	2.SY95/10cm	2.SY95/10cm	角開石	117	
82	R14	6	甕	脚縫								2.SY95/35cm	100S/20cm	100S/20cm	角開石	348	
83	S14	6	甕	脚縫								2.SY95/20cm	2.SY95/10cm	2.SY95/20cm	透明動物	360	
84	S14	6	甕	脚縫								DY95/10cm	DY95/10cm	7.SY95/10cm	角開石		
85	T14 <sup>a</sup>	6	甕	脚縫								DY95/35cm	DY95/10cm	100V/10cm	角開石		
86	C <sup>c</sup>	6	甕	脚縫		6cm	8.7cm	3.9cm				DY95/20cm	DY95/20cm	DY95/20cm	角開石, 透明動物		
87	L14	6	甕	脚縫		6.1cm	8.4cm	4.2cm				100S/10cm	2.SY95/20cm	2.SY95/20cm	磁青石	111	
88	L15	6	甕	脚縫		5.5cm	8.2cm	3.5cm				DY95/20cm	DY95/20cm	7.SY95/20cm	角開石	77	
89	M15	6	甕	脚縫			7.6cm					—	7.SY95/10cm	DY95/20cm	7.SY95/20cm	角開石, 透明動物	109
90	Q14 <sup>a</sup>	6	甕	脚縫			6.8cm					—	7.SY95/10cm	7.SY95/10cm	2.SY95/20cm		
91	L14	6	甕	脚縫		5.9cm	9.3cm	4.4cm				DY95/10cm	DY95/20cm	100S/10cm	角開石	65	
92	N15	6	甕	脚縫		9.1cm						—	7.SY95/10cm	2.SY95/20cm	2.SY95/20cm	角開石, 透明動物	181
93	M14	6	甕	脚縫		5.6cm	8.0cm	3.6cm				DY95/10cm	DY95/20cm	7.SY95/10cm	角開石	96	
94	S15	6	甕	脚縫			7.8cm	9.3cm	2.2cm			—	DY95/10cm	100S/10cm	100S/10cm	角開石	
95	H15	6	甕	脚縫								100S/10cm	100S/10cm	100S/10cm	角開石, 透明動物	8	
96	T14 <sup>a</sup>	6	甕	脚縫		8cm	10.8cm	2.5cm				7.SY95/10cm	7.SY95/20cm	100S/10cm	角開石, 透明動物		
97	T14 <sup>a</sup>	6	甕	脚縫		7.3cm	11cm	3.3cm				100S/20cm	100S/20cm	7.SY95/20cm	角開石		
98	T14 <sup>a</sup>	6	甕	脚縫		6.7cm	9.2cm	3.7cm				2.SY95/10cm	100S/20cm	100S/20cm	角開石		
99	S14 <sup>a</sup>	6	甕	脚縫		7.8cm	9.3cm	3.0cm				2.SY95/10cm	2.SY95/20cm	7.SY95/10cm	角開石, 透明動物		
100	M15	6	甕	脚縫		6.5cm	9.8cm	2.1cm				2.SY95/20cm	100S/20cm	2.SY95/20cm	透明の細粒動物	125	
101	M15 <sup>a</sup>	6	甕	脚縫			6.6cm					—	7.SY95/10cm	7.SY95/20cm	2.SY95/20cm	角開石, 透明動物	
102	L14	6	鉢	脚縫			5.8cm	8.7cm				NL/10cm	NA/10cm	7.SY95/10cm	カーブ 付青石	61	
103	S14 <sup>a</sup>	6	甕	脚縫			7.3cm					—	7.SY95/10cm	2.SY95/20cm	7.SY95/20cm	角開石, 透明動物	
104	K14	6	甕	脚縫			5.9cm					—	7.SY95/10cm	7.SY95/10cm	7.SY95/10cm	石灰小青石	1
105	T14	6	甕	側~側下部								2.SY95/35cm	2.SY95/20cm	100S/20cm	角開石, 透明動物	254	
106	T15	6	高井	新底								100S/20cm	100S/20cm	100S/20cm	角開石	267	

第16表 VII区出土遺物観察表3

番号	区	層	遺種	器種	測定	寸法					色調			混和層	取上層	
						口径	底高	直徑	脚部径	脚部高	その他	内面	外面	断面	月	
107	N15	8	鐵	脚部							SY98/1焼灰	7.5V98/1焼灰	7.5V98/1焼灰		角閃石	183
108	N15	8	高坪	脚部							SY98/1焼灰	2.5V98/1焼灰	DV98/2焼灰	透明白物、白、 角閃石、透明白物	166	
109	M14 <sup>a</sup>	8	鐵	脚部							2.5V98/1焼灰	10V98/1焼灰	10V98/1焼灰	角閃石、透明白物		
110	M14	8	高坪	脚部							SY98/2焼灰	SY98/2焼灰	10V98/1焼灰	10V98/1焼灰	95	
111	L14	8	鐵	脚部	8.3cm						NA/10C	10V98/1焼灰	DV98/2焼灰		黑色ガラス質物	38
112	M14	8	鐵	脚～口縁部	17.8cm						SY98/2焼灰	SY98/2焼灰	7.5V98/2焼灰		角閃石	103
113	L14 <sup>a</sup>	8	鐵	口縁部							2.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	角閃石、透明白物		
114	N15	8	鐵	口縁部							SY98/1焼灰	10V98/2焼灰	DV98/1焼灰	角閃石	161	
115	L14 <sup>a</sup>	8	鐵	脚部							2.5V98/1焼灰	2.5V98/1焼灰	DV98/2焼灰	透明白物		
116	L15	8	鐵	脚部							2.5V98/2焼灰	10V98/2焼灰	2.5V98/2焼灰	角閃石、透明白物		
117	Q14	8	鐵	脚部							2.5V98/2焼灰	SY98/1焼灰	DV98/2焼灰	角閃石	219	
118	L14	8	鐵	脚部							2.5V98/2焼灰	10V98/2焼灰	2.5V98/2焼灰	角閃石	37	
119	P15	8	鐵	脚部							2.5V98/2焼灰	10V98/2焼灰	2.5V98/2焼灰	角閃石	328	
120	M15	8	鐵	脚部							SY98/1焼灰	9V98/1焼灰	DV98/2焼灰	角閃石	87	
121	T14 <sup>a</sup>	8	鐵	脚部							2.5V98/2焼灰	SY98/2焼灰	DV98/1焼灰			
122	L14 <sup>a</sup>	8	鐵	脚部							2.5V98/1焼灰	7.5V98/2焼灰	DV98/2焼灰	角閃石、透明白物		
123	L14	8	鐵	脚部							7.5V98/1焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/1焼灰	角閃石		
124	R15	8	鐵	脚部							10H8/2焼灰	10H8/2焼灰	SY98/1焼灰	角閃石、鐵	313	
125	L14 <sup>a</sup>	8	鐵	脚部	4.0cm						2.5V98/2焼灰	7.5V98/1焼灰	10V98/1焼灰	角閃石、透明白物		
126	L14	8	鐵	脚部	6.1cm						10V98/2焼灰	10V98/1焼灰	2.5V98/1焼灰	鐵	61	
127	Q14	8	鐵	脚部	6.1cm						2.5V98/2焼灰	SY98/2焼灰	7.5V98/2焼灰		214	
128	L14	8	鐵	脚部	8.1cm						10V98/2焼灰	10V98/1焼灰	10V98/2焼灰	角閃石、鐵	65	
129	T14	8	鐵	脚部	4.7cm						NA/0C	10V98/2焼灰	10V98/1焼灰	角閃石、白鐵	279	
130	L14	8	鐵	脚部	5.6cm						2.5V98/2焼灰	10V98/1焼灰	2.5V98/2焼灰	角閃石	81	
131	M14 <sup>a</sup>	8	鐵	脚部	9.5cm						2.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	1.5V98/2焼灰	角閃石、解石		
132	N15	8	鐵	脚部	9.9cm						10V98/2焼灰	10V98/1焼灰	7.5V98/2焼灰	角閃石	139	
133	P14	8	鐵	脚部	7.5V98/2焼灰						7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	角閃石、透明白物	193	
134	L14 <sup>a</sup>	8	鐵	完全	15.0cm	30.0cm	6.3cm				2.5V98/1焼灰	10V98/2焼灰	7.5V98/1焼灰	角閃石		
135	M14 <sup>a</sup>	8	鐵	口～側～底	16.7cm	31.4cm	4.7cm				2.5V98/2焼灰	2.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	角閃石、透明白物	72	
136	L15	8	鐵	口～側～底	14.3cm	41.8cm	3.3cm				10H8/2焼灰	2.5V98/1焼灰	10H8/2焼灰	角閃石、解石		
137	M15	8	高坪	口～底	16.9cm	19.7cm					2.5V98/2焼灰	10V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	角閃石		
138	M14	8	高坪	口縁部	17.6cm						7.5V98/2焼灰	10V98/1焼灰	10V98/1焼灰	角閃石	112	
139	N14	8	高坪	口縁部	16.5cm						SY98/2焼灰	SY98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	SY98/2焼灰		
140	M15	8	高坪	口縁部	21.0cm						2.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	角閃石、透明白物	146	
141	M15	8	鐵	口縁部							7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	鐵	122	
142	L14 <sup>a</sup>	8	高坪	口縁部							7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰			
143	M14 <sup>a</sup>	8	鐵	口縁部							7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰			
144	N14 <sup>a</sup>	8	高坪	口縁部							7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰			
145	P14 <sup>a</sup>	8	高坪	口縁部	16.5cm						2.5V98/2焼灰	10V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰		
146	M14	8	高坪	口縁部							10H8/2焼灰	10H8/2焼灰	10H8/2焼灰	鐵	106	
147	M14	8	高坪	脚部							10H8/2焼灰	7.5V98/2焼灰	10H8/2焼灰	角閃石	132	
148	T14	8	高坪	脚部							2.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	透明白物	257	
149	T14	8	高坪	脚部							SY98/2焼灰	SY98/2焼灰	SY98/2焼灰	鐵	198	
150	T14	8	高坪	脚部							2.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	赤色の鐵	271	
151	S14	8	高坪	脚部							7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	10V98/2焼灰	角閃石、透明白物	357	
152	L14 <sup>a</sup>	8	高坪	脚部							SY98/2焼灰	SY98/2焼灰	SY98/2焼灰	板岩和砂		
153	L15	8	高坪	脚部							2.5V98/2焼灰	SY98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	角閃石、透明白物		
154	L15	8	高坪	脚部							SY98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	10V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰		
155	L15	8	高坪	脚部							7.5V98/2焼灰	10V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰		
156	M14 <sup>a</sup>	8	鐵	口縁部							7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	角閃石、透明白物		
157	M14 <sup>a</sup>	8	高坪	脚部							7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	漆面の黑色		
158	L15	8	高坪	脚部							7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	10V98/2焼灰	角閃石、鐵	21	
159	Q14	8	高坪	脚部							7.5V98/2焼灰	7.5V98/2焼灰	7.5V98/1焼灰	角閃石、透明白物	230	

第16表 VII区出土遺物観察表4

番号	区	層	遺構	基盤	断面	寸法		断面形	断面高	その他	色調			混和物	取上番号
						口幅	脚高				内面	外面	断面		
160	S14*	600×100	高津	断面					13.7cm		2.5V95/20C黒	2.5V95/20C黒	10V95/20C赤	角閃石、透明鉱物	
161	S14*	600×100									N6/0K	N6/0K	N6/0K		
162	T14*	8									N6/0K	N6/0K	N6/0K	粗砂粒	
163	N15	8									2.5V95/1黒灰	2.5V95/1黒灰	10V95/1黒灰	透明～白色粒	179
164	M15	8									2.5V95/1黒灰	2.5V95/1黒灰	10V95/1黒灰	白色粒子	138
165	N14	8									10V95/1黒灰	10V95/1黒灰	10V95/1黒灰	白色粒子	15
166	L14	8									2.5V95/1黒灰	10V95/1黒灰	10V95/1黒灰		36
167	N15	8									10V95/1黒灰	2.5V95/1黒灰	10V95/1黒灰	石英	165
168	N10	8									10V95/1黒灰	10V95/1黒灰	10V95/1黒灰	白色粒子	168
169	N15	8									2.5V5/1黄灰	10V95/1黒灰	2.5V95/1黒灰	白色粒子	169
170	N15	8									10V95/1黒灰	2.5V95/1黒灰	10V95/1黒灰	白色粒子	177
171	N14*	8									10V95/1黒灰	2.5V95/1黒灰	2.5V95/1黒灰	白色粒子	
172	N14*	8									10V95/1黒灰	N6/0K	10V95/1黒灰	白色粒子	
173	L14*	8									2.5V95/1黒灰	2.5V95/1黒灰	2.5V95/1黒灰	白色粒子	

第17表 VII区出土遺物観察表5(石器)

番号	区	層	遺構	基盤	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	取上番号
174	H-15	8		麻石	安山岩	8.1cm	7.8cm	5.5cm	200.4g	
175	T-14	8		麻石	安山岩	11.1cm	8.0cm	3.0cm	405.3g	282
176	M-14	8		麻石	安山岩	8.4cm	7.2cm	3.1cm	411.4g	81
177	N-15	8		圓石	安山岩	10.6cm	6.4cm	3.0cm	508.4g	175
178	L-14	8		圓石	安山岩	7.6cm	5.4cm	4.4cm	279.4g	71
179	L-15	8		圓石	安山岩	12.4cm	8.7cm	4.0cm	718.4g	75
180	P-14	10		麻石	板岩	21.8cm	7.2cm	3.1cm	1128.3g	340
181	M-15	8		台石	砂岩	14.8cm	8.8cm	2.0cm	2050.2g	91

## 第5章 分析

### 橋牟礼川遺跡出土の動物骨

松元 光春・西中川 駿

#### 1. はじめに

橋牟礼川遺跡は指宿市の市街地にあり、大正5年に発見されてから平成28年に100年を迎えた遺跡で、縄文土器と弥生土器の新旧関係が層位学的に実証されたり、874年の火山災害遺跡、古墳時代の拠点的集落遺跡とも考えられている遺跡である。今回、昭和61年から62年に実施された発掘で、古墳時代の住居跡から出土した動物骨の調査を依頼されたので、その概要を報告する。

#### 2. 動物骨の概要

動物骨は火山噴出物を含む酸性土中に埋没していたために、骨質が脆く細骨片化して保存状態が悪かったが、歯や一部の炭化した骨は比較的の保存状態が良かったので、できる限り復元した後、これらの骨を哺乳類、鳥類、魚類に分類し、さらに哺乳類は種と骨の部位の同定を行った。

同定された総骨片数は71個であった。そのうち哺乳類が26個、鳥類が2個、魚類が43個であった。哺乳類はイノシシ、シカ、ネズミの2目3種で、イノシシが17個と最も多かった。住居跡別の出土骨片数を表1に、また代表的な骨の写真を図版にそれぞれ示した。

##### 1) イノシシ (図版1-2)

下顎骨、歯など17個が同定された。下顎骨は左右が結合した状態で下顎枝上部及び歯冠を欠損するものの比較的の保存が良く、犬歯の形態から雌のもので、現生種よりやや大きい。別の歯の大きさからも同じことが言える。

##### 2) シカ (図版3-6)

角、臼歯、末節骨など8個が出土している。角は角尖で、若い個体のものと推定される。歯は上顎の白歯3個で、現生のキュウシュウジカの雄よりやや大きい。また、末節骨は現生種の雌とほぼ同じ大きさである。

##### 3) ネズミ (図版7)

下顎切歯1個のみで、現生種のクマネズミとほぼ同じ大きさである。

##### 4) 鳥類 (図版8-9)

中手骨と指骨の2個が出土している。これらは同一個体で、ほぼ完全な中手骨の最大長からツルのような大型鳥類のものと推定される。

##### 5) 魚類 (図版10-17)

いずれも種は不明だが、軟骨魚類のサメの歯や硬骨魚類の頭蓋、椎骨、鰓条棘など43個が出土している。ほとんどが炭化しているために保存状態は良好である。

#### 3. 考察

今回の調査で、哺乳類はイノシシ、シカ、ネズミの2目3種が同定され、これに加えて鳥類及

表1 住居跡別出土骨片数

住居跡 No.	哺乳類			鳥類	魚類
	イノシシ	シカ	ネズミ		
SB-1	3	3			1
SB-4	2	2			
SB-9		1			
SB-15	1	1			
SB-23	1				4
SB-25	1			2	2
SB-27	2	1			17
SB-28	7		1		19
合 計	17	8	1	2	43



図版 1-2: イノシシ, 3-6: シカ, 7: ネズミ, 8-9: 鳥類, 10-11: サメ, 12-17: 硬骨魚類  
 1. 下顎骨 2. 下顎第三後臼歯（右） 3. 角（左） 4. 上顎第三後臼歯（左） 5. 上顎第三後臼歯（左） 6. 第四指末節骨（右） 7. 下顎切歯（右） 8. 中手骨（左） 9. 指骨（左）  
 10-11. 歯 12-14. 椎骨 15-17. 鰭条棘

び魚類も見られた。これらの骨はいずれも住居跡内から出土し、さらに一部は炭化していることから食料に供されたものと思われる。イノシシ及びシカの骨は現生種よりやや大きいが、ネズミの骨は現生種とほぼ同じ大きさであった。

橋牟礼川遺跡から出土した動物骨について、西中川は平成2～3年の発掘調査からイノシシ、シカ、タヌキ、ノウサギの3目4種の哺乳類と魚類を(1992年)、また平成4年の発掘調査からイノシシ、ウシの1目2種(1993年)を報告している。いずれも古墳及び奈良・平安時代の出土骨である。今回は古墳時代のみの出土であったが、ネズミと鳥類が新たに出土したことと魚類が多く見られたことは興味深い。一方、近隣の山川町にある成川遺跡からは、縄文及び弥生時代の地層からイノシシ、シカ、タヌキ、ウサギ、サルの4目5種の哺乳類と魚類の出土が報告されている(西中川・松元、1983年)。南薩地方の遺跡から出土する動物骨の種類や数量に地形の違いや時代の変遷がどのように反映されるのかは、今後のデータの蓄積によってさらに明らかにされていくものと思われる。

#### 4.まとめ

指宿市橋牟礼川遺跡から出土した動物骨を調査した。

- 1) 同定された動物骨は哺乳類、鳥類、魚類で、哺乳類はイノシシ、シカ、ネズミの2目3種であった。
- 2) 骨片数はイノシシが最も多く、ついでシカで、現生種よりやや大きいことが明らかになった。

#### 参考文献

- 西中川駿・松元光春、1983、成川遺跡出土の自然遺物、とくに動物骨について、成川遺跡、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第24集、pp.228-235、鹿児島県教育委員会。
- 西中川駿、1992、指宿市橋牟礼川遺跡出土の動物遺体、橋牟礼川遺跡III、指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集、pp.523-527、指宿市教育委員会。
- 西中川駿、1993、橋牟礼川遺跡出土の動物遺体、橋牟礼川遺跡IV、指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集、pp.97-99、指宿市教育委員会。

## 第6章 総括

### 第1節 壺穴住居の新旧関係

VII区において確認された壺穴住居は、第6層、第8層及び第9層、そして弥生時代に帰属する可能性がある壺穴住居26基、住居の可能性が低い遺構2基(SB9・SB28)の合計28基が、複雑に切り合って検出された。このため、遺構相互の切り合い関係に関して整理し、層位断面から得られた情報を基に、遺構群の新旧関係に関して述べる。

壺穴住居群の中で最も新しい遺構は、第7層青コラ火山灰層を掘り抜いて造営された、古代に帰属するSB1とSB7とSB31である。統いて、青コラ火山灰が降下した段階で埋没途上にあったSB3、SB4、SB6である。2基は、住居廃棄後において壺穴が埋没途上であり、壺穴が掘鉢状地形となった段階で、青コラ火山灰が降下し埋没したものである。青コラ火山灰は堆積後硬化し、旧地形をパックし保持している。このため、窪地の形状は火山灰降下時点の形状となり、最も深いSB4が3基中最新となるとみられる。

これ以前の壺穴住居に関しては、切り合い関係や掘り込み層位に関して概略を述べる。

第8層中から掘削造営されたものとしては、溝状遺構2、SB9、SB10、SB27、SB28がある。遺構の切り合い関係は、溝状遺構2→SB9、SB10・SB28→SB27となる。

第9層中から掘削造営されたものとしては、SB12、SB13、SB16、SB17、SB24、SB25、SB29、SB30がある。遺構の切り合い関係は、SB3→SB16、SB5・SB6→SB17、SB11→SB12、SB12→13、SB16→SB15・SB18、SB24→SB23、SB25→SB24、SB30→SB29となる。

VII区で最も古いとみられるのは、溝状遺構1、SB19、SB20と考えられる。

VII区検出の遺構に関して新旧関係を示したのが第137図である。図中、遺構の切り合い関係は実線で表現し、掘り込み層位や出土遺物等によって判断した新旧関係は破線で表現した。

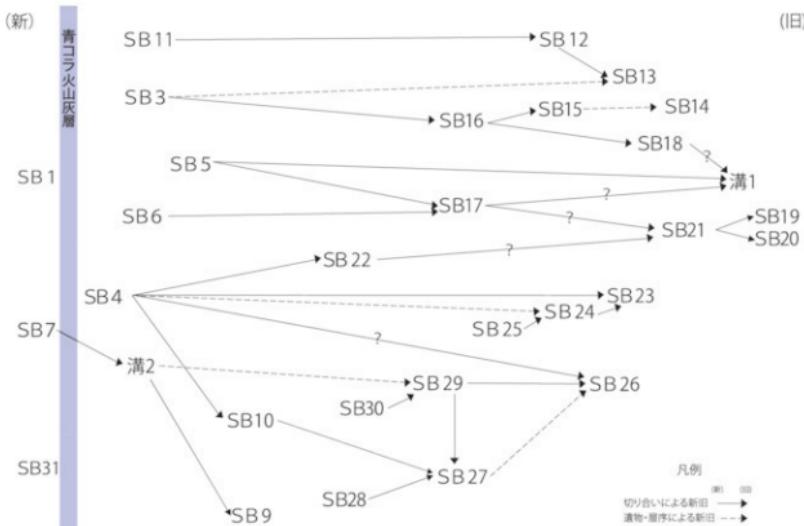
(中摩 浩太郎)

### 第2節 壺穴住居についての考察

VII区では壺穴住居と考えられる遺構は26基検出された。切り合いが激しく全体形を把握できない遺構が多数あるが、VII区の壺穴住居に関する全般的な傾向を西側隣接調査区であるV区等との比較を交えて述べたい。

造営時期に関しては、新しいところで7世紀後半の青コラ火山灰降下以前、古いところで弥生時代後半期と考えられる。中心となるのは、古墳時代の後半期であり、少なくとも10基が竪貫式の時期に造営された可能性がある。

壺穴の平面プランに関しては、方形プランと考えられるのが22基で84.6%、方形・円形以外が2基で7.7%、不明が2基で7.7%、「円形+方形」プランが0基で0%、円形プランが0基で0%となる。V区では、方形プラン(張り出しを持つもの含む)が44基で88%、円形プラン(張り出しを持つもの含む)は4基で8%、円形+方形プランは1基で2%、不明は1基で2%となるため、方形プランの比率はほぼ近い。ただ、VII区の方形プラン以外のものについては、古墳時代に帰属する円形プランのものがない点と「円形+方形」プランの住居がない点で異なっている。



第137図 VI区住居切り合い関係及び新旧関係

一方、東に隣接する南丹波遺跡で8基検出された、いわゆる「花弁型」を呈する堅穴住居や、2基検出された方形2主柱穴で柱穴に接して土坑を設けるタイプの堅穴住居の検出はない。南丹波例は、古墳時代初頭の中津野式段階に帰属する時期のものが半数となっているが、VII区ではこの時期に当たる住居がないことが原因とみられる。西隣のV区においても、同様に花弁型が検出されていない。古墳時代初頭の指宿地域の住居形態の一つが「花弁型」であるとすると、渡部が指摘した「居住域が時代とともに南丹波遺跡から西側に移り、辻堂原式段階へ笹貫式段階の集落が橋牟礼川遺跡に形成された可能性」についても妥当性があると考えられる（渡部徹也・鎌田洋昭 2010『南丹波遺跡II』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書48）。

ただ、VI区の北西約100m地点のIX区では、弥生時代中期後半の山ノ口式段階から古墳時代初頭の中津野式段階に至る土器集中廃棄所が検出されている点については注目する必要があると考える。橋牟礼川遺跡等における古墳時代の土器集中廃棄所に関しては、集落の近隣に形成されることが知られるが、弥生時代にこの行動様式があったと想定すれば、近隣に集落がある可能性を指摘した（中摩浩太郎・鎌田洋昭・恵島英子 2016『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書56）。VI区のSB14・SB18・SB21等については、弥生時代中期後半に帰属する可能性が棄却できないことから、橋牟礼川遺跡地内に当該期に集落が形成されていた可能性もあるところである。したがって、土器集中廃棄所を集落の近隣に形成する行動様式が弥生時代に遡ることになる蓋然性が出てくるのである。IX区の土器集中廃棄所の造営時期は、中津野式段階に及んでおり、加えて、橋牟礼川遺跡IV区においては、東原段階を含む土器捨て場が造営されている。したがって、橋牟礼川遺跡においては、住居数は多くはないが、弥生時代から古墳時代前半にかけても、連続して住居が造営されていた可能性が強い。ただ、集落規模が拡大する時期は、VI区においては笹貫

期が中心となる。他の調査区の状況からは、辻堂原期を含めた古墳時代の後半期からとなるのである。

次に、方形プランの竪穴住居の法量に関してだが、VI区の竪穴住居で一辺長が明らかになっているものは12基であり、統計的な傾向を導き出すことはできない。ただ、SB 3・5・6・7・11・17・23・27の長軸の平均は3.4mとなり、SB 4は5.1m、SB29は6.7mと規模が大きい状況である。いずれも方形プランであるが、数的に多い小型の方形プラン住居と数的に少ない大型の方形プラン住居が共存する傾向は看取できる。ただ、橋牟礼川遺跡V区や宮之前遺跡の事例では、大型の住居が単純な方形プランとは異なる構造をとる傾向がある。例えば、V区のSB 3は一辺が6m弱であり、方形+円形プランを呈するが、VI区においてこのプランは検出されていない。

V区とVI区との住居密集度をみると、V区がほぼ隙間なく全体に住居が切り合っているのに対して、VI区においては住居が設置されない隙間がある。住居検出数と調査区面積から、100m<sup>2</sup>当たりの住居数の概数を比較すると、V区18基強、VI区が12基強となるが、この違いに関しては、従来検討がなされていない。ここでは、大型の類型である「方形+円形」プランがVI区にみられないことと関連付けるべきと考える。すなわち、V区が集落の中心部分に当たるとみられること、また、V区の住居群は辻堂原期以降に形成されたとされているが、VI区が集落中心部分からやや外れていたため、居住域が拡大する過程で、VI区にまで拡大した時期が篠貫期であったためとみられるのである。なお、V区・VI区にまたがる住居集中域の規模については、VI区東側は海岸段丘となっていることから、東西90m程度となることが考えられる。その西側のIV区には土器集中廃棄所が置かれ、さらに西側に河川があり、集落範囲の境界となる。

(中摩 浩太郎)

### 第3節 第6層中出土遺物からみたVI区の評価

第6層中から公的施設との関連を示すと考えられる遺物の出土がある。墨書土器「真」2点と青銅製「丸鞘」である。また、須恵器・土師器もVI区に比較的集中して出土している。

柴田博子によると「真」の墨書は、小ぶりで丁寧な字体であり、8世紀代に収まるものとのことである(柴田2006)。なお、「真」は「真人」との関係を考える向きもある。

青銅製「丸鞘」の表面に鍍金の痕跡が残っており、「銀装」の帶金具である可能性が高い。757年施行の養老令の第19衣服令中朝服条には、五位以上は銀で装飾した腰帶と記されている。したがって、出土帶金具は「通貴」と呼ばれる貴族階級の人物が使用していたことになる。櫛木謙周氏は、8世紀前期から律令政府は、国家の諸費用を肩代わりして私物を献上する者に位階を与えて、民間の私富を導入する献物叙位政策を行っており、多くは郡司の地位にある者が行つたとしており(櫛木1993)、この地に郡司が滞在する地方郡家との関連を強く示す遺物であるといえる。

上記の遺物と遺構との関連であるが、いずれもVI区で検出された掘立柱建物2基の周辺での出土である。「丸鞘」は1号掘立柱建物の南側で出土し、墨書土器「真」は3号掘立柱建物の東面の朽付近で出土している。掘立柱建物の配置は、方位を意識した規則的配置とはなっていないが、遺物との関連性を考えておく必要がある。

橋牟礼川遺跡第6層に関しては、橋牟礼川遺跡総括報告書で紹介したが、VI区以外のV区等の調査区において、墨書土器「厨」、転用硯、鉄製刀子、開元通宝等が出土する等、橋牟礼川遺跡の第6層中において公的施設の所在についての確実性は高い。ただ、橋牟礼川遺跡においては第6層中期から874年に至る時期に、一面畠が設けられ、建物もまばらにしか設置されていない状況が判

明している。前時期の第6層b期に公的施設が置かれた痕跡が全く見られなくなったところである。一方、敷領遺跡においては、第6層中から公的施設が所在する可能性が高くみられ、874年段階でも火山災害で埋没した建物が5基検出されている。中に、墨書き土器「奉」、転用硯が伴い、かつ開聞岳の火山災害からの復旧工事の対象となった1号建物等が含まれており、注目を集めている。橋牟礼川遺跡の第6層中においてどのような政治的变化がもたらされ、このような状況へと転じたのかが、今後の研究課題となる。

#### 〈文献〉

柳木謙周 1993 「四 越出身の官人たち」『福井県史』通史編1

柴田博子 2006 「鹿児島県の墨書き土器」『先史・古代の鹿児島 通史編』 鹿児島県教育委員会

(中摩 浩太郎)

## 第4節 SB7 の評価

これまで指宿市内において、開聞岳を給源とする火山噴出物と出土遺物の関係から、遺構・遺物の年代的な位置づけや、災害範囲、災害後の復旧活動や人々の対応などについて、考古学・文献史学・火山学など多方面から研究が進められてきた（永山1992・2016、成尾1992・2016、下山1993、渡部ほか2012、鷹野2012、中摩2017など）。

開聞岳テフラの中でも、874年3月25日に噴火し、指宿市を中心の大隅半島までその堆積が認められる「紫コラ」によって被覆された遺構・遺物については、橋牟礼川遺跡や敷領遺跡において研究が進められている（下山ibid、鷹野2014、中摩ibid）。

その一方、7世紀後半に堆積したとされる「青コラ」については、紫コラに比べてその堆積状況や層厚が不安定なことから、災害状況や災害範囲も不明確な部分が多い。とくにその降下年代については、橋牟礼川遺跡において青コラに直接被覆される形で出土した須恵器台付長頸壺のみから年代を推定せざるを得ない状況である（下山1992）。今後、資料の増加を待ちながら、青コラの降下年代については、さらなる検討が必要である。

今回報告したVI区においては、第7層青コラ火山灰層を上位層から掘り込む3基の竪穴住居跡（SB1、SB7、SB31）が確認されている。これまで、青コラ火山灰層を掘り込む住居跡は、橋牟礼川遺跡において4基確認されており（下山ほか1996）、本報告を合わせて、少なくとも7基の竪穴住居跡が、7世紀後半から874年の間に構築されたことがわかった。

の中でも、SB1とSB31については調査から30年以上経っていることもあり、当時の出土状況や出土遺物を判定することが困難であった。一方、SB7については、調査時の記録と出土遺物等が明確であったことから、本節ではSB7の出土遺物について概観する。

SB7は報告文にある通り、主軸を南北にとり、長軸3.7m、短軸3.6mの方形プランを呈する竪穴住居跡である。住居中央には、土器利用炉（今塙屋2004）が設置されており、成川式の甕が埋設されていた。九州南部の土器利用炉についてまとめた今塙屋穀行によると、薩摩半島の土器利用炉は日置市辻堂原遺跡、鹿児島市鹿児島大学校内遺跡、枕崎市奥木場遺跡が知られており、いずれも高杯の杯部が住居中央に据え置かれていた。またこのような形態の炉は、埋設された土器の内部で火を焚いた「土器床炉」に分類されている（今塙屋ibid）。

SB7の埋設土器を観察してみると、内面には帶状のコゲが付着しており、スヌとは異なる（図版19-1）。そのため、土器の内部で火を焚いたとは考えにくく、検出時の写真を見ても、住居床面

から口縁部がわずかに突出する程度である。そのため、SB7の埋設土器は今塙屋分類の「土器床炉」ではなく、埋設土器を煮沸土器の支脚として利用した「土器埋設炉」と位置づけることができる。ただし、薩摩半島ではこの時期に丸底甕は普及しておらず、支脚を有する缶貫式甕が主体であることから、実際に埋設土器が支脚として利用されたかについてはさらなる検討が必要である。

SB7の埋設土器は、脚部が欠損しており、口縁部から胴下半部にかけてもひび割れがみられる。口縁部には焼成後穿孔が2孔認められ、おそらくこのひび割れを補修するために穿たれた補修孔であると判断できる。口縁部下には一条の不接合突帯を持ち、不接合部を正面にした場合、左側が上方へのびる形態を呈する。内外面とも細かなミガキ調整が見られ、缶貫式新段階に位置付けられる(中村2009)。その他の成川式土器も土器埋設炉に設置された土器と同様にミガキ調整が主体であることから、缶貫式新段階に位置付けられる。

さらに、SB7からは装飾高杯(第50図139)と考えられる土器片も出土している。この高杯は、外面に二条の刻目突帯を有し、内外面とも丁寧なミガキ調整がみられる。内面には欠損しているが把手状の装飾が施される。成川式土器様式において装飾高杯は、指宿市宮之前遺跡第5地点、垂水市後ヶ迫A遺跡土器溜まりなどで確認されており、缶貫式新段階に位置づけられる資料と共に伴することが推察される。これらの資料に施される装飾は、杯部外面に施された突帯・突起や、杯部内面に把手状の突起を有することが特徴としてあげられる。そのため、SB7出土の装飾高杯についても缶貫式新段階に位置づけることが可能である。

また、共伴する須恵器については、杯A(第50図140、141)と杯B(第50図142)が出土している。いずれも小型の須恵器で、佐藤隆による陶邑編年(佐藤2003)の陶邑V中段階に位置づけられ、およそ7世紀後葉から8世紀前葉と考えられる。缶貫式新段階の帰属年代を考える上で重要な資料と言える。

以上の点から、SB7は青コラが降下した7世紀後半以降、8世紀前半までの間に構築されたと考えられる。今後も青コラ前後ににおける集落の様相と火山災害状況を整理する必要がある。

#### 〈文献〉

- 今塙屋毅行 2004 「南部九州古墳時代の火廻-「土器利用炉」に着目して」『福岡大学考古学論集』517-546頁  
 下山覚 1992 「指宿市橋牟礼川遺跡出土の須恵器台付長頸壺の年代比定とその意義について」『人類史研究』第8号 65-79頁  
 下山覚 1993 「橋牟礼川遺跡の「被災」期日をめぐる編年の考察-「日本三代実録」貞觀16年7月29日条についての考古学的アプローチ」『古文化談叢』第30集(下) 1179-1193頁  
 中摩浩太郎 2017 「貞觀16年間聞岳噴火と火山災害の実態」『一般社団法人日本考古学協会2017年度宮崎大会研究発表資料集』53-62頁  
 中村直子 2009 「7・8世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考-新東晃一還暦記念論文集-』中巻 南九州縄文研究会 119-128頁  
 永山修一 1992 「『日本三代実録』に見える聞聞岳噴火記事について」『橋牟礼川遺跡III』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)  
 永山修一 2016 「文献・出土文字資料から見る薩摩国揖宿郡と聞聞岳噴火～橋牟礼川遺跡を理解するために～」『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(60) 181-185頁  
 成尾英仁 1992 「橋牟礼川遺跡の地質」『橋牟礼川遺跡III』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)511-522頁  
 成尾英仁 2016 「橋牟礼川遺跡における聞聞岳噴出物について」『橋牟礼川遺跡総括報告書』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(60) 186-191頁

渡部徹也・鎌田洋昭・鷹野光行・新田栄治 2012「遺跡にみる貞観16年の開聞岳噴火災害について」『条里制・古代都市研究』第28号 1-10頁

(松崎 大嗣)

## 第5節 出土石器について

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡のVI区において、古墳時代の遺物包含層と竪穴住居跡の埋土から出土した石器について概観する。

器種構成の内、剥片石器は両面加工石器、楔形石器、削器、二次加工剥片である。特に、第96図の両面加工石器378や二次加工剥片380に認められる大きな剥離面（b面上部）は、磨面としても利用されている。第9層からは狩猟具である磨製石器は出土していない。

裸核石器は、砥石、敲石、凹石、台石である。

砥石は、形態的に2種類が認められた。ひとつは断面形状が隅丸三角形または隅丸四角形を呈する棒状のものと、厚みのある断面隅丸四角形のものである。両者とも平坦面は砥面として利用されているため、三面または四面に細かな線状痕が認められる。

第97図の砥石383の上下両端には敲打痕が認められることから、多用途の石器として使われていることが判ると同時に、砥石を使う作業工程において、「砥ぐ」、「敲く」の作業が一連として行われていた可能性が窺える。また、第98図の砥石386の砥面に残されている深く明瞭な線状痕から、硬く銳利ものを研いでいたものと考えられる。

凹石は安山岩礫を用いており、その厚みによって、凹面が表裏面以外の側面にも及ぶものがある。よって、敲打によって窪んだ凹面が一面、または表裏二面、側面を含め三面以上のものが認められる。

また、第98図の凹石388と第99図の凹石393は、凹面の右下縁部に線状痕が認められ、何かを削った作業が行われていることが窺える。同じような位置にあることから、決められた作業による痕跡と考えられる。これは、第101図の凹石397の両面においても言えることである。凹石397のa面とb面の中央には凹面があり、その左下部には敲打痕が、右上部には幅約2mmの棒状のものによって削られた痕跡が同じような位置関係で認められる。

軽石を素材とした加工品は、両面を削るまたは磨ることによって扁平に成形したもの（400）や、磨面を伴うもの（403・404）などが認められる。後者2点の磨面は、403はa面に、404はa面左側面とd面上下両面の広く平坦な面に認められる。縦断面の形状が隅丸の二等辺三角形を呈していることから、推測の域を出ないものの、三角形の頂点部分を手のひらに取まる形で持ち、磨面を対象物に当てていたものと推測できる。

なお、軽石製加工品404は、磨面を用いる以前は、棒状工具によって穿孔が施された祭祀用の道具であったことが窺える。軽石を用いて「磨く」行為が祭祀に伴うものかは不明であり、祭祀用の道具の転用とも考えられる。

VII区内で検出された竪穴住居跡の埋土層から土器と共に石器も出土している。

狩猟具である磨製石鎌は、唯一SB9で出土している。磨製石鎌156は、頁岩製で丁寧に研磨を施しているがやや形状は不均等である。先端部の欠損後再整形を施している完形品である。SB9の埋土層からは砥石は出土していないものの、同型式の土器を伴う住居や第9層から出土している砥石などを用いて研磨されたものと考えられる。

食料加工具とされる石皿は、SB4で2点、SB27で1点それぞれ出土している。SB4の石皿76

と 77 は、いずれも一部が欠損しており、その欠損面の剥離状況から、使用時の加熱によって欠損されたものと推測できる。また、埋土中に接合できる同一個体の資料が出土していない。

敲石は、SB 4・5・6・29で出土している。敲石とセットで用いると考えられている凹石や台石、石皿などと一緒に出土している事例は、SB 4・6・29である。

特記すべき点として、SB 5から出土した第37図敲石98のf面上部には、何かを削り取るような作業によって残された線状痕が認められることである。作業は幅5.7cmの範囲で位置をずらしながら行われたようで、一部のみが深くなっている。線状痕は幅約3mm、長さ約1cm前後、深さ約1mmのもので、観察から比較的硬いものによって残されたものと推測できる。VI区の出土石器の観察で、敲石にこのような痕跡が認められるものは他にSB4埋土層出土の資料を含め2点だけである。敲石に残されている敲打痕や磨面から「敲く」、「磨く」の用途が推測されているが、今後、敲石の用途を考察する上で希少な事例として注視していく必要があろう。

凹石は、安山岩の梢円礫、不整形礫が用いられ、厚みはさまざまであり、先述したとおり側面の厚みのある場合は凹面が三面で確認されるものがある。

台石は、SB 6のみで出土している。意図的か否かは不明だが、a面右側面は大きく欠損しており、その後数枚の剥離によって再整形していることから、欠損後の引き続き使用されていることが窺える。敲打痕以外に線上痕も認められる。

堅穴住居跡の埋土層から出土している軽石製加工品は、SB 4から出土したものを4点実測した。加工の施し方や形態から祭祀用と考えられるものは、第33図の軽石製加工品79・81である。

特に、軽石製加工品79は、a面両側面と同面下部に鋭利な工具による抉入から人形を意識して整形されたものと判断した。

また、軽石製加工品81は、両面を鋭利な工具で平坦に削られており、その痕跡が溝状の痕跡として残されている。a面右側面と左側面には、それぞれ二条と三条の工具による刻みが認められる。意図性については不明である。

VII区から出土した石器の石材は、頁岩、砂岩、安山岩、凝灰岩等である。

砥石については、微細粒の砂岩礫が用いられている。現在までに指宿市内において砂岩・頁岩の原産地は確認されておらず、これまでの踏査によって最も近距離の砂岩・頁岩の円礫、梢円礫が入手できる原産地は鹿児島喜入の樋高川河口付近である。

また、敲石や凹石は、安産岩礫を用いているものが多い。

安山岩については、指宿市内で火山噴出物によって安山岩質溶岩が流出しており、円礫または梢円礫として河川や海岸で転礫として認められるのは、山川福元の竹山周辺である。

(鎌田 洋昭)

